女學世界春期増刊

花の栞

第三巻第四號

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

明治卅六年三月十五日定期増刊（毎月一回五日發行）(以)

東京博文館発行


地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋二丁目

女學世界定期增刊 花にしき目次

課題文

普通文

附録

彙報

第九卷第四號

文藝倶樂部

三月一日發行（毎月一回發行）

發兌元 博文館

正價廿五錢 郵稅二錢五厘

（正　價）

●一册金二十五錢●四册前金九十五錢●八册前金壹圓八十錢●十六册前金參圓五十錢●郵稅壹册金二錢五厘宛

坪内逍遙君序
森鷗外君序　伊原青々園君著
落合芳幾君畫
鏑木清方君畫

▲九代目最舊最新寫眞口繪コロタイプ美術印▼
▲刷摺△九代目書畫寫眞銅版△初代より八代目歌舞▼
▲伎十八番似顔木版△九代目現今に至る演技▼
▲寫眞銅版百餘△九代目家族家庭寫眞數種▼
▲附錄九代目自作旅行紀△事和歌俳句▼

劇壇之珍書

市川團十郎

製本寸法縦六寸五分横四寸五分
◉紙數四百頁◉
一部　金九拾錢
郵税　金拾錢

◉市川團十郎は劇壇の神仙にして斯道の明星なり、彼の技藝は老熟滑脱圓轉自在、今や既に入神絶妙の域に進みて古今獨歩の聲譽を縦にし、一代の名聞天下に鳴る、然りて彼は如何にして技藝の神となるに至りしや、

◉題して市川團十郎と云ふと雖も、其説く處は彼を中心として劇の全般に亘る謂ゆる團十郎史にして又實に近世の劇史たり、

◉若し夫れ材料の豐富趣味饒多なる、如何に著者が苦心經營に力めたるかに至ては、蓋し讀者の一驚を喫する處ならん。

發兌元　東京市京橋區竹川町十二番地東仲通　エックス俱樂部

(甲の一)

新刊廣告

少年世界文學

坪内博士校閲
青年諸名家編
青年畫家畫

第八篇 **梅王松王櫻丸**

第九篇 **葛の葉姫**

以上本日發賣◎正價拾貳錢ッ、郵税四錢ッ、各篇石版刷口繪入

我が「少年世界文學」は、兒女の好わる家庭の伴侶とし、小學校生徒の賞與品として、滿天下の少年諸君大喝采を博し普く、江湖に歡迎せらる、蓋し現代唯一の少年讀物也、

言文一致 **繪入** かなつき

1 ふしぎの魚
2 狼太郎
3 神代の話
4 はちかつぎ姫
5 イソップの話
6 六勇士
7 蛤の草紙

言文一致普通學全書

本書の特色

一、小學校卒業程度の力で理解獨習の出來得る事
二、理學科は中學校程度の科目を悉く備へ別に簿記、衛生、農工商等の一般有益なる者を加へたる事
三、講述は簡明適用を旨とす
四、篤志なる獨學者の便を謀り價の格別に廉なる事

第一編 日本歷史 上
第二編 日本歷史 下
第三編 萬國地理
第四編 西洋歷史
第五編 東洋歷史
第六編 日本地理
第七編 法制大意
第八編 經濟大意
第九篇 教育學
第拾篇 衛生學

以上既刊

▲洋裝菊判挿畫豐富▲每篇定價金廿錢郵税各六錢◎五冊金九十七錢◎十冊壹圓九十錢◎廿冊三圓六拾錢◎卅冊五圓廿五錢◎紙數二百頁

(甲の三)

發兌元 東京神田裏神保町 合資會社 **富山房** ◎ 賣捌 全國各地書籍雜誌店

花鳥（刺繡）

野口小蘋女史筆原圖



大阪大博覽會出品

京都飯田新七氏製

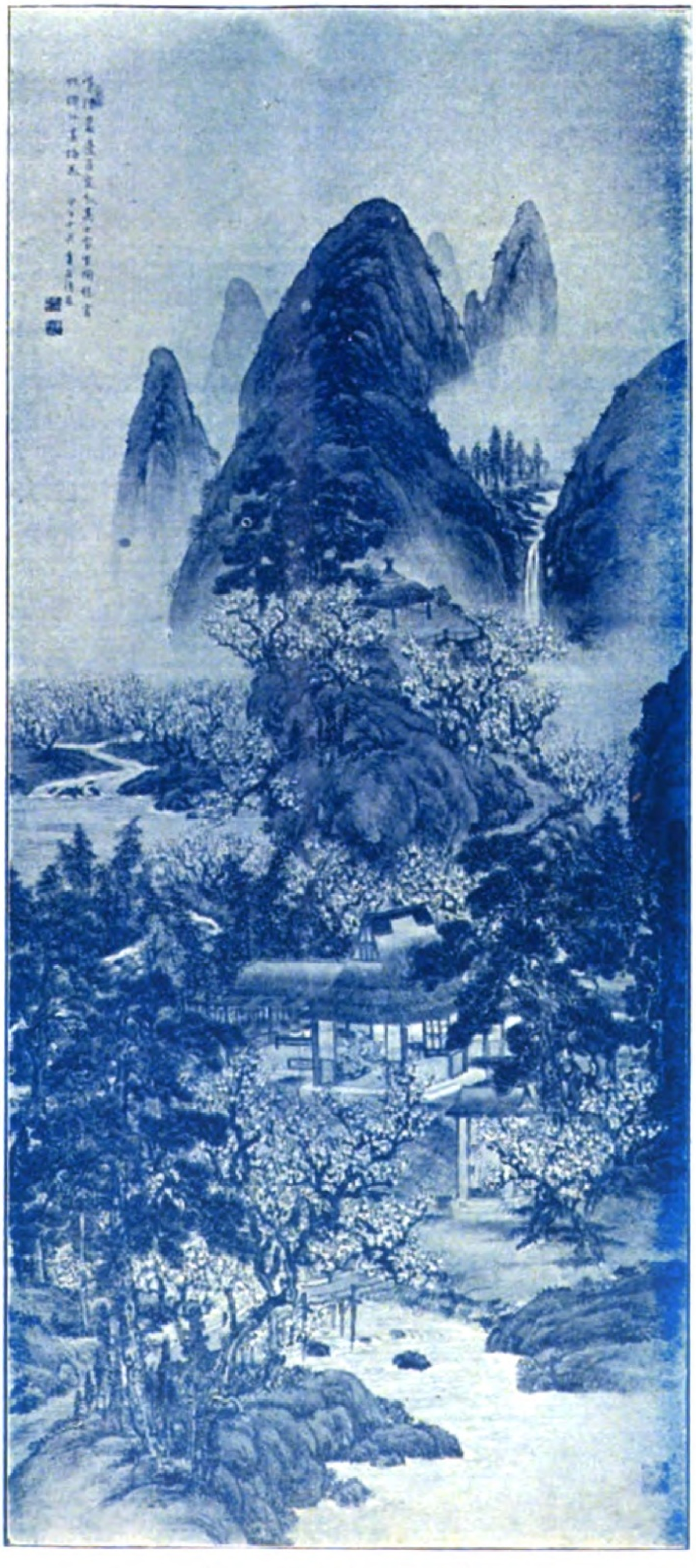


舞子公園（有栖川宮別邸附近）

狹穗姬



山莊觀梅圖



村田香谷筆

大和田建樹先生著



能を舞ふ人は、われども能を知る人は少なく能を見る人はわれども能を解する人は少なし此書一度出なば知る事も審に解せることも速かなる

を得ん斯道の爲めの舟筏とも燈火ともなるべきは獨り此書か

▲第一の巻……製本既成

總說＝能の種類、役者、地謡と囃子方、舞台と橋掛、形、位と緩急、中入と物着、次序、名乘笛、一聲出端、早笛、大癋、下羽來序、亂序、わしらひ出し、早皷、祝詞、舞、舞働、翔、祈、立廻、イロへ、幕、面、裝束、作り物、小道具、替へ形、囃子と仕舞、

一((目　次))一

翁、高砂、八島、支兆、蘆州、船辨慶、三輪、兼平、羽衣、安達原、蟻通、田村、江口、百萬、猩々

第貳の巻

竹生島、清經、熊野、隅田川、融、邯鄲、鉢木、卷絹、俊寛、海人、小鍛冶、夜討曾我、社若、花筐、鞍馬天狗

第參の巻

養老、忠度、松風、七騎落、山姥、橋辨慶、春榮、道成寺、富士太鼓、土蜘蛛、西王母、旅、草紙洗、唐船、紅葉狩

第四の巻

加茂、巴、三井寺、葵上、烏帽子折、葛城、小袖曾我、櫻川、接待、野守、花月、實盛、景清、放下僧、望月

第五の巻

嵐山、敦盛、二人靜、雲雀山、殺生石、小督、頼政、井筒、熊坂、善知鳥、項羽、盛久、住吉詣、柏崎、絃上

第六の巻

龍田、朝長、砧、阿漕、善界、國栖、弱法師、大原御幸、蟬丸、鵜飼、大佛供養、班女、藤戸、大江山

全部六册製本

和綴石版表紙 能舞精巧

木版畫挿入紙數一册二百頁以上

正價 一册四拾錢三册壹圓拾五錢
全部二圓廿錢稅郵一册六錢

(乙の二)

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

◎瓦斯の煮焼◎

注注注注意！！！！

●使用は輕便マッチ一本にて焚付き火力加減自由なり
●火災の危險なく晝夜何時にても即時に間に合ふべし
●費用は薪炭よりも低廉にして且つ大に人手を省く
●二升の米は瓦斯代僅かに一錢八厘にて炊くを得べし

(二〇三)



▲當社構内陳列所又銀座二丁目南谷勧工場隣にて各種の瓦斯器を陳列し専ら縦覧に供す▼

(乙の四)

農學士東條秀介君序文
東京農學園主江原春夢君著

(近　刊)

果樹草花 盆栽庭造 續園藝全書

全壹册洋裝菊判美本紙數四百五十餘頁有名園藝者所有盆栽盆石寫眞銅版精巧圖三十餘入正價郵稅未定

曩に園藝全書は上梓して世の好評を博し旬月ならずして數版を重ねたり而して前編は專ら露地(花壇、園圃、山野)培養を主述せしを以て本篇には盆栽培養法を專叙せり、記する所理論を畧して實地經驗の栽培法に則り簡明通俗の文を以て巨多の密圖を挿入し以て前書の闕を補ふ前後併用始めて園藝の妙技に精通するを得べし請ふ陸續御愛讀あらん事を

農學士東條秀介君序文
江原春夢君著

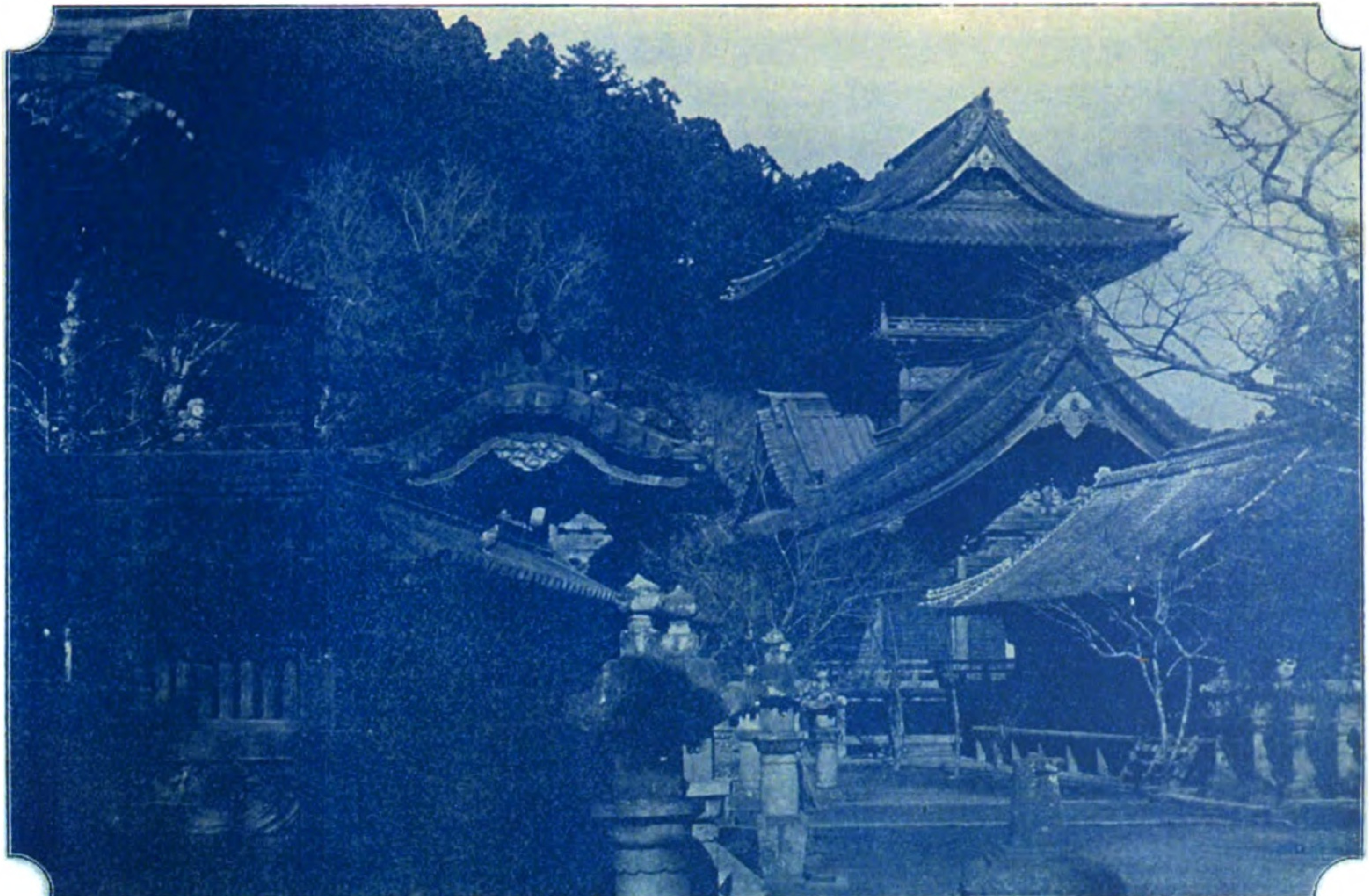
● 果樹草花 盆栽庭造 **園藝全書** 正價六拾錢 郵稅八錢

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館



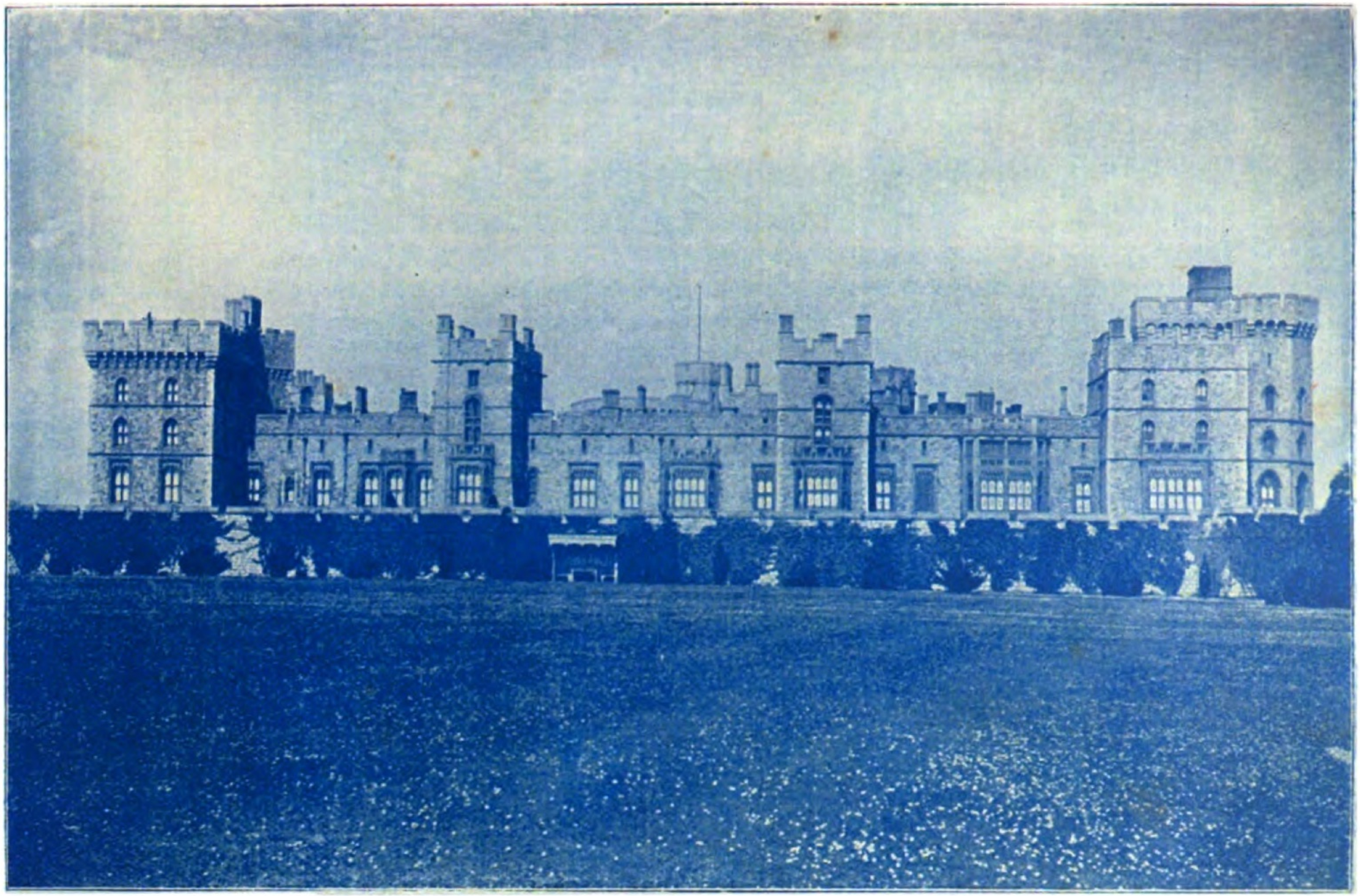
櫻雲十里の郷



靜岡淺間神社



清瀧川（西京名所）



ウ井ンゾル宮(英國皇帝の離宮)

續帝國文庫

第四拾七編

法學士 柳田國男 田山花袋 兩君校訂

校訂 近世奇談全集

（近刊）

架空虚飾の著漸く廢れ今や特に深遠神秘の境に達せんとするに當り所謂現文界の母源資料たる本邦古來の高想靈思より成れる珍聞奇談を輯集し玆に本書を公にす其一新著聞集 其二老媼茶話 其三想山著聞奇集 其四三州奇談なりとす校訂嚴密以て我國古昔の文流思潮事實の眞相を知らんと欲する者の座右參考に供す請ふ愛購を賜はらんことを

全壹冊洋裝
金字入美本
正價六拾錢
郵稅拾六錢

第四拾八編

幸堂得知翁校訂

校訂 名家短篇傑作集

（近刊）

●復讐煎茶濫觴（京傳）●敵討宿六娘（三馬）●復讐猫魅橋由來（傳笑）●敵討筆山大全（東里）●會談興晤門人雅話（振鷺亭）●兒ヶ淵誓仇討（月池）●鎌田又八强力譚（雪麿）●志道軒往古講釋（京傳）●滑屋お蝶三世談（正蔵）●十三鐘孝子勳績（馬琴）●父母怨敵現腹皷（東子）●戻駕籠故鄉錦繪（京山）●開運菊一文字（一九）●鬱女房仇討双六（鈍尉）●敵討女夫似我蜂（南杣）●小説比翼文（馬琴）●腕雕一心命（三馬）●床飾錦額無垢（種彦）●西國奇談月廼夜神樂（德升）●黑雲太郎雨夜譚（眞齋）●怪談岩倉萬之丞（南北）●摺針太郎豪傑譚（春水）●絲車九尾狐（京傳）●照子池浮名寫繪（馬琴）●浪花浴衣團七縞（南北）●廿三夜待（山鳥）●昔唄猿狂言（京山）●枕琴夢通路（仙果）●油丁製菜種黄表紙（仙果）●大盤舞花街始（三馬）

全壹冊洋裝
金字入美本
正價六拾錢
郵稅拾六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

業務擴張

東京堂は多年**書籍雜誌の大取次**を營み來り候處世上の御引立を蒙り業務益々盛大に趣き賣捌方其他の設備も大に擴張致し候に就ては此際一層の勉强を以て各位の御便利を相圖り可申候尚**本年度**よりは更に**歐米諸國の出版者と特約を結**び書籍雜誌の類は何種に拘はらず廣く大方の御註文に應じ精々廉價迅速に御取次可致候間何卒倍舊の御愛顧を以て續々御註文被成下度奉懇願候

㊞ **東京堂發賣書籍雜誌目錄**（二月改正）御望の方は郵券貳錢封送申込あれば出來次第送呈す

委託販賣（新刊書籍雜誌）書籍雜誌御發行の御方にして一手販賣方御委託相成候はゞ諸事御便利を相圖り弊堂獨特の擴張法を以て賣捌方は勉强可仕候間御發行前に御相談被成下度候

圖書雜誌大販賣

東京神田表神保町三番地
特電話本局貳百四拾八番

東京堂書店

The English Student.

英學新報

所載概目

社説（英語英文學研究社論其他一般青年學生を裨益すべき倫理教育社會等に關する社論）**寄書**（社會一般の事項に關する内外の寄書家の意見）**通信**（英米學生の通信）**講義**（斯學大家の講義）

訪問（英語英文學研究等に關する大家の實驗談）**時報**（内外の新事件）**逸話**（歐米帝王名士の逸話）**會話**（純良なる談話語になる會話及びダイアログ（斯道の大家

註釋（英米大家の詩文拔萃詳註）**飜譯及作文**（に依賴す）諸家の和文英譯、英文和譯の模範㊀和文英譯指南㊁懸賞和文英譯及英作文 和文英譯英作文答案修正）

讀者の隨意 英文 **雜説**（英語研究上に注意すべき事項、作文要訣、故事故語、熟語等）**尺牘**（各家の尺牘○作例○答案修正）**商業書簡文**講義

笑話（古今名士の滑稽譚、笑話）**小品**（從來の改作小話の他に近時英米新聞雜誌に見ゆる彼國大家の健全なる小品文に註釋を附す）**雜錄**（近時の文學界○大家修學談○神話○海外文壇）

○英語謎○我國英學界○**質疑解答**（書籍十數種の質問に應じ且つ直接講話者の特典あり、通信解答を與ふるに限り、）**挿畫**等

編者の机上○讀者の領分

主筆 新渡戸稻造。津田梅子

定價（定價金拾錢郵稅壹錢○半ヶ年（十二册）郵稅共壹圓貳拾錢○壹ヶ年（廿四册）同貳圓廿八錢

（每月二回一日十五日發行）

發兌元 東京神田 東京堂

（四の二）

各大醫協贊新藥

太陽散

神驗妙効

● 四十包入 金五十錢 郵送料貳錢
● 十五包入 金二十錢 郵送料貳錢
● 七包入 金十錢 郵送料貳錢
● 三包入 金五錢 郵送料貳錢

如何なる熱性諸症にても其効驗著しきと神の如く効能薄き駄賣藥とは月と鼈

太陽丸

即服即癒

● 二週分 金八十五錢 郵送料貳錢
● 一週分 金四十五錢 郵送料貳錢
● 三日分 金二十錢 郵送料貳錢
● 一日分 金七錢 郵送料貳錢

梅毒下疳胎毒其他毒氣多き人通し惡しき人等の持藥として効顯わるゝ妙なり

發賣元 東京日本橋區本石町角 博愛堂本店

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵劵三錢封入申込者に無代進本致すべし

東京下谷上根岸町百十一

藥學得業士 金澤巖

（電話本局二二五九番）

新式 漢文獨習書

神奈川縣立第一中學校敎諭 小櫃鶴城先生著（菊判美本全二冊）

正價金四拾五錢
郵稅金六錢
切手代用一割增

古來漢文講義錄ト稱スルモノ多ケレドモ論方ト意義トヲ記スルノミニテ文章ノ組立方法ヲ示サズ是レ豈ニ完全ナルモノト謂フベケンヤ本書ハ著者ガ二十餘年間漢文敎授ニ從事セラレシ新案セラレタルモノニシテ譯解部アリ文法部アリ原文部アリコレヲ彼此對照スレバ師ニ就カズシテ自ラ漢文ノ意義ト文法トヲ了解シ且ツ漢文ヲ造リ白文（反リ點ナキ文）ヲ讀ムヲ得以テ其ノ妙味ヲ解スルニ至ランヿ必セリ世ノ漢文學ニ志アル學生諸君請フ本書ヲ玩味シテ速成ヲ期セラレンヿヲ

發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂

發賣所 東京市京橋區弓町 三松堂

日本正則女學校

本科高等科裁縫專修科 各年入學を許す又寄宿舍あり 四月六日迄に申込べし

和洋料理春期講習會 四月八日より始む

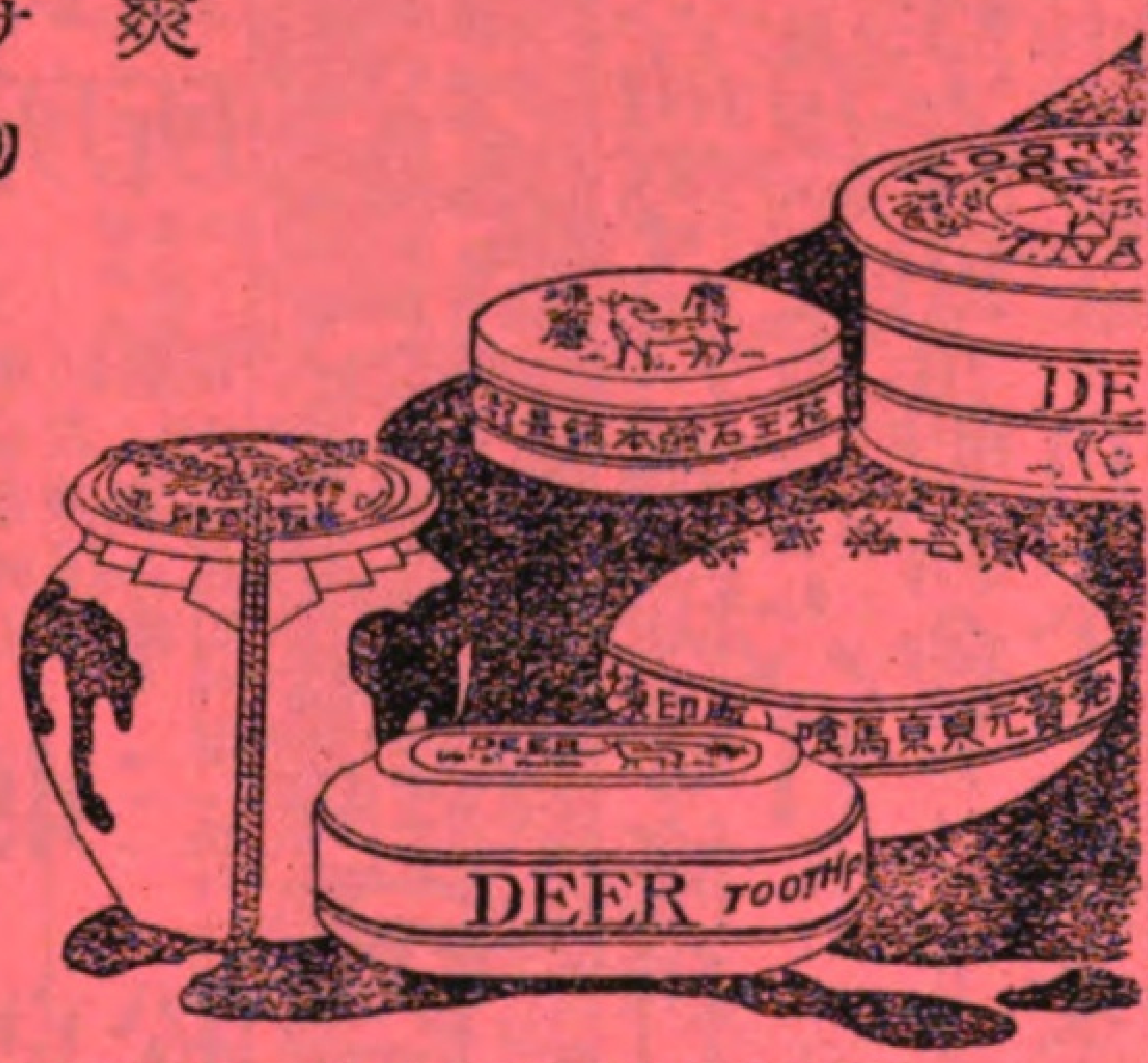
東京市神田區小川町一番地 日本正則女學校

（丙の三）

鹿印煉歯磨ハ

良質佳味ニシテ衛生上最
効能アリ使用後精神ノ爽
快ナルハ本品ノ特色ナリ





花王石鹸

品質ノ善良ト衛生ニ經濟ナ
旨トシテ製煉シタル佳品ナリ

●賣捌所ハ全國到ル所ニアリ

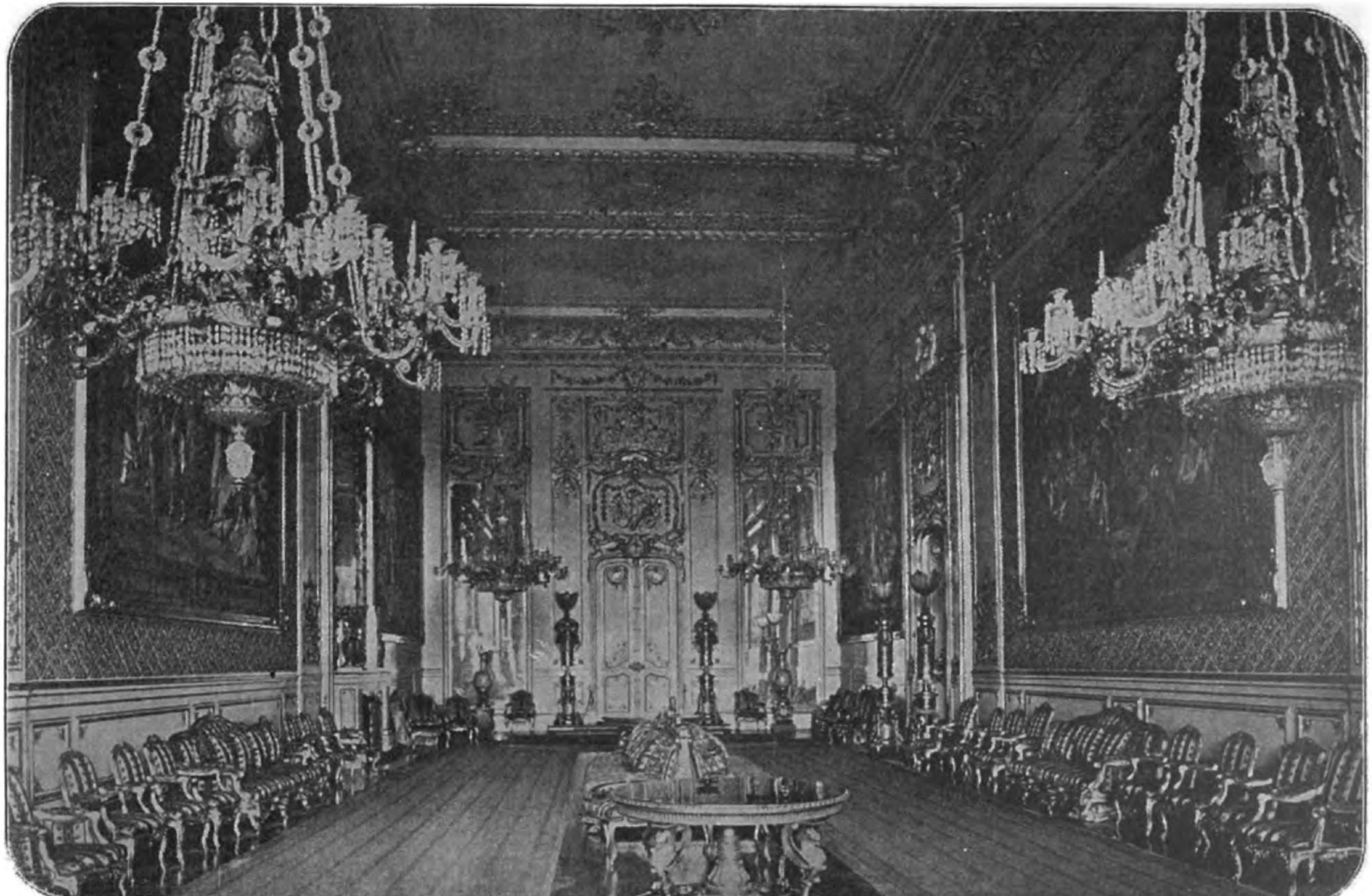


(丙の四)

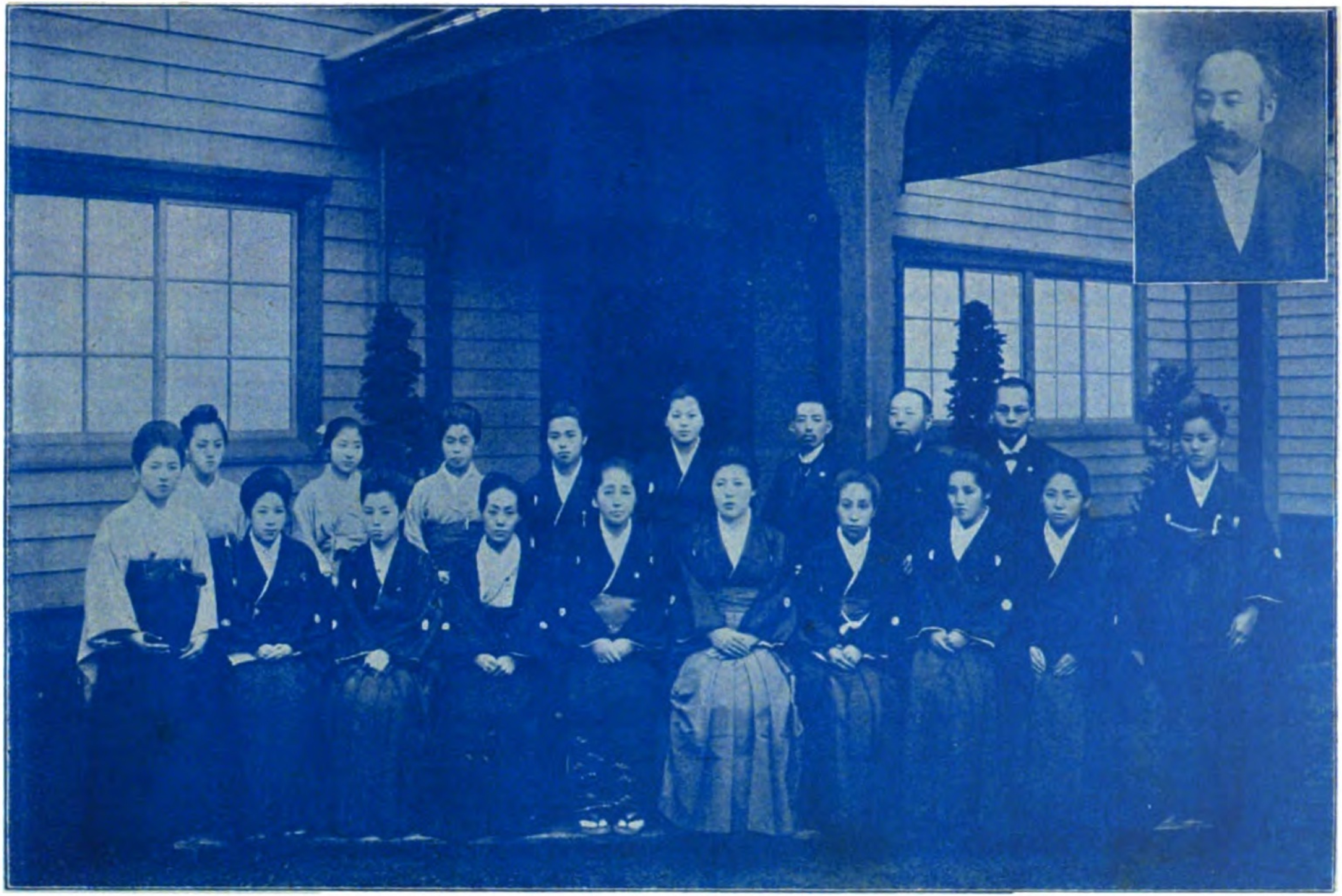
東京
馬喰町二丁目

發賣本舗
長瀬富郎

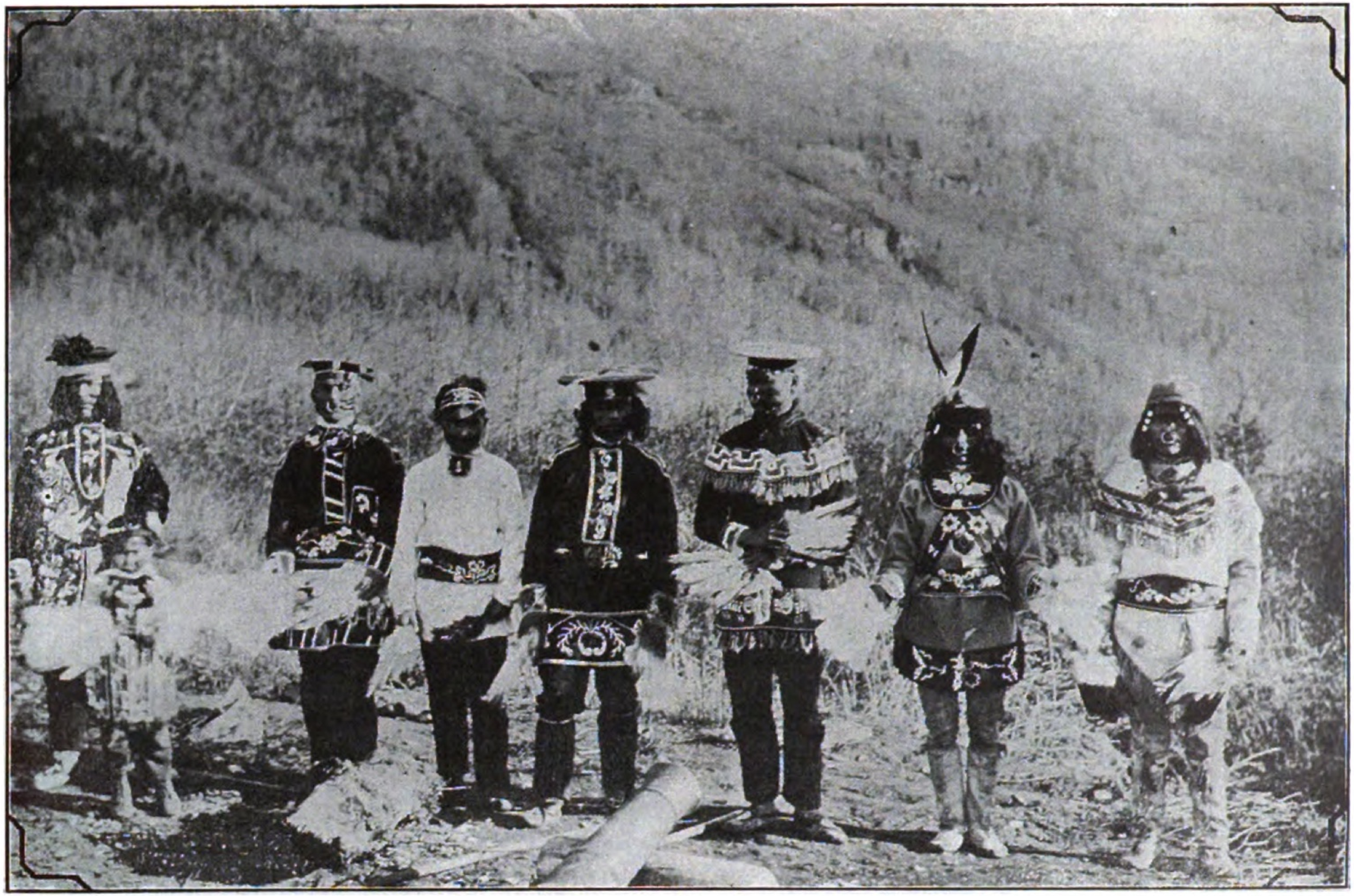
(特電話
浪花三番)



英國ウヰンヅル宮內饗應室



女子美術學校職員



北米アラスカ土人舞踏の服装

アラスカは米國の北部にして人種は日本に類似せりと云

尾州玉野川上流





肥後國球摩川の上流

少年商業文庫

内容 装幀 正價

本書毎編談話体の文を以て高尚の學理を極めて平易に解說し讀者をし知學理に接するの感なくして直に學理の要旨を知得せしめ興趣津々の間にてらず識らず商業上の智能と性格とを具備せしむ各編とも精密なる圖畫を挿入して行文の興趣を補ひ紙質は極めて選良に意を致し表紙は當代の知名畫伯に依頼して其艶美を盡せり出版は必らず毎月二回にして菊判洋装紙數は一冊凡そ百五十頁

●一冊金十五錢●六冊前金八十五錢●十二冊前金一圓六十五錢●廿四冊前金三圓二十錢●郵税一冊四錢ッヽ

第壹編

勤儉貯蓄

天城米海君著　小峰大羽畫

▲表紙畫……………羅馬の商神

▲卷頭……………フランクリンの致富術

▲正價金十五錢……………郵税四錢

商業家第一の秘訣は是れ勤儉貯蓄の單純なる法則を實踐するに在り然れとも此事言ひ易くして其實甚だ行ひ難きものなり此行ひ難き艱苦に打勝つて始めて成功開運の時あるを得べし天城米海氏本書の第一編に之を著はし先づ商業入門の樞機一斑を示す記述懇切平易通暢讀下直に秘訣の奥蘊を詳知し得べし

續刊

第二編▲商業の栞

第三編▲世界金傑譚

第四編▲商業作文

第五編▲日本金傑譚

第六編▲商人修身訓

第七編▲日本商業地理

第八編▲致富要訣

第九編▲商業計算法

第十編▲東洋貿易地理

第十一編▲内國商品誌

第十二編▲帳簿整理法

第十三編以下編次略す

（丁の一）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

(丁の二)

女學世界定期增刊春の巻

花はしき

女子と文藝

今の小學校に於て生徒に鉛筆を持たせ眼前の物を摸寫せしむるは必ずしもその生徒をして畫工たらしめんと欲するにはあらず要は唯事物を觀察するの能力を養ふにあり畫は物體の形狀を腦裏に印識したる上ならでは描く事能はざれども是を筆端に寫して巧みなるあり、又拙なるあり、その巧みなるは觀察の精緻なるの致す處ろにしてその拙劣なるは觀察の未だ十分ならざるの致す處なるに外ならず。教育の目的は又觀察をして十二分の精緻に到らしむるにあり。

而して今婦女子をして文藝を修めしむるの目的も又實に此の理に外ならず、婦女子に小說を作らしむるは婦女子をして小說家たらしめんと欲するにあらず。要は唯事物を觀察するの能力を養

はしめんと欲するに外ならざるなり並し観察力を精緻にするは常識を養ふ所以にして婦人が身を修め家を齊ふるに於て缺くべからざるの要素たらん、然かも文藝の徳は唯是のみにあらず、其氣品を高尚にし、その風趣を優美にし、其の天性を雅馴ならしめ、その智識を周到にし、其の趣味を廣くするもの職として文藝の嗜みあるに由る以てよくその眞人を化し以てよくその子女を薫陶するの力や大なりといふべし。

然りと雖も藝術は漫然としてよく成るものにあらず。　奈何なる藝術に於ても作者が苦心の存する所ろ即ち、勘の審る處ろにして苟くも筆を把つて文を成さんと欲す甚麼の苦心を經ざるべからず、漫然として筆を採り漫然として紙に臨むそのよく文を成すもの果して幾千かある縦令才かに一文を成すと雖もこれを以て奈何で人を動かすを得べけんされば文を成さんと欲せば事に臨んで幾分の苦心せざるべからず且つや其の材料を故紙堆裏に捜くるは常に現在に看、實境に鑑るの勝れるに若かじ彼の貧富地を替へ、窮達處を異にするの處ろ、要は離別に泣き夫は無情を怨む、この人情の幽折、世情の冷熱、誠に小説の材料にあらずや、こゝに孤兒あり東西を辨せず、是に寡婦あり日淺うして未だ再醮に意なし、誠に詩の材料にあらずや、父母兄妹遠く離れて他郷に在り、朝々暮々の情禁ず可からず、是に於てか消息の文なかるべからず、春の晨に花の爛漫たるを看、秋の夕に月の皎々たるを看る交感僞なかるべからず是に於てか歌あり。　或は水郭山村我を迎へ、長汀曲浦我が眼を樂しましむ是に於てか紀行文あり、雨蕭々たり雪紛々たり文なかるべからず、車轔々たり、人絡繹たり又文なかるべからず。　天象人事悉く皆我が文藝の材にして我が観察力を養ふの料たらざるはなし。　あはれ我が文藝に志すの人よ、願はくは實境に就て君等が想を練れよ自然を師として君等が観察を弘うせよ故紙堆裏に頭を沒して筆を役するは眞に文藝の賊なりと知るべし。



春の野邊

群馬　山村いさ子

妹の光子は明日いよ〳〵嫁入ることになッたのである。しみ〴〵と語り合ふのも、いよ〳〵今日が名殘となつた。

御互に泣いたり、笑ッたり、拗ねたり、怒ッたり、そして、十七年といふ長の月日一ッ家に起臥して、たゞの一日とて顏見ずには居なかつたものを、それが、いよ〳〵といふ今日となつては、今更名殘の惜まれて、胸は怪しくも種々なる思ひに掻き亂されるのでありました。

何うせ一度は兄妹別れねばならぬ身の、惜んだとて拒んだとて、今となつては、自分の力に及ばない、殊には親戚一家の人々も羨むこの良縁を、何で兄貴たる自分が否むことの出來ましよう、妹の爲めには幸福である一家の爲めにも又幸福である、自分は妹の爲めに兄として大いに祝はねばならない、自分は喜んで目出度この嫁入を送らねばならぬ、が、いざ今日の別れとなッては、心の奥に何やら殘惜いやうに思はれ、恰も掌中の玉を奪ひ取られでもするかのように。

と言つて今更何とも仕方はない、縁談は疾くに纏まつて居る、結納も濟んだ、而も輿入さへ、いよ〳〵明日とまで極まつて居る、あゝ自分は何うしても妹と別れねばならぬ、今日の一と日を限りに。それやこれやの嫁入準備に、一月前からかゝつて居たごた〳〵も、今日となつての混雜、親戚の一同、村の誰れ彼れと、祝儀やら暇乞やらに絶間もなく出入して居るので、家内は宛ながら眼の廻るほどに忙はしい、庖厨萬端を指揮して居るお母さんや、茶の間に主人役をつとめて居る分家の叔父さんや、その外下男下女までが、孰れもてんてこ舞で奔走して居るその混雜と言つたら!。

その混雜の爲め、役にも立たない自分までが引ッ張り出されて、彼れの之れのと用を言ひ附けられるので、氣はむしやくしやする、頭は悶々する、つく〴〵と今日の一と日が、不平でもあれば、情けなくもある。ごた〳〵は何時止むべしとも見えない、出入りは益々激しく、混雜は益々甚だしい、自分はもう居堪まらなくなつて、この不平とこの悶々の情を慰すべく、座敷を拔けて裏庭へと出た、足は何時しか田甫道を辿つて。

家内のごた〳〵に引き代へて、表の閑靜さと言つたら、暖かい春風はそよ〳〵と吹いて居る、鳥は長閑に囀つて居る、溪流は琴の音を立てゝ潺湲と。

自分の家の裏から、帶のような小川を横つて、畠道やら田甫道やらを二三町辿れば、其處には恰度小舟を伏せたような丘がある、この丘は、自分等の爲めには幼な馴染の搖籃であるから、今も尚は懷しき戀しき場所として慕はれて居る、自分は何時しか此處へ來た『兄さ……ん。』と、疳走つて頓狂な聲で、叫びながら追ッ驅けて來たのは、今年七ッになる少妹の銀ちやんである、後には妹の光子も。

『兄さん非道いは、妾等を殘して自分ばかり來るんだもの。』

倒けたり轉んだりして、喘ぎ〳〵走つて來た銀ちやんの元氣よさと言つたら、突然自分の袂に縋つて、わと

けない姿をいとゞあどけなく拗ねて、その鈴を張つたやうな愛らしい目で自分を睨み上げた。
が、自分は平生のごとくに元氣もないので、二人の詰問には答へもせず、茫然と氣抜けのしたやうに、思ふともなく様々の空想に耽つて居た。
銀ちやんは不平らしい顔で、早や一人で彼方此方と跳ね廻つて居る。思ひは同じいのでもあらうか、妹の光子、默念として何物をか思ふものゝごとく、我れを忘れて茫乎と立つて居る。その茫乎とした妹の姿を見るにつけても、空想は又それからそれと限りなく湧て來るのである、語り合ふのも今日の一と日が限りと思へば。
『兄さん、此處邊今日でもう見納めね。』と、幼な馴染のこの山や野に別れるのが殘り惜いのでもあらう、之が最後の別れでもあるかのように、感慨深き淸しい眼を瞬つて、四邊の景色を今更つく〴〵と眺めて居た光ちやんは、平生にも似ず沈んだ聲で、今しも自分を空想の夢より呼び覺ましたのであつた。
『さうね、最早今日限りだから、見飽きるほど見て置くが好いさ。』と、自分は又も十年以前の昔に遡つて、空想の夢をつゞけた。
さう〳〵、想へば自分が姉さんと別れる時も、恰度こんなであつたッけ、いよ〳〵明日はお嫁に往くといふその前の日であつた、今頃でもあつたらうか、麗かな暖かい長閑な春の日和で、山や野は甦つたやうに生々として、青い麥、黄い菜の花が、工合好く彩つて居るその中を、姉様と二人で、自分等の爲めには揺藍ともいふべき、幼な馴染のこの丘の、恰度青疊を敷いたやうな所に、菫花や蒲公英の花が、振り撒いたやうに點々咲き亂れて居る中へ、遠慮もなく腰を下して、草を拔いたり花を摘んだり、飛んだり跳ねたり、今日を名殘と、さん〴〵遊び暮して、そして麓の方遙く我が家を指して戻る時であつた、黄金色を浴びた野や山の凡てが、一面に美しき化粧を施して、その中から木々の梢が華美な衣を着けて、誇り顔に屹然として居るので、宛然パノラ

ゝを見るような、その見事な景色に見惚れて居た姉さんが、さも殘り惜しさうに四邊を見廻して、『何てえ美麗だらう。』と獨語のように呟いて、そして彼の淸しい情深い眼に淚を湛へて、『お前と此處へ來て遊ぶのも最早今日限りだね』と露のやうな玉のやうな淚をぽろりと落しなされたのだ、今まで元氣好く遊んで居た自分も、遽かに心細いやうな悲しいやうな、何だか姉さんと別れるのが厭で、自分も思はず淚ぐむだのである、すると、『お前も姉さんに別れるのが厭かい』と兩の手で自分をしつかりと抱きしめなすつたので、自分は益々悲しくなつて、心細くなつて、返答をしやうと思つても胸が閊へて、たゞもう姉さんの胸へ顏を押し附けて歔欷をして居た、『妾もお前に別れるのは厭よ、ならうことならお前も諸共に連れて往きたいんだけれど……』と言つて熱い頰を自分の額に押し附けなすつた時には、自分はもう堪らなくなつて、緊乎としがみ附いたまゝ、聲を上げて泣き出した、あゝその時の光景は、今思ひ出しても未だに眼に浮ぶのである……、が、その優しかつた、姉さんも、今は昔、早や十年以前のこと、彼れ程慕つて居た自分を殘して、遂々他家へ緣附きなされたのである、その當座、後に殘された自分は、何んなに心細く便りなく思つたのであらう、何だか大切なものを人に奪られでもしたごとく、口惜しくッて、自分はさん〳〵に泣き、さん〳〵に駄々を捏ねてお母さんを困らした揚句、時々お母さんに連れられて、姉さんの家へ遊びに往つた、姉さんは矢張り可愛がつて呉れて、菓子も貰ふた、手袋や靴下も編んで貰つた、昔話も聞いた、姉さんは矢張り懐しい優しい好い人であつた、そして自分は一里もある途を毎日のように遊びに往つた、が、その中自分も學校が忙しくなつたので、殊にはお母さんの忠告もある所から、三度の所は二度となり、二度の所は一度となり、知らず〳〵の間に、足は自から遠ざかつたのである　斯くて追々月日の經つに連れて、自分の足が遠ざかると共に、姉さんの自分に對する態度も、又自然と異つて來たのである、勿論疎いといふ程ではなかつたらうけれど、親しみ慕ひつして居た初めの程ではな

かつた、春夏と過ぎ、秋冬と暮れて、姉さんには赤ん坊が出來た、その後、自分も試驗休みを幸ひ、泊りがけで遊びに往つた、が、この時の姉さんは、又昔しの姉さんではなかつた、その言葉が極めて空々しく、その態度が極めて疎々しかつた、自分は姉さんの情けある暖かい言葉に慰められやうと、希望を以つて往つたのであるのでその希望は滿されなかつた、自分は姉さんの心を疑ひつゝ、少なからぬ不平憤懣を以つて、匆々に逃げ歸つたのである、歸つて之をお母さんに訴ると、お母さんはたゞ領かれたまゝ、敢て自分に同情は寄せられなかつた、自分は益々不平で益々口惜しくてもう二度と姉さんの家へは往くまいと誓つた、姉さんは折々自分の家へ來られたが、自分は復讐のつもりで、偶々優しい顏で情けある言葉をかけられても、それに對して何時も拗ねて居た『何うしたの、何をそんなに怒つて居るの』と詫るような言葉で慰められても、自分は矢張り遁げ避つて拗ね通して居た、後で姉さんが變な顏されたのを見て、あゝ氣の毒なことをした、と思つて後悔したこともあつた、けれども自分は不相變拗ねて〳〵、剛情に剛情を張り通して居た、であるから自然と姉さんの足も遠ざかり自分は尚更で、遂には益々疎遠になつて、そして自分や家内のものに對する姉さんの態度は、漸々他人行儀に改まつてしまひました。そこで自分はつく〴〵と考ひた、姉さんは自分のことや家内のことを忘れたのではあるまいか、自分よりも赤ん坊の方が可愛のであらうか、生んだ眞實のお父さんやお母さんよりも、嫁つた先きのお父さんやお母さんの方が親しいのであらうか、お嫁に往くと皆な彼んなになるものであらうかなどゝ子供心にも斯う思つたので、眞から姉さんが怨めしいやうな、情けないやうな、で畢竟は彼んなに好い姉さんが、遽かにこう異つて來たのも、全くお嫁に往つたからであらう、と少さい胸に深くも刻み込んだ自分は、最早之から後、自分の妹などは誰が何と言ふとも、決してお嫁になどは遣るまいと思つたのでありました、が、星霜は幾度か移り代つて、姉さんと自分の間は、今も尚は疎遠であるとは言へ、昔てお嫁になどに遣るま

いと思つたその妹の光ちやんも、恰度その時の姉さんの年頃になつて今、而も今日を限りに、明日よりは又他家へ縁附くべき運命となつたのである……。

と思へば、胸は怪しくも異様に亂れて、言ふべからざる感慨に打たれた、この時ふと氣が附いて、今し餘念もなく四邊の景色に見惚れて居る妹を見遣つたのである。

今日結ひ立ての髪艶々しく、香ひ溢るゝばかりの美しき頰に、掠りかゝる二筋三筋の後れ毛を、そよ吹く風に弄らせて、一點邪氣なき冴々した眼に、何を見何を思ふのやら、茫乎立つて居る姿は、恰も女神のようである、自分は自分の妹ながらもその美しさに見惚れ



て、今更につく／＼と眺め入つた。あゝこんな無邪氣な初心なものでも、明日よりは早や他人の妻とするのであるか……と思はずも。

『何が可笑いのです、兄さん。』と



妹は振り返つた。

自分は返答もせず、尙ほも樣々に邪氣なき空想に耽つて居た。

『厭です、兄さん、人の顏を見て笑つてばかり。』

『ハヽヽ、笑ふと惡いのか。』

『惡いは、人の顏を見て笑つたなんかして。』

『ハヽヽ、だつてこの間までは彼んなに稚兒であつた光ちやんがさ、明日からは遽に丸髷に結つた奥樣にな

るのかと思つて……。」

「厭ですよ、嬲つちやア。」

「だつて眞實じやないか。」

「けどもね兄さん仕方がありませんわ。」

「仕方がないと言つたつて、矢ッ張り嫁きたいんだらう。」

「知りませんよ。」

「へゝゝ、明日からは光ちやんも他家の人になるのだ、そして、赤ん坊でも抱くやうになると、姉さんのように又實家のことも何も忘れてしまふんだらう。」

「まアあんな事、兄さんほんとうに非道いわ。」

「非道いと言つたつて、そうなるだらうッていふのさ。」

「姉さんとは違ひますよ。」

「違ふと言つたッてそうなるよ、きつとそうなります、今日までは實家の人でも、明日からは他家の人になるのだから。」

「だッて兄さんそりや仕方がないわ。」

「だからそうなるッて言ふのさ。」

妹は答へもせず、遙か麓の、住み馴れた我が家の方を見詰めて居る、心の中には何物か思ふて居るのでもあらう、見れば眼は沾んで居る。

太陽は早西に落ちかゝつて、麗かな光を野や山に浴せて、餘光は遠く微かに村の一部を染めて居る、野の此

處彼處では、頰冠りした人の頭が、隱れては現はれ、現はれては隱れ、恰も鬼ごッこでもして居るかのやうに跳つて居る、遙か彼方に鬱蒼と茂つた鎮守の森、その森つゞきの松並木の間から、チラ〳〵と白壁の見ゆる土藏の後に、床しい茅葺家根の見ゆるのが、自分たちの家である、そしてその家根を罩めて居る豊かなる炊烟は風にゆられて霞のごとく空に棚靆て居る、その間を今烏が二羽突切つて西に飛んだ、前の溪流に馬を洗ふて居るのは、村の太郎兵衛老爺である、得意の馬子唄が聞える、それに和して、此處彼處の頰冠は、鍬を杖にして疲れた腰を伸して、東西相應じて鄙唄を歌ひ初めた、餘音は遠く〳〵霞んで嫋々としてゐる。

この平和な境、この長閑な唄、自分等はエデンの花園に遊んで、宛然天女の樂でも聞くかのやうである。

「光ちやん。」と自分は妹の肩を叩いた。

「なんです。」と妹は吃驚したように振り返つた。

「何をそんなに茫乎して居るの？。」

「アラ何も茫乎なんかしちや　居ませんわ。」

「だつて否に鬱ぎ込んで居るからさ。」

「そりや何だかあの變な氣になるんですもの、だつてね今日限りで當分此處邊へも來られないのかと思ふと……。」

「さうさ、もう今日限りだよ、光ちやんと諸共に居るのも。」

「厭、兄さん妾何だか心細くなりますわ、何だかわたし夢のようですわ。」

「さうさ、思へば夢のようなもんさ、ね、さうだらう、この丘へ來て鬼ごッこをしたり、この流れへ這入つて魚を捕つたりさ、彼の山へ登つて蕨を摘つたり蕈を採つたりして遊んだのも、もう二度と出來ないのだよ、こ

の山も、この小川も、この丘も、この村も、明日からはもう暫く見ることが出來ないのだよ、光ちやんが姉さんのように、子供の手でも曳いて此處へ遊びに來る時には、この美しい菫花も蒲公英も、幾度か咲いたり散つたりして、そして彼の頑是ない無邪氣に遊んで居る銀ちやんなども、今日の別れを思ひ出すように成人くなつて居るだらうよ。」

と言つて自分は再び妹を見遣つた。

自分のこの言葉は、妹の胸に何と響いたであらう、自分等二人の談話は耳に入らでか、少妹の銀ちやんが、菜の花や菫花の花に接吻して居る小さい美しい蝶を追ひ廻して、恰度その蝶の羽のような袂を翻へして、今しも菜畑の中へ追ひ込んで往つた後姿を、羨ましさうに見送つて居た妹の眼には、露のやうな涙が宿つて居た。

この瞬間妹の胸に宿つて居る感想は、何んなに清い美しい玉のやうなものであらう、その無心に見詰めて居る眼には、嘗つて幼ない折の邪氣なき樂しき聯想が映じて居るのではあるまいか、その何物か言はんとするごとき愛らしき口は、嘗つて罪なき優しい聲で、自分や銀ちやんを呼んだのではあるまいか、が、之もたゞ僅か一轉瞬のこと、而も、今日を限りに明日よりは、又今日の妹ではないのである、その清しき眼は猜疑の光を以つて曇り、その愛らしき口は嫉妬の焰に汚されるであらう！。

麗らかなる碧色の空や、長閑に囀づる鳥や、美しい菫花や蒲公英や、青々とした麥や草や、潺湲たる琴の音のやうな溪流や、神のやうな天使のやうな銀ちやんや、あらゆる凡ての風物は、皆眼新しく耳新しく、今日を名殘と、何れもこの憐れな妹に別れを惜むごとく粧ふて居るかのやう。すると偶と『兄さん、姉さん。』と、妹の銀子は駈け戻つて來た、さん〳〵蝶を追ひ廻して、遂々捕へることが出來なかつたのに自烈たのであらう、兩手に餘る程摘み取つて來た菫花や蒲公英の花を、恰も戰利品でもあるかのごとく誇り顏に示して

『美麗だらう、ね、姉さん。』と、その中から一番美しいのを撰り出して、そして、手づから姉さんの銀杏返しに挿して遣つて。

『好いのね、明日嫁くときにさうやつて挿して往くと好いわ、ね、姉さん。』

手柄顔に嫣然としたその眼その口、餘りの愛らしさと氣高さとに、自分は思はずも抱き寄せて、そして、最親の妹を失ふ代りに、この神のやうな天使のやうな銀ちやん一人を、何時までも〳〵、永久の友達……と思つて、自分はその福々とした櫻色の頬に接吻した。

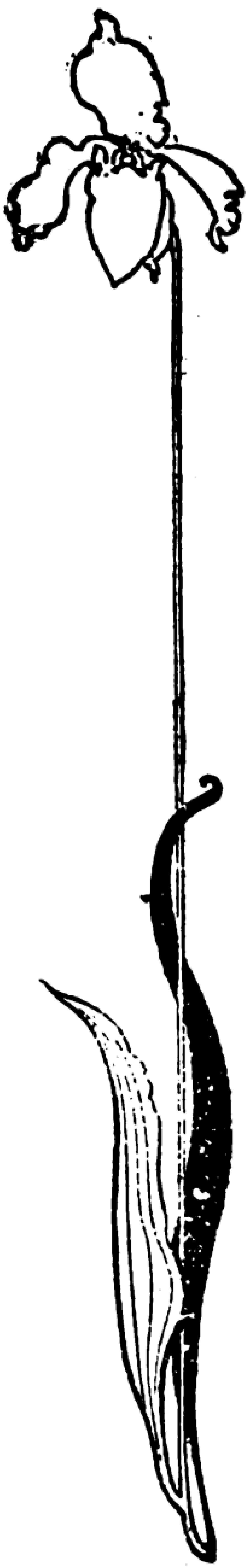
『銀ちやん、姉さんにばかり與つて兄さんには呉れないの?。』

『だつて兄さんはお嫁に往かないんだもの。』

『銀ちやんだつてお嫁には往かないんだらう。』

『フヽム、』と嫣然しながら、『妾も姉さんのやうに成人くなるとお嫁に往くの!』

わヽこの無心の一語、自分は又もや異様な感に打たれたのでわッた。(特賞)



はなすみれ

花にしき

大阪 渡邊たみ子

(一四)

一

我家は舊岡山藩士父は官につとめて一頃は郡長の職にもありき後病を得て職を辭し我れに妹を合せて親子四人都に家居を定めぬ、たくはへとては多からねども奢らねば何の苦もなく豊かに春秋を迎へき。荒きうき世の浪風を一重の垣根にへだて丶茲ばかり春みち渡る家の中に好む學問を我勤として年を送り年を迎へし我さても幸ある身なりしよ、あ丶思へば幸ある身なりしよ。されど我心、恨めしき我心、時折り〳〵夜深き埋火のもとに晝の程見聞し榮華の人の上など思ひ浮べて幸うすき身とかこちし事も一度ならざりき。さればてそ〳〵羨むましきを羨みて思はぬ苦にも逢ひけるなれ思はぬ身とも成りけるなれ。

思へば我十八の春なりき、同藩なれど今は十數萬の資産を貯へ世に時めける磯邊家より我を養女にと切に望まれき、幸福の神の手は遂に我身に及びぬ昨日羨みし人遂に今日の我身に如かざるなり、我は只嬉くて養女の如何なる者なるかも思はず養父母の氣質もよく知らず、ひたすらに受くべき身の榮華をのみ思ひやりて、故國にて高利貸を營みし人非人なりとて不進なる父を說き母に縋り遂に舊姓を捨て磯邊村子となり終りぬ、あはれ我は自ら求めて苦の淵には臨みしなりき

時は春の最中の日頃交際廣き養父母なれば彼方此方よりの招待狀は常に机上に絶ゆる事なし父母は出席し玉ふ毎に必ず我を伴ひ玉ふ。洋裝に和裝に 殆 會に出づる度新調せらる丶我衣服、母は常に華美なるが上にも華美なるを撰び玉ひき品よく滋味なる我好みは常に退けられき

我養父母は資産に不相應しからず賤き心根の人なりき金の外に尊き物を知らず、我だに徳あらば人は飢に泣くとも寒に苦むとも笑ふて過すと云ふ人なれど、如何にかしたる我には怪しきまでに優しかりき我身が望む事とも云へば惜しかるべきに聞れずと云ふ事なかりき

我居室なる淨房は軒に藤棚をめぐらし流にのぞみて椽側あり淙々の音心耳を淸くし後園鳥常に聲を絶たず、我は實に我想像を實地に行ふ事を得たり、幸多き身と人や云ふらむされど我は榮華のうちに眞實の苦を味ひぬ

我養父母は人格劣れるさへあるに只是れ無學文盲の人學問の何たるを解し玉はず金滿家即ち紳士と近り好み玉ふ、我は殊に學問づきなり。父母は成るべく所謂紳士に我を交際せしめむとし我は成るべく學者詩人の不生産的なるに近づかむとす。母は我好むを知つて殊更に學者を貧乏學者と嘲り其筋の人の出席多しと聞けば他に行くべき會はあらずとも堅く止め玉ふが常なりき。口惜さ殘念さに時折り我から病を起し錦の夜着に涙を注ぎし事もありき。

二

かゝる程に春はいつしか夏も過ぎぬ軒端の桐に秋風立ちそめて下葉露深う萩さき出で虫の音も聞えそめたり。月淸き夜俄の催しなる茶話會に友が向島の別業に招れ淸遊に一夜を深しゝ折初めて相知りし一紳士あり。ひそかに友に名をとへば文學士豐島正也と答へられき。髮にチックの跡なく香水の氣もせずセルの單衣に黑の羽織無造作に着下し音調凜として立ち居振舞に一點の氣障なし。今の世の若紳士に似げなくさても男らしき方よと幾度か其方を眺めき。

翌日骨牌會に行けば思ひ掛けなく亦其君と顏合せたり客は座敷に滿ちたれど知る人も多からぬに、我もの云へ

ば必ず彼人なり、彼人語れば相手は必ず我なりき」終りには互にありし多少の遠慮も無くなりて年頃の知己と知らぬ人は思ふまで親しくなりぬ。別るゝ時「お隙がありましたらお遊びに入來やいまし秋草がどんなに美しう御ざいましやうと云へば、お邪魔でなけねば明日伺ひましやうと答へ玉ふ。翌日違へず彼人は訪ひきぬ。

三

其後は殆日曜毎に訪ひ玉ひき。うちつれて音樂室に入れば君が好に任せ我は琴君はヴイオリン調は合ふも樂しく合はぬも嬉しう只譯もなく終日興じくらし。月清き夜は庭に出でゝこぼるゝ露に袖をぬらしつ。

　ふく風にまかせし袖やふれにけむ汀に萩の花ぞこぼるゝ

と詠み出づれば、君は打ち笑みて

　君が袖の葉にしあらば散る花も流れていかに嬉しかるらむ

いかにやと打ち笑ひ玉ふ。あゝ樂しかりしよ。されど此樂は束の間の夢なりき、無情の父母は彼の君を貧乏學者と罵りて當初交りを結びし我をせめ絶交せよと迫り玉ふ眞實の親ならぬ親の言葉我は遂に背く事を得ず、されど彼人に父の言葉傳ふる勇氣なし、如何にせむ如何にせむと只悶ゆるのみにてよき思案も浮ばず薄き氷をふむ心地に二日三日と立ちぬ、日曜日も昨日を過ぎたれど、そよとの音信もなきに我は稍心落居しもの丶亦其人の氣遣はれて如何にか仕玉ひたると思ひ煩ふ矢先き君よりの封書はとゞきぬ、開き見れば思ひ掛なや走り書きもて、文部省より海外留學を命せられ今宵七時の滊車にて出發明朝横濱解纜渡歐の由しるし、至急の事にて御暇乞ひのひまもなくて殘念の至り失禮の段は三年の後ゆる〳〵御詫び致すべしと書きそへありき。意外の事に暫し呆れしが思ひ返せば君の留學は我爲には殊に幸なりき。我は心にも有らぬ絶交書を君に送るの苦を逃

れ得たりと、一度は嬉しかりしが思へば今を限りに遠く〳〵立ち別れ歸期よしや定まれりとて三とせの長き遂に相見るを得ざるなり。三千里外にへだゝりて其面影を只木草に忍ぶ敢さは如何ならむと只胸の塞るばかりなりき

君に暇なしとならば我より停車場に行きて別れの言葉も交したけれど君を好み玉はぬ父母の何しに許し玉ふべき、何事も父母の心に背き得ぬ養女の身には、流れて如何に嬉しかるらむと詠み玉ひし彼の夜こそ遂に永き別れなりしか。あはれ養はれて人の子とならずば。

四

此夜音樂會あり心は進まねども父母に迫られて詮方なく新に調へられし目覺るばかりの華美なる衣裝に包まれて家を出でぬ。とある辻を曲れば向ふより來かゝりし車の一聯あり何心なく見やれば思はずや遂に相見る由も無しと泣てあきらめし其人の車上にありて我を見るより「村子さんこれから行つて來ます、御機嫌好うと聲かけ玉ふ我は飛び立つばかり嬉しく「御機嫌よく妾しは待つて居りますよと叫びしが君が耳に入りしや否や車は見る〳〵遠く走せ去りぬ、見送りてふり返れば其人の影はなくて不興げに我方を見玉ふ母の面の目に止りあわてゝ元の位置に返りしが何とも知らずハラ〳〵と涙は膝にこぼれき。

あゝ我戀人よ別れてぞ知る。我は御身に戀せしなりき。共に庭に出づれば月の光りも常ならず共に奏づれば音色の外に限りなき樂あり。あはれ戀なりしよ。さるにても悲しき今日の別路、只一言の我叫びも君が耳に入りしや否や。情なき情なき人の子とならずば、かゝる憂は見ぬものを君に別れて此の眺め更けゆく秋を誰と語らむ。虫ならねども終夜人の面影殘れる窓に、はてなき涙に咽びぬ。其年も暮れて立ち返へる新玉の春のはじめ

君よりの文を得つ先づ上書の筆の跡なつかしく開きてくりかへしまきかへし讀みつ眺めつ、この日頃絶えし笑も自らもるるなり、直に返書認めて送りぬ、開るゝ所は何處花の陰か雨の窓か。

五

其年四月養父母は我誕生の祝ひを兼ねて盛なる園遊會を根岸の別莊に開き玉ひき。我は其時薄桃色に一面唐草織り出せる上衣に藤色の襟飾頭にも指にも寶石を輝かせて父に替り幾百の賓客に謝辭を述ぶべく壇に登りし時は流石に嬉しからざるを得ざりき。戀知りそめてより榮耀も榮華も樂しからず意志の自由に飢えて、草木の己がじゝ風に靡き魚の好むがまゝに游ぐさへ羨まれて只敢なく日を過した身にも流石に嬉しかりき。

此頃より出入りを初めし若紳士あり、名を水野と呼びて形の如き當世風の氣障ハイカラ髮は常に黒光りするまで美しく撫でつけ洋式の化粧にても爲たるか顏は何日も眞白にて身裝持物一歩も流行に遅れず、毎日の如く來り父母よりも先づ此居室を訪はるゝに、初めは煩さく遂には困りて折には病と稱へ打ち臥して言だに掛ざりし事もありき。聞けば此紳士は近縣の豪農の次男にて何するとも無く都に出で遊び暮せる人なりとか、時折母は我に向ひ「いづれ何處かへ養子に入らつしやる方だよあんな程の好い優しい方のお嫁さんに成つたら、どんなに仕合せだらう、ねえ村さんと何の意味とも知らず云はれし事ありき。

六

思へば父母は初より彼を我夫とすべく家の出入りを許し玉ひしなりき、我は遂に父母の口より彼を夫とすべく進められぬ、親の言に背く御身ならねども添言して。

あゝさても情なき事にはなりけるよ、義理ある親の言葉背くもつらけれど戀しなつかしの彼君を捨つるは猶つらし、さらば親に背きて我戀を遂げむか。あまりに義理知らずなり親の言葉に從ひて戀を捨てむか、そは我心遂に堪えず、あゝ意志を通さむか義理を立てむか。人の世に立つ義理や重き我身や重き。

人にも知られず世の陰に朽つべかりし身の世に出でゝ多くの人に花ともてはやされしは是れ養父母が情なり欲する物は得好む所につき樂しく暮せし此一年が程に父母はわが爲め幾何の黄金を費し玉ひけむ、あゝ我身の受けし恩は大なり、受けし恩義は返さゞるべからず。我は遂に恩の爲意志を曲ぐべく决心したり。

すて難き戀をも捨て死するにもまさる苦に逢ふも皆我誤なり、進み玉はぬ父母を我から進めて受けまじき恩を受けたる我誤なり。あはれ我は自ら運命を造りて而して運命に苦む者、神や冷に笑ひ玉はむ。さても我戀人よ萬里の異域に今宵を如何にか過し玉へる我此の苦も知らで花の窓夢や安からむ。あはれ春風よ心あらば我が此の胸の苦しさを傳へて君が枕に通へよや。

七

雨いつしか降りいでゝ軒をめぐる點滴靜に、何に心せかれてやハラ〳〵と散りゆく花の影さみし。拭へども〳〵涙は盡きずかゝる程に父は再び入りきて「村や先刻は肝心の事を云ひ忘れたよ、彼の水野はね、五萬圓の持參金を持つて來るのだよ、お前はあの人を好かない樣だが此持參金と結婚すると思へば腹も立つまい、よく考へて置くがいゝと云ひ置きて獨り心地よげに打ち笑ひつゝ出で去り玉ひぬ。

さても卑しき御心よ、いかに血を分けぬ他人の子なりとて我にも父母はあるものを、情なくも我心を奪ひて黄金に替へむとは仕玉ふか、汚れし御身が心もて如何程進め玉ふとも我は黄金に靡く者ならず、御身は汚れなき

此身に侮辱を加へ玉ふよ。我は受けし恩義を思ふが故に捨てがたき戀をも捨つべく決心したり、何事も我誤とあきらめし身なれども此身を黄金に替よとは餘りなり。御身の言とし云へば我は遂に背き得ぬものと思ひ玉はゞ誤りぞや。身を賣りて社會の爲には不德の人、生の親には不幸の子となりてまで御身の言葉に從ふ我ならずかゝる人の家に子としてあらば其賤しき心にてこの上幾何の侮辱を我に、我父母に加へられむも知るべからず今は一時も止り難し、されど實家に歸りて父母に思はぬ迷惑かくるもつらし、此上は只獨立獨行して思ひのまゝに身の處置をつくべけれど心を決して立上がる折から下女は障子を開きて一通の文差出しぬ紛ふ方なき君が書なり、戀しき人の筆の跡嬉しなつかしく讀みゆけば半ばかりにすみれの色美しさが、はさまれたり、戀人の手にやふれたると取り上げ我を忘れて見入りしが忽ち心付きて立上り不斷着の上に實家に有りし頃の晴着なりし縞御召の赤裏付きたるお羽織り寶石入りの簪も指環も拔き取りて机の上に置き母の要るまじけれど何かの時の用意にと我の玆に移る時玉はりし黄金取り出し、君よりの手紙まとめて共に四季袋に納め一封の書を殘して立ちいづれば夜色沈として萬籟聲なき暗香袂をめぐりて出で行く我に縋るが如し。好みて出づる家ながら今を限りと思へば自ら三度二度顧られき。

舊友を便りて此地に來り今は小學教員の職を執る身となりぬ。衣服身の廻り昔に似ざる事のみなれど我は限りなき心の滿足を得て樂しく日を過すなり。君が歸朝も早や一年の後に迫りぬ。待つは其れのみ只またるゝはそれのみなり。　（終）





花にしき

おぼろ夜

信濃むらさき女

上

「だつてそれでは罰が當りますよ、嫂様を怨むなんて、數男様、ようく考へて御らん、私は女でよく物の道理はわからないがね、一体貴君が弱すぎるわ、御母様もそう仰いましたよ、わんな氣の強い一郎様の兄弟に、よくわんな優しい人が生れたもんだつて、御父様は、男だから怒つて入らつしやるがね、御母様は貴君が可哀相だつて始終いつてゝよ、私のお部屋へ入らつしやいな面白い雑誌もわりますから」と優しういひくるゝ京子の面、今更のやう見上ぐれば、色わく迄白う、眼許口許のしほらしさ、我が放蕩も、この君故とおもへば美くしき京子の桃割、つかんで劏いて、黄八丈の袂この手で八裂になしつる上、肉づき好き乳房のわたりより、生ま〳〵しき唐紅の血汐見では止まじ、止むまじものを、さて相向ふての神々しさ、もとより京子には一點我意てふものもなく、たとへば柳の西東風のまに〳〵なひくらん糸のそれにも似て、父母の命ならでは、たとひ位高き人の御仰もいなむらん心、女子たるべき資格のこれは第一と昨日までも思ひし事の口惜しさよ、我は世にも美くしき戀を失ひぬ、初より心を得つると定めしがそも〳〵の過、我はかほど迄、松田家の信用なかりしか、京子の心のかほど迄に弱かりしかと、女神の如き人の前、罪の男のよゝと泣きぬ。

朧月おもむろに二人を照して、櫻の花の二ひら三ひら風なきに散るれば、とこともなしにひゞく琴の音、池の小波しづかにうごきぬ。

「兄様は僕の罪をゆるして下すつたがね、京様、ひといよ、嫂様といふ人は、わゝ無教育の者は仕方がないさ、

けれども、嫂樣が家へこられたのは誰の力と思つてゐるんだらう、あんな貧乏人の娘を家柄正しき酒井の家の嫁には出來んと、叔父樣や叔母樣が仰つたのを、僕と京樣がね、說破して納得さしたのではないか、さうすれば僕も京樣も恩人だわ、それに二百や三百銀行の金に手を付たつて、僕を大罪人扱にしないでよさそうなもの情ないじやないか、今じや僕は三界に家なしだ、京樣すこしは憐んで下さいな、僕は一時狂氣のやうになつて茶屋酒は飲んだが、關係なんか付けた女などは無いのだからな、公明正大なものさ、京樣なんか今に御目出度い事があるのだから、其方に氣が取られて、僕の事なんか思つてはくれまいね、それでも少しは可哀相と思つてくれるの」と嫌味の詞乙女が胸へなげるやうにいへば、京子はほゝと笑ひて、まことの同情は寄せざりき、冷たき性にはあらざれど、かけても熱愛などいふものはなく、影より形をおもひ、形より心を觀るの深刻はなうて、從兄の數男にさら〳〵無情の積はなく、これでも精一つぱい慰籍と同情を與へつゝあるを自ら信じて、優しき詞折ふしの問答に現はるれど、この垣一重は越へざりき、京子は戀になやめる數男の胸を讀まざりき、やがて來るべき結婚の樂をもおもはず、夢のやうまぼろしのやう、一月の後には花嫁樣とも祝はるゝ身を、他愛ない事いふて其日ぐらし、彌生の雛人形、去年と異りたるが欲いとて、母樣促して十軒店歩き、父樣がいつまで赤ん坊だ、ちとたしなめといひ給ふを、オヽ怖や母樣と、乳房にすがらまほしきけはひなり。

中

酒井數男、体格逞しう、必ず兄のやうに立身出世して名譽を輝すに相違なし他人より貰ふたとて兎角は浪風のおだやかならぬもの、一つそのこと京子が聟にと、まだ中學時代より、影の如きえにしの糸の結ばれぬ。

「數男」銳き叔父の一聲はいかに心弱き若者が血を狂はしけむ答もなうてうつむきぬ。

「貴様兄を見い一郎を見い、貴様の年頃には海軍學校を卒業して直ちに正八位を戴いたぞ、貴様は何だ、生意氣をいふな、文學で飯を食ふつもりか、文科へはゐりたいとは何の寢言ぞ。海軍少佐酒井一郎の弟が乞食文士になつてとうするつもりだ、又この叔父をなんと心得る、貴様は軍人を侮辱して居るな、戰爭の器械と心得て居るな其くさつた心が直らぬ中は、出入叶はぬ、どうじや數男」と終りの詞さすがに慈悲ある音響を傳へて、美くしき京子を得んとすれば一生をこれへと定めし藝術を捨てざるべからず、乞食といはれやうが、愚物といはれやうが、契ひし詩の神、そがみまへに捧し祈禱を、京子が美には代へられず、ましてや、忌み嫌ふ軍人の修業はとても〳〵爲し難し、いかにせば目的通りに文學を捨てず京子をも得らるゝ事ぞと、もがきにもがく胸の中、唯夢のやうに答へしは「叔父様僕は軍……軍人にはなりませぬ………」

かくて美くしき京子は永遠の世に我物たらず、松田の家は永遠に我が住家にはあらざりき。

兄は海軍に事ふる身の、萬里の波濤に浪枕喧がしき航海にあり、家には嫂様の梅代といへるが全權を握りて、一錢も自由にはならず、叔父の意にそむきて我が酒井の家へ立かへれば、嫂は悲氣に「數男様お前様といふ人にもあきれて了ふね、叔父様の家を飛び出して、とてをうろつひていたのです、兄様が居らしつたら家の門はまたがせませんが、私にはそんな氣強い事は出來ませぬ、昨夜ね叔母様がお京様と見へましてね、まあ數男様にもあきれて終うじやないか、廢せば可いのに、昔堅氣なお人の前で、軍人の惡口、一体お前様中學校を卒業さして戴いたのは誰のおかげです、皆兄様のお力ではありませんか、兄様のお陰で朝晩の御飯をいたゞいて居るのですよ、さあ叔父様にお佗をなさいますか、私が兄様にけふはなり代つて小言をいひますよ」と義理ある姉の忠告も、唯一筋に邪慳とのみ取られて、他人のくせに何をいふ馬鹿な奴、手前の家は貧乏でもらはれないと叔父様がいつたのを、僕が納得さして貰つてやつたではないか兄も兄だ、今では華族からでも貰へば貰はる

ゝものを、氣象が勝つて居るからとか、何とかいつて、惚れた大馬鹿、梅代の高慢臭い面見たくでもない」といつになき大言吐いて、家を飛び出し、新橋柳橋遊び狂ふて、一月のうつゝに三百圓の借財、もとよりこれは兄の手許より償はれぬ。

何を失望の極とは知らねど、京子はいつも兄の如く友の如くおもひし従兄の、俄なる放蕩、少なからぬ借財をも作りいだして、家にも居これぬ仕義今頃は大方橋の下で乞食同様な生活をして居らう、大白痴、大愚物と、春とはいひながら肌寒き夜を、炬燵に父母が語らふをきゝて、何となう哀れさ身に逼り、この人には珍らしきほどの熱心もて、宥を父母に乞へば、さすがに母も同意なしけるを、物がたき父はいたく京子の不心得を責めて、數男ともいふな、従兄ともいふな、わかの他人に用はなし、乞食となりてこゝの門邊に立つも一飯をも惠むな、惠んだものは家を出すぞとの嚴命、京子無雑作に頸うちふりて「父様、私、追出されても可いわ、數男様を助けて上げたいわ、母様私これから探してきましようか、今晩のやうに雪摸様ではどんなに寒いか知れませんやね、可哀相だわ、母様つたら、よう、河へでも落こつたら取返が付かないじやありませんか、あんな氣の弱い人だから、父様明日いつても宜敷い、母様私、數男様探がして來ますよ」と一重にゐはれがる娘の面をきと見やりて「こら無茶をいふな、お前は今に陸軍中尉の夫人になるのだぞ、あんまり他愛ない事をいふな、たとひ従兄の間柄とて、もう結納も濟んだのに、數男を探しに行くといふ事があるものか、彼奴が軍人の目的さへあらば二年でも三年でも成功を待つて、お前とめやはすのだが、殘念な事には腰抜で、昔なら手打にもすべき奴、それをお前が可哀相だといふて、探がしに出掛るなどゝは以ての外、私も何、甥一人捨たくはないが、われでは自ら捨てるのだ、しかしお前の志に免じて、二三日の中には一まづこゝへ呼んでやる、しかし婚禮前のごた〳〵に、おくわけにはゆかぬから、五日でも十日でも寒い目だけはさせず、又靜にいひきかしてやる

から、お前獨で出たりしてはならんぞ、聟殿の方へきこへてもよくないからな」といつもは怖ろしき父の、けふに限りてやさしきも、まことは數男が身の上の案せらるゝがゆゑなんめり。

下

かくて數男は松田家の人々が情によりて、からき浮世の苦痛より免かれぬ、決して、決して、こゝの門くゞるまじと、契ひし數男の、いかに親身の叔父が詞とはいひ、かく迄も叛いて、從ふまじとかねての覺悟もろくも破りて、再び松田家の門をくゞれば、相も變らぬ美くしき人の、おもひなしか日頃よりはすこし大人びて顔さと赤めつ、「數男樣よく歸つて來たのね」

歸り來りしとて、迎はれしものゝ、こゝは終生我が棲む家に非らず、まして君ははや人のもの、一月とは出ずして妻てふ名のもとに、初々しき桃割を、丸髷にや結ひ變ふるらん、かくて我は益々君より遠ざかるべきもの妹のやうに愛しみ、姉のやうにたよらば、いまはしき名や、清き〳〵君が上にかゝらん、嚴めかしき叔父上を說いて、たとへ一日半日たりとも、なづかしき松田の門をくゞらしめたるは君が力の與つて大なるよしは、きのふ初めてきゝ知りぬ、かばかり我を哀れとおもひしか、かばかり我のいとしかりしか、否々愛し戀しのそれならで、幼よりしみし思の、唯乳飲兒が母の懷を慕ふがごと、我が名のこひしう、我が身のしたはれしよ、それにしても、今すこし京子に強き心のありせば、他人との契をいなみて、かくまでむごき運命の捕虜とはならざりしを、とて迄も戀しく、とて迄も怨めしきは京子よと、數男はつく〴〵おもひに沈みぬ。

『おや數男樣、およつて居らつしやるの』と今迄夢に相見し京子の母上、品よき黑紬の平常羽織に、着物はおなじ紬縞、とてまでも質素に、荒々しき叔父に、かやうの優しきがよくも連れ添ひしよと、今更ながら數男

は叔母様の面を見まもりぬ。

「いろ〳〵御厄介になりまして誠にすみません、酒井の嫂の酷いにも程がありますね、叔母様、僕が失策は失策として、すこしは憐れんでくれても可いじやありませんか、高が三四百の預金をへらしたとて、殺人罪か何か犯したやうな取扱をするんですもの、僕は一生、酒井の家へはゐりませぬ、兄貴は罪をゆるすから、後來再び犯さぬやうと書面をよこして一言金の事はいひませんのに、嫂はあんまりです、叔母様僕は三界に家なしです」といはれて見れば、近々に結婚の式を擧げるから當分いやでは有らうが酒井へ行つてくれろとはいはれず、叔母は當惑して、よきやうに慰め、一つそ京子をしてそれとなくいはしめる方よからんと、其旨かたれば造作なくうなづきて、よう御座んすよ、私がいひますから。

櫻の花の半、散りて、池の面にあや織るさま、婉なれや、京子はいつものさえ〴〵したる面に、霞か雲か、うれひの影を宿して、駒下駄そと離室をのぞきて「數男様、何か讀んでいるの、私つまらないわ」と涙ぐみぬ、「なぜ、なぜ、お目出度い矢先に何がつまらないの」とこと問ふを「なぜつて、私、いやだわお嫁様になんかなるの、氣心も知れない人なんか大嫌ひ、數男様のやうに幼い時から知り合つた人なら好いが」

夢なれや、夢なれや、京子の口よりかゝることのはきかんとは、もし、もし、聟君を嫌ひて、何とはなしに我のこひしう慕はしからば、京子が一生の不幸、大恩ある叔父叔母の愛子を不幸に泣かしむべからず、今なり、今なり、去るべきは今なり、と空には朧月花の梢にかゝるゆふべ、健げなる一通を叔父上様としるして、いづちゆきけん、數男は再び見へずなりぬ。

京子は初々しき奥様となりて、何事もたのしう、何事も嬉しかりき、而かも再びのおぼろ夜に、うき事ありしやいなや、あはれ數男をおもひでの涙、世を終はるまであらしめ給ふな。（甲賞）

浮世の風

(一)

花にしき
白ゆり

すさぶ木枯にもまれつくして、今は枯れたる梢の、どこに見處もなけれど、花の頃は、さてぞと思ひやらるゝばかり、老木の櫻を植込にせる、ひろきお庭の、そばしまの際を、ゆるく流るゝ遣水の汀には、霜にをごれる水仙花、まだきにつもれる雪の俤みせて、清き薫りに匂へるもおもしろきを、春とは名のみ、ふく風さゆる此頃の空、紅蕾の唇堅く結べる軒ばの梅に、谷の戸出しばかりの藪鶯が、チヽとなきつゝ、まださかぬかと促し顔に、枝より枝に、木傳ひぬ

日和よき、御書齋の、お庭に向へるお障子左右にひらきて、丸窓のもと、お机にもたれたまひし奥樣、お手紙手にして、よみゐたまひしが、お胸のうれしき御思ひ、面にあらはれて、さらでだに、美しきお顔の、ひときわてりわたる心地せらるゝ、其おんそばには、お氣に入りの花が、今そめわけてきたりしばかりの、裏模樣、無雙羽織の黒縮緬の反物、とぢめときて、手にとりわげ、しきりに尺をはかり居りぬ、うれしき〳〵御思ひ、小さきお胸に、つゝみかねたまひてや、奥樣わけもなく、「ホヽ」と愛らしきお口元に笑ひたまひて、「花や旦那樣が、上海まで、おかへりあそばしたと、今お手紙が屆ひたよ、ヲヽ、それ〳〵、そなたは、まだ、旦那樣はしるまいね」、といふを、花は尺もつ手をやめて、奥樣の御面をみわげて、ちよつと考へしが、物さし下に置きてヲホヽと笑ひ、「わゝ、さようでございますか、それは〳〵、何よりおうれしうございましょう、……旦那樣のお留守にわがりました私、お歸り遊ばして、ご覽になりましたら、さぞ、この不束に、お驚き遊ばすでござい

ましようが、奥様そのせつは、よしなにおとりなし下さりませ、ヲヤ〳〵、私とした事が、何といふそゝつかしい、今迄さしかけた尺、すつかり忘れてしまひました、」と笑ひて、再び物さしとりあぐるを、奥様も、よみかけしお手紙片手に、古代紫に、白の小格子そめたる、縮緬のお羽織のお袖に、小さきお口を掩ひて、ほゝゑみたまひぬ

（二）

主とかしづき、召使とよばれてより、日はまださしてたゝねど、奥様は、あはれなる花が身の上、きゝたまひてより、御自分の、何不自由なき御身にくらべて、あはれやと思ふお心、日にましてまさりゆけば、世にたよりなき孤子の花、浮世は、ほんに〳〵つらいもの、栄へしときは向ふより親戚となのりし、たれかれも、零落ては、たれ顧るものもなく、皆他人となる世の人心、親なき後の便りと縋る、たつた、一人の伯母様、はらがわりとはいへ、父は同じき、母様の兄弟、現在の伯母さへ、鬼のやうな慘き心、よく〳〵不仕合せに生れついた私、ひろい世界に、あはれと思ふて下さるは奥様ばかり、お問ひなさるゝまゝに、身の上話の其折に、流石に耻かしければ、委くは申上ねど、行衛しれざる許嫁の夫の爲、操をたてたしといひし時、勿躰なくもうれしくも、奥様、あの星のやうな、かわいらしいお目より、ホロ〳〵と、涙を落して下されて、「ホンニやさしいそなたの心、きつと、私が此末、たよりとなりてやれば、力を落してはならぬ、」と、世にもありがたきお詞、伺ふにつけて、しみ〳〵、心から忝く、此お方の爲ならば、火水の中もいとはじとまで、ま心つくして仕ふれば、奥様いよ〳〵ご不愍いやまさり、終にはなれがたなき間となり、主従とは名のみ、まことは、むつまじき同胞のやうにて、旦那様お留守のさびしきまゝに、奥様ひねもすおん側をはなちたまはず、夜も、女中部屋へは

さげたまはで、おん臥床のかたわらへ、同じまくらに、夢を結ばせたまひ、わけくれ花や／＼とめでたまふお年にわはしては、奥様と申上るも、お可哀想な位にて、今年わけて、やう／＼二十一になりたまひしばかり散も始めず、咲も殘らぬ花の、今を盛りのおん齢、ましてや、おうつくしきに、一体が、都育ちの派手なるお姿なれば、慥に二つ三つは若く見へたまふに、名さへ、輝くばかりの照子様とよばれたまふ、お花は、奥様には二つの妹、容貌の美くしさは、いづれまさり劣りはわらねども、渡りきたりし浮世のわらなみに漂ひて、涙の境遇にさまよひし故にや、どことなく、愁顔なるに、じみなる姿したれば、同じ年頃とみらるゝ程なり

奥様は、元と實業社會に、其人わりと知られたる、園村肇といへるおん方の、掌の玉とめでたまひしお孃様なりき、御兄弟とては、まだ小學校にかよひたまへる、ちい孃さま、お一方わるのみなれば、家をつぐべきおん身なりしを、今の旦那様、其始め、秋田由雄とて、高等商業學校に苦學せられしを、御父上が彼校に行きしとき、其俊才を見抜たまひて、お邸におひきとりなされしが緣となり、いつしか、お孃様、切なき戀に思ひを焦したまひて、はては病にうちふしぬ、脆きは親の心にて、いたくこを憂へ、とせんかくやと、奥方共々、御心憂の末、終に悶ゆるおん胸の裡を知りたまひ、子故に迷ふ心の闇、流石社會に出ては、飛ぶ鳥落す勢のおん方が、ご自分で世話する書生の前に頭をさげて、どうぞ孃を助けると思ふて、厭でわろうが妻としてくれとの、懇々のお頼み、奥方も、涙片手に、しみ／＼と仰せらるゝに、由雄、思ふ仔細わりて、當分妻は持たぬつもり何卒此儘書生でお使ひ下されと申上ても、現在我故に、思わる人の大切のお孃様が、此いたつき、お氣の毒にもわり、お可哀想にもわり、拒むに拒まれぬ恩義のしがらみ、義理の關所にせきとめられて、思ひし心屈かず終に由雄、お孃様のお婿様とはなりぬ

兎角に老人は、若き者には窮屈なものと、どこ迄も、有難き親心に、終に富士見町の本邸より、程遠からぬ處

を撰み、一番町の、いと物靜なるわたり、お濠に臨みし眺めよき地に、新たに立派なるお邸を搆へられ、新夫婦の樂しき家庭をつくりたまひぬ

もとより、戀ひ慕ひて貰ひたまひしお婿樣、お嬢樣、小さきお胸に漲る愛の泉、此君の御爲にと捧げまつれば旦那樣、いとしきものと思召すほど、いよ〳〵鴛鴦の御語らひ、いとこまやかにをはしましき、折しも、空には霞たなびき、地は、花の雲に包まれ、そよふく春風に、柳の糸のうちけむり、百花笑ひ、蝴蝶まふ頃、旦那樣首尾よく特待生の名譽ある名のもとに御卒業遊ばされ、直ちに商業視察として、外つ國に至るべきよしの命をうけ、しばしつきぬ名殘の御袂を別ちて、旅立たまひしあと、奥樣は、御歸りを、いつしかと待わびつゝ、淋しき〳〵日をば、數へたまふなりき

（三）

越路の空は、早もみゆきに埋もるゝ此頃なれど、都には、まだ珍らしきけさの初雪、さく花の俤みせて、お庭の櫻の枝に、つもりたるも面白きに、松の緑は、埋るゝまでならず、薄綿かぶせたらんやうなるを、餌あさる雀の羽風に、ひら〳〵と飛ぶさま、いとうつくし、見渡す限り、一夜に造られたる銀世界、薄墨色の空、まだはれやらぬ朝まだきより、けふは一番町の園村家の大門、八字にひらかれて、チラ〳〵とふる雪を、母衣によけて、出入る車ひきもきらず、ひるすぐる頃よりは、お奥にて、女共が、足を空にして、お膳の持運び、お銚子のおかわり、いといそがはしく、目もまわるばかりなるを、銀燭まばゆき廣間には、今や宴酣にして、富士見町の旦那樣始め、御親戚の誰彼、笑ひさゞめく聲のにぎわしさ、けふぞこゝのあるじ、園村由雄が、任命擧へて、外つ國より、歸りきたりし其祝の莚を開かれたるなり、そこよりも、こゝよりも、ひとつ處に集りきた

る盃に、たしまぬ酒、いつしか酔ひし由雄、美くしき面に、紅の色深く、酔眼朧にかすみて、人、一人の顔が二つ三つに見へるやうになりては、早其席に、すはつて居られぬ性分、しどろなる足元ふみしめて、廊下づたひ、部屋の入口迄はきたりしが、障子あくるも間に合はず、撞と倒れて前後もしらざりき

奥様は、女客のもてなし、母様と一緒になりてけふのあるじ役、すそ長くひきたる、黒紋付の下にかさねたる白の紋羽二重のふきが、まつくろになる程の忙はしさ、お花はけふも、奥様のかたへ離れで、女席のお給仕役大方の客は歸りし跡、酒にかけては有名な、町田様と、鈴木様のご隠居が、酒ぶとりの大きなる軀、うちふりて、來られしときの、澄した素振とこへやら、歌ふやら、舞ふやらの大騒、お銚子ならして、又更に、二次會は開かれぬ、お花、くたびれ足引摺りて、こなたをさして來る折、敏き耳に、鼾の聲聞つけて、可愛き目を四方に配りしが、急ぎ足に、臥る人の傍に來りて、さしのぞきて顔をさと赤らめ、「ヲヽ、旦那様、此夜寒に、お風召ては」と揺起せども正体なきに、「誰か手をかりて内へお入れ申さん」と、獨言て、行かんとすれば、由雄朧げに眼をひらきて、「水をくれ、」……お花は、いそぎ洋盃になみ／＼とつぎて、捧げ來り、倒れんとするおからだ、後より、「しか」と抱きまゐらせて、お口のあたりに水よすれば、「グット」のみほしたまふ其横顔、あかるきお廊下の、照返しの光に、つく／＼みたるお花、洋盃もつ手、ブル／＼とふるへて、胸轟くを、由雄ねむげなる眼をひらきて、「ねるから床をとつてくれ、ヲヽ苦しい、」といふを、お花は肩にして、お部屋の裡に扶け入るれば、お床、延るまもあらず、撞と倒るゝにせん方なく、枕あてがひ、かいまき、そと、うちはをり、立出んとせしが、お花、何と思ひてや、立とまりて、正躰なき、旦那様の、御顔、昵とながめて吐息つき、「あゝ私の夫は、私には十の兄様、今世にお出なさらば、恰度、旦那様と同じ位の年恰好、年こそちがへ、旦那様の面ざしが、由郎様の舊きお寫眞に、よう似たやうな氣がするも、あゝ心の迷ひ／＼、……お歸りなされてより

つひごた〱して、ろく〱お見上げ申さゞりしが、いつぞや、お玉どんの話に、今小町に、今業平と、よそではお二方を綽名して居るといふたも、うそではなからう、何といふ、美くしき御容貌ぞ」と、つく〲恍れたるお花、目をねむりて、考へ居りしが、キツト、心に決せしもの丶如く、障子ひきあけ、外に出で、ホツト吐息して、「あゝ私とした事が、實にあきれた、大それた考起して、あゝすまぬ〱奥樣に。アゝ廣い世間だもの似たお顔はいくらもあるもの、きのふ、お玉どんのとはずがたり、調子にのつて話し出し、旦那樣のもとのお名は、秋田由雄樣お家はないが、お生れは桐生とか、……あゝもしや〱。……否々、同じやうな名はいくらもある」と、自ら心にかたり、又心に強てこをうちけしつゝ、お花は御用あるみを、とんと、忘れしもの丶如く、懷より、肌身はなさぬ戀人の寫眞とり出して、じつと眺め居りしが、俄に、心付きたるもの丶如く、いそぎ再び、こを藏め、「ホンニ、私は、マア忙しい身で、何の事だらう、奥樣が、さぞ、お待兼遊ばしてゞあろうに」と、我と、我身を叱りつゝ、心殘して、かなたに立去りし跡、旦那樣、もだゆる乙女の可憐の胸の裡、知り給ふか、あらずか、いかなるたのしき夢路にや、わけ入りたまひけん、鼾の聲いと高し

（四）

さしも、まめ〱しう働きたりしお花、此頃は、する仕事もろく〱手につかず、何となう、物思はしき樣なるに、顔の色さへ青ざめて、頬のあたりに窶れのみゆるを、眼はいつも濕みがち、花はどこぞわるいではないかと、奥樣の、常にかはらぬやさしきおん語、伺ふ毎に、「いゝへ」と僅に答へつゝ、傍らむきては、涙を拭ひぬいふ勿れ、とく勿れ、つもる困苦の間にも、堅く操を守れる花、由雄の美はしき容色に、そゞろ迷ひて、浮きたる心に、戀を描きしと、これ戀といふや、否やはしらねど、お花こひしたふ其人に、由雄の面ざしが似たる

より、唯何となう、なつかしう、思ふにつけて、夫をこふの念、いよ／＼深くなる毎に、あやしや、旦那樣、いよ／＼いとしう思ふやうになりぬ

けふは、奥樣、お實家へおこし遊ばさる丶に、花も共にとの仰せ、心地わるきに、おゆるし下されと、申上てあとにのこりしお花、かれこれ思ひめぐらせば、つく／＼と世の中なさけなく、しきりに心細うなりて、ひとり部屋の中になき居りぬ

旦那樣、さりとも知りたまはず、御書齋の椽の上に、けさ、友の許より送られたる、早咲の梅の鉢、いぢりたまひつ丶、「誰か、鋏をもつてきて與んか」と二三度よびたまへども、たれもいらへせぬに、お花涙をふきて、みだれし衣紋つくろひつ丶、花鋏もちてゆき、泣顔隱さんと、うつぶき勝に、そと、御側にさし出し、いそぎ立去らんとすれば、生憎や、「花」と、旦那樣のよびとめ給ふに、又立戻りて、手を支へ、お椽敷の目をのみかぞへ居れば、旦那樣、御身をそなたに向けたまひ、「そなたはとこぞわるきか、奥がしきりに心配して居るよ、何か心にすまぬ事あれば、話してくれ、力にもならん、きけば、そなたも我と同じく孤子の身とや、便りにする濱の伯母とやらんも、心よからぬ人なりとか、定めて心細かろう、そなたの生れは桐生とのみきゝたれと、親の名は遉にだしたくなしと話さぬよし、われも生國は桐生、われとは國を同じふし、奥はそなたを妹の如く思ふてゐるに、何の我等へ遠慮はいらぬ、心に思ふ事かたれよとの語、伺ふにつけても、いよ／＼胸くるしく、そのやさしき仕方が、花にはお恨み、なせ、つれなくしては下さりませぬ、さう仰せらる丶程、一層に、罪をかさぬる此私と、心の裡に思へば、早生地なくも、涙はら／＼とちりて、膝の上に玉と砕くる不甲斐なさ、お答さへせで、うつぶきぬ、旦那樣お顏の色沈みて、しばし吐息したまひしが、おん膝こなたに向けて花、そなたに、きかん／＼と思ひ居りしが、そなた、あの桐生の井桁屋といふ家知てか、いかにせしや、お花つかへし

手ブル〳〵とふるえて、ふつくりせし前髪に浪うたせて、いよ〳〵うつぶきながら、存じて居りますと、幽かに〳〵いひぬ、旦那様は、今きり取りし枝、寶石の指環かゞやく御手に、手まさぐりつゝ、いよゝうれはしき御面に、聲さへ少しくふるひたまひて、あの井桁屋も、音に聞へた素封家なりしが、破産してから、行方しれずになつたそうだねと、いひたまひて、腕拱きて、頭をたれ、物案じたまふ、あはれ、暗雲一帶、今しも、月の面を掩ひぬ、御胸の裡は、無限の悶に、人しれず、惱み給へるなり、あの井桁屋の薫と我れとは、互に許嫁の間なりしが、別れてより、十年あまりの今日迄、更にたよりきかぬは、數ふれば、われも年頃、他に夫持ちたるか、われも退引ならぬ義理故に、今の照子を妻としたれど、もし、薫が、我との約束、反古にせずば、定めて我を、名利に迷ひしものと思ふであろう、照子が眞實つくす貞操に、忘るゝとにはあらねど、思はぬ日もありしが、不愍のものや、今は、いづくにいかにして居ることぞと、思ひみだるゝ由雄の面、お花はじつと、みつめ居しが、思ひきりたるものゝ如く、失禮ながら、旦那様は、もしや、秋田の御子息、由郎様ではござりませぬかと、語も未だ畢らざるに、旦那様せきこみたまひて、そなた、我幼名迄知て居るとは不思議、苦しからずば、そなたの素性我にあかしてくれよ、ときゝゐたるお花いかにかしけん、「ガツパ」と前にひれふして、物さへいはで、なき沈みぬ

（五）

お花、それより部屋にこもりて、病の人となりぬ、お心やさしき奥様が、醫者よ藥と仰せらるゝを、涙ながらに、お斷り申て、一切これを遠ざけ、唯夜となく、晝となく、あやしき事ども、ひとり、くど〳〵いひながらさめ〴〵となきぬ

わる夜お花は、何と思ひけん、身を起し、枕べのほそき燈火のもと、鏡に向ひて、ハラ〳〵と涙を落し、うつれる此影、鏡によもや僞りはあらじ、さても、やつれし此さま、なさけなや、それもその筈、昔の花でなき、性根のくさつた此私、戀の上には、邪念も起り、勿躰ない、奥様を、たとへ一時たりとも、戀のかたきと怨みしは、身の程しらず、恩しらずの私、姿も影もかわる道理、されど、いふは女の愚痴かはしらねど、私も昔一度は、お孃様とよばれ、子供心にも覺へてゐたれど、兩袖藏の土藏店、井桁屋といへば、人にしられし老舗ののれん、界隈きこえし分限者の一人娘と生れながら、有爲轉變は世の習ひ、父は相場に手を出して、失敗してよりは、終に累代の土地田畑まで、人手に讓る仕義となり、伯母をたよりて、濱に來り、戸部に裏店ずまひのわびしき月日送るうち、父に別れ、十四の秋、又も、母親わと追ひて後は、伯母の厄介となり、親の忌服の、すむかすまぬ頃より、そこ此處と、奉公しての艱難辛苦の其間にも、母の遺言を、心に堅く刻みつゝ、由郎の行方を、たづぬれど、更にしれざるかなしさ、沒義道な、伯母が、「母の臨終のまくらべに、誓ひし語忘れて、金の故に眼眩み、私を、妾にゆけの、洋妾になれのと、せまらるゝかなしさ、すまぬ事とはしれど、たつる操にかへがたく、そとぬけ出でゝ、東京にきたり、薫といふ名は、下女の身分で立派すぎると、自分でなはして、それにゆかりの花とわらため、今は、召使はるゝはかない身の上、そもや、長年のうき苦勞は何の爲、ことし十九のけふまでも、たて貫きし女の操も、いとしき君に逢ひしとき、唯つた一言、アゝはかない〳〵女心、それを眼前に仕へながら、浮世の義理のいましめに、狂ふ心の駒をつなぎて、夫とも、妻とも名告れぬかなしき思ひ、何にもご存知なき奥様が、數ならぬ私の爲に、み心なやまさるゝ勿躰なさ、旦那様は、私の尋ぬる夫、由郎でと、申上て、よしやお二方の間をさきて我に戀人の愛をうくるとも、恩ある奥様に、アゝ思へば、去年私が伯母さんに見つけられて、妾にやるとて、たつた今、お暇を戴きたしと、伯母が、奥様にせまりし時、私よ

り、わけをお聞取りなされし奥様が、不愍の者よと、仰せられ、其頃、まだ奉公の、一年にもたるか、足らぬ私の爲に、緣切同樣百圓といふ大金だして、お助け下され、心の操たてさせて下されし、大恩ある主樣のこひ婿、今は主人の由郎樣に、私は・あなたの妻の薫と、どう申上られよう、されと、さら〳〵嫉妬するではなけれども、御ふた方の、睦さおん有樣、みてゐる心の此くるしさ、きけば、旦那樣は、餘義なき義理にせまられて、此方の婿君となりたまひしとの事、それも私の家が、屋敷おとに、草のはへる仕末でさへなくば、又何とかなされしならんも、生死もわかぬわれらの成行、それも、これも、皆私の不運故と諦めまする、人の語ながら、由郎樣は、くれ〳〵婚禮を、ご辭退わそばされしと、それ伺ふて、せめて心の慰にいたしまする、御二方のご生涯、此末長く〳〵、おん睦じう榮へたまへ、薫といふ者さへなくば、御夢もまとかならん、なまじ、世にわれば、さま〳〵なる邪念も起り、猶更に、罪も重ねやうと我と、我心に語りぬ。（乙貴）

◀世界第一の高齡者▶

大和にても古くは武内の大臣が三百の長命を保ち續きては三浦大助百六ツと芽出度き例にも引かるゝが其の武内が齡の中ばなりとは云へ三浦大助よりも五十一年多く生延び即ち當年百五十七歳の高齡なれども尚ほ杖にも扶けられず最と健かに振舞ひつゝある矍鑠の翁は米國桑港に住むマニウル、デル、バレーと云へる人なりけり元來世の高齡者の中には其の生年月の曖昧なる者尠なからぬがバレー翁の戸籍は斯る不明の事もなく紀元一千七百四十五年十一月廿四日と云ふに墨耳古國のザカテカシに初聲を揚げ現に米國にては世界第一の高齡者として其の齒德を仰ぎ居れりとぞ扨も翁の故郷を去りて桑港に來りたるは其年齡百歳に達したる老躰多折なりしが當時桑港の土地は未開を極め今の繁華の狀態は夢にだも想ひ設けざりしと云ふ翁は現在甥の孫に當れる者を對手として老後の樂しき月日を送りつゝあり平素其の長命の原因を話せるを聞くに烟草と酒は健康を害するものと認めて少壯の折より一滴中服も口にせず又身躰に濕氣の及ばんことを恐れ一たびも跣足になりたる事なかりしと今の壯健の狀態にては東方朔が三千年の齡も此翁に保ち得られも圖るべからず

小夜千鳥

(上)

花にしき

土浦　山口すみ子

今宵は如何に幸多き夜なるらん、絶えて久しき戀人よりのたよりを得て、いにし昔の嬉しく果敢なき夢のあと今更の如く繰返されつ、敢なく別れし其人の面影さへも浮びいでゝ、胸躍り血潮狂ふうれしさに膝の進むも覺えざりしが、さすがに娘の手前恥しと、斜にかゞやく燈火の光をさけて、お清は俯向き勝に客なる男をぬすみ見ぬ。

「如何にお血統ひきしとはいへ、よくも似ておはし給ふもの哉」と今宵の嬉しく恥しきたよりをもたらせ來たりし客人は、お清に注ぎゐし眼をそらして、更に娘直子をじげ〳〵と見入りたり。

此處は逗子の濱邊のいぶせき家、渚を洗ふ浪の響きは後にきこえて、わけ放せし小窓よりさしいる月は淡き光を椽に投げつ、吹く磯風は軒端にさわぎて、僅に雨露をしのぐに足る家の樣。その片隅に坐せる直子の姿は、つやなき衣にいろなき帶、髮の飾りも荒磯邊に漁取る蜑女と異ならねど、わらそはれぬは眼元口元、眉のかゝりのやさしくて眞玉に似たる瞳可愛く、凛と張る眼尻は殿樣そのまゝ、飽く迄白き顏の色、紅玉に似たる耳朶の美しさ、かくと告げ知らせまゐらせなば、如何ばかり喜び給ふ事ならむと、客なる男は嬉しさの笑顏をそのまゝ、お清の方へ膝おし進めて、「御身は如何に思し給ふ、語るも中々涙の種に侍れと、殿には只一人子にておはせし菊郎樣、とみのいたつきにて果敢なくなり給ひしより、御歎きの樣はお顏の色にもいちゞるく、見上ぐる我等もそゞろに涙止め難きを、まして御嗣子の失せ給ひし事とて數代續きし御血統は絶へなん有樣、世の

人は月よ花よとあくがれ狂へど、廣き御家の中は鐘の音法の聲に閉されて、花咲き競へと稱さん人なく、鳥囀れど耳傾けん者もなく、涙の中に春も暮れ秋もいつしか過ぎ行きて降雪多きみ冬のなかば、三ヶ月凄く霜こほりて、隙洩る風そゞろにたへ難き夕より、殿にはみ心すぐれずなり給ひぬ。驚く人々醫師よ藥と立騷げど、はか〴〵しく御全快の模樣もなく、ひたすら菊郎樣いとほしとそれにのみ、心殘らせ給ひけん、病ひある御身をおして日毎の御墓參、御母堂樣初め奥樣の御心痛一方ならで、千々に心を碎き給ひし或夜の事、宵暗のおぐらき空を幸と、庭の繁みの木立の蔭に、御母堂樣ひそかに我を招きよせて、我子男爵直行にはいにし二十年の昔の夏、心例ならで逗子の濱邊に遊びしおり、美はしき賤の女と契りかわせし事ありしが、如何にせん其折は、今の嫁なる靜江と縁談の約なりて、病のいゆるを待ちわびつ、目出度式を擧行せんとの志なりしかば、罪深きわざと知りつゝも、ある夜人知れず宿をぬけいで、磯馴松影黑き木陰に彼の女を誘ひ行き、賴みつすかしつ、義理と情に清き戀をば引さきぬ。爵位や門閥のなからざりせば、妾はいかでさる鬼々しき事をばせん。堰きくる涙を袖につゝみつ、打しほれて歸り行く哀れの樣を見る目は辛くはた悲しく、許してよと闇に消え行く後姿を、妾は遙かに伏しおがみき。其夜は浪さへいとゞ荒れ狂ひて、み空の月にはいたむが如き色てりそひ、鳴きつゝ過ぎゆく小夜千鳥の聲さへいとゞ哀れなりき……とかく語り給ひし御母堂樣の御手は怪しう打震て、きら〳〵と御膝の上にかゞやく玉は、哀れに咽ぶ御涙にておはせしならむ」と男ははと吐息しぬ

お清はまた今更腸斷れん思ひしつ、泣かじとすれど涙はわやなく溢れいでゝ、言葉もなくさめ〴〵と泣き沈みぬ。男は猶も語をつぎつ、「御母堂樣には漸く亂れもつるゝ胸の惱をしづめ給ひて、の一民家、妾はげに罪深き事してけり。直行は程なく靜江をめとられしが、それよりぞ、寡言の人勇氣なき人とはなり侍りぬ。其後はのかに傳へきけば、彼女は直行が情の種を身に宿せしとか、そを耳にせし妾の驚き心苦しさは如何なりけん。

あはれ初孫に恙はなくてや、凶事はあらざるか、正しき父はあり乍ら私生兒よと冷笑られて、如何に悲しき一生をや送るらん、そも誰が爲ぞ………と思ひいたれば、身は身をせめて夜毎の夢もまどかならず、心は心を苦しめて罪をかぞうる胸の切なさ。さるをいつしか忘れしとにはあらねど、菊郎の生れいでゝ愛らしさの念深うなるにつれ、心の惱も奪ひ去られて、老の身の只事なかれとのみこの年月を送り來たれと、去年菊郎の失しよりまたもいにし昔の罪のくりかへされ、惱心の堪へ難く、淋しき思ひのまさるとても、まだ見ぬ孫は如何にせし、軒の呉竹綠濃くすぐなる道に生ひたちしか、高峰の花のうるはしう塵にもそまで咲きいでしか、逢ひたし戀しと思ひ侍るを、まして直行の心はさこそ堪へ難からめ、頼ひはこゝぞ、御身窃に逗子にいたりて、可愛き孫を迎ひ來たりてたまはらずや、嗣子失せはてゝ血統たへなん折柄なれば、夢粗略にはいたすまじ、必ずとの御内意うけたまはり來て、漸く尋ねあてたる嬉しさよ」となが〳〵しく物語りしつ、さて懐中より幅紗包みをとりいだして、「親御様の貴女には、些少ながらと御母堂様よりのお心づけ、何卒うけてたまはれかし」とうや〳〵しく差出しぬ。

(中)

寢室の燈火は油つきなんとしてほの暗く、外には磯の香こもる夜風の徒らに吹きすさびて、雨戸に聲あるは打つけらるゝ砂の音か、岩に激しく散る浪の響はごう〳〵と枕に通ひて、何とも知らぬ海鳥の叫ぶ聲さへきこゆるに、眼はいよ〳〵冴えに冴えて、直子は床の上に起きなほりぬ。旅館のうちは森と靜まりて下座敷にいびきの聲さへきこゆるは、夜もはやすでに更けたりな。あゝ思へば幸多き身なる哉、日頃慕ひまゐらせし父なる人は、位高く世にときめき給ふ君ならんとは、夢か、あらず、夢ならざる事の嬉しさよ、遠き東の空よりはる〳〵と

使して、迎ひくるゝ御心の有難さ、拙く賤しき身を恥ていなみまつらんとは思ひしかど、強てと客人の、のたもふに、母さへもすゝめ給ふものから、此宿迄はともなはれきつ、今宵一夜を旅枕、明けての日より荒磯邊の岩が根枕の夢路に見し、金殿玉樓のうちに起きふす身ぞと思へば、嬉しさの波は胸に躍りて、幸ある身よと打笑みしが…………

心の底の一隅より、いぶせき家にうら淋しくも、最愛の子に幸多かれと神に祈りつ、さらぬも病多き身を只一人、味氣なく暮しゆく母の半生の面影電光の如くひらめきいでゝ、嬉しさの波を碎きに碎き、心は千々に亂れもつるゝ。

御口にはいさぎよく、とく彼方にいたりて幸多き身となり給へと、雄々しく門出を祝ひ給ひしかど、み心にはさぞや悲しくおぼせしならむ。願ふにあらねどもしこの後、いたつきの床に悩み給はゞ、誰が優くみとりし參らせん。うるさしとのたもふ髪の亂れをくしけづりて、誰がみ心慰めん。御肩のいたみに手を添へて、いやしまつらん人やあるべき。と思ひ廻らせば、不孝者よ一身の榮華を望みて、哀れの母を顧みざるかと、形なきもの、聲虚空に響き、さながら己を罵しる如くきゝなされて、わつと聲立てゝ振り仰げば、瘦つれし母の力なく、彼方の隅此方の後に朧に彳むやうに思はれて、犇とばかり胸を抱きて身悶えしぬ。

アヽやみなむ〳〵、東におはす父上の戀しからぬにしもあらねど、いかで老ひませる母上を外に見て行かるべきぞ、とひた泣に泣て千行の熱涙に床を浸しぬ。夜の靜まるにつれ時を刻てよせくる浪の音は高く低く、耳元近く響くよと思へば、遠く〳〵消行くに、身も魂も音にさそはれて、地の底深く引入れらるゝやうの心地しぬ。

直子は思ひにえたへて立上がり、涙を拂ふ右の手に亂れし鬢の毛かきわげつゝ、長き寢間衣の裾さばきて、人知れず雨戸開きぬ。

四顧はいよ／＼更け靜まり、空には月なく星なく光なく、怒りて狂ふ海面の浪の間に只一ツ、隱見せる燈火あるのみ。

あはれこの深夜誰が家の窓より射す光ならむ、遙かに遠く西南の方にあたるは、我子の事とやかくと思ひやりつゝ母上が、寢られぬ夜半に燃き火し給ふにはあらざるか、春とはいへど風寒きに、老いの身のさぞや冷え給ふ事ならむ、明日は持病の胸の惱みに堪へかねて、苦しみ悶ゆる樣の目に見ゆるに、心したまへ母上、夜寒にあたりて風邪ひき給ふな、アレ／＼燈火のまだ消えやらぬは伏せり給はぬしるしにや、心なきわざしてみ体そこねなば如何にせん。と心も空に走り出でぬ。

風は俄に吹き增りて、天地は闇にとざされつ、おどろおどろしき浪の音は耳も聾せん斗りなれど、恐しと心に思ふ餘地もなく、風に亂るゝもすそ褄とり、人なき夜半の磯づたひをしたすらに走り行く。

（下）

隙もる燈火の光細く、黑闇に閉されし破屋は嵐にゆらぐ雨戶の響き、寂寞たる夜の大氣を劈きて聞ゆる浪の音に包まれて物凄きこの一夜を、まだ寢もやらで折々きこゆる咳きの聲、風の絕間にともすれば忍び泣く音も洩れくるなり。

ア、直子は如何にせし、今宵は海光樓宿泊のよしきゝたりしが、すさぶ夜風に夢破られ、身の行末とやかくと安じ過してゐはせずや、埋木の花咲きて世にときめかん春來にけりと思ふものから、さすがに嬉しからぬにあらねど、我身はこれよりの日を如何に過さむ、親子の衣にし遠ざかりて逢見ん事は中々に難からんを、何嬉しみに暮す身ぞ、と母も思ひにまぶたはあはず、枕に淚の音たてつゝ、今ぞさめ／＼と泣くなりけり。最愛き子

と別れしより、身はさながら廣き〳〵荒野の末に打捨られ、呼べど叫べど風の音木の葉のそよぐに聲通せず、走らんとするに道もなく、篠すゝき小草の繁みに崩折れて、果敢なく消えん露の身の、死するを待つが如き心地して、悲しく情なく、エヽ男爵家の血統絶へなば絶えよ、いかで最愛の直子と別るゝ事の忍ばれん。と我にもあらず立上がりしが、また力なく打しほれて、さても甲斐なき心哉、よし妾は戀しさの念にえたへで死なば死ね、いかで我子の幸をさまたげん。襁褓のうちより父なき子よと嘲られて哀れの數は濱の眞砂の算みてもつきず、可哀やてのまゝ味氣なき一生送らす事かと、朝夕袖のひるまもあらざりしを、神よあはれみたまひけん夢見る如き此度のおとづれ、それ嬉しからで何悲しと歎きたりけん。愚なりきと返しなめながらも、また後髪ひかるゝ如き思ひして、未練の羈たちかねしを、心に叱りはげましつゝ眼閉づれば、いつかうと〳〵と寢入し夢に、痩せにやせたる直子の襟髪むづと取て、夫人靜江の鬼にも似たる顏色恐しく、嫉妬の鞭りう〳〵と打据しと見て、夢として捨ておかれず、彈かれし如く立ちあがりし間もおそしや、はきもあらはに荒々しき雨戸の響きをあとに殘して、もすそはら〳〵走りいだしぬ。

直子〳〵と物狂はしく呼べど叫べど、聲は岩打つ浪にけされて、答ふるものは颯々の松の聲。

猶こりずまに喉も裂よと狂ひ叫べば、同じ心か、聲も哀れに鳴きつゝ過ぎゆく小夜千鳥。

月なき空よりはぼつり〳〵と大粒の雨を投げて、夜目にも一際黒ずみ渡れる浪は荒れに荒れつ、怒て岩に碎くる物音すさまじきに、お清は吹き飛ばされなん計りの身をからくもさゝへ、猶も呼びつ叫びつ走り行けば、思ひきや遙か行手に應ずる聲

誰ならむと訝かる餘地なく、いひ知らぬうれしさに走りよりて、袖摺あふ一瞬間「オゝ直子か」「母ア樣か」と均しく犇と抱きあいて聲もおしまず泣き沈みぬ。(丙寛)

撰外佳作の分

◎◎浮雲　藤枝子
◎◎仇さくら　丹波　田井かね子
◎◎姉さん　廣島　さかえ女史
◎◎小櫻　ときき女
◎◎その夜　矢の倉　遠藤かつら
◎◎世捨人　福島　きみよ
◎◎砲の響　麻布　山田箙
◎◎血染の袖　鶴見　芳葉女史
○二夫婦　ゆづる
○幸なき身　はちす
○彼岸　琴聲女史
○臺の行衛　名古屋　福鎌恒子
○明神丸　桂花子
丶脊戸の寒月　岩手　金田隆子
丶かくれ笠　東京　北村開子
丶雪の夜　松代女史
丶當世下女　北村さき子
丶孤蝶　神戸　桂つゆ子
丶白露　越後　行方淑女

丶雪の夜　島根　勝島哲子
丶軍人の妻　かね子
丶柳さくら　山城　谷おふみ
丶友の悧　はな子
丶雲間の月　芝　ゆかり女史
丶女こゝろ　水橋康子
丶若楓　前田美子
丶仇花日記　光江女
丶朧月夜　山崎壽子
丶花錦　筑前　松林歌子
丶妻琴　德島　雙池園靜子
丶遺羽子　三河　鈴木いち子
丶碎けし紅玉　埼玉　大亦隆子
丶夜の鶴　伊勢　橋爪美津子
丶更花　大阪　伊達朝子
丶無情　青森　角鹿ふし子
丶濡衣　大芝信子
丶流星　本郷　菊地蘭子

（以上撰外秀逸以下佳作）

鐘の音	下野	くれなゐ女
花の朝		静山美代子
一時の夢		森島ゆう子
春の夢	熊本	橋本玉枝
梅の雪	福岡	福田ゑん子
迷信		津留子
雪月	新潟	横山光子
薄命	久留米	大石溪子
春	堺	深水ゆひ子
乙女心	大阪	三好錦子
花錦	神戸	柳田鶴子
白菊	札幌	かづ子
奥様	神奈川	井上操子
流星	青森	齋藤梅子
落日		小林なつ代
流れ星		ふたば女史
夕鶏	山城	今村庄子
悔悟	秋田	きん子
花錦	羽前	なりはひ子
小夜嵐		波那女史
うしろ姿	岐阜	高松てい子
三味の糸	麻布	帆峯道三郎
おほろ月	東京	飯塚竹子
理想女學生	仙臺	篠崎はる
離緣	神田	林田さき
友情	伯耆	蓬莱女史
やふれ琴	越前	玉井さゆり
むろの梅	長野	兒平米女
春のゆめ	信州	春江女史
すみぞめ	丹後	梅原よれ子
なごり琴	名古屋	香梅

附

春や昔		原田きんに
あはれ少女	河内	串本友溪子
かへりみち	美濃	すみれ子
黒塗馬車	麹町	吳田ひて子
優な姿		藤山はさ子
積の露	群馬	玉葉女史
己が罪	靜岡	清水綾々
姉のゆくへ		すみれ子
あはれ少女	河内	串本友溪子
若菜つみ	福井	山崎ゆき子
烈女	兵庫	山内貞次郎
雪の友	島根	勝島哲子
改心	播磨	小路春子
怨	岩手	千葉西柳
天の恐	鳥取	小早川璽
花に嵐	麻布	佐藤虎子
操	大坂	吉田政子
梅二輪	名古屋	水光女史
春の夢	仙臺	櫻谷女史
運命	伯耆	須貝なみ子
家思ひ	下關	島田さよ子
水仙花		綾子
英	大坂	なちば
法姉妹	伊勢	藤子
狂女	下谷	水上春子
花に凰	麻布	佐藤虎子
はる風	靜岡	若草春子
春凰		花子
初夢	三重	田中美恵子
女朋友	赤坂	岩崎翠子
水泡	長野	小林つれ子

錄

蓮井先生	豐前	やす子
女の罪	早稻田	龍子
ゑにし	四谷	春かせ
烈婦		きよみ子
お千枝	熊本	堂木須磨子
ぬしなき宿	本郷	有澤ふじ子
可憐の少女	東京	唐澤けん子
無情	牛込	藤なみ
賃機織	四備	岡田美和代
花か夢か	但馬	佐藤阿岐子
花の精	埼玉	小林華子
お芳		土屋白子
暴姻		内藤さく子
少女心	山形	日塔以壽
幸なき身		はちす
魂の響	麻布	山田照
憐れの乙女	對島	桂光女史
雪雲		藤山せん子
ちるさくら	仙臺	鈴木竹子
ゆく春	丹波	加納ゆかし
一筆	島根	青柳秀子
雨中の海棠	本郷	須藤かなめ
湖畔の夕		鳥梅
家庭教師		鴨川
みたれ髪		河原芳子
初秀花	奈良	竹田せい
白椿	神奈川	加川一枚
都人	牛込	さをり
義勇の詩	上總	板倉たけ子
園の下露	四谷	渡邊しき
足尾銅山	小石川	栗田[illegible]子



花にしき

(四六)

消息文

北海道にある姉の許に

常陸土浦町　山口すみ子

あたゝかき春のめぐみに、花よ鳥よと世の人は狂ひ出しましたが、御地の空はいかゞで御座います、併せてお變りもありませんか。此方は御兩親初め皆々無事に暮しておりますから、御安心下さい。たゞ末の弟がこの冬少しわづらひましたが、程なく全快致しまして、いまでは以前より元氣がよいくらいです。それに去年迄姉樣の無二のお友達であつた鉢植の紅梅が、今年はたくさん花が開いて、ねし待ち顔に鶯を肩にのせては妙なる初音をはこつております。御上こひしう、朝夕慕ひおりますは、たゞに花のみで御座いましやうか。

ふと筆をおきますと、どこからともなくゆかしいかほりが致しますので、窓を開いてあたりを見れば、朧の月の光をあびつゝ、物いひたげに紅梅が軒下に彳んでゐるので御座います。夜半の雨をおそれて母上がなされた事と思ひ乍らも、折柄の配合面白く、そと花もぎとりて、色香をそのまゝ書中に封じいれました。その清く美しさは申す迄もありません。私も紅梅を見る度毎に、その美しさに劣るまじと、一意專心こゝろの花を養なつてをります。

末筆ですが兄上樣へよろしく、尚御体御大切に、一日も早く御任務おはたしなされてお歸りのほと、鶴首してまつてをります。左樣なら（天）

評曰。陳を化して新となし、景に對して情を陳ぶ。文品紅梅と共に可憐也。是を第一等となす。

又。その美しさに劣るまじ云々の語、確かに姉に贈ろの香たるを見る。（塚越停春選評以下同上）

愛兒を喪ふた友の許へ

大阪市東區牛入町　三好きく

只今お手紙を拜見しまして、夢かとばかり打驚きました。人は喜び狂ふ春風を、さぞやあやしう心を傷め

る秋風ともお怨み遊ばしませう、そのお心の程、御推量するのも涙の種でございます。

思ひ出しては悲みに堪へませぬ、それは貴女がまだ此地にお住ひの年、やう〳〵物心のおつきなされた、忠雄さんをお連れ遊ばした時、私は庭の紅梅の枝を手折つて、忠雄さんの帽子に挿してあげました、其時の可愛いお姿、私は今も忘れは致しませぬ、今年もその紅梅は咲きましたが、今はそろ〳〵散り落ちまして、殘つて居るのは、ほんの二ッ三ッ、こゝに封入しましたのもその一ッでございます。アヽ、他人でさへこれはとに思ひますものを。ちようど此花のように、今こそ斯う落ち果てましても來る年にはまた樂しい春を迎へます。あまりお歎きが過ぎましては、お身体の障りにもなりませう。一しは御用心遊ばすよう、ねんじあげます。(地)

評曰。文簡にして意長く、情切にして語促、自ら言はぬは言ふに勝るの深趣を見る。眞に愛見を喪ひたるものに贈る書と謂ふべし。是を第二等となす。

櫻狩して都の友の許に

下野下都賀郡中村字下河原田　神山美代子

佐保姫の情はこのあたりにもあまねく候て、見渡す限りたゞ白雲のやう、袖吹く風の香もたゞならぬにいかで一日を胡蝶とならざれば浮き立つ心のおち居ぬものから、友どち一人二人そゝのかしてうかれいで候。おなじ心の人々をかしき裝ひしてざれ歌うたひつゝ、おのがじゝ興じあふさま、世はすべて花と櫻のものに候みどりこめたる新草のしとねに横たはりて、すみれの花束、蓮華のかざしと流石に長き春の日もあやなく暮して歸るさ、さゝ川堤にかゝれるに日ごとの花曇の空僅かにはれて、うす絹をのべたらむ如く朧にかすむ月かげを花の絶えまより思はぬ方に眺め候、折柄故郷さして歸るかりがねのつらにはなれしがたゞ一羽、霞のなかに消えゆきしはとりあはせて哀れ深くこそ覺え候ひしか。

春の幸は短くして花の運命のかぎりあればか、風も吹かぬに枝をはなれてひら〳〵と袂に散りかゝりたる、一花ことにおしむ心の乘るやうにて、ふちせ常なきはたゞあすか川にてのみ候べきかは、あはれ明日などゝ

いひたりしならむには雨風のねたみにて、いかに口惜しき思ひをやして候ひけむ、さればよ今日の遊びを思ひ出にもと、一もとのすみれを根ごきして庭のすみにうつし植え候。

あはれ、見る目甲斐なき片山里に鍬とる身にもかゝるたのしみはあり候、いかでうらやましう思ひたまひてよ、あなかしこ。（人）

評曰。山里の春の夕暮目のあたりに見るが如くに候。才筆と申すべし。是を第三等となす。（停春）

菫に添えて

武生町大門川原十一番　長谷川緑子

あゝ花子様、妾が惡うございました何んで妾はかゝる惡魔になりましたのでしやう君の御いたづきも元はと云へば皆此の妾といふ惡魔の致しました事あゝ澄みませぬ何卒お許しを、何故貴女と秀雄様とが許嫁であるといふ事を早くおつしやつては下さらなかつたのです然すれば妾も決して斯様な大罪人とはなりませんでしたろうに、あゝ、貴女様の幸福の掠奪者たるその妾とぞ知らぬ顔して昔に變らぬお情を以て今まで御交り下さいました御友情の厚かつた丈それだけ妾は、あゝ堪えられませぬ、さぞ憎く思召すで御座いましやうが何卒たゞ一言「許す」とおつしやつて下さい、然らば妾は喜んで彼の白雲深き山奥に分け入ります。

あゝもう書けませぬ、どうか妾が心情はこゝの菫にお聞きなすつて……。

御存じありますまい、今まで詩集の中にひめられてありました此花菫、是はこれ先日秀雄様と共に花の野をそゞろあるきしましたその時に……あゝ澄みませぬ。最早妾の汚れた唇でこの尊い花瓣を吸ふ事はできませぬ、神が許しませぬ、さらば花子様、この花を可愛がつて秀雄様とゝも共に幸福にこの世を。（秀）

評曰。文字に生硬の嫌なきに非ざれども、其生硬なる所却て斬新を見る。

母より寫眞おくられし返し

信濃上諏訪　錦織幸子

かねて御願ひ申上置候御寫眞御送り下され、昨夜確かに到着いたし、取る手おそしと拜見仕候。誠や御膝下

はなれ候てより、早や三年の月日相暮らし候事とて只管御なつかしく慕はしく御寫眞かきいだきしばし涙にむせび入候。わづか三年の其間にいみしく老ゐさせ玉ひし樣なるは．全く寫眞師の不手際に候や、父上樣かなしき御上とならせ候ひしよりは．一家の萬端皆母上樣の御身に歸し浮世の波風いとはげしくおはしまし候に、多き子供も未だ幼少にて漸く御手傳なしまつるべき私は、いち早く良緣ありしとて、御膝下はなるゝ事と相成、御胸にあまるうき憂の御程、察し奉るも涙の外無之候。不孝の私うけし御惠の萬分の一も報ゐ得ぬのみならず、千里の他鄕に朝夕を異にし、風につけ雨につけ慈愛の御心痛めさせ玉ふ御事、誠に何たるいふ甲斐なくも罪深かき我身にやと、口惜く空おそろしく存じ候、妹弟とたわむれ母上樣に御無理なる御ねだりいたし候ひしも、昨日の夢かとばかり思はれ候に、今は早や私も二人の子供持つ母と相成、子を持ちて知る親の恩とは古き諺に候もいとゞ身に思ひ當り申候。御なつかしき此の御ふところに、乳房ふくみてうまゐせし昔もありしよと、抱ける我子のいとしきにつけさま〴〵にはてしなき思ひにかきくれ候て、うく〳〵と拜しまつる御おもかげの、幸子よとやさしくよばせ玉はする如き心地いたし、我をわすれて母樣と呼び試み候、おろかや三百里の雲井の今更かなしくうらめしく打仰かれ申候。寒さなはきびしく候に、かまへて〳〵御無理なる御働き遊ばされまじく、御障には隨分御うさはらしに相成る樣御保養なし玉ふべく、返す〳〵も御わづらひ下されまじき樣、神かけて祈り上候、三年振の幸子が姿、二人の子供つれて寫し候まゝ御目にかけて、いかにも世帶じみしよと御わらひ下さるべく千千の心のいとかぎりなきを寫眞にこめて候かしこ（秀）

評曰。文字の中に眞心見ゐて、何となう床しく見受られ申候。又、情眞なれは文辭其中に在り。

病める友に梅花を送るに添えて

島根　まつ　濤

ひとく御無さたを致しましてすみません事ね、此頃は御容子は如何ですか、御熱は矢張出ますの、胸の御痛はとうですか先日妹樣より承れは大分宜敷方ですつてね、でも春といふてもこんなに寒くつてはどうしても御身の爲に惡い事でせうと今朝の樣に霜の多い朝杯は別て案じらしくつて〳〵一寸御見舞に參りたいのです

けれど先日申上ました通り遠來の客がありまして出られませんので必ならずも失禮致して居ますどうか堪忍して頂だいよ

花が咲たならば必ず來ると云ふていらしつた園の梅が漸く咲初めましたから御宅にもわりますでせうが一枝御目にかけますから御覽被下御枕べの御慰みともならば私も嬉しう存じます名は殘雪。花が八重ですのにまだ若木ですから澤山ついて咲滿た時は實にこゝにのみ雪が殘つて居るかの樣ですよけれど一人見たつてつまりませんわ全体がをそく咲くのですからまだ盛りは長う御座いませうからとうか早くよくなつて散らない内に一度來て見て頂だいな。そして一所に挿して見るのも面白いでせう御花の稽古もねーあなたがいらつしやらないと淋しくてしやうがありませんわ、早く二人連で行く樣に成たらばどんなに嬉しい事でせう、あさては客も歸る筈ですから是非とも參りますからもし此花が御氣に召しましたならば御遠慮なしに仰て下さい持つて參ります。其時にはマア大層よくなつてといふ樣に成て居て下さいよ、早くよく成て頂戴。（秀）

評曰。筆の運びのひやかに、主意も言葉もよく盡されたり。文學に長けたるものに非されは能はじ。

歸らなむといひし叔母の歸らざりければ

美濃　すみれ子

北の海の雪の御明暮猶おかせ給はでやあゝ叔母樣よ先つ日の嬉しき御音づれに今日の日までいかに樂しみて待ち侍りけん御土產とりどり何やあらんとひそかに待ち設け侍りしものを叔母樣よなどて歸り給はざる僅の間にて候ぞやがて歸り來なんほどにとて都にあくがれ給ひしより思ひもよらぬ北の海のいと遙なるに移らせ給ひて早や五月にも余りぬるを御恨みにて候窓近き紅梅もやうやう香り初めて候ものから短冊に歌かきてつけばやと立ちいでし去年の春ゆくりなくも思ひ浮ばれていとゞ御なつかしきまゝに其一花を卷き入れて候海のこなたのふるさとにはやさしき梅も多くのはらからも皆叔母樣をまち侍れご猶ひたすらにおよび折てある私あるを忘れ給はでやかしこ

評曰。文情躍々として、生動の致あり。

さちなき友の許に

信濃　小林つね子

承はり候へば御父上樣には教科書事件とやらにて、不圖お上より御疑を蒙り俄に御留守にならせ給ひし由、餘寒なかなかに嚴しうて家にあらば朝夕は炬燵を離れがたき今日此頃を寒さへ小暗きひとやの中に日夜只うつらうつらとしてありし世を偲ばるゝ御身となりけんと思ひ候へば、此胸も潰れん斗りに悲しく相成候。

申し上げ候はんも却てよしなき事と思へど、せめて御母君にても世に在まさんには、かたみに慰め合ふて、遣る瀬なき嘆きも少しは忘らるゝ折もあるらんを、と、母ある此身に引きくらべて、御胸中、そゞろに御推しはかり参らせ候。殊に、こたびの御災難さへ無くば、定めし今頃は人も羨む敷島文學士の令夫人と呼ばれたまひて、琴瑟和合、鴛鴦の衾あたゝかに、お前様が理想の家庭を造りておはすべきを……と思ひ候ひては胸塞りて遂にそのゝかし参らせんの言の葉も浮び出で申さず候。さは云へ、彼を悲み是を嘆くとも、凡てまゝならぬが浮世の常にて候へば、よしなき事と存候。此上は只、御父上様の一日も早ふ青天白日の御身となりたまひて、お歸り遊ばさんことを祈る外候ふまじ。聞き玉はずや古歌にも「つらしとて誰を恨みんと覚はへずたゞゆく末をたのむ心に」。何事も只運命と諦め給ひて、み嘆きのあまりに大事の御身体を損ひたまひぞ。御父上様とて、もと犯せる罪に候はねば、やがて濡衣の乾くも近きに候はん。雨後の月こそ尙さやかなるものに候へ。尙くわしくは来る土曜日に拝趨の上ゆる／＼御物語申上べくと早々かしこ。

評曰。幸なき友に寄せてよく其体を得たり。

まだ見ぬ友の我故郷に住へる許に

武藏越ヶ谷町　大亦たか子

いと細やかに、例の麗はしき御水くきの跡、いま、拝しまつり候て、只只涙に咽び申候、未だ、たいめも賜はらぬ君ながら、かう打つけに、親しき文の上の、御交り、許し給はり候だにあるを、さらでも忘れがたう懐しき、我故郷の地に、住はせ給ふやう、なり候御事、いかなる過世の縁にやと、心勇むにつけ、あはれ、此友垣の、八千代の末も、へだてなかれかしとのみ、祈り候ひき。さるは、けふ、世にも嬉しき、み心の程を承るものかな。此程は、み情深きおぼしたちにて、わざ／＼、彼峠を越へてまで、我亡き母の墓に、積れる塵を掃ひ給はり候とや、只涙の外は、御禮の言葉も得しらず候。げによ光陰に關守なしとかや、千代もと祈る吾心の、空しく成果て候てより、早く、三年と距り候を、儘ならぬ世の仇涙に、漂ふ不幸の身は、まだ一度も、母の墓前に、好み給ひし花の一枝を、手向くる折もなくて、よな／＼、安からぬ夢は、遠く秩父根の、かの苔路をのみ辿り候を、同情厚き友君が、濺き賜はりし熱涙の、やがて、清き香に匂ひ出たる、白梅の御手向、いかに、苔の下にも嬉しと、うけ候事と、存ぜられ候、由縁の者に委れてはあれど、いかに墓の様の荒増りぬらんと、思ひやるにも、一しほ御志の有がたくてなん。さても此春中にこそ、床しき御面に接して、御禮の言も盡すべくや。けふは涙に……あなかしこ

評曰。情趣ある文字と拝見致し候。

姉より衣服を贈られし禮状

讃岐　田中なか子

仰の如く本學年も最早殘り少なく相成り候て何となく清まれ候、去る七日御送り給ひし御文小包昨日落手致し候、御二方様はじめ奉り姉上様にも御健にて御渡らせ給ふ由誠にうれしく存し上候、降て私も恙なく學びの道をたどりつゝ有りがたき月日を過し居候まゝ御心安く思し召し下され度、先日衣服等の御尋れの節つい／＼有りのまゝを述べ置き候處御

親切に着物、及羽織、繻袢迄も御送り賜り有りがたさの餘御禮の申上やうも御座なく候、昨夜御返を書かばやとて机に向ひ候折柄故鄕の事など浮ひ出だされて、いとゞなつかしく思はれ侍りし小學校通ひし頃より母様に代り賜ひて御世話なし下され又も二年前よりは修學の爲とは申せ海山隔てゝ迄の心づくしいかで忘れ奉るべき何卒今しばし御凌ぎ給ひてよ、ひまゆくこまにむちうちて文の林をいそしみはげみ申すべく後日寢食を共に致し只今の狀態等を思ひ出して打ち笑ふ時節もあるべくと存じ候、其時こそは及ぶ限りに御事へ申すべく、近きうちに遠足運動もあるべければ新衣着して行かば、いかに心地よからんと今より樂み居り候先は御禮までかしこ

評曰。やさしき御心根、姉君も定めて滿足に思ぼさるべし。

遊學の友に送る文

紀伊　島津秋子

露おく袖を某波止場に分ち候ひしは、只々昨日の樣に覺え候を、げに隙ゆく駒の足早くて、今年もいつしか花の頃とはなり侍りぬ。君にはいかに此頃御過させ給ふらむ、妾事は御蔭を以ていつもいつも健に侍れば、御心易うおぼし給ひれかし。さてもふりすてかたき袖をばわかち參らせてよりは、たゞたゞ手足をうしなひ、はらからにはなれし思ひして、今は心の底を打あけて語りあふ友もなく、小夜更けて月かげの淸らなるを見ては、はろかに東の空を打ながめ、君もさぞやこれを眺めつゝこなたを忍び給ふらむと、そゞろに袖をぬらし居候。あはれ、うつし身の、現ともなく、御あたりをのみ、忍び參らする、妾が心を露ばかりたに汲ませ給はゞ、いかで一片の御かへりを、な惜しませたまひそ、扨此品御覽の如くいとう不出來にて、御耻しうは侍れど、君を思ふ心のやる瀨なく、斯くは、御つゝましさを、なして御あたりへと、奉るになむ。あはれ、はかなきものにも、こもらふ、まことは、淺からぬを、花紅葉、とりかされたる、御文机の上にこそは離かれ。せめて折ふしに昔の友を思し出でむ、よすかともなしたまはらばとてなむ。あなかしこ。

評曰。友情可掬

在京の兄に送る文

伊勢　河原芳子

學年試驗も滯りなく了らせられ優等點を以て御進級被遊候由誠に〳〵お目出度存上參らせ候母上叔父上の御滿足は勿論乳母迄が承はり候て嬉し涙に咽び申候さて當春は是非隅田上野の花見にと兄上よりの御勸めもあり叔父上もよきお序での候迚何かと御用意も有之候ひしかご亡き父上の七年忌を急に執行する事と相成候程に殘念乍ら此度は見合せに致候故御注文の品物のみ小包郵便を以て差上參らせ候其內の單物母上か手飼の蠶を糸に繰りて自ら織り上げられ候を私が拙なき手して裁縫致候次第お氣に協はぬ處は幾重にも御辛抱なし被下度候次に兄上の御植ゐなされ候吉野種の櫻殊の外美事に咲き初め申候故花の心を推量りて一輪二輪御目にかけ申候お閑暇の折御歌にてもお送り下され候はむには花も一しほの情と存じ候はむ歟妹も近頃は壯健に成りて日每機嫌克く遊び廻り紙雛など抱きてあごけなき子守唄を謡ひ居申候間御安心なし被下度候。

尙外に種々申上度こと有之候得共取急ぎ候まゝこれにて筆をとめ參らせ候。かしこ

都なる友の許に

麹町 北村開子

夜の更けゆくまゝに寒さもいとゞ身にしみてねざめの床のわびしさは一しほに覺ね候 扨も其後はいかに渡らせ給ふらん 君と惜しき袂を分ちて故鄕に歸りしもはやこぞとは相成申候 鶯のなかん頃には必ず同じ窓にとちかひ參らせしも今は仇となりわがいたつきはいつ癒へぬべくも見ねず唯都のみ戀しうてなんあはれ君があつきみ心に重れてこん日は共に手を携へてかしこの山にこゝの岡に月を花をなどのたまひしなげにその頃は頼みにて病の忘らん日をのみ數へ暮して埋木と共に朽ち果てんとは思ひ設けざりしに世は辛き木枯の吹きすさびて花も咲きねで空しく散るあはれさは知るものから今更に口惜しうこそ あはれ君よせめて一度ば御かんばせ見奉りて思ひのまゝを聞ねたくみ學びのいとまに賤が伏屋を音信れ給はゞ 其嬉しさ何にたとへ申すらん 病める身のはかなさによしなき事のみかきつられ 廣きみこゝろにゆるさせ給ひてよ かしこ

評曰。個々動人。

湯治にある母の許へ

尾張 やよい子

春と云ふは名のみにて、寒氣の風未だ去りやらず候、母上樣には御容体如何に候哉、何卒御養生遊され一日も早く御全快下され度候。次に宅は皆々無事に暮し居候間、御安心下され度候。扨御心にかけさせられし、妹は御出立に成りし翌日の朝目を覺し、かあちやま〱と申しむづかり候へども乳母や伯母上に慰められ其よりは一度とむずからず日々乳母車に乘り、近所を遊び居り候、弟等は日々學校に登り、歸りてはいたずらのみ致居り候。皆々母上樣御歸宅の節は停車場まで御迎いに參ると云て喜び居候。何卒宅の事は御心配なく、御養生専一になし下され度候。余は後便にゆずり可申候。

評曰。簡にして要を得たり。

久しく音信なき友の許に

千葉 平川遊幾子

四方の山邊も紅葉するこその秋、御文たまひてより又そよとの御おとづれもなく、此の頃ばいとゞ御なつかしうおもはれ候、かくふりはへて御便り給はれど、御身に御變りのあらせ給ふ御事にはおはさずや、おもへばこぞの七月にて侍りき、はる〲こゝ許へ訪づれ給ひて、積る御話し致せしうれしさは、妾には今も忘るゝ日とては之れなく候、その御別れの折には、九月には又も御上京との御事にて、妾もその頃には都に登る積りとて、又も御面會いたさんと、御約束致し候ひしが、その後九月中旬、妾は都に登り候まゝ、日夜忘れ難き御許樣を、かれて承りし御宿所に訪づれしに、かなしや御許樣には、七月下旬御歸鄕なされしまゝ、今に御出京なきとの事にて、樂しみに思ひし心も水の泡と成り果て申し候その後御鄕里に伺ひまゐらせしにまた御返り言のなければ、いかにおはすやと密かに御案じ申し候に、十月下旬計らずもうれしき御玉づさ接し飛び立つ心を押し沈めて、封押し切りて讀み下せば、信濃路に分け入り玉ひしとか、すぐさま御返事まゐらせむと思ひしも、御居所のなければ、今は止むなくそのまゝに打ち過ぎ申候、その後年のくれにも成りし故、そもふるさとにおはすらむと、文まゐらせしに、又御返り言のなければ。そも

御許様にはいづこの里におはすらむ、すぐる夏の御話しには、もる學びやに教への糧とり給ふと承りしが、今はいかにおはすぞや、今ゝ信濃路におはすにや、此の頃人づてに聞き及び候へば、此の頃は故里におはすとか、依りて此の文認め申し候、若しさる事ならむには、一片の御玉づさ寄せ給へや、待ちまゐらすぞよかしこ

評曰。筆の運び精細にして、よく事情を曲審せるを見る。

新月を見て都なる姉上へ

仙台　永田さだ子

都なる姉上、如何御暮しなされ候か。さいつ頃、諸共に學校の冬休み相果て候て、今更に、短かりし樂しかりし二十日あまりの夢、永かりし悲しかりし百日のそれにひき比べて、名殘多かりし再別の夕べのみ言栞、月みばとちぎりをきてしより、一月の後の今宵を、いかに待ち願みまいらせけん。さるを、都にてのけふ日、日當りよき南の枝の一つ二つより綻びそめては、含みに〱し春の息吹をも漏し候べく、その新しき馨りに醉ひ給へる姉上の、たゞ〱谷の戸いでん鶯の初音にのみ心待たれ給ひて山河へだてたる古里の空に、君を思ひて、かひなき袖ぬらしまゐらす君が一人の妹の上など、つゆ思ひ出で給はず候にや。さりとはあまりなるみ心に候かな。想へば浮びくるその夕べの面影、今はたさなからの月の光も、つれなき人の胸には入らずや。御恨み申しまゐらせ候
宮城野とは申せ、さすがなる今宵、月にも消ぬべき春の響なれや。小松の根本に柔しくも音をたて候へば、君戀しさの情抑へ難く、筆とりての繰言、たゞ〱御約束の御音信賜はりて後にこそ、いく重にも〱御わび申しまゐらすべく候へ。かしこ

友の許に

筑前　岩佐雪枝

あらたまりぬる年を君には如何にしてむかへさせ玉ひしやらん客冬の御文にこん春はと云ひ送り玉ひしに明けてはや十日餘り音すれ玉はぬはもしやと心にかゝる折弟の「姉さん安國のお姉さんなぜ入らつしやらないだろ又御病氣か知ら」と云ふにおゝそれよ又々例の病におかされ日ねもすたれこめて物思にふけり居玉ふにやあらんそはお身のためならぬを
去年の秋とひ玉ひし折の夕虫の音きかんとて庭におり立ち冷やかに水のごとすみ渡りたる月かげあびつゝ耳傾むけしにはしなくきこゑし隣家の琴の音の淋しかりしには引きかへて此程は月こそ春の夜の照もせず曇りもはてぬ朧ながらすかゞきのすが〱しきそれさへあるにかれてめで玉ひし古木の梅の春尚淺く殘りの雪のそれかとのみほころひ出てゑならぬ香を送るにけさしもきなきし鶯の初音のゆかしさ心なき身も水仕の業のあさ夕せどのほとりに時をうつすはかりなるをあつたら一人見すぐさんもいとゞ本意なく君の御出の待るゝを一日お姉様そゝのかし玉ひ是非〱さあらんには此身のみかは弟も如何はかり花のゑまいもさぞな

旅行中の友の許に

信州　小林春子

滊笛の一聲と共に、滊車のゆるぎ出した後も、なほお姿の見ゆる限りは茫然と、人のあやしむ迄、打ちまもり居りました姿を、見かへりゝせで

恋きたまひしは、いと心つよき君かな、とお怨み致しました。さて家に歸つては、今頃は何處の里をすぎ、いづこの川を渡りたもうか。今日はなにがしの山をこしたまふて、路をふみ迷ひはしたまはぬか、などゝあんじては、御道すがらのうまや〳〵の地圖くりひろげて、せめての心やりに見つゝ思ひわぶるうちに、もはや七日をすぎました。今日しもなつかしき御文を手に致しまして、何により心うれしく存しました。今の大み代となりましては、萬の事いや進みに〳〵て、いづこの村里もたらぬものとてもなければ、道のほども恙なく、おわしまさんとは思へど、女子一人の旅び故、又とやかくと思ひを煩しましたも、御消息にて全く安心致しました。此上もどうか右の様においさましく、目的の地を十分觀察遊ばされて、お歸りなされし時の御話のみを、切に待つて居ります

あなかしこ

故郷なる母の許へ

横濱　長谷川さく子

昨日一昨日の春雨に都の花も頓に氣色だち候て上野向島なとぼつ〳〵放賞茶屋なども設に取りかゝりたるを見受け候御送被下候小包郵便今朝ほど到着此の春着にとて袷二枚縞柄裁ちぶり萬今様の御好にて都恥かしき御仕立殊に年老玉へる御身に御手づからの御縫り裁ち袖に裳裾に忘れ緒たる御匂ひこもりて床しさ懐かしさ坐に身に泌み申候儘て此を身に纏ひ候はゞ縫目継目にこの置き給へる御情は馴れぬ旅路の風雨をもよぎ隔てゝ身の健かさも一入ならしと推し頂きて櫃に納めんとする折柄漫歩きの歸りよとて鄰の刀自立寄れし端なう御送物に目を注き玉ふや押隠す間もあらせず手に採りて熟々と見そなはす程こそあれ御面

怱打疊りあはれ親を持つ子の殺しさ…とて暫し涙に溺れ伏し候夙く當兩親に別れて縁遠き人の許に生たち給ひし御身の上懐て承り侍るものから御心の内推測り參らせて共音に歎かれ申候其に付けても御兩方様の雛育さ一入にて哀れ孕の爲とは乍申海山遠く隔て住み朝夕の御事ちへ奴婢等の手に任せ置奉る不孝の程恐しく何で一日も早う業成し終へ絶ず御許に侍るべき春もがなと岩代の玉松が枝をひき結びて切さに希侍るになんあなかしこ

父母の安否を問ふ文

和歌山　上野山郁子

春も最中になり候事とて、空の景色のご〳〵しう、何處も花の匂ひ侍らぬはなき折から、御二方様にはいかが渡らせ給ふにか、御母上様にはいつもかく暖かに花咲き匂ふ頃には、氣候の變りめとて、御持病の起らせ給ふを、今年は如何におはしますらむ。遠くへだつる身の悲しさには、御そばは近く侍りてなぐさめ奉る事もかなはず、雨につけ風につけ思ひやられ侍り。まして月さへ渡る夕べ、虫のなく夜半などには、一入御二方様こひしくなつかしく、御地の方のみながめ暮され候。妾事は御蔭を以ていさすこやかに、日々學びの業にいそしみ居候まゝ、かまへて御心配下さるまじく候、誠に海山も只ならぬ御恩を受ながら、御老体の御身をいつまでも煩し候事、忍び難き業に候へども、今暫の内には學びの業も卒へ、やがてなつかしき御膝下へ立ら歸り、變らぬ御姿見奉り、み心安めまゐらせんさ、それのみ今より樂に致居候。なほ別紙に認め侍るは、此の程大内の伯母上様より御問合せ給はりし、返しの文に候故御手かず乍ら御手渡し給はり度候、返す〳〵も、御身の養生専らにせさせ給はん

事、切にれぎ奉るになん。かしこ

評曰。他の奇あるにはあられご情の眞なる所見るべく存ぜられ候

海外に遊學せる友の許に

伯耆　蓬萊女史

春の霞の野に山にたちこめて、櫻の花もなかば咲きいでつ、雲井に諧ふ雲雀の聲も何となうなかしき昨日今日、御許様には歸る雁をば眺むるにつけ、いかに故鄕の戀しうましますらむ。歲まだたけ給はぬ御身にて、はろ〴〵遠く波路を越え、言語風俗など異りたる外國にての御修學は、定めし御心にかなはぬふし〴〵も多からむといさ御いたはしう思ひまいらせ候。されご元來御賢明に渡らせ給へは、學びの道に秀で給ふのみならず、優にやさしくおはしますには、とつ國人をしていかにわが國婦人の優美高尙なるかを想はしむるに足り、御許様の如き方々の御遊學ばわが國の御威光をとづ國に輝すものとや申すべく、御歸朝後はわが女子敎育に美彩の光明を與へ給ふならむと末賴母しう思ひ參らせ候。想ひ返せば四歲の昔、友の契りのいや久しかれとて、共に植ゑにし八重櫻の、嬉しくも今年初めて花咲き侍れば、その一花を封じあげ參らせ候まゝ、せめては一輪の花一片の瓣をも妾が面影と思ひ給ひてよ。次に御玉章には是非巴里とやらの、美しき薔薇の一花を惠み給ひてよ。あなかしこ。

若菜おくるにつけて

備前　小山松枝

うら〳〵とさす日影のごかにて、垣根の梅もけしきばみ、鶯まちかほなろもいとなかしうおぼえ侍る折しも、友の二人三人來りて野遊びにとうながすまゝ、立ち出でゝ、青やかにもえいでたる若菜こゝかしこあさり候ひしに、うれしさは秩ならぬ籠にあまるまでつみため侍りしまゝ、いさゝか捧げまゐらす、野邊にだけ果つべき若菜も君がみ手に調し給はゞさぞな、よろこばしう思ふらんかし。知らせ給へるごと、わが宿はゐなかびて常はいとわびしう侍れご、春は心を慰むることも多く、今よりは菫たんぽゝも雛の野べににほひ、近きをかべには蕨なんごおひ出候へば幼き御方々伴ひ遊ばし、一夜を柴のいほりの假寐にとの御心がまへにて渡らせおはしましてよ。あなかしこ

若菜つみにそへ（の）かされし返し

四辻清子

遠山の霞は一日〳〵に立まさり春はやう〳〵これよりこそといとも長閑になほへそむろをわきて此二日ばかりの晴れやかなる情ふかき春風の美しき薫り吹きこめてこゝもとの窓にもほのめかす心にくさすぶろ氣もうきたち野山のけしきごもさぞなと思やられ心もゆくばかりに候折から君にもをなじ御心に御文つかはされ身にしみてうれしく卷かへし拜し參らせ候されば明日の日曜を幸にと親しき友垣つごひ給ひ近き邊りの野路にもゆる若草あさり給はむとてをのれをもそゝのかし給ふ思召なか〳〵に鶯の初音聞つるよりもうれしうこそよろづさしをきても此御催しにはもるまじくせちに御供のれがまほしうなん定め給ふ時までには必らず御庵おごろかせ參らすべく何も〳〵其折にぞと取あへず御返りごとまでにかくきこへあげ參らせ候かしこ

國元の母のもとへ

大阪　下垣内富美子

春立ちしより殘る寒さ一しほ身にしみておはね候無音を平安と思へと仰せ給ひし御言の葉を恃みて音づれなきを却て嬉しう思ひながらなごか此頃は鄕里の空のみ懷しく花見ても我家の軒端の紅梅を思ひ出て過にし年の春の始めつかた御いたつきに惱み給ひし頃彼梅の笑みそめし朝始めて御床拂ひせさせられ祝ひの席に折て挿せしなんど故鄕よりは遙に低溫のこの地にても日あたりよき庭の梅ははや蕾含める枝さへ之あり候へば麗なる此頃の天氣に珍しく匂ひ綻びて定めてみ心を慰め侍らんと慵しらぬ梅もあやしう羨まれてなん、私も近ごろはいと〳〵健かになりて折々の夜更しも更に障ることなくもはや卒業試驗もまのあたり迫り候へば日夜勉强いたしをり候學科は專ら實習を主としてそがなかにも昨年御ほめごと給はりし「マッサージ」のみは未熟ながらも私の最もまされる處にて歸省の上は父上母君の按摩はなか〳〵他の人には爲させまじと樂しみ居候今はたゞ歸省後の嬉しきことども及がかれてせまき胸は希望の光りにみたされ候時分柄御身御大切に斷上候

在鄕の父上へ請願の文

近江　安井しづ枝

去十日御投函の御狀、今日着忝く拜見仕候、先々御兩親樣始め妹逹皆々御無事に入らせられ候由、目出度存じ上候、私事御蔭にて、其後更に健かに相過し申居候、御心安く思召給はり度候、さて御書中、何か御考慮の趣にて、本學期終了後一先退學歸宅致すべきやうとの御事、每々承仕候

御承知の通、私も入學以來日夜懈怠を戒め、不束に勵うち居り候より、固より譽れある成績などは、迚も及び申す所にこれなく候へども、先々是迄漕附け候て、來る三月の試驗にも、及第は困難に之あるまじくと存居候、就ては最早後一年にて、卒業の事に御座候故、今にして半に退學致候はんは、實に終身の恨事と存じ候、固より、御考慮云々の儀は、委細拜承の上ならでは、推察致し兼れ候へども、或は先月芥川樣の不都合の事など、思し合され、私の前途に關し、御懸念遊ばされ候樣の事よりには非ずかと愚考致居候、私の推察にして果して大差なき樣の儀ならば何卒今一應御考へを給はり、私在學の出來候樣、御許し給り度、自分より申上候は烏滸がましさの限りには候へども、平素懇々の御敎訓も有之候身上の儀に就ては深くも心に銘し戒心致居候に付、必ず〳〵御配慮下さるまじく、右取敢ず卑見陳述仕候條御諒察の上、尙委細御消息奉願上候匆々敬具

評日。無難なる書きふりと見受けらる

嫁せし友のもとに

兵庫　柳田暢子

大變お寒くなりました事あなたごこも御變は御座いませんか先日は切角いらつしやつで下さつだのに何もおかまい致しませんでれ誠に失禮致しました事其節姬路へいらつしやるさ承りましたからきつと御伯母樣のお宅へいらつしやる事さ計思て居りましたらあなた澁谷樣へお嫁入り遊したつてれまあほんに御目出度事皆樣にも御喜びでいらつしやるで御座いましよう妾嬉しくつて御祝ひ申上げてよ妾始めて何た時ほんに驚きましたよ妾にだまつていらつしやるのだもの知ないもので

すから御見送りも致しませず何卒許して頂戴いほんに姉樣と御ぶれしたやうで淋しくつて仕方が御座いません其れでもすゑの樣姫路へ、すもの近ふ御座いますわれたつた二時間程で參られますもの妾其内御祝に上つてよすゑの樣何卒身を御大切にれ御皆々樣の事から家事のことから何にもかもよく氣をつけてよく御世話遊せよそうして一日も早くかあゆらしい赤チャンが御出來遊すやう妾神樣に祈てよ何卒之から後も妹と思召したらわね盛は數へて頂戴よ皆樣へも宜敷御つたへ下いましいづれ其内上りますからけふは之で御免遊せ先はあら〳〵御祝詞まで

彌生の頃病める友の許に

和泉　井上清子

春もいよ〳〵深く相成花の香り百鳥の聲、げに人の心も浮き立つ昨日今日たゞ面影にしておはすらむと思ひまゐらするにも、獨り袖を絞り申候。御許樣の御いたつき少しは怠らせ候哉如何おはすらむ、日頃は度々御たつれも致されど、束の間も忘るゝ暇なく候。花咲きぬとて袖をつられて野山にあくがるゝ君はいまされば、一日幼き妹と近き野邊をさまよひしも、何となく淋しきまゝ早々立歸り申候。まして御許樣には御いたつきの床に思ひ出多くおはしますらむ、あはれ去年の春共に手をとりあひて浦江を逍遙ひしなり、傘のさきにて根こじ歸りし菫の、土かひしかひありて見事露を含みて咲き候ひぬ。もてはやさせ給ふ君の來まさぬを、花もさぞな心うく思ふらむといとほしく、せめて御枕邊の御慰みにもと差上まゐらせ候。何卒御病ひの一時も早く怠らせ給はむを祈り、思出多きかの浦江に袖をつられむ日をたのみまゐらせ候。あはれ、今宵はしも月朧ろなり、一夜をば眠も合はで背に鳴くものは、常世に急ぐ天津かりがれのみかは。かしこ。

梅の初花を贈られし返し

東京　みどり子

只今は挿花の料にと白梅を一枝お贈り下されて誠に有難う存じ升。私宅の梅などはまだ紅唇を堅く結んだまゝで何時ひらくとも分りません折柄、匂ひ得ならぬ初花を贈り玉へるみ心、いかにも嬉しく、花は物言はねど、何やら耳の傍りに、あなた樣の數々優しき囁きが聞ゆる心地がいたしました。

お添えになつた御文によれば、さる宮家の大奥にもこれと等しきを奉り玉ひし由、花の運も樣々の事と思はれました、彼れは金殿玉樓の中名香の煙にむせぶ姫君の文机のほとりに其美を稱へられるに引かへ、此れは又むさぐるしい机の上に怪しげな器にさゝれて、私如きものゝ伴侶となるのですから、此花はさぞ彼の雲井の上に參られた花を羨む事でありませう。はやそれ共これを宿世とあきらめて妾の愛づる心に同情を寄せ呉れるでせうか、などゝつまらない事を考へました。あなたは、これから世の中にいで玉ふお身体でご座い升から。吹雪の中になほ嚴然としてほゝゑむ此梅の花にならひ玉ひて、これをば女性が朝夕の心の手本に御覽なさる樣、御勸め申上げます。すべて世の女子が、梅の花を理想とし導者といたしたなれば、女の纖手もて世の男子を助け世の中に立つべき功績も必ず多い事と信じます、ご覽じ玉へ。ローズを以て一世の花とする泰西婦人はあまりにも慢心ふかき樣に私は思ひますそれ故に、よしや夜會の御裝飾、御髮には紅ばらをかざし遊されても、心はいつもこの優しき梅の花にならひ玉へ、もはや御子供にてもなきあなたに近頃まし出

がましい申條ではありますが、心に浮びましたから申上ます。
別紙梅の歌は、とても此花の姿や香りには比べられませんが、御笑ひ草迄に御目にかけます、何れ近き中御禮に上る積りで御座います。左樣なら。

雪見に友を誘ふ文

京都　村上琴子

今朝のけしき面白くは見そなはせずや冬に入るよりいつしかさのみ侍ちこがれ侍りしに昨夜より空かきくもりて寒さたゞならず夜半ばかりより音なひ來りし嬉しさにいねがたくて日頃いぎたなきが今朝のみさく起き出でゝかくは認しまつりぬいざ簑笠取出でて銀閣寺あたりに雪見催させ給はずやかしこは眺めもいさよくて殊に雪の名所さか聞き及び侍れば今朝のけしきは一しほよからん必ずこの寒さになどのたまひぞ今日を過ぐさばいつ催さんさく玉の世界に出たゝせたまへかしこ

妹の許へ

駿河　村由ちか子

日增しに寒さうすらぎ候へども、御地はなほ降雪やまぬよし、さぞな、御通學に御困難ならんと推量しまゐらせ候扨て御身は近々の内に小學科を卒へさせられ、愈々高等女學校に御入學なされ候由芽出度き事と存じ上候。されば此度の卒業證書は御身の爲め一段落と存じ候まゝ、とく〲心じて、一寸の光蔭もあだにせず、專ら學業に心をこめ人にぬきんづるやう、いたされたく候優等の成績を御手になされ候はゞ、姉よりも褒美にして珍らしき品々御送り申すべく候間、そも樂しみに御勉勵ありたく念じ上げまゐらせ候、先達ての御文中に御申越しなされ候袴は早速裁縫に取りかゝり候間卒業式の折までには御間に合せ申すべく候、私も先頃當地山田先生より琴のゆるしをとり候間、御喜び下され度候、みな〲樣へは例のよろしくと御傳へ下されたく賴み入る、かしく〲

二十世紀女子の歌

若柳燕孃作歌

二十世紀の劈頭に　藝苑爰に春を見る
平和の神と囃さるゝ　女子の美德は何の爲め
男尊女卑は昔にて　男女同權事なりぬ
奮ひ起つべき時は今　卑屈は女子の德ならず
畏かれども神功の　三韓征伐勇ましき
其の勝鬨を仰ぎ見よ　卑屈は女子の德ならず
常盤靜が貞操は　男子にまさる世の鑑
ヂヤンダーク孃が勇烈は　丈夫も膽をひやすべし
ナイチンゲールが建てそめし　不朽の名譽赤十字
深き慈愛の旗風は　女子の手をまつ大事業
日進月歩の世の中に　姑息に富强の途ならず
極東多事の今日に　神の御國の大和姫
交際塲裡の花とさく　海上王のブリタンニヤ
手を取り合ひて勇飛せん　世界の舞臺活戰塲

和歌

佐々木信綱先生選評

春興（天）

病癒えし母をたすけて樂しくも今日三年振り嵯峨の花見る　京都府　氷室浪子

評　杖によれる母のおもわ手をひける少女のおもわ共に笑の波あふれたるべし

春興（地）

わかなくに春野ははやく暮れそめぬさらば別れん花よてふよ　麹町區　福島安子

結句原作「蝶よ」とありさては調いたく劣れり

船（地）

梅かほる小島のかげの捨小舟春の女神や乘り來ませし　大阪市　酒井美代子

評　下乘有神とやいひつべからむ

春興（人）

これやこの里に二つの水車やみぬめぐりぬ春の日長さ　本郷　菅原薫

船（人）

をかしとてまねて笑ひし楫取の歌にもなれし船のたびかな　周防　大木久仁子

●船　乘り捨てし葦間のふねに白鷺の一つとまりて春のあめ降る　和歌山　平田静子

◎船　しづかにも霞の母のふところにねむれる舟やなに夢むらん　長門　熊谷ふさ子

●船　須磨の浦　春をのせ行く船ひとつ　船人わかく船歌きよく　長門　桂野花子

●船　乘り合ひてかたれば同じ故里の人もありけり淀のかはぶね　美濃　坪内清子

●春興　雛祭もゝを隣に乞はんとてひとり歌おもふはるかせの窓　大阪　吉田政榮子
下句　原作「長き春の日うたに暮しつ」

●船　今日も亦磯邊に立ちてはし妻はなく見すかしてわを待つらんか　三河　靑木絹子
二句　以下「あま妻は愛見すかして己れをまつ見ゆ」

●船　わたし場のをぢかさにはの梅咲きてかは風かまる船のうちかな　岡山　長尾秀子
原作「ゆくりなく梅のかをりおとつれて川風さむしわたし船かな」

●船　舟一つ岸の櫻のかげしめて笛の音すなりおぼろ夜の月　名古屋　片野珠子

●女學校　みめぐみの露にうるほふ白百合のかほりゆかしきまなびやの園　小林直子

●春興　琴の音は雲井にすみて少女子が立まふ袖にさくらちりしく　熊本　豐子

●春興　百鳥のさへづるはやし訪ひてみん堤のすみれ蝶にゆづりて　日向　原地廣子

◉春興　鳳簫の調はやみて日淡き御欄の御簾に梅のはなちる　河内　櫻井喜子

●春興　かすむ富士とびかふ胡蝶匂ふ花たのしさつきぬ春の野あそび　麴町　榎本乙女

●春興　花見んと敎へ子つれて野雲雀のこゑのしたゆくはたなかのみち　東京　若林文子
評　生徒ともなひ野路ゆく女敎師、着想おもしろけれどいひざまいまたし

●船　送り來し人は小さく小さくなりておもふこと多き船のうへかな　京都　三宮露子

●春興　雛まつるうたげははてゝ床のべの燭の灯あかく桃の花ちる　東京　野澤はな子

●其　つゝじさく一里の山路踰え來ればまたおもしろき菜の花のむら　美濃　莊加ふじ子
原作「踰え來れば菜花盛り此里は山道一里里つゝじなりしに」

佳調

春興――船――女學校

● 下谷　白井すみ子
よそほひし花嫁のせて船二艘利根下りゆくうすづき夜哉

● 山口　草賀はな子
のどかなり一夜をこゝにあかさんかすみれの床よ花のふすまよ

● 河内　巽白ゆり
花により柳にそひて春の日のながら堤にあそび暮しつ

● 信濃　田中千枝子
少女等のうたげたのしや打つれて酔もくだらせ花の下陰

● 大阪　猪頭芳子
おのかじゝさせる園の教草いづれ紫いづれ紅

● 埼玉　林若葉
擢は折れぬ腕は疲れぬあゝこの身さそふがまゝの浪にまかせむ

● 愛媛　能代すみゑ
若草にたはるゝ稚兒を乳母の守る野邊をるやかに春の風ふく
二句より四句迄原作「たわるゝ乳子を母の守る野を溫き」

● なほむら　桃月
思ふどち雑ふりはへて行く野邊にうたふ雲雀の聲ぞのどけき
初句以下原作「打ちむつれつゝ行く野の徑に呼ふ雲雀のこゑぞかれしき」

● 志摩　伊藤美惠子
眞帆かたほ靜にはしる株日和筑波山あたりひばり鳴くなる
四句原作「みそら高くも」

● 尾張　岡瀬かつ子
里の子は菫花さく春の野にうちまろひつゝ遊ぶのどけさ
二句原作「里の子のみとりしたゝる」

● 甲斐　土屋政方
長閑けさにあこがれ立ちて姉妹花のむしろにあそぶ今日哉
二句結句原作「浮立ちけりな」「祝ふ今日かな」

● 高知　高橋ゆき子
少女二人すみれつむ野をさながらにうつして居るよ若き畫師の君
下句原作「うつしてゑみぬやよひなかばに」

● 長崎　松下よし子
松浦潟朝もやふかしせなのせてこぎゆく舟の親ねずなりゆく
二句原作「霞やふかし」

● 伊勢　佐々木すみ子
すみれつむ少女に今はなれ〳〵て友得しかほの春の若駒
四句原作「野邊にや遊ぶ」

● 鹿兒島　宮里さな子
なり〳〵は櫂の手止めてあまの子の思に沈む夕月夜かな
三句原作「乙女子の」

● 上越　冬野ゆき子
春風にたもと吹かれて里の子と若菜つみつゝひな歌うたふ
結句原作「ひな歌覺ゆ」

● 和歌山　西口峯子
梅の花何處ともなくにほひ來てわけ行く野路のたのしくもあるか
一句より四句迄原作「何處となく梅が香ましもこゑのしてわけいるみちの」

● 丹後　篠原米子

おもふどち若菜つみつゝ遊ぶ日に世にたのしさの限なりけり

下句原作「笑みなすかほぞ殊にあまれる」

● 飛彈　峰公作

あはれなり我身は総の捨小ぶれ何處の濱に身をば寄すべき

一句結句原作「いそ地より」「身をよするらむ」

● 和歌山　保田森子

青柳のけぶる川邊に舟捨てゝ舟夫のねぶれる春ののどけさ

下句原作「舟夫のねぶるや春ののどけき」

● 麹町　榊谷よし子

まなびわざ終へてかへりしふるさとに妹つれて菫草つむ

結句原作「けふのたのしさ」

● 川浦　小林しづ子

行くまゝに花また花に送られてこゆる山路のおもしろきかな

四句原作「通ふ山路の」

● 牛込　松島かつね子

待ちわびし庭の白梅さき出でゝ眞柴積がき春の風ふく

結句原作「春雨のおと」

● 長門　末成靜子

花そのに小鳥の聲も興添へて父の諭ひのいと面白きかな

初句原作「花見れば」

● 埼玉　鈴　米子

いつしかと煙の末も見えずなりて君かみ舟ぞ遠ざかりける

結句以上原作「動くともあらで水路はのびゆきてのこれる人ぞ」

● 和歌山　宮井靜子

ちらちらと櫻花ちる堤陰翁釣する小舟うかべて

結句原作「小舟の上に」

● 長門　曾子

乙女子も文の林に分け入りてこと葉の花をこゝに尋ぬる

結句原作「尋ねつるかな」

● 和歌山　田中實子

御園生の花の木かげにつどひより御題の歌を詠みかはすかな

下句原作「文歌おもひするぞたのしき」

● 伊勢　橋本春の子

おもふどちのどけき春の野に出でゝ胡蝶おひつゝあそぶたのしさ

三句原作「春の野邊にいて」

● 基隆　西ふじ子

長閑さよ歌ふ雲雀をきゝながら花さく野邊にわかなつむなり

四句「花ながめつゝ」

● 山形　阿倍常子

船人の小うたの節も面白し水かくかいに調べあはせて

結句原作「調子あはせて」

● 麻布　山田清

菜の花にむつるゝ蝶のあと追ひて家路はるかに日を暮らしけり

二句結句原作「花に戯むる」「日はくれにけり」

● 滋賀　かう子

けふも又蝶とたはふれ菫つむこのたのしさを母にはなさん

結句「春の野べをば」

● 山口　都野しげ子

まちまちし日曜の日を日もすがらかるたとりけり春雨の家

二句より原作「日曜日もともどちとかるたにや消さむ春雨のため」

●

いもうとゝ若菜つまむと行く野路の梅さく木影うぐひすのなく　三河　やよい

原作「我いもとなつみに行く道すがら只ある木かげに鶯のなく」

●

春の夜を母の片見の小琴とりてかなづる樣に花のちりかゝる　長門　桂野年子

三句以下原作「小琴もて更かせば花のちりかゝりけり」

●

佐保姫の織なす錦しきわたす春の野面のおもしろきかな　備中　大野悦

三句原作「引つめし」

●

花の影むしろしきつゝ妹が小まりつく手に蝶もまひつゝ　但馬　二葉子

結句原作「花もまひつゝ」

●

つなみせし濱邊にとちてけふもまた父の船よぶ海人の子あはれ　鈴木　山田早苗子

結句原作「海人の子やたれ」

●

思ふまゝつみて興ずるはな籠にちごわに似たるてふ二つ三つ　北海道　靜女

二句「つみて興かる」

●

皆人のむや同じ花のゝべ昨日みし子にけふもあひつる　佐賀　石井安子

原作結句「けふもあへるは」

●

思ふとち咲く花の雪にあこがれし唐詩を誦せし春もありしを　甲府　伊藤うた

原作初句「あなたむきて」

●

花鳥に身をばまかせて永き日も短く暮らし春ぞ樂しき　香川　勝田陽子

四句原作「ありてくらせる」

●

めもはるにこゝろも野邊にあくがれてかへる山路に月おぼろなり　尾張　森みよの

結句原作「ゆふ月のかげ」

●

おもふどち花をかざしてすみれさく野へに一日を遊びくらさむ　伊勢　林登美子

四句原作「野へをしるべと」

●

去年の夏君と涼みせし舟の上に今霜さむくかもめとぶ也　橫濱　大石あい

三四句原作「舟の中は今霜く」

●

春の海の凪ぎて長閑に見ゆるなりあまのつり船かげ二つ三つ　陸中　薰岡ゆき子

四句原作「合沖漁船の」

●

わが園ににほへる花はあまたあれどつくらぬのべの花をこそ見め　日本橋　紫山女史

二句以下四句迄原作「賞むべき花はあるなれど自然に生ひし」

●

鶯のいざなふ聲にあくがれておもはぬ野邊に花を見しかれ　常陸　杉野茂代

二句以下原作「いざなふ聲にあこがれて野邊におもはぬ花も見しかな」

●

バイオリンピヤノのすさび音たゆて花に深けゆくおぼろ夜の月三句　信濃　錦織嘉子

原作「おもしろく」

●

日うら〳〵桃の花さく多摩川に里の子三人さゝ舟なかす　小石川　成瀬やへ子

結句原作「さゝ舟うかす」

●

思ふとちすみれさく野にあくがれて日のくるゝをも知らでありけり　大阪　霜野秀子

原作四句「日のくるゝのも」

●

雨にぬれし軒はの花をそとなりて一人歌おもふおばしまのもと　三河　鈴木たんぽう文

初句原作「梅の小枝そとなりて春の歌おもふ文机の上」

●

つれ〴〵に桃さくまどの筆すさみひゝなの日記かきて見るかな　河内　いその上露子

初句原作「遅日けふ」

●

長閑なる霞も分けて春の野にすみれ摘みけり友と日ねもす　上野　三原芳子

結句原作「友の君して」

●

佐保姫の綾織なす山里に蕨折る程たのしきはなし　名古屋　松本みれ子

三四句原作「山ざとに蕨つむ」

●

里川にさゝ舟流しおかの邊にすみれつゝ春の日くれぬ　長野　笠原この

●

青柳の糸を吹きとく春風に髮なぶらせて鞠あそびする　弘前　平山ちい子

●

桃さくらすがたばかりはなにかせん松の操のなからましかば　和歌山　浅井まさ子

●

嫁ぎゝて三年にあまる都住今日春の野のきにまどひぬ　磐城　内山房子

●

ほの〳〵と朝きりこめし波の上を艪の音ゆるくこぎ渡る見ゆ　周防　艶子

結句「帆かけふれ引く」

●

けふはしも花に暮せり明日も又またそのあすも野邊遊びせん　播磨　大山恒子

四句五句原作「あすは磯遊びせん」

●

年経なばいとゞながめやまさらまし庭に氣高き大和撫子　下總　土井粘子

三句原作「ましなまし」

●

外つ國の學びやをへて歸りまし兄上のみ船をあの船にして　淡島　小林ちやう子

下句原作「兄上のする船はかしこに」

●

いざ子供貝ひしろひつゝ見てゆかん磯山さくら今盛なり　神戸　井上品子

下句「磯山とほくおちの野山を」

●

愛らしく今年もさける梅が枝にはつ音床しき鶯の聲　愛知　中川しゆう

二句「今年もきたる」

●

笛の音はいつしか絶えて牛飼もうしも眠りぬ花の下かげ　石見　千代延淑子

初句原作「牧笛も」

●

そことなくうかれて來ればこゝかしこ雲雀鳴くなり春の野毎に　志摩　里居女史

原作「心あてもあらで語りつ遊すれば雲雀なくなる春の野の面」

● 播磨　三木みさを

綾錦幕引きはりて八重櫻ちりくる下に君舞じ玉ふ

二句原作「さそふ小風」

● 甲斐　高橋種子

船子等がふな歌うたふこゑすなり夕日長閑き春の海原

二三句原作「唐詩うたふ」「こゑ」

● 下野　美喜子

螢のれぐらをさがす夕ぐれにすみれ摘む子の去らんともせず

二、四句原作「我宿さがす」「すみれなつみし」

● 下野　喜邑きれ子

風ふとち花の木かげの小酒もりゑひてまひけり蝶ならぬ身も

上句原作「心にもあらで盃をくみかはす」

● 群馬　小野寺浪子

榮えゆくみよのめぐみのつゆうけてひなにもにほふなでし子の花

原作　「榮へゆくみよめぐみやあまさかるひなにももれず敎へうけけり」

● 陸中　太田きよ

諸共に學びし友を外國にのせ行く舟の見えずなりぬる

原作「昨日まで學びし友や神戸立つ英都指し行く蒸氣の船」

● 下野　黒田武子

みやこ人常は訪來ぬわが野邊の花さくあたり車多く見ゆ

二句以下原作「わが宿に歌よみかはし今日もくらしつ」

● 和歌山　畑中てる子

春の野にくるゝもよしやくれば又花にすかすめる月をながめん

原作二句以下「風ふとち花見てくらす心なりけり」

● まさ子

咲く花にたはるゝ蝶のあと追ひてつれ來し妹を見失ひける

上句原作「摘入し花にたはるゝ蝶おひて」

● 埼玉　飯塚たい子

外つ國に物を學ぶと乗り出しわが背の船の見えずなりぬる

三句以下「螢あつむる我君の來出にし船のかげうすれゆく」

● 播磨　原田

父君の病癒えしを祝ふとて鶯なくか庭の梅が枝

初句以下原作「病いえにし祝とてか鶯なきぬ」

● 伊勢　黒田章子

若菜つむ少女のむれは打ちわたす菜畑をすぎて麥畑に入る

二句以下「はるかなる菜の花くゞりむぎ畑より」

● 駿河　宮城錦子

あらしありと聞て心はみだれたり君が御身を神まもりませ

下句原作「海上千里君でやすかれ」

● 日本橋　河村かれ子

吹く風に花や散らんと惜まれておしあくる窓に月おぼろなり

下句原作「なしあぐる窓に朧月の影」

● 金澤　森川とし子

おもしろき花見のむしろに日はくれぬいざ月待ちて小宴かなてん

四句原作「月まつすさびに」

● 群馬　星野信子

宮の中いとどひろくぞおもほゆれひばりなく野にたてるわが身よ

● 伊賀　村尾倫子

真帆あげてみなとを出づる船二つ二つの船の行方知らずも

●大和　あさぢふ女史

鶯の聲を霞に閉されて梅薫るなり月が瀬の里

●近江　たし留

行末の花はこの舎の園よりぞさき匂ひては世をばかざらん

●東京　近藤はな

わが夫のみ舟は見ねず熊野灘三日月落ちてたゞ千鳥なく

●伊勢　岸田ちゑ子

菅の根の長しと言へどはるの野にあそぶ日影の暮れ易きかな

●和歌山　石井歌子

父まさば樂しからんを母まさばうれしからんを春の野遊び

●紀伊　中川いさを

暮れ果てぬ今宵はこゝに夢や見む散りし花びらしとねにはして

●米澤　冬野ゆき

菅の根のながき春日を夢の間にあそびくらしつ野べにうかれて

●紀伊　楢本しげ子

野に山に花のふすまに圍まれて一夜ねてみむ菫の床に

●つた子

花のもとにかすみなくみてうたゝねのまくらのどけき野邊の春風

●大阪　天野元子

あらしふくよべも一夜をまどろます船のらなる人を思ひて

●近江　新村ます子

うか〳〵と思はぬ野邊に來つる旅路もせに咲く花にうかれて

●日本橋　水本うめ

鳥にも月はのぼりぬこゝしばし我等の世なり留とれな君

●美濃　莊加圭子

ほやり〳〵かげろふもゆる春の野に今日もひれもす花にうかれて

●越後

母上のみ手とりながらをちこちとあそぶもうれし春の花野に

●駿河　林すゞ子

蝶々は花のかざしにまひ〳〵て鶯うたふ野邊ぞのどけき

●長野　小林つれ子

花の露硯にうけて書きてみんあはれたのしき春の遊を

●伊勢　中村三枝子

里の子がつくりて流す笹船にとり〳〵のするすみれ蒲英公

●下野　すみれ

少女子の文の林のとしごとにふかき色ます御代ぞうれしき

●柴田　渡邊しげ子

大臣の仰せをうけて造りあげし船試むる春のうな原

●小石川　木内てい子

くるゝ迄すみれと蝶にたはふれてかへるさは又月にうかれぬ

●長門　福永けい子

あくがれて野邊より野邊に今日もまた月になるまで遊びつるかな

●丹後　中島みつ

樂しげにかへるをとめ子二人みたりかるたあそびの噂かたり行く

●芝　石川順子

身は小船世は海原の浪荒らし心の舵綱心して引け

●茨城　菊地みれ子

夕霞雁おつる方よりくれそめてすみれつむ手に月ぞかすめる

●伊勢　篠原貞子

梅散て霞そくべくなりしより野邊に暮さぬ日は無かりけり

● 上野 佐谷戸さく

春くれば梅よ若草よ野に山にいざやと人のいはぬ日もなし

● 山口 串山文子

船とよぶ船てふものは多かるもみいくさ船ぞいさましくして

● 筑前 吉武なか

此春は病もいねて背の君と花をたづれて旅をするかな

● 宮城 香露女史

暮はてし去年より戀ひしわが宿の櫻の花さきにけり

原作「朧夜の頃より戀ひす佐保姫はあらすのにはの櫻なりけり」

● 東京 駒田繁子

くるゝなもしらで遊びぬ野に山に花の香こめてのどかなる頃

原作「日長さを忘れてぞ見ん野に山に花の香こめし春の山ふみ」

● 東京 大飛方

菅根の長き春日に梅花かざして遊ぶ野邊のたのしさ

下句原作「かざし遊にも故山の宮」

● 金澤 龍村仲子

春日和うらうらとして畑打ちの菅笠の上に胡蝶むつるゝ

結句原作「孤蝶弄むる」

● 芝 鈴木つた子

けふもまたしくれにくれてかゝり船夕げたくらん火かけ淋しき

● 大阪 田中しゆん子

鍬の手をしばしとゞめて背子とわれ花下かげに鳥のうた聞く

● 香川 丸山国子

河風に岸の白梅ほろほろと主なき船に花散りかゝる

● 香川 佐藤たか子

長き日を萬生にわきてやすらへば堤はるかに駒のいなゝく

● 栃木 高鹽さた子

歸り路を急ぐ白帆の影淡し霞が浦の朧月夜に

● 鹿兒島 羽田くに子

ひと時に來れる春の風と水何れ訪ひてか先づ興を得ん

● 駿河 林すき子

舟よせて貝やひろはん三保の濱海士の乙女のむれにまじりて

下句原作「海女の乙女と共に」

● 陸前

はらからよ友よと呼びて日暮まで昨日も今日も花にうかれぬ

原作結句「花の園守」

● 信濃 錦城千代子

貝ひろひ籠いとおもき歸り途磯山櫻月おぼろなり

下句原作「櫻の上にかたわれの月」

● 伊勢 阿部文子

帆は裂けん嵐孕みて猪の狂ふ姿をさながらの船

四句原作「山とぶ姿」

● 武州 大賀靜子

のどかなる春の光を背にうけて花散る下につごふ乙少子

二三句原作「暖き惠みの光」

● 横濱 藤原し[illegible]

こぎいでし小舟のかげは消えにけり海原千里只霞め

結句原作「いま霞のなか」

● 山口 山の内つや子

思ふどち花の木かげにまとひして浮世をよそに遊ぶけふかな
二三句并に結句原作「花のむしろを宿として」「見るぞたのしき」
●　上田・市村操子

山行けば山もをかしく野邊行けば野邊もをかしき春の色哉
二四の原作「山もおかしや」「野邊もおかしや」
●　陸前　お田さく子

み吉野の花に霞にあくがれて歸路迷ふ春のたのしさ
結句原作「春のおかしさ」
●　花子

犬の子がまろびあひつゝ遊ぶかな春日のどけき若草のうへに
四句原作「春日うけたる」
●　香川　大島春子

人は皆かへりはてたる花蔭に匂はん月の影をまつかな
一二句原作「大方の人はかへりし」
●　大村　朝野とみ子

行きかよふ野邊はすみれの香も滿ちて足もと惜しき心地こそすれ
初句原作「行とまる」
●　大阪　下垣内富美子

のどやかに吹きて音せぬ春風になびく柳のおもしろきかな
一二句原作「のどかなる」「吹くも音せぬ」
●　相模　青木眞

あきやらぬ花見の袖に夕日さしくて春の一日のみしかくもあるか
原作「さめやらぬ花見の袖に夕日さすみちかくもあるか春のひれもす」
●

梅ぞのをさして花見の道すがら迎ふろごとき鶯の聲
「
●　廣島　和知廣子

をとめ子の歌にぎはしき脊戸の野に白もゝひもゝいま花ざかり
二、三句原作「こゑうらわかき卯月近く」
●　仙臺　村田さく子

外國に業なし給へし汝か兄の船はあの船今見ねそめぬ
三句より原作「汝か父はあれよあの船今か來ましも」
●　山形　野口菊子

船あまた港の内につきぬれど兄をのせ來し船はなくして
原作「蒸汽船港の内へつきぬれどのりゆきし兄君あはれいづこへ」
●　下谷　みき子

夕日さす沖をはるかに見わたせばあまのつり舟こぎ歸るみゆ
初句原作「夕日かげ」
●　埼玉　松木留江

うす霞む須磨の浦わに白帆見ねて千鳥鳴音ものどかなるかな
三句以下「白帆見ね」「あわれかなしき」
●　伊勢　黑田靜子

春風にたもとふかせて若菜つむ少女のあとをおふ胡蝶かな
二句原作「ふかして」
●　山口　清水幸子

花にま蝶ふらこ蝶に筆湧きて文も麗はふ春のたのしさ
原句原作「錦なす」
●　紀伊　島津秋子

思ねし馬を花の木かげにつなぎ置てつくしつむなり里のわらはべ

二四句原作「櫻の精」「いたづらす」
● 埼玉 倉朴染
うつら〳〵思出ながき桃の樹肌へのどかに風わたり行く
四句「肌ぬくとく」
● 東京 菊池蘭子
春興打むれて花見かへりに仰ぎ見るかすみの空の匂はしきかな
四句原作「すみの空は」
● 本郷 辻富子
とぶ蝶の心やわれに通ひけん花より花にけふもうかるゝ
結句原作「けふもあこがる」
● 美濃 高木庭子
小松原遊び暮してかへるさの土産にとつむすみれたんぽゝ
● 長崎 松下よし子
故里の野の戀しさぞ増りけるみやこの花を見るにつけても
● 和泉 井上清子
蝶と舞ひ鳥と歌ひて春の野にきみと千代をばへましとぞ思ふ
● 日向 坂元はる子
花に醉ひてかへる夕暮渡橋の柳にねむる春の夜の月
● 山城 古川米子
すみれつむたんぽゝつみてまたさらにいそぎてゆかん土筆ある野に
● 鹿児島 指宿さわ子
蝶一つとびゆく方を見送れば菜の花畑春の風ふく
● 佐賀 石井とめ子
文よみし友を尋れて袖つきし櫻がりして一月くらしぬ
● 神戸 茂子

なさな子が作りてうけし笹ふれを池の金魚のくつがへしけり
● 東京 野澤はな子
桃の花入日にはゆる夕暮を川べにはてし渡船かな
● 千葉 林濃子
花になく小鳥のこゑにおくられて霧さをさす小舟行く見ゆ
● 下野 高鹽さた子
見送りしわが兄の船の影消ねてたゞながめやる天津の空
● 神田 村瀬靜子
母亡き子今朝もなぎさに立ち出でゝながむる沖のなつかしき船
● 越後 山岸棠子
緑なす春のあしたの山里にをもれて梅の香ぞする
「四句原作」霞ときわけ
● すみれ子
荒浪の寄する磯邊の破れ小舟主はなくて獨り漂ふ
二句四句「よする磐邊に」「主をば捨てゝ」
● 群馬 根岸せい子
鶯の梅にさへづる木の間より諸の聲のもれきこゆくる
二句井に下句原作「梅が枝うたふ」「もれきこゆけり謡曲の聲」
● 伊勢 植木しげ子
霞たつ花野の蝶と身をなして舞はゝや我に春の歌あり
● 信濃 竹鼻はる子
片帆あげて港はなるゝ船の上に歌かすかなり月淡くして
● 牛込 松崎すゑ子
たすけよばふしろしの煙あと絶ぬ小島はるかに船のゆけども

故郷は榛の彼方の浦なれば沖ゆく船のなつかしき哉　高知　小西雅子
●
つみて來し菫にまへる蝶を見てひとりほゝ笑む夕暮の窓　香川　眞久子
●
流れ清き里の夕川歌乘せて下り行く舟に花散りかゝる　府下　三好珍子
●
燒あとのまけるのどけき春の野につくしつむ子の顔おもしろき　長野　小津八重子
●
遠山の麓は花にかすみつゝ菜の畑三里小蝶舞ふなり　高崎　深井せい子
●
風ふとぢ花にあくがれ日暮しの里の夕月愛づる比かな　弘前　三宅亮子
●
浦波の音も霞みて釣船のありとも見えぬ朧月夜かな　弘前　三宅亮子
●
若木川いさりする船ほの見えて木々の梢に明鴉なく　麹町　宮内俊子
●
航海の日記ひらきて風多き波路きづかふふれの中かな　越後　千代路
●
大御代の恵の露にうるほひていよ〳〵花ふ姫百合の花　近江　川端豊子
●
墨田川櫻の春を繪にゑかき歌をも添へて古里の友へ　河内　串本ふさ子
●
青柳の岸邊行く船主やたれ唐詩うたふ聲のきこゆる　横須賀　英女
●
峠の道日陰浴びつゝ遠近ば若菜なでくる風暖かき　信濃　岩間八重子
●
卑き世も尊き民も少女等の學ぶ庭より崩しいづらむ　弘前　平山ちい子
●
名もしらぬ山を越えきて名もしらぬ海路はるかに行く船をみる　駿河　宮城錦子
●
さらくて學びの庭も遊ばれどつくす心はわれおとらめや　陸中　澤田はな子
●
さく花に鳴く鶯にあこがれていとなき身も今日はくらしぬ　福島　青柳緑子
●
日うけよき納屋の南にむしろしきまゝことなしていざや遊ばん　岡山　北那ゆき子
●
童餉してすみれつみつゝ弟と叔母君とへば日は落ちはてぬ　石川　野村佳子
●
なにも事打すてはてゝけふあすと棒朔つる時は來にけり　栃木　田波秀子
●
菫わらび我は少なし誰は多しと打つごへをれば夕日かたむく　高知　高橋ゆき子
●
小羊のねむりのどけき春の野に草笛ふきて雲雀うたきく　芝　種の榮子
●
春の野に菫摘み行かへりまた飽なくに月は出にけり　和歌山　郭雪子
●
菫さく野をなつかしみわけくればこのふも袖にむつれてぞとぶ　山口　草賀通女
●
さそはるゝ身こそつらけれこぞまでは母もろともにわかなつみしを

新體詩

(天) 落日

名古屋市澤井町大原屋 大原ちゑ子

寂びたる廟に入る如く、
殘る光の白きかな、
森は黒くも聳ねたり、
風吹くなべに靡きつゝ。

蝶の羽袖や寒からむ、
沈む光のかく淋さ。
夕の色はせまりきて、
笠より暮るゝ野べの色。

沈む光を仰ぎ見ば、
ひとりたぎつに似たる哉。
この寂寥をすくへかし。

行きよき老樹の、
靜かにきしる落日の、
闇に啓を望むごと、
穗なせる下草は、

小草の花も萎みては、
なぞや眩ゆき白日にして、
羊追ふ子のそびらより、
ゆくてを急ぐ旅人の、

あゝ風荒ぶ野に立ちて、
慾は森の眞淸水の、
夕べの星よとく出でゝ、
落ちゆく光荒ぶ風、
わが世は餘り淋しきに。

評 想深く、調高し、而して佳句彙々として連ろ。天なるべし
(尾上柴舟選以下同じ)

(地) 兎の賦

赤坂區新町五ノ卅九森方 兒嶋みね子

冬のあさ妹と二人
築山の雪をむすびて
作りたる眞白の兎
眞すぐなるゆづり葉の耳
深紅なる南天の眸
かはゆしとめでけるものを
此春は如何なる幸か
姉妹のいかなるトか
里の翁汝を得さしぬ

星の譜の言葉なかしや
我星は露葉に
彌生すら白雪とけず

銀漢のながれの末と
大古より語りつぎたる
小琴なすせゝら錦川

其川の源とほき
山の峡眞木きるなべに
圓らすも得しは汝とよ

銀漢に耕耘します
白砂の帛より白く
柔き汝がにこ毛よ

何こふろうろほひ深く
にほひある紅寶石の眸
あゝ塵の世のものならず

秋早き蟠環の殿の
欄干のつめたきにしも
人の世をこひそめにけむ

月の姫銀河に下り
ゆあみます汀にありて
ときすてし御衣の袖

戯れ惱んじ心淋しく
うき雲のさそふまにく
月の都のがれやいでゝ

友もなき姉妹が中に
汝得しもくすしき縁
いかならむ神の御心

評　字錬句茉、而して奇想天外より下るの感あり。蓋し鐵花の仙後紀に擧ぶさころ尠なからざらむ。塊ならむ。

(八)

五重塔

蓬萊女史

墨縄たゞす番匠が、
朝旅霧のはれゆけば、
岸に聳ゆる五重塔。

讃めし經も畫みて、
雲せまりくる高欄に、
しらぬ氣韻の高きかな。

朝は露盤に露うけて、
四天の神に守られて、
夜は北斗を額がへり。

掌の上につくられて、
寶珠を空に捧げもち、

供養忘れし末の世も、
浄き爺のあとみれば、

扉は神秘に閉されぬ、
金輪際に根をうづめ、

おつる夕日に背いては、
重なりうつる草の上、
其世に栖し歌反古は、
命の岸をしたに見て、
高き姿を水に見よ。

五重の屋根のあざやかに、
月を扉にまれきては、
時の嵐にやぶれたり。
天に呼吸する塔樓の、

評　極力摘寫、塔影宛然眼にあり。人なるべし。

秀逸

月と鶯

牛込若宮町　川田䤈子

水ほのしろき夕暗の
眞珠とかせる山川に
塊の詩人鶯は
うたひ暮らしてねむりけり

朝のかなり鶯の
妙なる歌はしろかねの
天の佳人月姫は
てらしあかしてかくれけり

谷に月姫あもりきて
虹のみだれげ洗へども
藤のとばりのかげ深く

みどりのそれにふき初めて
流れに谷のあふるれと
曙のすみれの露ふかく

動物の虐待を訴ふ

鳥取市新町　尾崎綾子

知しろしめす天地に、
野山と家と隔つれど、
等しく生を享け得たる、
無辜の動物羸弱きに、
耳を貸さゞる人の子の、
情こはきを怒らずや。

そのかみつらき逆境の、
金に賣らるゝ友を見て、
靈あり情ある人の、
自由の旆をひらめかし、
平等の弓とり持ちて、
奴隷は茲に解かれけり。

斯くて平和を喜ぶは、
あゝ〳〵胸の淺きかな、
見よ文明の國民の、
足跡遠く行くところ、
無情を叫ぶ動物の、
滿てるをなどか救はざる。

力に餘る資を貢ひて、

坂道辿る牛馬の、
額に汗のにじむ時、
そびらに降る鐵鞭の、
するどき響ひゞく時、
若き血汐は躍らずや。

われ巾幗の身を持てば、
涙多しといふ勿れ、
もし暴虐日に阻はれて、
肉をも破る虐待を、
受けなば人の心堪へじな、
去らば弱きを思ひても見よ。」

うすやみ

下谷中御徒士町一丁目　齋藤百世子

ほのしろき雪の丸窓
我めつる梅か香高し
ともしひはあらぬ竹檠
さらくとなつるなよ竹

こし方風ふむは淺し
筆なげて机にふせば
おちやすき我前髪に
こぼれしは花かはた雪か

闌けかれそは何ものぞ
我は今人にも遠し
靜かにも御空を戀へば
かげなき者耳にさゝやく

「オゝうすきなれ人の子よ
いたづらに高きを戀ふな
秘ことはとはに開けじ
ふしてたゞ人の世にゆけ

たへなる香はとくくんじ
たなびくは神の御袖か
すがらんと身をうごかせば
かげもなし我やまぼろし

つと立ちてあふぐ御空に
ゆきやみてうす月出でぬ
ともし火のかげ二つ三つ
あゝ我はとはに人の子



佳調

花籠

福島　三宅さく子

菫

胡蝶菫の色篁ひ睽ひくるひ悶れるよ。
風は胡蝶の姿慕ひ添ふよ綴るよ籬はるよ。
知らず菫は誰が爲に笑むか粧ふかつくらふか。
夕眠る星や啼く鳥や情は朝の東雲や。
何れを愛づる花菫ふかく默して語られど、
夜毎靜かに白露は花のうてなに宿るなり。

花

花の香情けに閉づるにも似て息薰る。
星の瞼の重たげに夢見る如くしばたゝく。
夜の帷に二人れて默笑濃かに花と星。
　こや世の中の常ならむ
見よ森のみは呑みてきくよ木の葉の八千耳に。
斯して森は風呼ひぬ花ことしく散すづく。

誕生

名古屋　久田　とし

勇ましく鳴くくだかけに、
ほのぼの明くる春の夜や、
よき子生れしこの朝、
このよき占やことほがむ、
たちわかれゆく朧靄に、
希望の色はあふれたり、
すきもる風の梅が香に、
こづたひ鳴くは鶯か。

まだ幼なる瞳は、
たとへば花の雫かも、
ゆめ見るらしき頰の色に、
匂ふは春の朝日影。

まだ生れこし世の中に、
れがふもとめもなからむを、
ものえふらしきまなさしは、
はやも希望に燃ゆればか。

まひかつ歌ひ美酒を、
こゝろごゝに酌みかはし、
よき日ことぼく朝まだに、
春の光はあふれたり。

母を懷ふ

長野　小澤八重子

想へば去年の春なりき
床しき花の香を受けて
母の御手にすがりつゝ
野邊に小草を摘みにしを、

想へば去年の春なりき
御空に月を仰ぎつゝ
母の御手にまつはりて
夕、里より歸りしに、

吁、なつかしき母上は
妾をおきて只一人
やさし笑顏を永しへに
遠き御國へ逝きましぬ、

ひねもす野邊に待ちぬれど
歸り來まさず母上は
今年も花は咲きけれど
月は今年も變られど。」

山の井集

四ッ谷　中澤　墨江

山あひ

いはほの花の雨を得て、
更に染むるが如くなり、
崖にかゝれる古き樹や、
怪しくも飛ぶ姿かな。

日も暮れ行けば濱深み、
渡らん人もあらなくに、
そこに二つの白き鳥、
林に飾ひてかへりゆく。

湖畔

昨夜の小舟雨しげく、
夜半の濱風いかなりし、
けさとまをあけ見渡せば、
かはらぬ山の木の緑。
あさ日のかげのうら〳〵と、
今ひむがしをいづるなり、
川せみふたつ岸の邊の、
柳の糸を縫ひてゆく。

雪ふる朝

あゝ凍えなむ雪の朝、
若いませる母のとく起きて、
吹き巻く吹雪おもかすめ、
危く汲みし水桶を、
捧げむ樣の偲ばるゝ、
母ます里をふりさけて、
見れどへだつゝ白雪に、
うたゝこゝろの沈みゆく。

花にしき

離れ緣

淺野あや子

妹背の契り千世かけて
結ぶ宿緣(えにし)の糸をくり
こゝに三年を故郷に
君を待ちしも夢かとよ
錦かざりて來ります
優しき君が手をとりて
恥らう顏のまなざしに
さすが無限の愛情(なさけ)あり
日毎はぐくみ養ひし
片言交りの三つの兒も
父の名を呼ぶ可愛さに
微笑(えみ)をふくむもいぢらしや
しばしも早く一つ家の
まどかの庭に遊ばんさ
いそぐ運びもあら濱に
契りの絲を隔てられ
わかれ〳〵に濡枕
君は濱邊に我は島
義理の絆に縛られて
悶ゐは更に增す鏡
うつす面影窶れ果て
さし出なむさ思へども
君が片身のいとし兒に
心を引かるゝ憂たてさよ

霜の朝

（七八）

埼玉　林　若坊

ひどく寒いよ冷いよ、
起きるはどーもつらいなー。
起きすれてよー今すこし。
勝手元には母(かー)さんが、
茶椀や皿を洗ふ音、
朝餉の仕度せはしげに。
背戸には水を姉(ねー)さんが、
汲んでおゐでだから〳〵さ、
つるべの音もいさましく。
あゝ母(かー)さんや姉(ねー)さんは、
煖(あた)りもしないで早くから、
見るもつめたい水仕事。
そーだ〳〵よ先生が、
朝起きするは一生の、
我身のさくさ云ひました。
子供の時の習慣(ならはし)は、
一番大事朝起きの、
習慣(ならはし)つくるもこの時だ。
さー起き様ぞ起き樣ぞ、
少しの寒さ何かあらむ、

外には小鳥がよんで居る。
勇氣を起しむつくりと、
夜具をはれのけとび起きて、
外に出づれば美はしや。
朝日の光きらくと、
眞白の霜にかゞやきて、
あゝ心地よし朝景色。

雪の朝

埼玉　林　若坊

これ秀ちやんも春坊も、
起きて御覽よ野も山も、
見渡すかぎりまつ白に、
たいそー雪が降りました。
母(かー)さんほんとうれしいな、
あゝうれしいなうれしいな、
兄(にー)さん早く起きましよ、
起きて見ませう雪景色。
かく云ひながら兄弟は、
夜具をはれのけとび起きて、
長き廊下をメメメメと、
湊の方へかけくらべ。

やーきれいだなうれしいな、
はやく來なさい春雄さん、
兄(にー)さんおまちと云ひながら、
春雄は呼ばれてかけてゆく。
まーたいへんに降ったのれ、
あゝうれしいなうれしいな、
僕はだるまをこしらへて、
今日は一日遊ばうよ。
そーだくよ面白い、
隣の芳ちやんよんできて、
大きなやつをこしらへて、
みんなと一つしよに遊ばうよ。
かく兄弟で相談を、
して居りますと母(かー)さんが、
皆さん御飯をおあがりと、
勝手の方で呼びました。

無常

山口　井川ふじ子

花なきやどと厭ひてや、
櫻の花に折りそへて、
桃とつばきを人づてに、
翁はおくりこしにけり、
ひとの心のうれしやと、

小瓶にさして眺むれば、
とりくの色香競ひつゝ、
ほゝゑむ様の優しさよ。
日毎に花をながめつゝ、
散らさじものと朝夕に、
心つくしてやしなへば、
はなは一入さかねけり。
そよとの風も吹ざるに、
心つくしをよそにして、
櫻はやがて散りゆけば、
もゝの百年あだにして、
八千代とちぎる椿とへ、
色うつろひて落ちにけり。
ちりたる花を眺むれば、
涙のあともなかりけり、
吹ばいつしか散なるを、
惜むは人のまよひかや、
我にはなをば贈りたる、
おきなは花に先だちて、
散失せにきと告げこしぬ、
浮世のかぜの常なるよ、
嘆くも甲斐し非ざれば、
今はおきなの形見なる、
花なき枝をあたらしき、
塵に手向てなぐさめむ。

はまべにて

小ゆり

天そゝり立つ岩の上に、
衣簾かせ佇ずめば、
孤こそ騒げ夕暮を。
世にそむきたる巳が身は、
此處に立てども天地の、
聲なき聲も聞えれど。
八重の潮路のはてもなし、
さぎりに込むる嶋見れば、
涙ぞ落つる何となく。

駒下駄

柴田 勇子

露こぼす風ものすごく
なく虫のこゑ哀れなり
芝はらに月をながめて
只ひとり立つは誰ぞとよ。
くぼみたる彼れが眼は
露をもて濕ほはされぬ
ほつれたるみだりの髪は
吹く風の儘になびきぬ。

花にしき

雲の間に隠れやしけむ
月影は見えずなりけり
哀れなるすがたもろとも
うき雲の隔つるまゝに。
やゝたちてむかひの川に
いぶかしき水音なしぬ
その音の聞えしよりは
鳴く虫のこゑも絶えけり。
彼はいま如何にかしけむ
月かげは再びさえて
むしの音はまた聞ゆれど
そのかげは浮び見えず。
川やぎのいざなふまゝに
堤の上音ふみ行けば
あし先にあたるは何ぞ
主のなき駒下駄ひとつ。

いとし子

周防 大木くに子

あな悲しいとしわが子よ、
昨日かもすみれつみつゝ、
かすむ野に歌おもしろく、
うたひしものを。

あな悲しいとしわが子よ、

昨日かもながれも清き、
里川にめだかすくひて、
あそびしものを。

あな悲しいとしわが子よ、
昨日かもきよき月影、
ふみながら千草をわけて、
虫をおひしを。

あな悲しいとしわが子よ、
今日はそも其[illegible]あらで、
新墓におく霜しろく、
只風の聲。

萬里の城

東京 佐々木和子

山をばうがち谷をこえ
築き建てしな數百里
中華の北に聳え立つ
國のまもりの長城よ

あくまで強き匈奴すら
波濤のごとき城壁を
越えて襲はんすべもなみ

闇のこなたに迷ふのみ
たけきみかどのいさをしは
たゞ此城にたもたれて
いくよへぬらむ亡國の
恨はふかし眞里城

雪嶺

伊勢　阿部　文子

夢牛る朝霧に
浮ひ出てたる雪の山
頂僅か桃色にゃ
旭匂ひて薄明り

その薄明りほの〴〵と
森の梢を上染めて
外山遠山末遠く
打ち擴かりぬ朝の色

今はさ霧も消ねたれは
山の裾野も現れぬ
仰げは嶮と屹然し
白雪千丈高き山

颯と吹き來る嵐
憂ひの翼打ち擴け
氷れる羽さながらに
雪いとひきぬ荒磯に

蝶と菫

眞　子

菫「あはれとおぼせ　やゝ小蝶
たのしき野邊に　ほゝ笑みて
君が夢さば　宿せども
やがてば里の　わらはべの
ほそきおよびに　つみとられ
しをれも果てん　わが身なり」

蝶「涙の露に　うなだれて
さはな歎きそ　すみれ草
もしもわらべの　來りなば
舞ふや羽袖の　ひら〳〵と
われは彼方へ　誘ひゆきて
なれを摘まする　ことはせじ」

遊へる兒よ

美濃　すみれ子

風ものどけき春の野に
　ひとり樂しくあくがれて
清く流るゝ小野川の
　水に昔を語る時
うしろに朝聲愛らしき
　小さき群はみね初めぬ
まとへる衣ゝ色あせて
　對なる帶に形もなし
されど遊べる少女らは
　何のなやめるさまもなく
神の植ゑけむ八千草の
　花の香送る春風に
長くもあらぬ袖ふりて
　いとたのしげにたふなり
われは見知れり三人の子
　遊びつかれてかへらなむ
家に待つらむ父もなく
　たよるはゝそのかげ消ねぬ
道に迷ひて泣きくれし
　たそかれ時に孤兒院の
夕の窓に迎へよれぬ
　しらすや笑みて遊ふ兒よ
天つみ空の樂園に
　母も待つらむ父もまつらむ



花にしき

課題文　花　十五種

和歌山縣立高等女學校生徒　郭　文子

花は夏秋冬もあれと、のとけき春の眺めにしくものぞなき、あら玉のとし立ちかへるあしたより、山ふところにいだかれたる梅の匂ひの、えならぬを初めとして、やう〳〵春ふかくなるまゝに、こゝかしこに、咲きいづる薫さへたゞならず、まして。白き紅なる枝かはしつゝ、咲きみだれたる色香に、谷の戸いづる鶯の、梢にさへずるなと、いといみじうゆかし、はた桃の白う赤う咲き分けたる、さてはけぶれる花の、水にうつれるなど、ひとしほなるに、まして彌生の節句、家ごと戸毎に、この花を立て祝ふなん、めでたしともめでたし、海棠のなまめけるすがたは、云はずもあれ、李の白きは、消えがての雪の、梢に殘れるかと見えて、いとうるはし、梨は李と同じく、いろ白く潔よし、昔揚貴妃、皇帝の御使に逢ひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝、春の雨を帶びたりなど、いひたるは、おぼろげならじと思ふに、猶いみじうめでたき事、他に類あるべしやは。

櫻こそ殊に目には立つめれ、朝日のかげに匂ひ出でゝは、大和心のいさぎよきにたとへられ、遠き高根に咲きみだれては、雲か雪かとあやまたれて、諸人のみやび心をあくがれしむに、まして、薄きぬもてつゝみたらんやうなる月の夜、

一つ二つ散りゆくは、花びらごとに、惜しむ心も乘るやうなる思のするなど、さらに、この世のものとも覺えずなむ。

薔薇は、四季ともに咲き出るものなれど、まして、春に咲くなるぞ、その香たかくうるはし、やがて來ん夏を、まちがほなるもあるは、いとおかし、寢よげに見ゆる若草にまじりて、紫ふかく、野べを匂はすは菫なりけり。その花、さも、世に云ふしゃみ蝶とかに、ことようなるもなつかしく、香のよきまゝに、少女子の櫛筐に入れて、もてあそばるゝなど、この花のほまれにこそ、たんぽゝの花の黄なる、はた蓮華草のうす紫なるなど、とりどりに愛らし、豆のむつかしげなるも面白く、すゞなすゞしろ、咲きみだれたる、田の中道など、またすてがたき心地ぞせらるゝ、

春やう〳〵深くなれば、ぼたん芍藥の、清げなる園生に、いと氣高く咲きいでたる、富貴は我が物のやうなるもめでたし、躑躅はこち〴〵しきかたもあれど、しぼりさては薄紅など、誰人かめでざらめやは、まして、さつき霧島など、入りまじりたる園生に、おり立てば、我身は、さも、炎の中に入り來りたらん心地するぞ、いとおかし、山吹の清げに水にうつれる、はた呉竹のませに、わざとのう咲きかゝりたる匂ひ、いと面白し、藤の花のおぼつかなげに、若葉の間よりたれたるなど、いづれか哀れならざるはなきに、まして玉のごと清水たゝへたる池の面に、影を宿したるは、水底よりや、さきいでけんとおもはれて、捨てがたき、心地ぞせらるゝ、さては入江の奥湖の岸邊など、ちりもなきほとりに、こゝしう立る岩のひまより、老松の枝さし出したるに、緑の色も見えぬまで、さきかゝれる、何にかはたとへつべき、さても、これこそ、暮れゆく春の形見と思へば、一しほなつかしう、いかでかあだに見すてさるべき。（甲賞）

神戸下山手通二丁目　青木茂子

四季をり〳〵に花こそさはなれな夏の花の清げなる秋の花のものはかなげなる冬の花のさびしげなるとりどりにさるかたにめでたけれど春の花こそわきて艶だちてをかしけれ

夕の色遠き山元をこめて牛おふ子等の影もたえたり誰が垣根ぞ半朽ちたる老樹の梅の梢には花やさくらむほのかにうちかをりたる見上ぐれば空たゞたそがれにけり紅梅は若き女房さては汗衫などきたらむ童の見ゆべき局等いふ處のまへわたりには必ずあらせまほしく思はるゝは古めかしくや

福壽草は花いと愛らしきに葉のしゞかまりたるいひしらずをかしましてお名さへかぎりなくめでたきをさばれ程すぎておほとれたるなむいとゞ見るかひなき

麥青き畑中にたてる藁屋の近きわたりに牛なども見ゆるそが破垣に長閑に匂はむこそ桃はよけれそれも紅に木の丈も高くあらせばや白きはさる所につき〴〵しからじ

歌に文に櫻といふ事はいひつくされたるを今又かにかくといはむはをこがましかるべけれど曉の鐘響く頃水音清き大堰の川に靜かに棹さゝせて松の木の間に朝たつ雲とばかりさき匂へる花をめでなましかばいかにをかしからむと思へば山の名の嵐といふがいとゞうしろめたうてなむげに此花なくば春の心はのどけからましな何處にまれ花見るとて酒のみゑひしれたる男子どもはあらずもがな

土筆生ひいでたる里川の堤のそゞろありきに何心なく見れば菫の花二つ三つ紫の色濃く匂へり過にし事の偲ばれてなつかしきにこれ彼の君におくらばやとて摘みとりぬ

見渡す限り黄金のむしろしきたらむばかりなる菜の花のさかり雲雀の聲も菫の床におつる夕まぐれ細き畔道つたひして歩めば入相の鐘餘韻ながく響きてほのかにふく風にさとうちかをりたる袖にしめてもかへらばやとおぼえつ

菜の花は黄に菫は紫に麥青うして茅花は白し紅深き蓮華草もそへてまことや五色をいろどれり美しや春の野長閑なりや春の野鳥は空に囀づり蝶は花に戯むる一日を野邊にくらせし少女のむれ霞む夕日におくられてと節面白くうたひつれて家路にいそぐ田舍路誰へのつとぞ大きやかなる紅の玉もてるは

やれし籬に八重山吹の枝たわゝに咲きしにさと雨そゝげばいとゞきよらになりたる折しも急ぎに急ぐ狩人のともいかめしき人々の入來ともなき破家にたちよりさま雨になやむものなり簑貸し給へといひぬればうらわかき

女の何ともいはでかの枝手折りてまゐらせたる色はくちなしなどいふにその花にしも心の程いはせけるがいと〳〵をかしうて此花見る毎に俤も浮ぶ心地す
廿日草とは其盛の久しきをいへるにや牡丹は白も紅もげに富貴の相はそなへたり美しき花壇にうゑられたらむはつき〴〵しかるべくはたわやしき家の古びたる垣根のやぶれより見えたるも亦をかし
琵琶湖のわたり坂本といふ處に遊びしをり日吉神社に詣でしか何にかわりけむ見上ぐる木立にさきかゝりたる藤の花はたゞ紫の雲のたなびく心地して風にゆらめくさまいひしらずあはれなり朱の宮居に緑の梢にいかに色はえたりしか
何とはなけれど松の花あはれなり風のまに〳〵さとちりかひたるものさびて清らにいとをかし　（乙賞）

紀伊伊都郡橋本町　池永ふみ子

花はあまたあれど、妾の好める花のみ綴らなむ。
▲梅。うめの花ばかりなつかしきものはあらじ、うすく積もれる梢に、おぼつなくも春立つ風に匂ひそめたる憐れになん、庭のかなたの籔かげよりさし出でたる枝のけしき計りはゝゑみたるに、枝ちかく雀のちよ〳〵と鳴きかはしたる鶯にまだしられぬこそ、花の爲めあはれなり。
▲櫻。さくらこそ花の王ならめ、はでに咲きはでに散る春もかすみて長閑なる折り、風薫りつゝ咲き出でたる姿いはむ方なく、朝日さす山べに咲きては立つ雲かとあやしみ、夕の庭にうつるさまは空にしられぬ雪かとあやしまるさまいとをかし。
▲牡丹。みどり深き草むらの中に隠れぬ深み草、ゆたかに咲き出でたる花の姿おかしく、春のさかりを我もの顔に色とり〳〵に咲きたるに、蝴蝶の一つ二つ香り慕ふて舞ふすがたえも言はれずうれし。
▲躑躅。松のみどり深き下影に白きと紅なるとのつゝじのさきみだれたる夕日にはえて匂へるさまは何の筆か及ぶべき、白きはきえ殘る雪の如く、赤きは山やく火に似たり、松の緑りのひまに見渡されたるさまはいひし

らずうるはし。

▲藤。春の名残をせき止め顏に咲き下りたる藤なみの、紫匂ふ花の姿を池水に映して細かき波の動くごとに花房の長く短く、見ゆるなどいとおもしろし。

▲菖蒲。春も夢のまに打ちすぎ天乙姫の分れの涙かしぐれふる時、我を見よやと言はむ計りのゑみ顏もて岸べにならぶ花菖蒲、水に姿の映じたる又なく憐れになむ引きぞわづらふと、詠みける古人の心は知らねど、見る人の心を何となう樂ましむ。

▲蓮。池の汀に蛙の鳴く聲かまびすしき頃はい、水の濁に汚もせで清げに咲ける白蓮紅蓮うるはしく咲き揃ひちりたる花片の上に一疋の蛙乘りて、己れは大海に浮べる舟の如く、風に任せて浮ぶ様いとをかし、露にぬれたる白蓮の花のさし登る朝日にてらされて、匂ふさまいとうるはし。

▲朝顏。わさがはの身を任せたる垣根くちて倒れんとするに、三つ四つ二つ色とり／＼に咲き出でたる數輪の花、露に命を保てるさまいとうるはし、ゆかしと見る程にてそが許より何に驚かされしにや虫一つ二つ露に交りて飛び立ちぬ。

▲萩。はぎの一株二株枯落葉のかゝれるまゝ咲き出でたる小萩の花、いろいとうるはしく何にとはなく面白きに、さと吹きくる秋かぜに花はひら／＼と散りて枝のみ右に左に動けるさまいと憐れなり。

▲菊。そも秋草と言へばあまたある中に、殊に菊はその形やさしく秀でたる、色香のやさしく高きこと、此れに及ぶものあらじ、朝露もこちたき朝には雪かと疑ひ黄金の色はまがふよき面影して匂ひ出でたるいとうるはし。されば古より詩人の心を動かし歌に、詩を綴られ、けだかき操は君子の風采にたとへ婦人のかゝみとせられぬ、心なき花もいかにうれしく思ふらむ。

あゝ此の花のいろ／＼何れか美はしからざる可き、何れかめでたからざる可き、沙羅雙樹の花の色は生者必滅に示すとて泣き、祇園精舍の音は諸行無常の響を傳ふとて憂に沈む人々よ、何ぞ花の神の寵に浴せざる。（丙寅）

長門長府村三七四　植村せい子

嗚呼美はしきは花にあらずや、花は自然なり自然ほど淸く氣高きものはなし、春を飾れるは桃に櫻に艶深く色華し之れぞ佐保姫の錦の衣にや人は貴きも賤きも老いたるも幼きも皆之を愛し之を喜ぶなり、夏は朝顏、蓮などの淸き花の咲けるも誠に自然の配合よき所以なり、秋は龍田姫の御手に愛らしき花は綴られて菊は野に庭に蘭桔梗なども其中に含まるゝなり、終りの冬に至れば水仙梅などの香高きが雪の中に現はるゝも不思議なり。人は花を愛する性あるが故に探梅櫻狩りなど稱へて野に山に花を求めて賞するにあらずや、又此を庭に移して眺め盆栽として賞翫す、或は生花として床に置くを以て早くより生花の法の開けたるゆへならむ。されば人は花に向ひて罪を思ひ穢を考ふることも露だになく只淸き心となり愛心となるのみ、げに花は人のよき友なるべしまして花に各々德ありと思ひて花に習はんと心がくるに於てをや。いでや吾が常々好める花につきての理想ともいふべきを記さむ。

一、梅　雪の降りかゝれる中に花を開き芳ばしき香の薫ずるは誠に淸く氣高し之れ雪の積りて寒さいと堪へ難きを凌ぎたればなりされば貞操の正しく堅固なるものともいふべし。

一、櫻　旭ににほふ日本の國民の眞情を表はせるものにして貴きものなりかゝる艶麗なるも嵐の吹きては惜しげもなく散り失せぬるは未練の心なく決心よきものなり。

一、牡丹　淡紅紫濃紅白などの八重なせる花はいと艶なり人は容貌風采を飾らずとも心こそ正しくば何かはあらんといへど顏を整へ相當に服を飾るはまして宜からずや。

一、藤　紫色は貴き心地せらるる此の花は長く垂るゝ程よきものなりされば奢らず誇らず謙讓の德深き花といふべし。

一、蓮　泥水の中より汚れもなく抽き出でゝ眞白く淸き花を開くは心正しく行よきものなり。

一、水仙　初雪の積りたる庭の隅に此の花の咲きたるは心強きものにしてよく己が職務を盡したるものならずや。

一、つゝじ　野山の岩陰などに紅の花咲きても農夫の見やるのみにて誰とて賞すべき人もなけれど常に變らざるは他を羨みなどすることなく愼み深きものなり。

一、菊　庭園に培養せられて美はしき花開くは姫君にて野などに寒げに咲けるは賤しきものかさるにても霜の烈しきをも厭はざるは感ずべきものなり。

一、菫　春の野を裝へる菫は此れぞと賞すべきにあらねど捨て難きは温順なるものなるべし。

尙數多ければ一々擧げむは煩はしければ略しぬされど皆其の德を守れるを見ばよき手本にしあらずや。（丙賞）

紀伊日高郡藤田村　小池秋子

天上に花あり、長しなへにうるはしく匂ふ、人の子これを星の花とあをぐ、下界にまた花さく、草の花、木の花、波の花、これみな神の大なるみ手に刻まれしものとかや、春は花によりてかざられ、人は花をみてたのしむ、なべて、花にやさしき色あり、すてがたき香あり、例はゞ、わが女子もそれに似るぞがし。

……一二輪さきそめし風情のいはむ方なきに、一枝手折りて御目にかけまゐらせ候まゝ、御文机の片隅にだにさしをかれなば、うれしかるべく、こよなき花の面目のみかはと、白梅にそへて送りこしゝ親しき友垣の、水ぐきのあとの匂ひこぼれんばかりなり。

さても、神さびたるうぶすなの大前に、神代ながらの古き一本、薫じそめたるけしきの、いかに尊かるや。

花てふ花の王は櫻花かも、うすくれなゐの色さへ香さへ、佐保姫のかざしと見ゆらむ『古の奈良の都の八重さくらけふ九重に匂ひぬるかな』と口ずさみて、時のみかどが一しほの御感にいりにし赤染衛門が歌の姿、おのづからその昔を偲ばしむるなる。

三つばかりなる稚き妹を抱きて、川添野道のそゞろありきを、強ゐて乞はるゝまゝに、折節さけるうばらの一輪を折りわたへけるに、しばし、そがわたゝかき口づけにたゆたひしも、そと流れに浮べてはゝえむ靨こそいかに淸かりしか。

有明の月影をあび小草の露ふきはらふ朝風にむかひて池塘にたてば、幽かに音たてゝ蕾をやぶる蓮の花のけ高さ、時しも、み空の星の一つ二つおちて、浮葉にやどる白玉の、げにこの世のものとも見えぬかな。泥よりいでゝけがれなきはこの花の德、かゝらましかば人もまた。

運命の神の手にもてあそばれけん、失戀の子が、夕べ戸によりて、しと〳〵とふる春雨のほそく山吹にそゝげば、ばら〳〵とさびしげにこぼるゝを、うるめる眼にながめやりて、たへざりけむ、力なく、首うなだれたる悲しさは戀のゆく末ならずや。

はか〳〵と湯の氣はのめく鬢づらを、夕風になぶらせて、いでゆよりの歸さの磯づたひ、混々とわきいづる淸水にうがひすとたちよれば、熊笹の中に露にうるはふ白百合のあまり可憐さに、手折らむとせし手の、何となくうちふるひてぞおぼえし。

雪眉の老僧がそが幽寂なる閑庭におりたちて、黃菊白菊さきみだれたる方へ、おもむろに歩をはこべば、虫の音頓にとたえて、短き秋の日はくれんとす。

西の國の詩人がいみじき才情もてたゝえたりけむ、菫のむらさきこそゆかしけれ、春の歌誦しつゝ、わか草もゆる野や、せゝらぎゆるき小川の岸のべに、小草の花をつみにき、かたみにおかしう遊びたる、君よ、今いづこはや、おしむらくはうつろひやすき色にして、そゞろ惆悵の思ひにいたましむ。（秀逸）

伊勢　河原芳子

花は自然界の單調を色彩して四時の裝飾を鹽梅し希望低き人の子に無限の慰籍を供給して精神の萎微を復活せしむるの靈妙あり若し造化の神をして此の花を作ることなからしめしならば恰も女なき國家の如く極めて殺風景に單調なる生活をして乾燥せる情囊を醫すなくして止まむのみされど女ありて戀を謡ひ戀ありて喜怒哀樂の劇を演ずる如く花ありて慰められるゝ代りに花の爲に苦痛を感ずる事亦尠しとせずと雖其靈妙なる精氣を齎らして人の子の胸に甘き薫を充たしめ單調なる天地に多大なる趣味を供給するを以てすれば敢て尠少なる苦痛を

得む可からざるのみならず大に感謝の涙を捧げて花の温情に酬はざる可からざる也。

花や色彩優麗芳薫馥郁其嬌姿の風に得堪えぬ風情より果實を結むで同族を繁殖せしむる等の點に至るまで殆女子の性格氣風に瞑合して一種の形容詞を彼此の間に取交はせしむるの緣亦奇ならずや。

試に花と女子とを對評せむに梅花の清冽なるは女丈夫の如く桃花の濃艶なるは傾城の如く露を帯びたる梨花は未亡人の如く春雨に濕れたる海棠花は戀に惱める姫君の如く旭に匂へる山櫻花は堂々たる日本軍人に侍して賢良の聞えある婦人の如く薔薇は西洋婦人の如く牡丹は支那婦人の如く菫の幽雅なるは以て詩才ある處女に比ぶ可く山吹の俗臭あるは以て高利貸の妻に比ぶ可く躑躅の淡雅なるは汚れなき田舍少女に比ぶ可く千代の松が枝にかゝれる藤波の花は雲上に侍り給ふ官女にも比ぶ可きか然り而して女子の春を裝ふの尤も密なると同じく花の裝飾を凝らすも亦陽氣喚發の春に於てす花や女子の如く女子や花の如し神の此の世に配する所實に靈妙ならずとせむや。

嗚呼人世の春をして花を戀はしめ花を恨ましめ花に怒らしめ花に樂ましむ花や情なきが如くして情あり罪なきが如くして罪をも作る女子の心と夫れ幾何ばかりの差をか存せむ遮莫花に對して喜び花に對して悲むは人生自然の至誠にして女子に對する情も亦之に同じきものゝ有りて存す只夫れ罪を作るの一事に至つては一の理想問題として他日更めて說く所あらむ。

要するに女子は人間社會の裝飾となり花は自然界の裝飾となつて其愛せられ慕はるゝ美の點に於ける品位は兩兩相俟つて一致せるものゝ如く單調なる可き社會を複雜ならしめ乾燥なる可き自然界を趣味多からしめたる點に於ても先天的に瞑合せる結果は永しへに美的觀念の精髓を發揮して天地の春を融和せしめ人の子の胸に愛の光明を抱かしめて多大なる慰籍を供給しつゝある花其物の精神に對しては實に熱き涙を以て感謝の意を注がざる可からざる也。　（秀逸）

花にしき

靜岡 伊藤加津

春のもの

霜を冒し雪をしのぎて、毅然二輪三輪、ほころべる梅の花、吹き荒ぶ風の嬲るがまゝに任せつ。あはれ雄々しや、節義を守る烈婦のごと。東風なよやかなる薄月夜、若葉の袖に朱唇蔽ひつ羞しげに、笑まひ初めたる櫻花、あはれなまめかし。あでなる美人のごと。長閑に春の霞たなびく時、田舍の藁屋に添ふて、咲き揃ひし桃の花、あはれうらゝに彩る春の日の、平和てふ神の化身とやいはん。いと無邪氣なる乙女子のごと。紫の色鮮かに、いと懐しみたる氣はひして、打さがりたる藤の花、いと心にくし。前栽の棚に咲出でたるを朝夕に、打見やるもめでたけれど、小川の邊り僅か許りなる樹などに纏はりつゝ咲匂へる、或は大なる松の幹を傳ふて、年古にし蛇の如く延びに延びて、右に左に垂りつ、佐保姫の乳房のごと垂れたる、亦いはん方なう美はし。

夏のもの

高き山の峙ち、低き丘の横りたる片田舍に、遲れたる山櫻の葉を形身に殘して散り果てたる、彼方の頂き此方の麓に、花つゝじの咲き出でぬる見渡す限り生地滴り、戰の巷だらんごと覺ゆ。

流れ清き遣水のあたり、眞菰がくれに咲出でたる花あやめ、五月雨の晴間に眺むるいと嬉し。傍ら近う寄りて見るに、水に花の姿を寫したる、亦なく哀れになかしうなん。

敢果なき夢の浮橋とだへて、晴いづる庭の邊り、清げき白露いたゞきたる花笠に、月影星影宿したる朝顔、げに麗はしうやさしき姿よ。あゝされど、昇る朝日に輝されては、そが白露と共に消ね果つる、東の間のいのちよ、あはれ潔ぎよき丈夫の様かな。

秋のもの

遠きは、風のまに／＼靡きつゝ、白浪の寄するかと疑かはれ、細き手動かして、人を招く樣なすは秋の尾花なりけり。近きは、荒庭のれじけたる置石のもとに、二かぶ三かぶ育ちたるに、三五の月の影宿して、そが根本に鈴虫の悲しげに、りん／＼と泣くなど、またなく凄き景色なり。萩の花はいと／＼鮮かなる物なり。土橋かけ渡したる里川堤にさき續きたる、水面を若紫に染めなして、いと麗しく、尊き聖住むてふさゝやかなる庵の、廻りめぐらせる透垣の下に、一株二株枯葉の掛れるまゝ咲出でたる、なにとなう面白きに、白髮の翁筆とりてそが本に佇みたる、いといとう床し。

冬のもの

霜いと白く置けるあした、鵯餌あさる榊の下に、水仙の花二つ三つ咲出でたる、いと珍し、殊に水もて養へるを、文机近う供へ置きて、學びのひまに眺めやりたる、其根のいと奇しく、其の花いと妙なる、いふも更なり、馨さへいみじうて、まこと文讀む窓の、二つとなき友だちになん。黑塀高うめぐらせる、某が家の庭にいとほこりがにそを誇りて咲ける山茶花、あはれいかなる位高き人の住家にや。裏の籔に百舌の聲、いさ騒々しきに、うるさしと竿もて逐へば、怨しげに寒椿一輪こぼれぬ。あはれそか蔭には、未だ霜の解けずや、いとゞ白

う、雪寒し。（佳調以下同）

よれざは　春　子

おゝ花、花は地球に笑めり、自然のまゝに花ば地球に笑めり、其厚き花の心、其美しき花の姿、げに似るものなく、類ふものなし。あはれ、其花の上うつすべき筆我にあられど、微風一陣幽香を送りて雪にほゝ笑む梅の花、朝露香る日影にて輝きいづる山櫻、夕暮の鐘のひゞきに一つ宛ちる雨夜の海棠、梭の音霞む茅屋のほとり咲きつゞく姫桃、曉の星影のせて青白き梨李さては、女神ジユノーの暇喩よりも美に女神シセリヤの呼吸よりも快き菫花、繪がける如くはなやかに燃ゆるが如くかゞやきて香鋭き園の紅薔薇大きやかの花うなだれて幽谷の寒水に影清き白百合の花、有明の月の雫に咲きいでゝ古井に匂ふ釣瓶の朝顔、癈寺の三ヶ月にひとりゆらめく、鐘樓の藤、玉も色なる月の白萩は香清く色潔き霜置の菊花、明月を抱いて風にさゝやく花薄、湖畔に戰ぐ雨の蘆、寒風に笑容かゞやく黄水仙のとり／＼にまさりおとらぬ、其高潔其幽慢其婀麗、其幽凄、をめでざるもの、好まざるもの、何れにかある、苟も情あるもの、此花を愛好するは自然の與ひし通有性ともいふべからんか、試に他の動物に就きて見よ、梅枝には鶯なき、櫻樹の前柴馬嘶き、桃林の後牧牛息ひ、菫の花に胡蝶眠り、薔薇の花に蜜蜂戯れ、萩の花に鈴虫すだき、菘の花に白鷺遊ふの活畫あるにあらずや、あゝ之れ其花を愛好するによらずしてそも何ぞ、花の笑また値ある哉。詩人はいへり。極めて微々たる花も涙にあまる幽遠の感想を我に與ふと、實に花は唯に美に、清なるのみならず神祕と、暗示とに富みて或るときは吾人をして生活以上の精神界にも遊ばしめ、はた薄命に、失戀に泣く人、悲しむ人、を慰籍して、希望の光を與へつゝあり、尊しや美しや。夫れ芳樹花老いて轉た寂寥の情あるを、まして此世に長へに絶ねて咲く花なからしめば、其寂寥たる其無趣味果してあゝ如何ぞや、あゝ其花なからん其時よ、人の嘆きは更にもいはず、薫風ふかず、香雨ふらず、山は憂ひ川は悲み、鳥虫の讃美のうたば長へに絶え、詩人一管の筆亦動かずならんを、うれしや花はひろはゞ消なん白露に脆き命を保ちつゝ、吾人のため、否地球のために自然のまゝに打ち笑めり、されば苟もはかなき花の命しらん情ある人の子は、雨に風にちり行くまゝに任せおきて、床の花瓶に巧を誇るをとくやめて尊き自然を花にならへ。

周防　大木くに子

花は櫻よ、八重櫻も美くしけれども、ひとへに心ひかるゝは山櫻にこそ。春雨の名殘の露を、艶なる花びらに宿して、朝日に芳ひいでゝは、敷島の大和心にたぐへられてめでたし。梅、けだかし。降りつもる白雪の中に、咲きいづる心や、げに人の鏡なるぞかし。桃の花、白きもよし。深川の岸に咲きたるは、武陵の昔しのばれて、なつかしく、さがる程人の見あぐる藤の花めでたし。雨になやめる海棠は、美くしき人の身の上にたとへられ、梨の花、また思ひすつべきにあらず。口なしの色に咲きいでゝ、物いはれども山吹は、大田のぬしを歎ねて、其名高く、花橘を聞けば、郭公てふことの、心にうかぶもをかし。五月雨の晴れゆくまゝに、庭の面の、樗の花の芳ふもうれしく、つゝじ、椿、共にうつくし。そ

の他、牡丹、菊、など草花の美くしきものを、數へいでんには、小指もために、傷みつべし。されど是等の花は、いづれも、雨に、風に、はかなく散りゆけど、人の心を種として、咲きいでたる筆の花こそ、とこしなへに、うつろふことなくて、めでたしとも、めでたし。

横濱　長谷川さく子

あはれ花よ、大きやかなる朝日うら〳〵と、仄めき出でたる山の端に、千本八千本咲誇りて、雲も霞も春の光に匂へる樣は、獨りわが敷島の日本の國のみ、占め得たる景色なれば、此の國たのしとして年毎に、愛で翫ばるゝわれ〳〵こそ、いと〳〵幸あるものなりけれ、照りもせず曇りも果てぬ朧月夜に、やゝ盛過たる並木の梢、一とそよぎ〳〵過ぐる春風に、二ひら三ひら散りかゝるけはひ、例へがたなうをかし、春雨そぼふる夕ぐれ、うつぶき勝の梢より、匂へる雫はら〳〵と溢れて、柳の露と亂れあひたる、折にあひてはた捨て難うもあるかな、浦の松原にこき交ぜたる、島山寺の伽藍に咲きかゝりたる、野路の古塚に昔の名殘をとゞめて匂へる、さては八ちまたの都大路に咲出て、往きかふ人の袖かをらするに、其貴き賤きけぢめを分かたざるなどそのむき〳〵の面白さ、一つ〳〵あげつらひなば、百千の卷にも余りぬべし、殊にわが學の窓の一もとは、其昔父母おのれを生み給ひし時、此の如くいさぎよく麗はしきこゝろかたちに、千代萬代を榮へよかしと、芽ばへの一もと植ゑ付けて、名さへ常處女の櫻と負はせ給ひたるが、やがてわが身と共に長のびて、今は軒端を掩ふばかりなりたるなれば、われにとりては命とも寶とも、守り愛しむべきものにこそ、幸に昔のねぎごと空しからで、吾身は年頃風邪一つひかず暮し來ぬれども、悲しや植付け玉びし父母は、相次ぎて世を去り玉び、殘る形見の一木の櫻は、春毎に昔ながらの花を咲かせて、賴少き我身の友とはなり來つるなり、あなあはれ。

東京　渡邊しき子

花とし云へば先づ櫻をこそ思ひ出づれ、古も今も歌に文にもてはやさるゝは此花なりけり。九重の御垣の内は申すもかしこく、雲か雪かと見紛ふばかりに咲き續きたる高嶺の奥より、落花片々水底の盛を疑はしむる長堤曲浦のほとりは更なり、森の榊かう〳〵しき神社の鳥居のかげに咲きいでたるは、僅に尋くも眺められ、みつ葉よつ葉に殿造りして高き玉垣めぐらしたる内より、ほのかに匂ひこぼれたるは、いと似つかはしく艶なり。天さかる鄙の伏家さては月もる海人の苫家の軒近く、春知りがほに咲きほこりたるは、いとゞ珍らかにこそ打見やらるれ。朝日に匂ふ山櫻は云はずもかな、夕日まばゆきも捨てがたく、雨になやめるなむ又なくあはれなりなり。なべての花は盛久しからぬが中にも櫻ばかり短きはまたなからむかし。夜半の嵐今朝の雨、眺めもやらぬ程に散りはてゝ、むなしく落花の雪に恨をとゞむ。さればや君が爲めに散るを惜まぬ勇夫にたくらべて、鈴屋の翁も朝日に匂ふとは詠けれしなるべし。梅は百花に先ちて霜をしのぎ、雪の中より咲きいづるなむいとめでたく、貞操眞平たる大和婦女にも似たるかな。匂ひこよなくて闇の夜にただにそれぞと知らるゝこそゆかしけれ。桃、藤、山吹、つゝじなどとり〳〵にうつくし。

牡丹花の艶麗なるは華やかに飾れる女の笑めるが如く、燕子花の清楚たるは束髪の美人に似たり。花橘は昔ゆかしき未亡人の如く、百合の花は露の美人にも似たるかな、薔薇の花に外面如菩薩、内心如夜叉を忍ばれ、鬼あざみの見る目恐しからぬにしかずなど覚ゆ。泥中より匂ひ出でたる花蓮の清きうてなは例へん方なく、浮きたる巷に身を寄せて、しかもなづまぬ女にや人々の例ふるよ。

秋の千草こそ面白けれ。尾花、かるかや、女郎花、萩、桔梗、さては撫子などとり／＼に少さくて、露の玉ぬける様いひしらず優し、まして虫さへすだくに。朝貌の露のひぬ間にしほたるゝを果敢なきもののためしとはすなれど、昔やむごとなき帝はさかり久しき花にこそと、のたまはせ給ひしもいとかしこきや。

一としづくの露をうけてだに千歳の齢をのぶとぞいふなる菊こそ、またなくめでたけれ。霜にまがふ籬のしら菊は君が八千代の友とこそ古人もめで給ひつれ、もろこし人は四君子の一として尊みもてはやすとぞ聞くなる。和漢に匂ふめでたの花や。

花ならねど並々ならぬ花にもましてうつくしきは秋の紅葉ならずや。野も山も唐紅の錦の綾もて飾りつくし、渡らば中や絶ねなんと谷の流れなさへ埋むるに至る。月雪花と比べ賞せらるゝは實に理りなりかし。

鳥は塒に、花も紅葉も散り果てゝ、淋しき梢をはらふ木枯の風いと物凄く、寒さはてなき冬の日に、時ならぬ花の咲きいづるなむをかしき。片片として大空より散り來る樣、勇ましくはた清らなり、この花一度咲きそむれば、しばしが程に、見渡す限りの世の塵を被ひ盡し。只白妙の花、うき世をよそに積るのみ。あはれ面白の花や、香はなくとも。なべての罪障をうばひ消むること、いづれの花か及ぶべき。古の才女は簾をかゝげて叡慮にかなひしとか聞くなる。四季八節の花の色香、實にさま／＼なめれど、節にふれたる心の花、おのがじゝ筆に匂ひて咲きいづるは、この花錦なるらんかし。

讃岐　白井きよ

四季折り／＼のながめはうつり變れども、そのたび一きは面白う景色をそうるは花にぞありける、さればこゝにしなさだめやせん花のいろ／＼。

△水仙

池の邊に三つ四つばかり雲間より咲き出でたる水仙の、花のかほりの氣高き事よ。寒さいみじう烈しくて、雪のいたくふりたるあした師の君がり行けば、何となく氣高き香のするに、見れば机の上に水仙のさしおかれあるなり、かくてこそ花も本意ならめ。此頃の寒さにいとはず、朝な朝な市に行く花賣嫗の籠に、今朝は、寒椿の赤き上に並べられたる水仙の色のあざやかなる、捨てがたう思はる。

△櫻

花の吹雪に勿來關のもののふか、馬の蹄のかほりなづかし。また、眞心こめたる十字の詩を止めて、匂ひゆかしく九重の空にあげし、優にやさしき此花よ、いかでかくはかり武士さ交り深き。里の山にそひて幾千本の櫻のまばゆき迄に咲きたる中に、戰捷紀念碑の建ちたる中々にいさぎよ

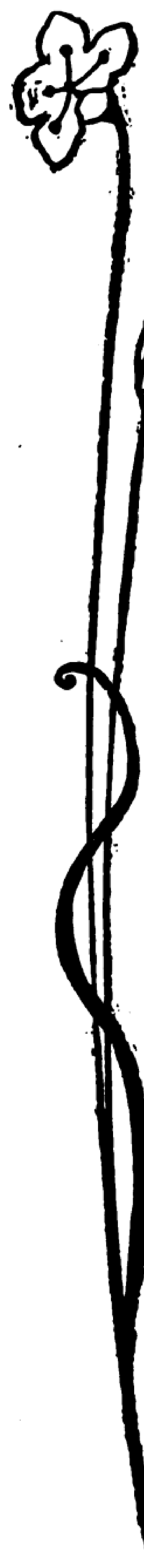
し。此山の頂の社の庭にしだれ櫻と云ふあり、幹太く二丈ばかり伸びて五つゝ枝に別れ、それより細き枝の數しれぬがしな垂れて、柳の糸に櫻花の咲きたる樣なり、社に使はるゝ翁のみやびにも、此櫻に梅の香を持たせなば、たれやらの歌に似ようと云ふもをかしや。

△蓮

泥より出でゝそれにもそまず、美はしく心おきなく咲き匂ふ氣高かさよ。軍營の城を圍める壕の中に、花蓮の白く咲きたるに赤き花の此處彼處にまじりあり、夕風そよふく折などは、かほりをあたりに送りてゐならぬにほひのするは心地よし。

△菊

賤が垣根などに沿ひて、一本二本の白菊の咲けるいとゝなづかしうなん八千草の霜がれて、見るもあはれなる中より、ひとり霜をいたゞきながらなほ色香のうつろはで、ほゝ笑みたる姿のなんとなくみさを正しき乙女の如き心地してめでたし。隣の里に菊畑あり、あるじの殊に此花を愛するより、毎年花の盛りの時は、其の入口に花にて大きなる人形を造りて、先づ花見の人を悦ばす、內へ入れば一々名のかはれるを植ゐならべてあまたあり、みやびの人の見物したるならん、所々に短册を付けたるはをかし、其內に一本花の形小さけれど、三百輪ばかり花のつきたるを、別に鉢植にして置きたる中々美事なるものなり。



課題文 女子と學問 十種

熊本縣鹿本郡米野岳村 酒井津屋子

いにしへは、女子に訓ゆるに、從順なるを此上なき德操とたゝへ、女の物知りはよからぬものぞと、內輪に出過ぎぬを第一と躾、萬の事に手拙なるを蔑みぬ、されば敎へ授くるものとても、手習ひ、縫針、糸竹の道に過ずして、歌詠み、茶の湯、生け花の如きさへ、さる尊き御身分のまゝ習はせられける程にて、進取の氣、自發の心とてはながく押へられ、天の爲せる才能も空しうしてしが、時移り、星變り、世は進み行くにつけ、自然の道、啓發せらるゝぞいともめでたし、女子の訓へも、今は昔ならで、男も女も賢ぞ尊まれ、劣れたるぞ口惜し、されば敎へ授かるべき業も數增し、男にも劣らぬ程になりて來にけり、

今其の數々を書き出んに、讀み書き、計算、家政、衛生、裁縫の道は、女として是非とも心得ありたきことにて、いづれも修め深からんことと望まほしきことなれど、そは身分にもよることなれば言はずなむ、裁縫は、手を下す程の身分ならねば、と、おぼす方もありなんも、こは心得違ひにて、其の道の心得なければ、品の善惡もわき兼ぬる道理にて、知らではやみがたきふしも多からめ、能々心得ありたし、歷史、地理、理科は、研究爲すには及ばましけれども、心を養ふたよりとしてまたなく、識見も高まるべし、一通り心得ありたし、和歌、音樂、圖書、禮式、茶の湯、生け花、などか女のたしなみならぬはなし、いづれか品性を高めざる されどこれにて身を立つる希ひならねば、世事に疎き事とて、さまで深くは益なき事ぞ、和歌は、短歌程にて、可笑からず詠みなば足りぬべし、音樂圖書は、折節の樂しみにて、折角習はすもありなん、茶の湯生け花は、世間交際に見苦るしき恥さらさぬ程にてよかるらん、起居擧動には心のさかもあらはるものなれば、是非とも一通、禮式の心得ありたし、外つ國の言語は、人の上に立ち國の

進歩をも計らんず、人には、會話をも出來、新聞をも讀める程にありたし、さもなくば學ばでありたし、言語の端に外つ國の言語を雜へ、學者めかせしは、心苦し、此他なほありなんもさまでやは、

却説、かゝる數多き學科の中には、讀み書きが、特別必要の人もあるらん、專一の人もあるならん、何も彼も一通り修むべき人もあるならん、人により修むべき業に輕重はあるものぞかし、されば萬に渡り知りたるに過ぎじとはいへ、限りある身の限りなきを望みてもかひなきことなれば、是も女の道、彼も女の心得と、させる己の生涯に用もなき業にたちさはり、尊き月日を費し、あつたら骨を折り、人に笑はれ、よきこと習ひそこね、悔ゆまじきことぞかし、されば和歌音樂茶の湯生け花なとは、深窓の裡に、幸多く、憂きこと知らで住む人こそ習はまほしけれ、西又東、北南、都遠き山里のいぶせき小家に、敢なき月日を送り、貧にやつれし、乙女には、何の益かある、襤褸さす道こそ相應しけれ、かゝれば身の分に從ひ、嗜好を撰むべきことにこそ、みだりに己が氣の向くまゝに修めたりとも益なきことぞ、何事にまれ己を知るこそ第一なれ、されば孟子も、先づ其の心を求めよとはおほせ遺かれき、（甲）

神戸　五百枝子

ありとも知らぬ春の風にすら靡くと見ゆる青柳のさすがに雪折せぬこれ女の心に相應しからずや旭に匂へる櫻の花の美しきのみにはあらで霞の隙よりほのかに見えたるこれ女の風情としてふさはしからずやさばれ心ざまに優しけれど操かたく姿きよらなるが上に愛敬ありとも學の道にたと〳〵しからば例へば柳の枝のしなやかなるのみにて淺綠のなつかしき色なく櫻の花の只艶なれど匂なきに似て口惜しからじやは

昔といへど遠くもあらぬ事なり女子といへば深窓のもとに育てられ人をし見れば顏を赤くしものいはゝひきいれ聲すべく敎へられしも今は人をも伴はで數百里の道も遠しとせずして物學びする御代なりけりされば其學問といふもかの假字をたくみにかき歌をもよみいでなばこよなきものに云ひなしたる昔にかはりて漢字もかきはては横様に書く事さへ學び歌詠む事はさらなりやゝ古き女子たちの夢にも知らぬむつかしき名つきたる道にさ

へたど〳〵しからざれば今の女は錦の上に花の心地せむと思ふにさにもあらず數にもあらぬもの、なま賢しげにいはむはかたはらいたかるべけれどもだしてあるべきにもあらずいはまほしき事いはぬは腹ふくるゝわざと昔の人もいひてき

今の教育うけて且もてはやさるゝ人はいかに彼の目さむるばかりの衣服をまとひきらびやかなる帶をしめてまばゆき指環のかず〳〵きらめかして馬車を驅らるゝ令夫人などよばれ給ふ君よ木綿の衣服を着汗にあえて立働きつゝ一家の和樂をむねとつとむるも女の務なるを知り給ふや多くの人々に推されて某の會の會長幹事などいはるゝ婦人達其事務はまことに機敏にとり行はるゝとも我家の押入の中を整理する術は知り給ふやパンの焼き方ビーフステーキの調理に巧なるを以て誇らせ給ふ君の食膳に上る香の物は酸くはなきかはた辛きにすぐる事はなきか教育の爲孤兒院の爲といはゞまづ第一に力を盡し給ふ君の子女達は無學にして是非をも辨へぬ乳母又は下婢に委ねてあらぬ樣になりつゝあるをもかへりみずして安じ給ふ事はなきか洋琴を巧に彈じ舞蹈をも拙からずものし給ふとも洗濯灑掃のすべ知り給はぬはなきか思へば心もとなき限りにあらずや世にある人誰かうるはしきものをよろこばざるたゞまのあたりのきらびやかさに惑ひて心をなやまし力を盡してよろづに美しきを求むるは世の人の常殊に女子の癖なりかしされば身のほど〳〵をもうち忘れてひたすらに姿かたちを飾らむとするよりおのがつとめをもよそにしてふさはしからぬふるまひもいでくるなるべししかくて人にほこらむ學問ならば要なし學ぶ事は多かりとも人々によりて其最も必要なるもの異るべければ家政をつかさどらむものはまづ衣食住の道を辨へてさてのちにこそ娯樂としての學問をもすべきなれどをこがましくも筆にまかせてかき出づるものからさらば御身は如何なる教育をうけたると尋ねられたらむにはおのれも同じどちなりされぱこそなかなかに口惜しくてかくは記しぬるなれとこたへむさばれさる事なき君たちかたはらいたしと見給ふとも其罪はさるかたに見ゆるして世にはかゝる女もあるよと笑はせたまへかし　（乙）

花にしき

山口ふじ子

女子と學問、こは古き問題にして、而も新らしき疑問なり、今より十歳の昔、學深き博士の口より男女同權を稱へられて、多くは女子の是に心醉せし結果、再びの男尊女卑、猶それよりも低う低う我等女性はおとしめられ恥かしめられたること、例へば、俄なる高嶺に櫻花のまぼろし、捕へんとして悶えし果は、闇き谷間につき落されしやうの威切に、幾多私立女學校の廢されしもこの時なりき。

愛を知らざりし日本婦人は、愛を教へられて失敗し、富を知らざりし日本婦人は富を教へられて墮落し、學を知らざりし女性、またこれによりて恥辱を蒙りぬ、わはれなりや、名即ち美にして實即ちわがらず、隣邦清の久しく仁義を稱へて、まことは枯骨に等しき名をいだきしが如く、明治の聖代に教育されし我等女性は、空しき名にほこり、空しき名に醉へり、是を以て、烈しき反動は女子は唯やさしくば足れり、親に孝、夫に貞、從順の二字に束縛せんとして、賢母良妻主義は生れぬ、英米未だこの語を發明するの學者なきに、ひとり日本女子教育家はいふ、賢母良妻主義と。

教育家は敢て我等を、賢母たらしめ、良妻たらしめんと期す、これ現時に於ける教育の大方針なり大目的なり、嗚呼危い哉この語や、累卵のそれよりも甚し。

紫式部は平安朝に於ける女文豪なり、ひとり日本の女文豪たるのみならずまた東洋の女文豪なり、しかるをまなかきちらして云々と、女子が漢字をつかふるを以て婦德にそむけるが如くいふ、優なれや、明治の女子亦この心わらまほしき限になん。

愚考すらく、廿世紀の女性、宜しく外國語をも研むべし、源氏枕草紙をも學ぶべし、又科學的才能もなからざるべからず、美術の觀念も養はざるべからず、茶の湯もやるべし、是は禪恰と神に近づくの思わり、琴も彈ずべし、是は優、よろづの愛をわする丶なり、學問とはひとり讀書の謂に非ず、交際もまた學問の一なり、世界我の大學校たる上は、わらゆるもの皆學問にわらずして何ぞや、月を見よ、花を見よ、そこに神秘のさゝやきわり、そこに時代の物語わり、誰ぞや女子に學問の不必要を稱ふるもの、進でゆくべし、退くなかれ、人は天性と教育と

相待て、初めて完全の城に近づく事を得るなり、そも〳〵女子ひとり、完全の榮ある冠を得能はざらんや。夫れ月に村雲の蟹はふるし、花に嵐は春のゆふべに限るべきかは、空に明月なくんば、暗膽たる浮雲何ぞ意とせん、梢に深紅の花なくんば、嵐をねざめにかこつの憂なきを、人生亦然り、男子の身うらやましきかな、百年の苦樂他人に寄るべきの我等、寧ろ、學あるに泣き、才あるに悶へ、主義と戰ふて敗るゝの悲しさよ、我等が女性の先人は從順の二字を生命とかしこみて能く夫に事へ、夫を天の如く敬ひけり、士太夫外妾を蓄ふるを例とし、怨せず恨ます、おきつ白波の歌をつゞりて理想的婦人の名を博せしに非ずや。今の世は即ち然らず、戀愛の神聖を敎へられて深き妬心を養ひ、黃金の尊むべきを敎へられて貧しき人をさらひ、宗敎の信すべきを敎へられて家庭の平和亂る、故に曰く、願ふは日本に賢母良妻の叫びを止めしめて、これに代ふるに聲無きを以てし、而て其實を擧げしめよ、黃金崇拜、宗敎的敎育、はた戀愛的文學、皆女子に害ありて益なし、女子と學問、是ふるき問題にして而も新らしきクエスションなり、我女の身の、未だ佳き答を捧げるを得ず、迷宮の殿に、悶のうめきをばかくは。(丙)

河原芳子

女子の學問は實用的なる可し理論的なる可からず生產的なる可し不生產的なる可からず技藝的なる可し學理的なる可からず彼の漫りに學術を評論し高襟的の生活を好む如きは我等の毫も採らざる所なりと雖其處世の法に於て餘りに因循主義に偏し强硬主義に流れて家庭の衝突を來す如き事ある可からざる也

ゆづる

明治昭代の光普く萬づ事日と共に進み行く其か中に分きても我婦人界の進步は實に昔時の夢想し能はさりし所ならん事におくれぬ花の都は言ふ迄もなくありともしられぬ鄙の里にも敎育普廣の恣をいぶせきはにふの宿にも優しき咿唔の聲を耳にしもしほ燒く海士の苦屋の軒もる月も文讀む窓の燈火にかゞらる思へは目出度からずやは

さるにても我は問はん慈愛深き父母の膝下を離れ戀ひしき故郷の空を夢に見て當然笈を都に負ひ給ふけなげなる幾多妙齢の婦女子よ御身等は如何なる未來の希望の爲めに惜しき月日を只これ學ひの道にいそしみ玉ふにや 我又聴かん一身を教育にたゆれ分きても纎弱なる我等女子の爲めに專心思ひを其か教導の上に砕き玉ふ熱心なる師の君達よ卿等は如何なる 女子をや作らんか爲め世には數多とるへき事業の多かるに古より養ひ難しと定められつる婦女子を教へ玉ふぞや終りにきかまくほしきはそを許し給ふ情深き父母の君の目的と希望にこそ

人は其面の異る如く其志す所も千差萬別あるは色も香もある言葉の花にあくがれて其古し清紫の才を慕ひ玉ふもあらん或は奇しく妙なる美術の技に或は慈善なる教育の任に仁ある醫術になど比なき名を求め玉ふもありさては美しき家庭の母を夢に描きて才を磨く研き玉ふもあるべし何れ進み行く文明に伴ひて恥ちさる女子たらんを希ふは學をうくる者授くる者もはた又授けしむる者も要するに思ひは此に等しかるべし

さるを見玉はすや近来女學生の世評紛々情なき世人は事の眞僞を顧ざるにや 徒らに無理なる注文と冷淡なる批評を試んとするのみか其幾多螢雪の勞を積み父母の慈愛と師の君の惠みに浴せし者も世にいてし其時天晴れ其意を滿足せしむへき性格を備へ得る者いくばくぞや

抑も學問とは何をかいふ淺學なる我のいと嗚呼がましけれどしはし許させ玉へやこは徒に古人の書を讀し智者の物理を機械的にさとるのみにはあらすして凡そ人は自ら天より稟けし才あり力あり是をしも自然に啓發して完からしめ此を實際に活動して誤なからしむるの力ならすや學ざれは理に暗く道に暗くいやまし事繁くなり行く世にいて到底處し難かるへし此に於てか我は學の究むべく教育の尊ふべきを信ずまして女は感情に由て働く者なるに於ては益々其理性を高め才能を進むるに必要なるを感するなり古來言はずや磨かさる玉は器をなさず養はさる草花何によりてか其美を求むべけんや實にさなり人に於るも亦何の差異かあらん

然れど草木の完美を求むる三つのかくべからさる者あり一は其種子の 完きこと二には其土壤の饒なる事三は其培養の法宜しきを得るとにあり此三つ者の相待ち相整ひて初めて美はしき花完き實も結はるゝならずや

勤儉忍耐自ら怠さるは是れ凡そ學ふ者の第一の心すへきの事にして人の 家庭は草木の根させる畑に異ならず人生に尤も感化力強きは其家庭にありとしり玉はすや教へ玉ふ其人の貴元より輕からざるをさとるなり

清く美はしき家庭に在りて德高く才深き師の御手に導かれ黽勉忍耐怠るなければ 是に始めて圓滿なる學問の功顯はれて才徳兼備の希望をみたすにちかゝらんか

女子は家の母たり國の母なり養ふ可きは女子なりと言はずやあゝ幸あり望ある 我同胞姉妹諸姉よ卿等の責は重にして小ならず世は御身の未來に待つ事多し幸に自愛しいやまし勉め玉へよや

近江　安井しつ枝

明け行く御代の惠みは、溢る限なくて、學びの道も日に月に榮ね行くこそ、洵に嬉しさの限にはあなれ、さるをもて九重近き都の樣はいふも更

なり、天さかる鄙に至るまで、學の庭に遊ばぬものなく、なりもて行ける、げに盛なりといふべしや。かく盛になり行くは悦ばしさの限なるに倚しも飽かず思はるゝ一ふしなんある、何ぞや、「女子には深く物學びせさせむる要なし」「おの子は兎まれ、女子に學問せさするは、なか〳〵あらぬものに成り行くぞ」などいふがあることなり、かくいふは固より稀れの人たちにて、なべての論ならねば、とやかくいはんやうもなきに似たれど、さて熟々世の實際を見渡しぬれば、さきの論の偉りがたき勢あるに驚くぞかし、今や我國には既に女子の爲に大學の設けもあり、各々の府縣には、高等女學校あり、その他にもさま〴〵學校のなきにはあられど、おの子に較べてその學生のいたく少きは、たま〳〵わが國人の心の置き所も推し量られて、嘆かはしさの限ならずや。

そも學問は人の世に立ちて蹈むべき道はいかに、とる業はいかに、といふことを主として、殊、人として知るべきことを學ぶなるに女子になど要なしとはいひ得べき、開けざりしそのかみのまゝにて、「女子は唯一家の飾り」「男子の奴隷」といふに甘んぜばさても止みなん、苟もこの大御代に生れて、いかでかさる忌はしき僻言をば口にすべき、思ひも見ずや、女子は人の妻たるにあらずや、人の母たるにあらずや、女にして學びの道に遊び、物のことはりをしも知らずして、はた如何によき兒女を擧げ得べき、いかに其の兒女をか導くべき、ためしを古今東西に引かんにもかの良妻とたゞへ、賢母と歌はるゝ人たちの、いかに學びの道に疎かならざりけるよ、かれこれ考へ合せなば、學問の女子に必要なること、明けき鏡に對はんよりも尚明かなるにあらずや、さは言へ女子にして學びの庭に遊べるが中にも、少し物知れば忽ち得たり顔して、世の爪彈を受けあるは、あらぬ邪路に踏み入りて、人の嘲りを蒙るものも、なきにはあらず、されどこれ數多き中には、おのづから免れ難き事にて、これをもて罪を學問に嫁するは、ことはりに合へりとも言ひ難きをいかにせん、若しもそれ等を氣遣ひて、學問に遠ざかるが如きあらば、之をやげに羹に懲りて膾を吹くものとや評しぬべき、あはれ、御國人よ、心してこの理を悟り、女子をして、御代の惠みに洩れしめざれ。

岡山　小山松枝

女子に學問の必要を感ずること、日に月に盛大になりゆきて、至る處に女學校を設け、あるは書籍雜誌によりて、其道を奬勵す、誠に女界のため並に國家のため喜ばしきことなり。夫れ女子は良妻賢母となりて、夫を輔佐し子女を敎育するの任務あり、而してこの文明の御代に出で、學識なくしてよく前の任務を果し家政を整理し得べけんや、まして偉大なる國民をつくるも、母の手中にありといふに於てをや、婦女子の責任も重且つ大なりと謂つべし。

然り而して我國は由來男尊女卑とかやいひて、女子をば卑屈因循男子より遙かに劣等の地位にあるものと見なされしは、いとも悲しき極にこそこれ蓋し女子に學識なかりし故ならん。若し學なきときは、物の理明らかならずして惑ひ易く善惡を判斷するの力乏し、是に於てか自ら身を卑うして、依賴心を起すの止むを得ざるに至る、實に遺憾ならずや。今や女子も國民の一部として尊はれ、且つ敎育の必要なる、心ある人の口のはにかゝらざるなき當今、吾々ばこの多幸多福なる時代にあひたるを感謝し、つとめて學理を研究し其品位を高めざるべからず。他日世に立つ

に必要なる智識を求め、規律正しく一定の主義によりて身を處せざるべからず。何ぞ昔時の不自由に甘せんや。さるに言はやすく行はかたしとかや、近来女學生の擧動宜しからず、殊によく書よみ物の理をとく人も、事に當りては無學の人に後るゝこと往々あり、これ眞に歎かはしきことにして、女子特有の性質を失し、且おのれいさゝか修學せしをほこりて、世を侮りたる結果ならん。女子たるものよく慢心をおさへ、其特質を養成し、巳の能力と本分とを覺り、學ひしことをば實地に應用して、從來の迷夢を破り、家庭の趣味を高尙ならしめよ、之を小にしては家名を擧げ大にしては國を益す。さればこそ女子教育の有樣を見れば、其國の進歩の度も知らるゝとはいふなれ、あはれ外國人に辱められざるやう、天賦の諸能力を完全に發達せしめよ、文明國は教育ある男子と女子とによりて組織せらるゝものぞかし、つとめはげみて世の開化に伴はずして可ならんや。

能登　櫻井順子

吾等も固より當今の女性には、學問の必要を認めざるにあらず、女子の地位低くして、殆んご奴隷視せられ、男子の玩弄物視さるゝ、我が國女性の有樣なれば、男子と對等の地位を保ち、男女同權否男尊女卑の弊を矯めんには、男子と同じく秩序整然たる學制のもとに、教育なかるべからず。然れごも當今追々その制備はり、學ばんと欲せば學ぶを得べく、修めんと欲せば修むを得べき時に當り、未だ婦人の地位學制を、口にするは愚の極ならずや、如何に學問あればとて、良妻賢母が學問ある人より生ぜる例は、吾等未だ之を聞かず、却つて良妻賢母は質朴なる田舎の女子に於て、屢々見るはそも如何なる理ぞや、況して近事の所謂學問ありとし、學問せんとする女學生を見よ、口には英を囀り獨を歌ひ、大道を横行濶歩し、以て得たりとなすが如きものあるに於てをや。之れ等の女學生社會に出でたる曉に、果して良妻賢母となるを得るや、女子の本分たる裁縫、庖厨さへも碌々なし能はず、且つ夫に對し過言慢弄し、社會に對する禮義をも盡さず、一言めには英獨を口にするに至りては、之をしも男尊女卑の弊を矯むる、標本と云ふを得べき、却つて夫より疎まれ、社會より擯斥せられて、世人の嘲笑を受け、遂に玩弄物視さるゝに至る、之れ等多くの女學生を目撃すれば、あはれその行末を忍ばれて、後輩の少女をば、學問の道に進ましむることを如何しく思はざるを得ず、されば吾等は所謂學問ある女子となるを望まず、小學卒業の程度を履行せしむれば、それ以上のことは社會の德育に任じ、高等の學校に進ましむるを要せず。然れば之れ等の中より良妻賢母こそ出づべけれ、男尊女卑の弊を矯むる標本こそ出ずべけれ。

筑前　飯田しげ子

古來文學は男子に負ふ所業より多しと雖も、女子に負ふ所亦いかでか少かるべき。かの平安朝なる春陽の最盛時代に於ては、紫式部淸少納言伊勢大輔の諸才媛等、何れも艷を競ひ妍を爭ひ、一時に文學の花を咲かしめて、朝こちのまに〳〵世の眠りを醒せしが、今日は泰西諸國に心にく

き方の女流文士數知れぬにも係はらず、文明の開けたる明治の御代、然かも平安朝に比すべくもあらねど、源氏物語枕草紙榮花物語の如き、平安女流に比すべきものゝ今幾品かある。特に、今より十年の昔し。若松賤子樋口一葉なむど、明治の詞園に咲き亂れ、ほと〳〵蘇生の思ひありしが、一葉落ち若松枯れての後は殘んの菊も香り少なく、いといたう歎はしき極みになむ。

それ、女子は綿密なる注意力と鋭敏なる感情とを有し、然かも、その想や皎潔その筆や艶曲なるを以て、文士として身を立つるに得難きの資を有する也。まいてや明治の御代の賜物として女子教育の日に月に維れ盛むなる、かの十九世紀の末葉より女子の自由權力を增したる、實に、如何にもして才を磨き智を練り、節操溫順慈愛優美の諸長所を益々發達せしむるに何の苦しき所やはある。あはれ、明治今日の女子はかゝる好時機に在みながら、尙も、徒らに粉黛を裝び綺羅を纏ふに餘念なく、女權益々地に落ちなむとす。あなうれたきかな。

女子は臣民を造る母なり。女子は國家の基をなすものなり。されど如何にして、この詐僞世界の闇を照す照世鏡とも燈火ともなるべきか。白紛頰に媚び綺羅眉展に阿るは、いやまし社會を迷はしむるものにして、徒に、內心夜叉の如く外面菩薩の如く女子は三界に家なしと迄に罵らるゝのみ。いかでか文學の力ならざる。泰西諸國にては、現今女子に負ふ所の文學は男子に超ゐ、或は小說家、詩人、新聞雜誌記者等數知れねど、我國にては、社會家庭の組織異るとはいへ、女流文士の輩出すると曉の星もたゞならざるなり。

女子は嫁しては家庭の良妻賢母となりて圓滿に趣味を溢らしむるも、社會の一員として理想の生活を營むにも、帝國の公民として國家有要の臣民たるも、さては、一箇の婦女として完全なる發達を願ふにも、是皆文學の然らしむるものと斷言すべきなり。今、家庭の妻母となりて、和氣洋々たる春日の如き團欒、秋意深き菊庭の如きスウイートホームを造らむとならば、保育教育の大要を解し社會のあらゆる事情を知るの必要あり。又、社會は男子のみにて發達すべきものにあらず、女子と相俟ち相調和して共に社會發達の動力となるものなり。又、國家の振張を來さむとならば、その國家の生活の狀態を知らざれば、國家の望む有用なる女子を育つる事能はず。而して國を守り且盛すの任は男子の獨有にあらず、女子亦是が重任を負ふを以て、深く國家の事情を知るの必要あり。

此の如く社會國家に對して重任を負ふ吾々女子、その責を埋むるの完全に近からしめむには、從つて是に應ずべき豫ての素養なかるべからず。即、女子教育と國家の成長との間に大なる關係の存する所以なり。されば今日の女子たるもの、徒に粉黛綺羅にのみ眷戀すべきやは。進むで文學の大海に掉し、或は面晤り或は新聞雜誌等に依て、互に智識を交換し、以て數多の女流文士を出すこそ必要なれ。即、妾が、女學世界婦人界などにいたく心をひく亦理りならずや。希くば天下の諸女、益々來りて明治の詞園に遊び玉ひてよ。

山口白石琴子

女子に學問せしむべきか否かについては、世間に種々の異論あるを免れず。ある者は心理的方面より立論していふ。女子は情的方面の發達旺にして、智力の進步は比較的鈍し、これをしも學者に仕立てむとするは、そもあやまれりと。ある者は生活的方面より觀察していへらく、女子が

學問を修め、社會外部の業務に從はんとならば、勢ひ配偶を避けざるべからず。これ、折角の婚嫁の時期を、あたら學生にて經過し、爲に其時機を失ふ・よしさなくとも、人の家に嫁ぎ、子などあげたらむには、とかく職務に差支を生ずればなりと。又學問したる女子は、割烹術を研究して居ながら、汁の鹽梅を調ふることだに得知らず、英語を口にすれども、應對の挨拶をだに辨へざるなど、徒に理想のみ高くて、處世に疎しと云ひて、女子の學問する事を非難するものあり。されどこれらは、いづれも、單に一部分の眞理を含みたる偏見にして、未だにはかに首肯すべからざるなり。

蓋し女子が、比較上情的發達に偏するは、爭ふべからざる事實ならむ、さりながら女子が學問するは、必しも皆天眞に背いて學者たらむとするにはあらず、その大部分は、相當の智識を啓き、技藝に達して、こゝ他日良妻賢母たらむと願ふものならむ。然るに猶は論者は、智的發達が比較的鈍ければとて、直に女子に學問せしむるは、あやまれりといふか、何ぞ知らむ女流中にも往々男子を凌ぐ才女あり、又學問中にも情的美術的方面あるを。

又學問する女子は配偶を求むる事難しといはんか、これはた薄弱なる論據たるを免れず、何とならば女子養育の爲に、全く其務を擲するに及ばざればなり・殊に、近時結婚の條件中、人物、身體に次で、學問の有無を問ふに至りたるは、學問ある女子が、配偶を得るに、甚だ便なることを證明するにあらずや。

第三の問題に至りては、稍、近時の時弊に中れる感なきにあらず、されどもこれ亦一を知て二を知らざるものといふを憚からず、眞の學問したる女子はゆめかゝる弊あるべき筈なし、其偶々斯の如き者あるは、教育法の不完全に基するものにて、學問其ものゝ罪にあらざるは明なり。學問したる女子が、必しも淑女良妻とにはあられざ、世に學問なき女子程、あはれにあさましきはなし。彼等は事局に通せず、趣味を解せず、子などまうけたりとて、之を教育する樣を知らず。衣服、飲食、起臥などに關する衛生の事を辨へず。言語動作の好模範をも示すこと能はず。甚しきは兒女が學校より歸りて、學科など復習するに、誤りたる所あるを傍より聞きて、それを悟らざるものあり、或は僅に文字を知れりとも、訂正せんとはせず、其儘にすぐす事すらあり、かくてはいかでか、明治の國民の母たる資格あるべき。

羅馬の古哲、クインチリアン教育上、兒童の最初の印象を深く重んじて、母親なる者は、非難なき人たらざるべからずと論及せり。かゝれば、學問なき女子は、人の妻又は母として、その天職を全うすること難しと斷言するも、强ち過言にはあらざるべし。殊に、彼の女子に缺くべからざる、柔婉たる、貞操、從順、その他女子特得の藝能等は、學問の力をかりてはじめて、玉の如く光を放ち、花の如く香を發するを思ふべし。明治の女子たらむものは、たとへ政治的夫人となり、學者となりて社會に活動せずとも、家政を執り、子女を養育し、夫を助くる丈の教育は、必ずしも受けざるべからず、彼の學問したるために生意氣なりと呼ばれ、お轉婆なりと誇られ、甚しきは、女學生墮落問題などの忌はしき輿論を惹起せしめ、世人をして、女子に學問をすな、などいふに至らしめたるものは、實に明治の女子社會に於ける學問の敵として、鼓を鳴らして之を擊つとも、その罪猶餘りありといふべし。

女子と學問

播磨 はらだ

或父は云く我子の女なれば左まで學問さすの要なし或母は云う我娘は茶の湯生花に通ず又人は云く某女は箏三味線をよくす、と嗚呼世人の理想の女子とはかくか。

人あり資本なくして商業家たれと云はゞ智識なくして官吏文官になれと云はゞ食せずして勞働せよと云はゞ必ず迷惑すべし、しかも其好果なき論せずして明かなり、

世は進み社會は子女の教育と一家の内政は當然女子の分擔すべきを宣告せり。思ふに子女は我第二の國家を組織すべき者にてこれが運逐は直ちに國民の運逐にして即一國の運逐なり、第二國家の盛衰存亡又女子の掌にあるものあり、嗚呼女子の責任や重且大なり、この重大なる責任をば現世の所謂學問なく茶の湯生花の道に詳しく、線絃を弄するの巧なる理想女子の果して全うし得るや否、？

一家は一國の基にして一家の盛衰は終に一國の盛衰なり、一家の内政者またよく國家を動かす世の所謂理想女子果して一國の隆盛を現實にし得るや否、？

世の所謂理想女子に向つて子女教育の好果を望み内政の圓滿を希う者尙資本なき商業家、修養なき官吏に比すべし如何で其責を全うし得んや。

蓋女子をして社會の要求する如き大任を實現せしめんと欲せば必ずや其か活動の資本を與へざるべからず。資本とは何ぞ其心身の圓滿なる發達に外なし心身の圓滿なる發達これ教育の司どるところ是においてか女子教育は個人としては其責を盡すの基、國家としては其隆盛を期し、未來の發達を望む所以なり。

世の識者これを是とし年來女子教育の隆盛に赴り女學校の設立日に月にまし遂に女子大學あるの今日に至る國家の前途大に祝すべし、幸に當路者其法を誤るなからんことを。敢て問ふ世の父何故に女子は學問を要せざるか、母、茶の湯生花をよくすとも其重任を如何にする。



普通文

春の野の眺め

播磨印南郡魚橋村　岡本もと子

しと〳〵と降りつゞきし春雨もやみて、今日は、めづらしくも、空は一面にはれわたり、野邊の遊の、いと心よき時、さらでだに、たま〳〵の日曜日、うすくらき一室に、いかで、空しく此日を送らるべきと、午過ぐる頃、飄然、我が家を出でぬ。

菜の花に、狹められし細道を分けつゝ行く妾は、いつしか、里川の堤につきぬ。ぬるく流るゝ水の面に映る、菫たんぽゝの影いと美しく、のどかに、なびく青柳の姿、いとゆかし、妾は、もゆるが如き草の上に座して、四邊をみれば、一人の農夫、麥畑に鍬つへつきて、浮世を外に、煙草くゆらすなど、一幅の活畫に似たり。足元より、つゞく麥生のはての菜畑を、横ぎりて來たる洋服姿、腰のあたりに、閃々としてまばゆきは、査公のサーベルにやあらむ。うら〳〵と、霞こめたる山奥に、雪かと見まがう櫻花の彼方より、一騎かけきたりて、蹄の音、ぱく〳〵と、山下道を、北にゆくあり。今日騎兵の演習ありときく。こは必ず斥候にやあらむ。若紫の、れんげの床をはなれて、み空高く、さへづる雲雀、仰げと、たゞ、青空にかしましき聲をきくのみ。咲きつゞく菜の花に、戯るゝ胡蝶の、やがて、黄なるを逐うて、白きはひら〳〵と、空たかく舞ひあがるなど、今更めきて、春の野のなつかしく、たゞ恍惚としてありしが、俄に、けたゝましき笑聲するに、ふと顧みれば、隣の美代ちやんに、靜さんと妹のあさ子との三人、みどりの若草、ふみしだきて、花など摘みをるに、妾の姿みるより「姉さん」と優しき聲たて、驅け來たり、龍の花など、ほてり顔にみするに、妾もいとうれしく、とも〳〵、そこはかとなく逍遙ひて、とある丘の麓につきけるが、山鳥の尾のそれならで、春の日永も早やくれんとして、

山櫻の、しづ心なく散る下を、年わかき僧の一人歸りゆくに、入相の鐘の音、いと、あはれにひゞきぬ。妾等も、いそぎもときし道をかへりきつ、懐しきふしを、斯くはものしおへて、破窓を開けば、くれないにはふ桃の花に、かゝりたる朧月のかげ、いと美し。（甲）

春の夜

伊勢　河原芳子

やむことなき方の儚なき戀にしはたれ給ふ樣にも似て、いとも床しう打仰がるゝ朧夜の月は、夢より淡き霞のかつぎまぶかにかうぶりて、菫の床に暖かき夢や結ぶらむ、柳の糸に風もなくて、眠れる蝶の鼾さへきこゆる程、今を盛りと咲き亂れたる脊戸の櫻の、はやちらはらと散りかゝりたる木陰に立ちて、我はあやなき思ひに耽りぬ。あゝ、懐かしの夜の景色や、あな、なつかしの君の俤や。

思へば、去年の春なりき。千代の契りを結びたる君の、ふとした事よりよからぬ道に迷ひ入りて、やさしきみ心はいづちいにけむ。家の内には人しれぬ波風立ち騷ぎて平和の光明は冷たる涙に打ち消されしまに／＼、泣きもし、怨みもし、手を替へ、品を替へて諫めたれど其甲斐なく、遂には忌はしき離縁沙汰となりて、二世の盟ひも鏡と共に破られ。思へる事の十分一をも言ひ得ずして、つれなき涙に永き別れを告げたりしが。君もさすがに打ちしほれ給ひて、ゆるせよかし、と唯一言、力なき語調に無限の切なさをこめて、最後の握手に言ひ知らぬ願きを傳へし時よ。

噫、其瞬間の我心には、親無く、同胞無く、社會無く、希望なく、唯、愛を切斷する殺那の苦痛のみ、小さき胸の裂けよとばかりてみわげて、君より外には何物の影も認めず、聲もきこえず。此の木陰にイみしまゝ有耶無耶の境を辿りたりしが、慈悲深き母上の我が身の上や氣遣ひ給ひけむ、故と氣强う呼び立て給ふものから、さらば、とわかちし四つの袂に、ちら／＼とこぼれかゝりたる花片を恨みて、霞み行く後姿を見送り參らすにつけても、子を思ふ闇に迷ひ給へる母上の、痛く曇りし御聲を察し參らすれば、いかに我が胸の苦しかればと

て、此上のわづらひをせさせ參らすべきや、と思ひ返しつ。瘦せ細りたる戀猫の聲も哀れに泣き叫びざま、重き袂をくゞりぬけしも心有りげなるに、我は力なく居間に戻りてこらえ〳〵し涙を一時に。守刀の玉の緒をとくや、何樂しみの小琴ぞと狂氣の刄鋭くも絃を斷ちて、妙なる韻きを朧夜の空に漂はせば、魔の笑ふ聲幽かにきこえて、社會の罪ぞ、と罵る如く思はれたりき。あはれ、其夜の我は如何なりけむ。

友は平和のさゝめきに瞳がれて夢路長閑けく歌ひくらすに、一羽はなれし鴛鴦の思ひ遣瀬なくて、世のすねものと笑はるゝ迄引籠り居つ、絃なき琴に幸薄き歌を口吟むにも、胸にもつるゝ亂髮の解くによしなき悲しみを湛えて、幾夜を君の枕邊にさまよひ、醒めて夢なき花の曙に、浮世すてむと思ひしは愚かや。

其悲しみの内に春去り秋來りて、冬も心細き年の暮と成りぬる程。教科書事件の繩目を受くるものひきもきらず、全國の新聞紙は日々其姓名と罪跡とを揭げて、世人の注意を惹きたりしが。おもひきや、家宅搜索は我が家にも及びて、君が在家中の罪跡を調査されしかと、別に嫌疑の種となる可きものなかりしに。其罪證は何處にかひそみ居たりけむ、君には痛はしき繩に繋がれて遂に東都の獄舍に送られき、と聞きし悲しさ。よし今は露程の緣なくとも、心の傷は束の間も忘れかねて、共にあらばなど夢なき儚の昔を繰返しつ、今尚迷ひの雲霧に閉されて去年の別れを偲びつゝある身の、いかに冷たき運命なるらむ。あゝ、花は匂へど、月は霞めど、春は昔の春ならぬこそうたてけれ。さるにても鐵鎖に繋がれて嚴酷なる呵責を受け給ふ君が心の、今は那邊にかさ迷ひ給ふらむ。

あはれ、かゝる夜の逍遙にあとけなき物語りなどとして此花かげに笑ひてけし事もありしを。樂しき春は我にのみつれなくて、永しへに怨めしき日かげものゝ身となりしてとよ。

あゝ、此なつかしき夜の景色に向ひ、懷かしき君の俤を幻に描きて、切めては絃なき琴を抱きつゝ花散る椽に力無き歌の一ふしを謠はむ哉　。　（乙）

忍びなき

周防　中谷登羽子

木枯すさぶ冬の夜に折々、破窓を叩く落葉の音にふくるともなく夜は更けて。寝もやらぬ苦しさに。やめる妾は床を出で雨戸くりあけ眺むれば月は隈なく澄み渡り中空高く輝けど我身の憂を増す鏡。遠山寺の鐘の音は木の間をもれて、いとも哀に響くなり

兎角婦人の身は心配多き物とは聞けど何故にかゝる苦勞をなす事か氣強い夫の袖の下憐み淺き姑御の病に惱める妾をば。わが儘病よ氣まゝよと罵り給ふ妾が胸には百千のいかづち轟く心地して胸も張裂く計りなる此切なさを草も木も妾をふびんと思ひしか吹き來る風に、はらはらと露の涙をこぼせしに。尙憎しやと思ひ給ふてか、カチカチカチカチと長煙管、火鉢にあたる其音も妾が胸には五寸釘、打るゝよりも尙つらく身を切る如き苦しさに、溢るゝ涙おし拭ひ又も臥床に入なむと雨戸引しめ仄暗き燈火の下に身を投伏し。傍に眠りし稚子の顔をつくづく眺むれば。嬉しき夢を見たるにや眠りしまゝに微笑める其愛らしさ見るにつけ又も涙に咽び入りぬ

あゝいかに情ない夫とて斯も優しき幼子はよも憎まれは致まい。鬼も我子はかまぬとか。あゝそれにしても始め程はさもあらざりし夫のいつの程よりか心變りて二葉樓、小花が元に雨の夜も風の吹く夜も厭はずに重々通ひ給ふるは實にいかなる惡魔の誘ひしか家業の事もうわの空其上やめる妾には情なくあたり給ふるは。そもいかなる宿世の因果ぞやかゝる悲しきつらさをば母に一事知らせなばよも此まゝにはなし給ふまじ。あゝ辛抱も是迄と心を定め、筆取りあげ一筆示すと書き初めたれど又思ひ出るは子共の身今にも妾が歸りなば成長したる其後でいかなる思ひや起すらむ定めし妾を恨むらむ里に歸れば一方ならぬ心配を母にかけねば兄嫁の世話にもならねばならぬ。あちら思へば胸迫りこちら思へば袖ぬるゝあゝ神も佛も妾を援ふ者なきかと心は千々に亂る、折柄犬の遠吠幽に聞ゆる物凄さ。あゝつくづく思廻せば夫の心變りしも姑御の常々ごきげん、よからぬもみんな妾の不勤故。今更誰を恨まう樣もない。いかに氣強い夫とていかに情ない姑御とて、あらむ限りの眞心を盡して尙も勤めなばいつかは妾の誠心の達する時もあるならむ。「いそがずばぬれさらましを夕立のあとよ

りはるゝ「勘忍の二字」妾が里に在りし頃常々優しき母上の妾を諭し給ふには。人は何より勘忍が大事なるぞやそも忍と云ふ字は刄の下に心と書いてゐるからは心を常に刄の下にをく思ひにてからき浮世を渡りなばいかに切ない事なりともいかに悲しき事なりともいかでか堪えなん忍ばれなむと。の給ひし言の葉は今尚耳にのこれるを思へば我身の愚さよと思ひたゆる暇もなく又かき曇る胸の雨涙かみしめ忍びなき　（丙）

春の初め山に遊ぶ

廣島私立高等女學校　堀内なたね

春立てとこぞに變らぬ寒さにて打積きたる雪もよひの空ひまもる風も身を切る許り唯火桶のみ、友としてわびしくたれこめてゐりしに或朝ゆくりなくも初音をつぐる妙なる聲に打驚かされ起き出て見ればあな心地よや日の御神は豊けく吾身を照らし玉ひ綠の空は薄くけはひし昨日までつぼみなりし軒端の紅梅もこの惠みにや浴しけむ一輪二輪咲き匂へるなど俄に變りし春模樣何れを見ても心浮き立ぬはなし

朝げもそこ〳〵に急ぎ机により文讀まむとする折柄親しき友二人三人春の山邊に遊び日頃のうさを晴さばやとてとひ來ましぬあな嬉しや今日は飽くまで遊ばむと打つれ立ちて出づ御神はうす絹を透して樂しく行くてを照らし玉ひ四方の山々は霞の衣よそほひそめ見渡す限り青々とはえ揃ひし麥畑小川の堤はやう〳〵萠え出でし若草に包まれなつかしき土筆ゆかしきすみれの顔もやがて見らるべしなど語りつゝ登るともなくはや山の中程に至りぬ老松はみどりしたゝる色を見せ昨日今日咲き出でしかと思はるゝ一本の梅は人待顔に咲き匂ひ眞白き花綠の松とてりあひて濁りなき谷川の水にうつれるさながら山姫の帶打はへたるかと疑はれあなたにはゆかしき鶯の初音聞ゆるなど心も今は曇りなく樂しくうたひつ戯れつしばしが程に頂にたどりつきぬ十重廿重に打重れる山々は遠ざかるまゝに大空に連り雲か霞かともあやまたれ或はとけやらぬみ雪に照りそひて水晶の山もかくやと思はるゝばかりなりかなたに見ゆる洋々たる海原は外つ國までもつゞくらんと思へばいつしか心もひろやかに又蟻のはふにもたとぶべきは漁舟の浮かべるにて沖つしま山はうすがすみたなびきわたりぬ。

附錄

西比利亞の孝女

某宣教師夫人談

其一　父の冤罪

今でこそ西比利亞も横貫鐵道が出來まして、旅客や何か〻各其便利を得る事となりましたが、今より百年以前に有ましては、曠野萬里絶人煙、行旅の艱難は非常なもので有りました、殊に軟弱い巾幗婦人の身を以て、此大曠野を横ぎり、獨身で千里の旅に上るといふ場合には、其艱難は實に筆紙の盡せる處ではありません。茲にプラスコウヒヤといふ一少女が有ります。芳紀わづかに十八歳、父母を救はんと思ふ孝女の一徹心から、僅に八十哥の旅費を懐にして家を出、此大原野を横ぎつて、千里獨歩の旅に上り、雨露雪風の艱苦を忍びて、終に其目的を達した美談が有ります、私は今此孝女の美談に就て、讀者と共に、その孝心、その勇氣、その忍耐、及びその確乎不拔の美徳を、其談話の中に學ばふと思ふので有ります。

プラスコウヒヤの父親は、其名をロプウロフと呼れてハンガリヤ人で有ります。（ハンガリヤ人は韃靼人種なれば、我々日本人とも同人種で有るといふ事を記憶したまへ）壯年の時澳士利亞の騎兵士官となりましたが、後露國の貴女と結婚して露國に來て、露國の陸軍士官となりました。夫婦の間に一女を擧ましたが、其名をプラスコウヒヤと名附まして、即ちこれから御話をしやうといふ孝女です。扨て此女は韃靼人種とスラボニツク人種との間の子ですから、世の所謂「相の子」なるもので有ります。ロプウロフは屢土耳其との戰に出て、數年の間度々功名を顯はしましたが、殊にイスヌエル及オツチヤコフの攻撃には、天晴なる功名を顯はして、世の持はやす所となりました、然し滿れば缺る世の習ひ、戰ひ終つて家に歸るや、間もなく上より嚴命が下つて、何

の裁判もなく、無實の罪を以て、妻子と共に直に西比利亞の曠野に謫さるゝ事となりました。
凡そ西比利亞の徒刑人といふのは、各罪の輕重に從つて服役するもので有りますが、ロプウロフは、其罪狀が甚だ輕かつたものと見え、服役丈は免されましたが、さりとて今迄は立派な第宅に住ひて、世の尊敬をも受た身が、斯る茅土邊境の地に謫された事であれば、其歎きは如何斗で有りましたらう、昔は罪なくして配所の月を見るなど申して、風流がつた歌人が我日本には有りますが、其も須磨明石の如き風光明媚の地の事ならば知らず、茫漠たる千里の西比利亞では、なか〳〵風雅處のさわぎでは有ません。

ロプウロフの謫されましたのは、トボルスクの南境トボルスク郡のイスキムといふ所、西比利亞の伊太利亞と呼れて、氣候の餘程温暖い地方では有りまするが、然し何しろ西比利亞の事、秋の九月から初夏の五月迄は地上一面の銀世界となつて何事も出來たものではありません、僅に五月から九月迄の四ヶ月の間で穀物や菓物の類が、或は一時に花咲き、或は一時に實を結びて、百姓家の仕事の急がはしくなるといふ土地です。斯る邊土へ寃罪を以て流されましたロプウロフ夫婦の痛恨は如何樣でしたらう、實に察しやるに餘り有るです。殊に其妻なる人は根が貴夫人の身でありますから、馴ぬ仕事の賤の業、夥多の奴婢を召使ひて、豊に暮した昔を想ひ出しては、今の我身の不運を悲しみ、懷土望鄕の念に堪ず、幾度歟袂を絞つた事が有りました、幸ひ娘のブラスコウヒヤは、稚くして都を出ましたれば、昔の富貴の生活を覺えず、父母も又娘の心を苦しめるのを痛みて一度も其身の上を語つた事がなければ、娘は一切何事をも知らず、今の身の上を怪しとも思はねば、日々の艱苦を意とする事なく、年十二歳の頃よりは、洗ひ灌ぎの手傳をしたり、又穀物取入の時節には、農家の業を手傳ひまして、其報酬として、鷄卵、野菜、穀物なぞを貰つたり、時としては些少の金錢をも得て、父母の貧しい暮しの足にしたといふ事で有ります。

此間役人の來た事有ります故、父ロプウロフは、自己の寃罪を陳て、御赦免の訴狀を其筋へ屆けて貰ふ事を委托しましたに、其人都へ歸らば必ず盡力しやうと言ひましたから、世にも賴母しき事に思つて、望を其人に屬しましたが、其も空賴み、其後幾度歟役人は來ましたが、訴狀の事に就ては、終に一度の音沙汰もありませんかつた、斯して又數年を過た或日の事、プラスコウヒヤは、例の如く野良仕事に出て些斗の賃錢を得、父母の許へと歸つて來ましたが、母は一向に涙にくれてゐます、父親も又打鬱いで思案の体でした。少女は驚いて仔細を尋ねましたが、父母も今はかくし切れないで、一切の事柄を打明て娘に語りました。そこでプラスコウヒヤは始て父母の身の上を知りまして、驚き悲しむ事一と通りではありません。で、此時から彼女は都ペテルブルグへ上りて、父の赦免を乞はうとの念を起しました、時にこの少女の年甫めて十五歲でした。

けれど流石は氣の勝つた少女です、心に思ひつめてもその考は未だ容易に父母に打明けません、唯深く心の中に秘置いて、如何したらば父母を救ひ出す事が得られやうかと、其方法を考へるばかりです、何を申すにもそこから都まで何千里といふ荒漠な郊野です、かよわい少女の身としてどうしてそれが乘切つて行かれませう、そこで少女は暇有ば近い邊の森に分入り、天を仰で靜に神に祈りました、願はくは惠有る神の冥護に依て、父が寃罪を許させたまへと、主の名を呼て一心に祈るのみで有りました、然るに其孝心が神に通じてか、或日の事プラスコウヒヤは萬能の神の加護に因て事を爲さんには、如何なる艱難の事も成遂られざる事なし、と思ふの念が自然と湧きまして不思議にも勇氣が全身に滿々となりました、其日はそれで立歸りて、日頃の思ひ立を父に語りました、これが日本などでありますときつ第一その不心得を叱つてそうして思ひ止まらせるのですがそこはやはり露西亞人です父は之を聞て甚く其孝心を喜びまして、臺所に働て居た妻の傍へ娘を伴てゆつて、我妻よ、今日は嬉しい事を聽きました、娘が爾々の事を思付し由、其志を語れば、母も之を聞て莞爾としま

したが子供の事故さしたる決心とは思はず、可愛き者よ、無益の事を心配するより、仕事を精出してするが宜、と言捨ました儘、別に取舉る樣子もありませんかつた。父は娘の孝心を思ふに付け、世に榮へた昔の身で有つたなら、斯る辛苦はさせまいものと、我身の不運が今更恨めしく、痛恨胸に迫つて、甚く激昂の体に見へましたから、プラスコウヒヤは悲しみに堪ず、涙にくるゝばかりでした。母は涙を拂ひまして娘に布巾を渡しつ、もはや泣いても詮方はなし、まア御膳の仕度をせよ、出京の事は又善い折も有らうからと慰さめました、聊か慰められて、其日は其で止みましたが、扨思ひ止まり難きは孝心の一徹です、其後も屢此事を言出して、父母に旅立の許を乞ましたが、父母は其度に、此處から都迄は里數千里も有り、殊に道は曠々たる大原野である、乙女の身の獨で旅せん事など思も寄らず、途中で必ず死んで仕舞はうからと言ひ諭すのみ、許す景色は有りませんでした。然るに其後母親はふと風の心地で打臥ましたが、假染の事と思の外、重い病となりましてどつと床に臥つくやうになりました。

其二　孝女の旅立

扨てプラスコウヒヤは都へ旅立つ處の事ではなく、朝暮枕元に付添ひて、母の看護に身を任すばかり、幸ひ醫藥の効がありまして、三年を過て後母の病全く愈ましたから、彼女は再び又出京の許を父母に乞ひました。然し父母は依然として之を許しません、そこでプラスコウヒヤの心は火の如くなりまして、身体既に痩衰へ、このまゝ打棄置時は、生命も危からん歟と思はるゝ計り今は父母も一概には其望を拒み得ず、涕ながらに娘を諭しました、お前は年が若くして知るまいけれど、凡て人の旅行するには、必ず旅行免狀といふものを官から受ねばなりませぬ、然し其を受るには中々手數がかゝるから、思ひ止まつた方が宜らうと言ふので有りました

けれと少女はなか〳〵屈しません、此地に訴狀や何かの願書を認むる人の有るのを幸ひ、此人に頼んで願書を認めて貰つたが、然し願書には父の實印が要りますけれと父が印をしてくれぬは知た事、如何したら宜らうと考へたが、是は何でも、父の機嫌の宜時を見計らつて、頼むの外は有るまいと思ひまして、斯る時の有れかしと待て居た、一日ブラスコウヒヤは農事の手傳を終つて我家へ歸つて來まするを、父は門口に立て煙草を吹しながら、四方を眺め居ましたが、其樣如何にも機嫌宜氣に見へましたから、今日こそと思つて、兼て仕舞て置た願書を取出して、父の承諾を得て實印を求めやうとしました、父は暫らく打案じて居ましたが、何と思つた歟、啻に實印を與へたのみならず、尚何かは知らず細々と書いた一書を添てくれました、そこでブラスコウヒヤ甚くも喜びまして、早速其願書を其筋へ差出しましたが、奇なる哉、妙なる哉です、さしも今迄は痩衰ろへて居た彼女の体が俄に夫丈らしくなつて來ました、然し政事の行届かない露西亞の事ですから、肝腎の旅行免狀が容易に下りません、ブラスコウヒヤは願書を出してから、漸やう六ケ月を經てそれを落手しました。

是さへ有れば最早大願成就と、彼女は大に喜びましたが、父は又娘の旅行が心配になつてなりません、山河幾千里を隔てた長途の旅途中迚も無事では行れまいと思ふから、果は其旅行免狀をかくして娘へ渡しません、そこでブラスコウヒヤは大變に失望落膽して、大きに歎き悲みましだが、結局体が又次第に衰へ始まして、果は病の床に就きまして、それを棄置ば命にも拘はるやうになりましたから、父は大きに憂へ悲しみ、妻とも相談の上、とう〳〵娘の乞ひを許しました、此時のブラスコウヒヤの喜びは如何計でありましたらう、病氣も俄に本復しまして、早速旅の用意を整へ、愈出立する事となりました、そこでいよ〳〵出立となりましてその前夜は近隣の人も別を惜んで訪ね來り、一夜語り明しましたが、夜の白々と明るに及んで、ブラスコウヒヤは、容を改めて席に着きもはやこれが御別れと、父母から門出の祈禱を受けまして、隣人にも別を告て、終に我家

を立出ましたは九月の中旬でした。嗚呼生れてからこの方未だ曾て父母の膝元を離れた事の無此乙女が獨りで千里の旅に登りました、出しやる父母の心さては出ゆく娘の心の中は如何樣で有りましたらう、父母は隣人と共に門邊に立て之を見送りますれば、娘は幾度歟後の方をふりへかり見返りして去りましたが、やがて其姿もついに村の端れの森蔭にかくれて見えなくなりました。

扨プラスコウヒヤは、其日は土地の娘と連になり、十里ばかり歩みまして其夜は幸ひと或る人の家へ宿を借る事となりましたが、安心して一夜を此處に過し、翌日は又早朝から辿り行きまして、元より馴ぬ旅路の事ではあり野を越え、河を越え、村を越て、山路の露を踏み分てゆく程に、木立茂りておどろ〳〵しく、さしもに怖さ、心細さ、いふ計なく、されど元より覺悟の身であり、心に神の加護を祈りて、倚雄々しくもたどり往きましたが、何時歟道を踏迷ひて、行くべき處を知らず、如何しやうかと躊躇ふてゐる所に、折しも一人の樵夫が來ましたから、ペテルブルグへの道を尋ねさゝますと其人は親切に敎へる事かとおもひましたのに豈圖らんや此の少女を嘲りまして、此處より都迄は數百里ある、今から其道を尋ねた處で何の分るもの歟、愚かな事をいふものだと空嘯いてをります、さらばモスクワ府への道はと更らに聞きますと、其も同じくてゝから數百里ある、それを今茲で敎へたところが分るものか、との道なりと管はず行けば、露西亞の本國へ着くだらうと嘲笑つて立去りました、成程それも尤でせう譬へて言へば九州の涯から江戸へ行道はどれかと聞くのも同じ事ですそれも日本のやうな細長い島國であれば東西がよく分れてをりますけれども西比利亞のやうな曠野になりますと丁度方角の知れぬ大洋に居るも同じ事で道は勝手に踏みつけたものであり一つ迷ふたらば印度へ行くか支那へ行くか又羅馬へ出るか亞剌比亞へ出るか分つたものではありません、ですからプラスコウヒヤは甚く人の無情を悲みましたが、詮方もないから一つの道を辿つて行きますと程なくカモイチエフといふ所へ出ました。

折から激しき嵐が吹いて來まして行うとするに大木は道に横たはりて、一歩も行く事が出來ません、余義なく木蔭に身を寄せまして、風の摸樣を見てゐますと、嵐は益々吹荒て勢凄まじく、其中にとう〳〵日は暮る、寒さは强くなりました、成程これが日本のやうな温帶の土地であれば九月といへば左程寒くもないのですが何をいふにも世界で評判の寒國ですそれが夜に入ると季候が俄かに變つて實に肌を裂くやうになりますから堪つたものではない、身內は唯冷に冷て、わますさい食すべきものもありません、總身凍へて死なん計の心地、夜が明なば兎も角もなるで有らうと、木蔭に慄て一夜の明るのを待つ中に、風は漸やう止みて、東の方が白み渡り、天やうやく晴渡つて來ました、ブラスコウヒヤは稍力を得て、僅に其身を起しつ、其處此處とさまよふ折しも、車を牽て通りかゝつた一人の農夫、彼女の行惱むを見て憐に思ひまして、次の村迄送つてくれました、實に渡る世間に鬼は無とは是でせうか。併し昨夜の嵐で衣服は泥まぶれになり、疲勞と、饑餓と、艱難とで、一夜の中に別人のやうに貌色さへ瘦衰へましたから村人も惡者の落魄かと思ひまして、誰一人哀む者もありませんでした一体こういふ時には兎角神樣を思ふ者で有りますが、殊に敬神の心厚いブラスコウヒヤですから何更の事で、會堂に行たならば如何にかなるで有らうと、疲れた足を曳づり〳〵、その村にある會堂へと往きましたけれども生憎に戶は閉されたまゝで、人の居る氣合もありません、仕方がないから階段に腰を打掛て、ぶる〳〵と身を顫せながら寒さを堪へて居ましたが、嗚呼此時此際、彼女の心は抑如何樣で有りましたらう、夜一夜を嵐の中に餓凍へ、今漸々一つの村へ着は着たれど、誰一人力になつてくれる者はない、此時此際、其心中の苦痛ハまあどんなでしたらう、然るに村の子供等は物珍らしげに彼女の前へ集ひ來て、銘々口ぎたなく彼女を罵るも有れば、或は小石なぞを拾つて打付るのも有る、然し彼女は勘忍强くも、其辱しめをじつと忍びまして、尙此處に二時間余り居ました、そこへ一人の婦人此處を通りかゝつて、此有樣を見て哀に思ひ、村長の

所へ斯くと報せてやりますと時を移さず村長は村人と共に來りて事の次第を尋ねましたから、少女は落もなく其身の上を語りましたが、それでは旅行免狀が有かと問ひました、取出してそれを見せますと、人々は始て事の僞りでなかつたのを悟り、何れも氣の毒に思ひましたたが中にも以前の婦人は心やさしく、彼女を我家へ伴ひ往かうと言ひましたのでプラスコウヒヤの嬉しさは如何計、保護の天使にでも遇つた心地で、階段を立うとしましたが、足が凍へて居て立つ事が出來ません、來合せた人々はこれを見て、愈哀がりまして、車を呼んで來て早速それに乘せて婦人の家へと伴て往きました、そこで婦人は親切に乙女を勞はりまして數日の間我家に逗留させて丁寧に介抱してやり、乙女の爲に新に靴を調へてやりました、段々と冬も近づきましたから心靜に旅したまへとて樣々と注意をして呉れました、これを思ひますに父母の膝元に生長して、暖に着、暖に食して何不足ない都會の娘達ならば、とても斯る艱難には堪難いので有らう、若しそんな御孃樣でこうした場合に立至りましたらば必らずその身の無謀を思ひ止つて恐らくはそこから踵を旋らして歸るでせうが然し幼少から西比利亞の風雪の中に生長して、貧苦と艱難との戰爭に馴たプラスコウヒヤですから、唯一念父母を救ひたいと思ふ孝心に駈られてゐますから、中々此位の艱難では屈しません、そこで彼女は尙心強く都をさして出立しました、されと都迄は千里の道程で有る、懷には錢と言つて僅かの外は無のです、然し幸にまだ危難といふ危難にはまた出遇ひません、是は慥に神樣の御手が、彼女の孝心を哀みて、蔭ながら護りましたのでせう。

其三　途中の災難

左る程にプラスコウヒヤは獨り曠野を辿りつゝ行く内に日暮て山路へ懸りましたが、今夜はとうして何所へ泊らうかと考へたけれと宿るべき家がありません、仕方がないから暗々たる木下蔭をたどつて行きました處、幸ひ

遙かな彼方に燈火影がちら〳〵と見へて來ました、扨は彼處にこそ家が有たらうと思ひまして疲足を曳ずり〳〵急いで行つて、戸をほと〳〵と打叩きまするど、一人の老翁が立出て、何の御用かと問ひました、妾は日暮て道に惱む者、お宿の御無心をしたし賴むと、翁は頭をふつて、宿を貸す事は出來ませんと言ふて斷はりました、情ない人であると思つたが、强て爭ふべき事でも有りませんから、余義なく其處を立去りまして、今宵は野に臥し、露霜に打れる事歟と、力なくもたどり行ますと、後からおういおういと呼者が有ります、振返つて見ると最前の翁です、先刻は宿をお斷り申したが、家内が後で申しますには、此邊は名にし負ふ山路で、前途にはとても泊られるやうな家もなければ、我家で宿を斷はれば、嘸かし難澁の事で有らう、まア泊ておあげなさいと言ふ故、お呼戻したのであるといふ、いかさま人の情はこうあらうかとブラスコウヒヤはやうやく安堵の思を爲て、その翁に伴はれて其家へ着ました、ついて見ると成程一人の老婆が居ました、で先づ〳〵お這入りなされといふ、因て家の內へ入ると、老婆は表の戸を堅く閉して、先づ先づ是へといふて煖爐の傍へ招く、室は松火を壁の間に挾んで、其光も稍薄暗い、松火の光に夫婦の体を見ると、眼が恐ろしく光りて、其容貌も何となくいかめしい、初旅のブラスコウヒヤは稍しく氣味がわるく思ひながらも、二人の傍に坐しましたすると、二人は何處へ往たまふかと問ひました、少女は別に怪しみもせず妾は都へ行く者なりと言ば、御一人にて斯る遠き旅路をしたまふには、定めて路銀も多く所持したまはんなといふ、否僅二十錢有るばかりと言へば、夫婦は頭を打ふりて、其は僞りだらう、斯る遠き旅路をする者が如何して、其計の金にて爲れやう。馬鹿な事だと見幕を變て詰りました。が軈て夜も更けたらう勝手に休みまたへといはれて、ブラスコウヒヤは煖爐の傍にある臥床に入て打臥ました、元より身に附ものとては何もないが、夫婦の樣子が何となく怪しければ、所持品は悉く見易い所に置並べて、一目に何物をも持ぬ事の分る樣にして置いて其まゝ堅き眠に就きまし

た、實に妙齡の女子にしてはよく行屆いた注意と言はねばなりません、すると夜半の頃翁夫婦は、ひつと計に床を立出で、乙女の臥せつてゐる處へ來てその所持品を一々に改めましたが、成程所持のものとては二十哥の錢の外に一文もありません、然し所持金が是丈で有らうとはどうしても老人夫婦に信じられない、定めし膚に付て居るであらうと思つて、俄かに聲を勵まして搖起した、疲れきつて熟睡してゐるプラスコウヒヤは驚いて目を覺ましたが、此体爲に喫驚して、嗚呼老翁さん、老媼さん私は大望のある躰どうかいのち計は助けて下さいと、手を合せて拜みましたけれど、夫婦の者に慈悲はありません、丸裸体にして衣服を改め、靴迄脫せて撿査をしましたが、元より何も所持せぬ無垢の少女でしたから、二人は大きに失望の顏色で舌打をしながら、其まゝ少女を許しました。

プラスコウヒヤは後で心も消る思ひでした、一時は恐ろしさに身を慄して居ましたが、其でも晝の疲があれば又何時しかうと／＼睡つて仕舞ました、斯て翌日目の覺た時は、早晝近き頃でしたが、急いで出立んとしたところが、翁夫婦は昨夜の擧動に打て變つて、大變親切にして吳れいろ／＼と食事を進めつゝ、老婆がソップを持出れば、老翁はビールを取出して進めるなぞ、一方ならぬ待遇でした、でプラスコウヒヤも稍心を安んじ、己が宿望を落なく物語つて、且つ一夜の宿の禮をも陳て、此處を立去らうとしますると、夫婦は甚く昨夜の所業を愧た按排で、どうか前夜の事は夢と思ひて、御許をたまはれ、我々は斯る卑しい身であるけれど御身の孝心を聞ては、まことは慚愧に堪ぬ思が致しまする、如何ぞ一日も早く都へ登りて、御志を遂させたまへ、御所持の金を數へたまはゝ、必ず餘分のものも有ませう程に、昨夜の事は返す／＼も御許し下されとて只管詫るので有りました、實に奇態な人情ではありませんか人の情合に洋の東西の差はありますまいが、これが若し日本などでありましたらば昨夜の不首尾をおもつて滅多に顏など合はさない然るにこれは又打つて變つた有樣

でした。扨プラスコウヒャは此處を立出て、道の程六七里も行きました頃、ふと懐中の重いのに氣がついてそれとなく改めて見まするに、果して今朝老人が言つた通りに八圓計の金が殖て居ました、そこで少女は大變に驚ろいて此先の村人に遇ふて、老人夫婦の生業を聞まするに、彼の者共は此邊に名高い山賊であるとの事でした、扨ておもへば乙女の心はさしも殘忍冷酷の山賊をも、化して一日の善人とならしめたのでせう、誠意が人の心を動す事此の如きものであるとおもへば實に神通と言つてもよろしいのです。

扨乙女の旅行も、早冬の半となりました故、降つむ雪の深さに、路の艱難は一方でありません、此處に五日、彼處に十日と、足を逗むる事度々でしたから、思の外日數がかゝりました、漸やくにして亞細亞と歐羅巴との境なる、有名なウラル山の谷間にある一市府、エカテリンブルグといふ處に到着しました、すると宿の主人はプラスコウヒャの貯蓄の少いのを見て、申すには土地に名高い慈善家、ミルン夫人と云ふ貴夫人の許を訪づれて、助を乞ふたらば宜しからんと勸めました、そこで乙女はミルン夫人を訪問しやうと思ひましたが、プラスコウヒャの癖とて、何事を爲すにも、先づ神に祈りて其助を乞ふが常ですから、此度も先づ神に祈を懸やうと思ひまして此地の會堂に參つて見まするに、折しも日曜の事でしたから、大勢の人が集ふて居ました、今しもプラスコウヒャが聖壇の前に立て、熱心に其祈を捧げてゐる處ろへ、側らなる一人の婦人が其樣子を見て、御身は何處へ行きたまふやと問ふ、妾は名高きミルン夫人の許を訪れんとする者で、と言葉少に答ふれば、婦人は之を聞て、御身はミルン夫人を賞過たまふものかな、御身若妾の方へ來たまはゞ、ミルン夫人に優りて御世話致しませうといふ、プラスコウヒャ此言葉を聞て、心憎き事をいふ人かなと聊か不快に感じましたが態と返事もせず躊躇して居ると婦人は又御身左程にミルン夫人を慕ひたまはゞ、妾御身と一所にミルン夫人の家へ行つてその待遇ぶりを見ませうさア一所にとて先に立て往きますから、プラスコウヒャも否みかねまして、其後

へ着て往ば、やがて一軒の家の前へ來て、戸を叩いて案內を請ひました、暫らくして一人の下婢が出來ましたが、プラスコウヒヤの立つてゐるのを見て何の御用でと問ひました、妾はミルン夫人に用事有りて參つたもの御取次下されと頼めば、彼下婢莞爾して、御身の傍に立る夫人こそ、御身の御尋ねなさるミルン樣ですといふ、プラスコウヒヤ驚いて彼夫人を顧みる時、ミルン夫人は大きに笑つて、手を採て彼女を一間へ伴ゆき、其から懇ろに持なしてくれました。

時は恰と深雪の季節でしたから、旅行するには來春雪解の後が宜らうといふ、この夫人の深切な勸めに順ひまして、プラスコウヒヤはミルン夫人の宅に逗留する事となりました、其間プラスコウヒヤはミルン夫人から、讀書習字の技を敎て貰ひましたが、一体これは西比利亞のやうな邊土に生育つ者は、讀書の業を習ふも無益で有るといふ考へから敎へて貰はなかつたから、幸ひ今此逗留中の閑を窃んで、夫人から習ひ授かッたので有る

そうこうしてミルン夫人方に逗留してゐる中、西比利亞には恐ろしい冬季も明け、雪も次第に消へ長閑な時節となりましたから、いざや是より又旅立んものをと、其心を夫人に打明せば、夫人は旅行用の裝束一切を、不自由ない樣取揃へて呉れましてノウゴロド迄の舟賃をも拂ひくれ、且ッ同行の商人をも見出して、其人にプラスコウヒヤの身の上を賴み、その上都で力になりそうな婦人に紹介書を呉れて、旅立の餞別祝をもして立してくれました、プラスコウヒヤは夫人の情にひどく感じられし涙に咽びつゝ、別を惜みて此處を出立しました。

其四　着京

去る程に亞細亞、歐羅巴兩洲に跨る烏剌爾山の大山脈を、亞細亞の方から踰て、山路を行く事幾十里、其から鐵や鹽杯を運ぶ荷船に乗りましてチウソ川といふ川を降り、ペルミといふ處に出で、カアマ河を降り、ウオル

がといつて露西亞で第一番の大河の流れを下ッてカザンニといふ都に出るのであります。時に乙女はカアマ河を下る折しも、暴風が俄に吹起ッて、波濤が山の如くに寄せて來て、船腹を叩く事が度々でしたが見る〳〵船は轉覆して、プラスコウヒヤは乘組十五人と共に、カアマ河の水へ流されましたが幸にして命丈は援はれたが、着替の衣服がない爲めにづぶ濡になりまして、それが因で烈しい風邪に惱まされて、長き間途中で病蓐の身となりました幸にして病は癒ましたけれど同伴の商人が此時病ひ付て、未だに床を離れられぬ仕末でしたから、見棄て旅立のも心苦しけれど、大望を抱ける身には、左樣辨々と待ても居られませんから止むを得ず商人に別を告て、又もや助けない身の唯一人、艱苦をしのいで往く程に、とう〳〵ノウゴロドといふ大都府へ着きました。

此の途順を申すと地圖で見ても分りますがノウゴロド府から舊都モスクワ府、モスクワ府から新都ペテルブルクへ參るのです。がこのノウゴロッドからペテルブルク迄は、立派な街道が有るといふのですから乙女も稍氣強い心地がして、市街の諸所方々を見物してゐるく中、何が扨西比利亞の片田舍で育つた身の今このノウゴロドのやうな繁華な大都會を見た事でしたから目に入るもの一つとして驚きの種ならぬはない、殊に都大路を往來する幾多の人が意氣揚々たる樣を見るに付け、彼等には父母もある、子もある、兄弟も有る、姉妹も有る、又家も有る、食物も有るに、自分は獨千里の孤客で寄る邊のない捨小舟であると思へば、さしも大山大川を渉り、野原山道踰た時は、さのみ寂しいとも思はなかつた身が、今この家多き人多き大都會に入るに及んでは却てその身の孤身煢然たるがおもはれて寂しさ心細さを感ずる事、身に染て一層深くなつたので有りました。

扨諸所を見物する中に、例の如く會堂を見附て神に祈をいたそうかと思ひましたから氣を着けてゆく中にやがて一つの尼寺をば見附當ました、時に一人の尼樣がゐまして彼女を憐み、我家へ來たまへとて其住居へ伴歸り

種々と彼女の身の上を聞し後、懇ろに之を持なして、幾日なりと逗留したまへと申しました人の情にプラスコウヒヤは有難く、おもひまして其夜は尼の方へ泊りましたが、夜半の頃から熱が出て、枕も上らぬ熱病となりました、尼は甚く驚いて、早速に醫師を呼迎へ、種々と手當をしてくれたが、隨分長引きましたもの丶藥石効を奏して、漸やうに本復した、本復して見れば先が急がる丶身の上、出立せんと思つて其由を尼に語れば、尼のいふには是よりモスクワ府迄はなか／＼に道が遠い、冬を待て橇で行つた方が便利であらう、左樣したまへと勸めましたから又此處に逗まつて其間尼寺の樣子を見ますのに、如何にも純潔で、淸き生活でしたから、自分も此志を達して後は、是非尼にならんものと、深く心に思ひ込みました

斯てプラスコウヒヤはノウゴロドの尼寺に逗留して、冬の日の到るのを待中に月日に關守なく、光陰矢の如く過往て、早寒風が吹立ち、川には堅氷を結び、橇の便利最も好き時となりましたから、旅の用意を整へて、都をさして立出でました。

ノウゴロド府からモスクワ府迄の道は、流石に都會より都會への街道筋ですから西比利亞の旅行とは大層な違ひで、橇のすべりも早く程なくモスクワ府へ着きました此處でプラスコウヒヤは、尼から貰つた添書を以て或る商人を訪ねて、そこの世話で又其車に乘り、首府ペテルブルグをさして赴きました。途中別に變つた話もなく、翌年二月の半頃、恙なくペテルブルグの都へと到着しました、西比利亞を立てから歳月を閲する事玆に一年半、プラスコウヒヤは千辛萬苦の後、漸やくにして其目的地へ達したのであります、其熱心、孝心、勇氣、忍堪、不撓不屈の精神如何ばかりでありましたらう。

其五　皇后の御感

扨プラスコウヒヤは首府へ到着するや否や、第一着にミルン夫人から添書を貰つて來た二人の婦人を訪はんも

のと思ひまして、其住居を尋ねますと、其は何れもチワ川の對岸なるワシリイ島の住居でしたが。然し當時チワ川は春風の爲に氷解初て、通行が甚だ危險でしたから往來止めだといふので如何共し難く、空しく同伴の商人方へ逗留して居た、此時件の商人がいふには兎も角も訴狀を裁判所へ出して見たまへと忠告したからプラスコウヒヤも訴狀を認めて裁判所へ出て一人の裁判官に面會して之を差出しました、裁判官は之を受取りて一讀した上、是は書方がわるい書改めて持つて來いといふのでした仕方がないから立去らうとした處、守衛の者が乙女の衣服の惡るいのを見て、巡禮の者で有らうと思ひ違ひて彼女の手を採て門外へと突出しました、プラスコウヒヤは情なく思ひながらも、旅宿へ歸つて訴狀を認直し、翌日裁判所へ持行て再び之を差出したが、今度は何人も受理する者がありません然し乙女は少しも屈しません、毎日裁判所の門前へ往ては、出入の裁判官に向て之を差出した、けれど一人として受理してくれる者がない、何と情けない次第ではありませんか、その內チワ川の氷も解け、架橋も設けられたといふから、彼商人の妻はプラスコウヒヤを促して、ミルン夫人よりの紹介狀を持せ、馬車を飛して河向ひのワシリイ島に行き、紹介の夫人を訪問ました、すると有難いものです主人の夫人は、兼てミルンよりの書狀で乙女の身の上を悉しく知つて居ますから深切に彼女を待なして與ました、扨夫人の言ふには私の親族に貴族が一人居ますからあなたの事を其人に申して頼んで見ませうと申しました、且つ忠告して申さるゝには凡そ裁判所を經て願を遂しやうとするには空しく日數ばかりかゝつて道は捗取らない事ろ他の方法を以て願を遂する方近道で有らう、私も何とか盡力してあげやうから其積りで居られよとて、御種々と慰めてくれました、そうてうする內此貴夫人の盡力で、プラスコウヒヤの身の上が世の評判となりまして終に一人の皇女の御耳へ這入りましたその皇女はプラスコウヒヤを見たいと被せられましたから彼の貴人はプラスコウヒヤを伴ふて早速皇女の御前へと出ました、此時皇女プラスコウヒヤの体を御覽になりましたのに

其服裝はイカにも質素で何の裝をも施さず、容貌が如何にも人を動かす處ろがありました、で皇女は哀の者に思召され、終に皇太后の御耳に達せられて拜謁を仰せ付らるゝ事となりました。

皇太后に拜謁の當日も、プラスコウヒヤは常の服裝で宮中に伺候しましたが、やがて御前に跪きました時、陛下には殊の外不愍の者に思召され、願の次第を自ら問せたまひたれば、プラスコウヒヤは有難さに涙にくれつつ、事の仔細を明かに奏啓に及んだ、皇太后には一什の事を御聽有て、嗚呼朕が皇帝がしろしめす西比利亞の郊野にも又斯樣な奇特な少女があつたかといたくも其孝心を感せさせたまひて、何れ帝にも拜謁の出來る樣取計らひて遣はすで有らうと、御感の御言葉を賜はり、且感賞のしるしとして御手元金二百五十圓を下し賜つたのであるプラスコウヒヤは賤しい身を以て、斯る高貴の御前へ召出さるゝさへ有難いのに、斯莫大の下し物迄賜はるとは、何たる忝ない事で有らうと、嬉し涙にかきくれました。

其の日はそれで事濟になり次で又二三日を經て宮中へ召出されましたが、この度永く宮中へ奉公する樣との、有難い御懇の御言葉を賜はりましたが、少女は兼て尼になるの所願でしたから其事は御辭退申上ました、其日皇太后陛下の御言葉添で、皇帝陛下へも拜謁の榮を賜はりましたからそこで彼女は積年の宿望を果して父が無實の罪を奏聞し得る事を得ました、斯樣な事は日本などには元より支那でも朝鮮でも出來る事ではありませんがそこは專制君主國と言はれてゐる露西亞でも流石は個人の人情を尊ぶ事にかけては格別な御取扱があるのでそこで陛下は西比利亞奉行に宛て、速にロプウロフを宥して都へ歸す樣との勅狀を降したまひ、且路用の銀をも取らすべき樣恩命が有ましたからプラスコウヒヤの喜びは天にも登る心地でした。

嗚呼西比利亞を出てから野に伏し、山に寢霜に虐げられ雪に困しめられ幾度歟生命をも失はんとして助かりつつ千辛萬苦の後、漸やく都へは着き裁判所の門前では、乞食の如く追はれんとした身が、今斯も不思議の助を

得て、天顔にさへ咫尺し奉る事を得て其所信を陳る事を得、終に其目的を達し得たのは、是は實に人間の力で無く誠に神の冥助の然らしむる處で、あらうと少女はおもふてゐるのである扨又西比利亞に殘りました兩親は娘が出立してから早一年餘になりましても何の音沙汰もなければ、元より事の成否をおもふまでもなく何さま途中間違ひが有て、可惜娘は猛獸にでも食れて死んだか然もなければ風雪の爲に惱まされて凍へ死でもした歟若しや山賊の爲にでも殺されたで有らう、軟弱い女の子の身で迚も都迄往れる理はない、嗚呼實に可愛想な事をしたこんな事なら遣るでもなかつたと大變に後悔しましたが或日の事計らずも赦免の狀が都から到來しましたから、夫婦は夢かと計、喜びまして早速旅の用意を整へて都をさして出立しました、プラスコウヒヤは之を出迎ふる爲め都を立てノウゴロド府へ赴きました、斯て親子の者は、ノウゴロドの尼寺で再會をしましたが其時の彼等の喜悅は如何計でしたらう。

扨ても百折不撓の孝女プラスコウヒヤは己が忍耐に依て首尾よく父母を救ひましたが、是皆偏へに神の御惠であると思ひましたから其謝恩の爲めに尼寺に入て、一生を神に仕へて淸き生涯を送らんものと決心して、父母にも其旨を語りて其許を得ましたからノウゴロドの尼寺に入て尼となりました、彼女の永眠は、一千八百九年十二月八日丁度今より百年ばかりむかしの事であはれ淸き彼女の靈魂は、とこしへに天國に在て神の御惠に預りつゝ有るのでせう。

（をはり）





花にしき

美術家の妻　上

藤本夕颸

宵より降り出せし雨の小止なく、夜あらしの窓さむう、煤け洋燈の小暗き下に、一雄と云へる三才ばかりの男の子を傍に臥さしめ、己は只一人つくねんと寐もせで坐せるお澤は、うるさしとや裁縫物を其處邊に掻遣りて物思ひの限しなく、火鉢の椽に打靠れゐれば、門前に車の音して出迎ふる間もなく立かへりし夫の秋谷、ほろ醉ひ機嫌の鼻唄交り、足元危げに茶の間に打通りて撞乎と胡坐をかき、もう一雄は睡て了つたな、これは明朝の目覺しだよと袂より紙袋の駄菓子取出して其處へおけば、お澤は夫の顔を打見遣りて、大變な御氣嫌ですことねえ、御臥りになれば直に褥を取りませうかと何時もながら愛相無し、秋谷は頭をふりて、いや未だ寐るには早い、げーぷハヽヽ些し醉つたな、什麼も喉が喝いてしやうがない、己に水を一杯呉れないか水をと呼びつつ今度は三勝半七のさわりを唸り出す、軈てお澤の酌んで出す盃子を手に把り上げてぐつと一口に呑干しながら、ハヽヽいや、今夜は怎も愉快だつたよ、篠田の奴も不相替の貧乏仲間でな、細君が子供を負つて酒屋へ行く、悴が岡持さげて豆腐屋へ走る始末なんだ、その中に相原の奴が來合して大賑いさ、遂三人で四升ばかしの酒を平げて了つた、ハヽヽヽ、腹の中では細君も隨分弱つたらうが、厭な顔もしないで始終會釋しながら酌をしてゐたのは遉にえらゐ、什麼も感心して了つたねと何氣なく褒むる言葉をお澤は面白からず、急に顔色かへて、はい、それは篠田さんの奥さんは定めておえらうござんすでせう、妾のやうな口やかましいものは大馬鹿の頓痴氣、貴郎が御意に召さないのは御尤さと唇を反らせば、はいこれは大失策ハヽヽヽ、決してお前へ

當てつけて言つたの何んのと云ふ譯ではない、お前は又お前で別に長所がある、それは俺も知つてゐる、全くお前もえらゐよと酒が言はする戯談も一酷のおさわは愈つんとしてはい、散々人を馬鹿になさいまし、貴郎は酒さへ召上れば女房子供は餓死してもお構いなさらぬ、妾なぞは帶一筋質受けも出來ない哀れな有樣でござんす、那麼に酒が召上りたけりや寧そ畫師をやめて酒屋におなりなすつたがい丶と口說き立てんとするを、いや、何もさうぷん〳〵膨れなくつても好いではないか、別に心あつて云つたことではなし、お前のやうに直に那麼嫌味を列べ立て丶は困る、それでは折角のんだ酒の醉がさめて了ふ譯だと打消さんとすれば、いつかな肯入れずはい、貴郎にはそれが嫌味のやうに聞えませうさ、妾はこれでも本氣で申上げるのでござんす、いくら暢氣な貴郎だからつて些ア家のことも考へて被下らなくては困るじやありませんかと言ふ。秋谷は平氣にて、何もさう〳〵〳〵心配しなくてもよからう、貧乏は畫師の常だ、借金が命を取る譯でもあるまいからまあ〳〵心を大くして、今些し氣を永くしてか丶るさと例に依つてたわいなき言葉、慰むるのやら嬲るのやらさつぱり解らず、お澤はもとかしく口惜しく膝擦り寄せ、くよ〳〵せずに什麼して遣つて行かれます、貧乏は畫師の常でも何も借金が世間へ見榮ではありますまい、車挽の女房でも眞冬に着かへ一枚ないものがありませうか、それも眞實運が惡くて出來ないのなら諦めもしませうけれど、貴郎のは自分の贅澤から貧乏をなさるのでござんす金になる腕がありながら怠てばかしゐらつしやるから借金もふへるのでござんす、今日も今日とて酒屋米屋魚屋の懸取共が押よせて妾は顏から火が出るやうな思ひをしました、それに本多からは愈々差押をすると嚴しく云つてよこすし、山本は利子の催促に來て怒鳴り出す、もう〳〵妾は精も根も盡き果て丶了つて寧そ死んで了つた方が什麼位樂だか知れないと思ふ程でござんすと涙含んで喞てば、有繫に秋谷も打沈みて、いや、さう言はれては俺も重々面目がない、尤も心ではいろ〳〵考へて居ないではないけれども什麼も未だ志を成すこと

がてきないで、ついお前にも這麼苦勞をかける譯だが、然し此境遇も爾う長いことはなからうと思ふのだ、何しろ借金丈は什麼かして返へしたいものだがそれも一時に形をつける好い方法もなし、まあ折角お前も今日迄辛棒してくれたから今些し氣を永くして遣つて貰ふより外はないと宥むるに、それは元より妾も覺悟の前ですから甚麽にでも辛棒はするつもりでございます、けれども貴郎もその氣に御なりなすつて、五合召上りたいところは三合になし、又御嫌な時分も一つ商賣と思つて勉强をして被下つたら、何も今日此頃のやうに苦しい思をしなくてもよからうと思ひます、貴郎は平素口癖のやうに貧乏は醫師の常と仰いますけれど、何も自分から好んで貧乏をしないでもよい話、妾は何がつらいと云つて世の中に貧乏ほど辛いものはございませぬ、金のないのは首の無いよりと昔の喩にもあります通り口惜しいことも情ないことも大切なものが不足な爲め、だと云つて妾は自分で贅澤して見たいの何んのと云ふ心は夢更でざりませぬ、只一時も早く此の苦しい境涯を脫け出して不足ながらも人に面皮を缺かないやうに、こればかりの願でござりまする、妾は元々人に金を借りることが大のきらいで、足らなければ足りないで三度の飯は一度にしても我慢をして參りました、家賃のやうなものでも其月の廿七八日迄に必と屆けねば寐付かれぬくらゐ、これは妾の性分ですから借金や懸取りの申譯するのは身を斬られるより辛うござんすと泌々と語りぬ。

秋谷はほと〳〵酔もさめてはてゝ少焉首を傾けし後、成程それは女心にしては無理はない、俺にした處で何も好んで貧乏したくはないけれと、又强て貧乏の爲に志を曲けるにも當らないと思ふのだ、それは自分ながら酒が過ぎるのは惡るいと承知してゐる、孰かと云へば飮まないに超したことはないが人間と云ふものは爾うも行かないもので、充分節するつもりではあるけれとも俺には什麼しても禁ると云ふことは出來得ない、云はゞ先づ一種の病氣なんだね、その代りに酒を飮む外別にこれと云ふ道樂はなし、お前の知つてる通り衣服でも食事

でも夫等は一向無頓着で、自分が榮耀の爲に半文たりとも遣つたことは是迄決してないではないが、單に晩酌の三四合、それを大變な贅澤でもするやうに日々愚痴を云はれては俺も甚だ迷惑だ、又畵をかく上にしてからが數でこなす職人とは些と筋がちがふ、朝から晩迄何でもござれで爾う矻々とかいて居られるものではない、例へ萬金の富を得た處で畵が下手であつたら美術家としてそれは誠に不本意な話で、それくらゐなら寧そ畵師をやめて商人になつた方が遙に増つてゐる、畵師としてはまづい畵をかく位大な耻辱はあるまいが俺も美術家として立つ以上は只金が欲しいばかりで自分で不滿足な畵をかき散らかすことは什麼してもできぬ、だから氣が向かぬ時分は他目には何だか怠けてゐるやうに見ゆるけれども、實際は横に轉つても腹の中で樣々の工夫を凝してゐるのさ、それにお前のやうに一寸手を休めて居つても直にがや／＼と騷ぎ出しては猶は氣がむしやくしやしてかけるものではないと說き諭すに、お澤は飽迄不承知の面色して、それは廣い世の中に只一人か二人かそこらの人のこと、普通の畵師が人並にして什麼して立派な大家になられるものですか、何の藝事にしても勉強しないで上達した例しはありませぬ、這麼事を申すと御憤りになるか知りませぬが、云はゞ貴郎は未だ修業最中の御身の上、朝から晩迄筆をおとりなすつても上手にこそなれ別にまづくなる原因はありますまい、氣が向かなければ幾日經つてもかゝぬと云ふはそれは腕前が達して了つた人の云ふことかと乍憚思ひます、まづい畵でも面白くなくても一生懸命にかきなれて始て世に大家とたてられるやうにもなりませう又例へ畵が上手でも喰はなくては第一生きてゐられません、此の有樣で貴郎は後々什麼して暮して行かれるとお思ひなされます、貧乏にも大概程のあつたもの、それは妾だとて貴郎の御氣に召すやうにお酒も充分に差上げ、何事も貴郎の仰る通り只はい／＼と申しておけば宜しうございますけれど、這麼有樣になつたのも元々貴郎の御心持通り無茶苦茶にやつてお來なすつた擧句の尻で、一日だつて那麼暢氣なことで生活して行かれますものですか些

ア自分で御考へになるが可うござんす、妾は貴郞が晩酌の二合かそこら召上るばかしなら決して兎や角う申す譯ではありませんよ、只何事もやりつぱなしで、些し纏つた金でも入れば直に氣が大くなつて只ぶら〳〵と幾日も遊んでゐらつしやる、酒を出さなくても可い者迄無理に引止めては夜おそく迄飲つゞけで翌日は二日醉で一日御臥つておゐでなさる、米櫃の底が空にならうが財布の裡に一文もなからうが、女房は着る羽織もなからうが一切關はないで、酒ばかり飲んでごろ〳〵と遊んでばかり居て、些しでも何かと云やア五月蠅いと仰つてそれでは餘り無茶と云ふものではありませんか、妾には此上には迚も勤りかねまする、貴郞が心を取直して稼下らなきア迚も遣つて行かれる見込はありません、それで不可きア御暇でも何でも戴きますと疊みかけられて、秋谷も押默りしが、稍あつて、お前はお金があつて畫が下手と云はれるのと、貧乏しても畫が上手と言はれるのとは孰方がいゝと問はれてお澤は冷に打見遣り、貴郞は何にかにつけて貧乏々々と仰るけれど何も畫師は貧乏しなくてはならぬと規つてゐる譯でもござんすまい、那麽事に御答へする必要はありませぬ、人並の境遇になつてから貴郞の好きになさいまし、立派な腕前の者を今の世間が打棄つとく譯はない、上手も下手も未だ修業中の貴郞ではございませんかと愧しむるに、秋谷も聊か不快な色を發せしが、急に打笑つて、へゝゝゝなか〳〵の氣焔當る可らずだ、到底お前には叶はないハゝゝゝ、畢竟俺が惡るいので、お前の慾と云ふのは誠に小い者、今千圓も天から降つて來たらそれこそお前は蘇生つたやうな心地になるに相違ない、借金を拂つて普通の生活をしてさへ行けばお前の不足もなくなる道理で考へて見れば容易い望さ、俺が後々大家にでもなつたら今散々苦勞をさした代りにお前は好き勝手な贅澤をするがいゝ、俺は只酒さへ呑ましてくれりやそれで結構だからと言へば、女の慾と云つたらそれくらゐの者、世間の義理を缺かないで並々の境遇になつたら其上の望はない、畫の巧拙は巧拙で生計は生計で又別な話、妾は何に代へても貧乏だけは一日も早う脫ぎ度うござんす

寒中に女中もおけないで手に垢切をきらし、おさんとんから乳母の役迄一人でして、戸口三寸出るに衣服なく其上毎日借金取りに責立てられて何の樂しいことがありますものか、一年も二年も此態であつたらそれこそ第一妾の命がつゞきませぬと啣す、秋谷は打頷きながら、成程ね、それは俺も充分に察してゐる、然しつく〴〵考へて見りや那の金貸の本多や山本のやうな奴さへ普通の生活をしてゐて、其點から云へば先づ俺等より余程えらゐ譯なんだね、そこで俺も明日から斷然畫師など貧乏渡世は止して了つて寧そ高利貸でも始めやうかと思ふが什麼だらう、其方が反てお前も滿足なかも知れないてハヽヽと打嗤つて、何も彼も俺が惡るい、お前の云ふことは一々尤だ、だから此通りお前に頭を下げて謝罪るからお前も機嫌を直して、什麼だい、仲直りに一本熱く燗けて呉れないかと何處迄も氣樂さ、遉にお澤も呆れて何の言葉もなかりし。

中

まあ貴郎は何と云ふ性根無し、今日も今日とて家の四苦八苦を外にして何の爲に朝ぱらから御出かけになりました、鬼でも蛇でも些しは思遣がある可き筈、それに用も無い方へ飲あるいて自分一人の好機嫌、妾は今迄どの位心配して待つて居たと思召す、暢氣な事ばかし云つて、人を茶にして、猶其上に酒をつけろとは貴郎そりや餘りではございませんか、貴郎が何處迄も其氣なら宜うございます、妾も其氣で此後甚麼ならうと一切搆つたことではない、噯思ひまわすと皆妾の不運、今更欺されたのが口惜しい殘念なと涙をはら〳〵と流し、元々什麼いふ譯から妾が當家へ參つたと御思ひです、よもやお忘れはなさるまい、一年前妾が未だ麴町の三番町へ居ました時分、元學校での同窓で親しい間柄の磯邉の奥さんから、實は夫が竹馬の友人で至極心易い小山田秋谷といふ畫師がある、些し事情あつて先の奥さんは離緣になつて、三つになる男の子と女中との三人暮し、青

年の畫師の中ではなか〳〵腕前も確で第一容貌から氣質迄眞實の畫師に出來上つた人、行々は必と立派な大家になるに相違ないと知合のものは專ら噂をするくらゐ、それが五六年前學校を卒業した當座無鐵砲な放蕩に身を持崩した爲に千圓からの借財をこしらへ、一時東京へも居られなくなつて國元へかへつて漸と形をつけ、二三年凝乎と田舍へ引込んで居た處から餘り今日では名は賣れてゐないけれど以前當地で大變評判の好かつた方それが一昨年の夏又東京へ出て來て國元から奥さんを連れて本鄕の西片町へ往つてゐましたが、酒が飯より好きなのと心が寛裕で締りのない上に奥さんが遣り放しの氣儘者ときてゐるものだから又直に三百圓ばかしの借金ができて散々の有樣、而も去年の晩其奥さんと云ふのは國から出て來た兄さんと一緒に薄情にも子供を殘して逐里家へかへつて了うし、其跡で母さんを國元から呼びよせて是が又着京後間もなく病氣を惹起して大學病院へ三四ヶ月入院中逝られて了つたさうで、數々の不幸つゞき、從て一家の困難も尋常でなく目も當てられぬ始末、是れと云ふも畢竟は一家の切廻しがまづい爲で相應な收入ありながら五百圓足らずの借財が整理のつかぬ原因はない、それをむざ〳〵見殺しにするのも如何にも殘念で、那程望のある人物を生涯世に出させぬは誠に惜しい譯、又友人の情として素より打棄つておくべきものではない、だと云つて吾々の身分では金錢の世話は及びもないし當人は猶はの事、是は寧そ誰か丈夫した奥さんを仲人して巧く內證を整理して當人を世に立たして貰ふより外はあるまい、就ては誰が好からう彼が好からうと種々穿鑿した上で是はお澤さんの外に遣つてのけさうな人は世間にない、又大概な者では奮發もできぬが遣おゝせもむづかしい、お澤さんなら大丈夫だと夫とも種々話し合つて、それで一切先方の事情を打あげて貴方へ御話します譯ですが、先方が先方だから失禮なと御憤りなさるか知れませんけれど、出來るものなら貴女も義俠心を出して一奮發してはくださらぬかと折入つての相談、磯邊さんも同じやうに男泣きに泣いての依賴、實は妾もそれ迄先の夫の薄情に愛想をつかし、

それからもう〳〵男と云ふものには懲々して、此四五年何處迄も一生獨りで立たん決心堅く、確と覺悟をした上の事であつて見ますれば御氣毒でも御謝絶する外なく、一應は截然と素氣ない御挨拶をしましたのさ、然れも是非にと其後度々の依頼。又若い女の身が只一人故郷から何百里と云ふ旅の空へ出て獨立の無分別な事や困難なことを説かれたので、妾も終には些しく心動かぬでもなく、それでは兎に角御當人に逢つて見ました上で御返答しませうと挨拶したら夫婦は飛立つほどの悦び、直に貴郎に御報せして磯邊さん家で始て貴郎に御逢ひ申したのは忘れもせぬ妾が此家へ參つた十四五日前のこと、其時貴郎は妾に向つて何と有仰つたか定めて覺えて御出でせう、磯邊君から委細申した通りの事情、猶實際それ以上の困難があるは自分で自分の家の財政が分らぬくらゐ、子供は居るし、借錢取りや懸取りは押かける、書をかく所の騷ぎではない、倘し貴女が來て被下るか誰か整理をしてくれなかつたら、それ等の世事にうとい私は意氣地のない話ながら此儘自滅して希望も理想も世に埋木の、花咲く時節に逢はないで朽ち果てる外道はありません貴女が幸にして私方へ來て被下つたら私も懸命になつて魂を書に打込むことができる。希か御差支なく御厭でなくば、兎も角も私を信任して被下つたら一つ大奮發をなすつては被下らぬか、誠私の收入は是々負債は幾許、又私の考へは恁くの通りとざつくばらんに打出しての御話、あゝお壯い方には感心な、珍しい御心がけ、こんな奇麗な腹の方と生涯苦樂を共にしたら例へ一時は什麼境遇でも厭ひはせぬ、運不運は時世時節、別に大した借金と云ふではなし、なあに一二年も辛棒したら什麼にか形もつけられやう、書師と云つても大家になれば大したもの、舅姑はなし夫婦の外に只子供一人、これも自分がやうな子のない者には何よりの幸福、これは思きつて一苦勞して見やうと氣も引立ち、又是迄見込んで頼まれし事をむざ〳〵謝罪りも心外と、其處は女の情に脆く、つい誰にも相談しないで其場で自分一人承知して御返事をしました、實は其跡で友達や一二の親戚等へ此事を話しますと皆餘り氣の乘ら

ない挨拶・折角今迄一人でやつて來たものを今更そんな處へ急で嫁くにも當るまいと云ふもゐるし、中には強て抑止むる人もあり、又此方でも充分に先方の蹊蹊を穿鑿した上にしたらと勸めるのもあり、皆それは結搆なとよろこんでくれたのは一人もありませんでした、けれども妾は一端決心して御返事迄したもの今更斷はるなぞ云ふことは無論できないし、又更に先方の様子を調べて見ないでも惡かつたら又其時の事と、只貴郎の御心を買つて行末を樂に、自分一人で我を張り通して此方へ上つた次第でございます、這麼事を云ふと何ですけれと其前相當な處から是非來てくれなぞと申して參つたこともないではありません、山川と云ふ或る銀行の重役をしてゐる人からなぞは、それは〳〵うるさい程何に彼と云つて參りましたのさ、だと云つて妾は今更愚痴は毫も申しません、だけとも余り貴郎が思遣りがなければ自然と不足も出ますし恨も言ひまする、實際妾が當方へ參つてからと云ふものは、直ぐに翌日から借金の斷り金の才覺、手にあつた自分の金子もそれらに散いて了い、猶は足りないで衣裳迄一枚ぬぎ二枚ぬぎ簞笥の底から鏡臺の中の髮の飾りもの迄手續して、今日迄の心勞苦勞はどれ程であつたと思召す、假に五六百圓からの借金が三百圓かそこらになつたのも誰の力だと御思ひです、それに貴郎は始め妾へ御仰つた言葉とは全で反對で、晝は怠放第酒は飲法第・何一つ元御誓いなすつたことを御守りなさらないではありませんか、いくら男は無頓着だからつて貴郎のやうな暢氣な方が何處の國にありませう、まあ篤と御自分で御考なすつたが好うございます、是が女の時々の着物さへなくて舊の友達や知邊へ顏出しもできないとは何たる情ないことでございませう、妾は生れてから這麼とは始てでござんす、それも眞實出來ないなら兎に角余りと云へば貴郎の性無しに張合も辛棒もあつたものではない、何も妾だからつて爾う吝なことばかし申すのは決して好しい譯でも何でもありませんが、吝にしなければ一日も此家は立つては行かれぬ、喧しう云はないと貴郎が心を取直してくださらぬ、それで妾も自分ゞ宜くないとは知りつゝ御意に逆

つて苦い顔をされるは厭と承知しながら依然とやかう申すのは畢竟は家の爲め貴郎の爲め、決して妾の爲ばかりではございませんよ、それを只もう妾が口ぎたないやうにばかし御思ひなすつて妾の身に取つて何の面白いことがありまするを管々しく掻口說けば、秋谷は厭な面色して、そんなこと迄今更喋舌り立てなくてもよからう、何も俺がお前を欺したの何のと云ふ譯ではなし、始から畫師と云ふものは貧乏なもの、殊に俺は借金がある酒はのむし、一順の覺悟では一家の困難にたへうるものではない、少くとも三年間くらゐ死んだ氣でかゝつて貰はなければ到底息も吐けまいからと、自家の事情を悉皆打啓けて財政は凡てお前の心一つに今日迄任しておいたではないか、お前も勿論それを承知の上できてくれた事、一年も經たぬ今日那麼愚痴の百萬陀羅を列べられては俺も誠に閉口だ、お前今些し心を落着けて氣永に遣つて行つてくれるよはできないかなあと諭すが如く云ふに、はい落着いてゐるわけには參りません、幾干申上たとて同事ですが、妾は貴郎の有仰ることも爲ることも皆な餘り分らない無茶だと思ひます、此金の入用な場合に、過般奥村から賴んで來た山水の二幅物、出來ると直に廿圓の御金は掌中に入るに、賴みやうが氣に喰はぬと些細なことに腹を立つて妾が何と云つても遂斷つて御了いなさるし、又今井の紹介で先方へ御往になれば屛風を一雙賴むだらうからと折角世話をしてくれたを賤しい藝人風情の家へ頭を下げて行くのは嫌だと御往でなさらぬ、笹岡から賴んだ普賢菩薩の畫は氣が乘らぬと云つてはもう半月になるのに打棄らかして手をお着けなさらない、それから美術協會の出品にわざわざ十圓以上もかけて買つた畫絹を一月餘それにかゝつて些し面白く行かなかつたからと云つては其儘に放擲つて遂出さずに了い、家の會の畫は未だ三枚丈殘つてゐるに矢の催促をうけながら未だに筆を御取りなさらぬ、畫をかく御暇はないけれど晝寢をしたり、友人の家に遊びに行つたり、何の役にもたゝぬ人達を引張つて來ては一夜飲明したり、それは何とも彼とも云ひやうのないなされかた、貧乏々々と有仰るけれど貴郎のは故意と

自分から好んで貧乏をなさるじやありませんか、何時かも長尾さんから頼まれて大井さんへ探幽の三幅對を賣つて御わけなすつた時分、賣手の言値より八十圓も高く賣れて、妾がそれ丈は此方で取つても搆いますまいと是非御勸め申しても、那麼ことが出來るものかと頭から怒鳴りつけて、加之に長尾さんから御禮によこした三十圓迄俺は骨董屋ではないからと無愛想にも突返して御了いなすつた、而も其折は命を奪れる程辛い金に迫つて居た時分ではございませんか、未だそればかしではなく、貴郎は何時も俺は例へ名が人へ知られなくても搆はない、自分から名を廣告するやうなことは大嫌いだと仰るけれど、幾干畫が上手でも世間へ知れないで何の役に立ちまする、つまり畫なぞと云ふものは名を取るばかりのものでせう、それに名がなくて一生貧乏の仕通して例へ畫が名人でも畫師になつた効は些ともない、昔も今も立派な畫師は依然いろ〳〵なことをしては名を賣つたと云ふではありませんか、過般成田屋へ送る引幕へ畫をかいてくれと特々内藤さんから一は貴郎の名を賣出させん爲に紹介してくだすつたのを、それは眞平御免だ、紺屋へ行つて何か染めさした方が余程増したらうなぞと憎れ口を仰るし、又或時新聞社の木谷さんが見へた時、御親切で其新聞へ貴郎の畫を賞めてくだすつたのを、那麼馬鹿な批評をされては窘る、君は未だ畫なぞ見分る鑑識がないなど禮を云ふ處か反て劒突を喰はして、酒の上とは云へ妾ア誠に其時ばかしは顔から火の出るやうな思をしました、全く貴郎のやうに御世辭のない方はありませんよ、此節の世の中は正直なばかしで行くものではない、人一倍に伶悧に立廻つて、例へ畫師でも商賣と同じ事些は掛引と云ふものがなくてはできません、貴郎は何かと云ふと今の世間を惡世だの、今の畫師なぞも大家からして不見識な奴ばかりなぞと歎息遊ばすけれど今の世の中ほど結搆なことはない、昔の世に今日のやうないろ〳〵な便利なことがありますか、又今の大家の方々でも決して不見識でも何でもない、畢竟時勢につれて其のやうになさる丈で、現に雅邦先生や玉章なぞと云ふ方々は大した御身上、其畫も昔に數倍

じた金高のものでございませう、貴郎のやうな御心持ちでは迚も今の世の中に合はふ道理がない、又何一つ成功ることができますものか、だから依然時勢につれてそれ相應の態度を取り、自分ながら其氣になつて何事も爲すつた方がようございます、堂々と門戸を構へて表には始終馬車の四五臺も駐つてゐる位の身上にならなくて何の畵師になつた効がありますものか、若し妾が男子であつたら馬車にくらゐ乘らずにはおきませんねと滔々と述べ立つるを、秋谷は眉打皺めて他を向きしまゝ口を噤みぬ。

下

少焉經ちて秋谷は屹とお澤に向ひ、お前の云ふことは元より女の情として無理もない話、然し畵家の女房は畵家の女房らしい心持ちを持つて貰はなければ窘る、俺に連れ添ふ間は馬鹿でも阿房でも俺の理想に合ふやうな考にならなければ遣つて行かれる道理はない、目下の逆境に御前の並々ならぬ苦心は充分思ひ遣つてはゐるけれど、俺には又俺だけの主張があつて、それは例へ死んでも曲ぐることはできぬ、如何に貧苦に迫つてもそれが爲め意志を挫くやうであつたら寧ろ死んだが増なくらゐで、俺は不肖ながら生きる爲に畵をかきならつたのではなく畵をかく爲に生きてゐるのだ、大工や仕立屋の職人稼業とは譯がちがふ、例ひ修業最中にした處で人から依頼されて書いてやつたものに一枚にても心に向かぬまづいものを殘したくはない、技術家などと云ふものは其天職の前には一身を犧牲にしてかゝらねば成功されないもので、どうも物質の慾望に滿足することが出來ない代りに、又物質的の快樂に數倍した趣味と云ふ精神的の逸樂がある、立派な家に住いたい美衣美食をしたい、是は普通一般の人情だけれど、俺なぞは例へ出來ても那麼ことは眼中にない、まして那麼劣等な欲望の爲に志を屈して職人根性となりさがるやうなことができうるものか、俺はお前の云ふやうに門前に車が駐

らないでも、馬車は愚か手車へ乘廻さないでも澤山だ、家も是で足りれば衣食も此儘で不足はない、興湧きて覺えず筆を手にし心の行くまゝ山や川や人物や何でも存分に出來上つて我知らず微笑む時の愉快は、千萬圓の金を得たより遙に愉快で、擾々してゐる世間の俗物等此趣味が分るものではない、人の性次第で畫に表はるゝ處も又其通り、夢にも賤しい心を持つたら自とその畫も賤しくなつて、くよ〳〵心配事を胸に疊んで碌な畫が」できるものか、それは俺も依然人間だから此の苦しい逆境に幾干暢氣だからとて腹に心配がないではない、大にゐる、非常に心を痛めてゐる、けれども思つたばかりで其時が來なければ何とも始末のつけやうがなし、それに又那麼心配事の爲に心を傷けたりなぞしては反て技術の爲に大に不覺だから、可成は自ら忘れやうと努めて、晩に寢てからなぞも特と心を山や海邊や景色のいゝ境に馳せて慰むくらゐ、本來ならお前は俺が若し貧苦の爲に志を曲げるやうなことがあつたら意見をしてくれるが至當で、昔夫が節を賣らんとするに自害して迄諫めた貞婦の例は幾干もある、俺が志を曲げるのは昔の武士が節を折るのと同じ道理で、俺は始め豈敢お前ほどのものが貧苦の爲に夫へ其意志を屈させやうなぞと云ふ考の女とは聊か信じてゐなかつた、些し酒を飲過ぎたと云つては德利を衝ころがす、友人が些し長々話してゐれば俺が吩咐もせぬに特其處にしやくり出て貴郎は例の處へ御出かけになりますか、最早何時ですよなぞと故意歸へれと云はないばかりの謎をかける、退屈して暫く横になつてゞも居ればやれ仕事をせぬの怠けてゐるのと囂しく騷ぎ出す、衣裳の破れを特と見せびらかして貴郎は女房子供に這麼みすぼらしい服装をさせて迄御酒が飲みたうござんすかと突かゝる、二言目には自分は素裸になつて着る衣服もないの、這麼貧乏する位なら死んだ方が增しだの、昔の友人や知己へ合はせる顏がないの、何に彼につけて出て行の離別してくれの、此家は誰のお蔭で今日迄生活して來たかのとそれは其れは一々聞くに堪えない程の愚痴を云ふ俺を罵詈する、それでは折角お前の盡したことが反て仇になつて俺に

面白くない思ひをさせるばかしでもお前の損さ、さう何も騒いだとて急に逆境がぬける譯ではなし、又第一近處に對しては見つともなくてしやうがない、お前も覺悟の上で畫家の女房になつたからは些とやそつと物質上の不足不滿は忍んでくれなければ困る、裏長屋の嬶ではなしお前も相當な教育を受けた女ではないか、今些し沈重の態度を取つて貰いたいものだと賺むるに、お澤は首を打掉りながら膝行寄り、馬鹿なことを仰い、落着いて居たくても差詰め明日は什麽なります、貴郎の有仰ることは人間並に生活して行く上での事、此の態で畫師の女房の心持も何もわるものですか、妾が貴郎がお酒ばかり召上つてゐるのを默つて見ては居られません又一家立行きのできない塲合に怠けてばかしゐらつしやるのを其儘に打棄つてはおけませんよ、やかましと云はれるのが御厭なら酒もお止めなさい、怠けずに勉强してください、それが出來なければ這麽家に辛棒したからつて何の見込はない、末始終餓死にするくらゐが落だ、だから妾は御暇を戴きます、はい離緣をしてください、戴くものを戴けば只今でも出て參りますよ、何だ、人を馬鹿にするのも大槪にするがい、、幾干暢氣だからつて貴郎のやうな人が世間に又わるものか、此儘では妾は第一命が恐ろしい、此頃のやうでは氣でも狂ひはしないかと自分ながら心配するくらゐ、元々のやうに獨り暮したが幾干氣樂だか知れはしないと言募るを、秋谷は冷にじろり視詰めて、無理に離別して吳れと云へば仕方はないが、お前は俺が畫の上の技術に愛想がつきて出て行きたいのか、但しは俺の心がけが氣に喰はないで一生苦樂を共にすることが出來ぬと云ふのか、或は貧苦の爲にやりきれない爲だからか什麽だと訊ねれば、お澤は憎さげに目をむき出して、はい、何も彼も氣に入りません、到底も見込が立ちません、第一畫家など云ふ意氣地のない人間からが氣に喰はないと言つて退けしが、秋谷は靜に打頷きそれなら、お前の望む通り如何にも離別をしてやらうと言つたきり、後はお澤の怨みつ怒りつ泣き騒ぐを見かへりもせず起上り、自己が書齋に引入りて間も無く聽ゆる鼾の聲雷の如くなりし。

其翌日お澤が磯邊の家へ出行きて跡に、主人の秋谷は子供と共に何方へ立去りしか其姿を見失ひぬ。（完）

乳母車

（一）

國木田はる子

「鬼はそと福はうち。」
と言ひながら紅白の金米糖を座敷じうへ、撒散らして遊んで居るのは六ツばかりの女の子。其の側て仕事を仕て居た祖母は、
「千代ぼうや甘い物を座敷に落して置くと、蟻が上つて來るから、撒散らしては不可ませんよ。」
「ハイ。」と返事は仕ながらも、やッはり福は内をやツて居ると、椽側を人の通る足音が仕たので、障子のガラスから覗いて。
「アラ母ちやん何處へ行くの、坊も連てッて。」
「ぼうはお留主居してお居で、お土産を買て來てあげるから。」
此樣言つて行きすぎ樣と仕た母親の袂へ、
「イヤぼうも行くの、道でだゝをこねないから連てッて頂戴よ！、」
と早や泣き聲で縋る時、
「急ぎの用でなければ連てッてお遣な、」
と祖母の言葉に、口のうちで何かつぶやいた母親は、
「連てッてあげるから、其の金米糖を皆なお拾い。」
「ハイ。！」と千代ぼうは大急ぎて拾い始た。瓢子形のガラスの小瓶へ粟粒ほとの金米糖を、彼方此方から拾い集めて來て入るのだから、中々手間が掛るので。椽側に立て待て居た母はじれ出して、
「未だかい早くお仕なね。」
「待つて頂戴よ！。」と一生懸命で拾つて居る際を見て、置いて行てうとする母親に。
「待てお遣よ。」と聲を掛けた祖母」
「待て居ますよ。」と言ひ捨て母親は茶の間へ入つて行つた。やつとの事で拾い終つた千代ぼうは。
「おばアさん預かつて置いて頂戴よ。」
金米糖を祖母に預けて、

「サア母ちやん行きま仕やう。」と茶の間へ來て見ると、母はおぶつて居た千代ぼうの妹を下して、乳を呑ぜながら煙草を喫て居た。

「最早よしたよ。」

「何故、ぼうは皆な金米糖拾つたの、サア行きましやうよ――。」と母の肩へつかまつて顏を覗くや、

「煩いね――、最早行かないッてば。」

と怒鳴られて驚ろいた千代ぼうは、目をねむつて可愛い丶手で自分の顏を押へたが、

「御免なさい。」と泣き出して祖母の方へ逃て行つて了つた。

（二）

「千代ぼうも此方に居たがりますし、私も急に淋しくなつて嫌ですから、當分此方で預かつて置てうでは御坐いませんか。」

と言ふ祖母の言葉に祖父は、

「私だつて千代を手離すのは嫌だが、能く考へて見ると一所に居てさへ、お前にばかり千代を世話させて、自分は碌に關はないのだから、當分のうちでも離れて居ると段々親子の情が薄くなるばかり、そうすると後々千代も親達も兩方の爲に惡いから、矢張千代は彼方へ遣つて「時々宿りによこして貰うではないか、さう仕た方が私は可いと思ふ。」と孫の行末を心慮ふ祖父の言葉に、

「ではそを致ま仕やう。」と祖母はしぶ〳〵ながら同意したのである。

千代子は母の十七の時に生れたので、祖母は初孫の可愛さと、年のゆかぬ母に代つて人手に掛けず「母は只乳を呑せるばかり、祖母は夜もおち〳〵眠らず千代を育てた、年はゆかず一人娘の我まゝにそだつた母は千代を人の子でゞも有るかの樣に、祖母にまかせて遂うか〳〵と千代子が五ッの時妹は生れた。自分が手塩にかけて見ると小供は可愛いゝもの、母が妹を可愛がる事は一通りでない。が如何いふものか相變ず千代子は餘り可愛いがらない、千代子も母には直き叱られる

ので、自然お祖父さんお祖母さんと、祖父母にばかり着きまとふので、「今の樣では段々親子の情が薄くなるばかり。自分等は老前の短かいもの後に殘つた千代が親子の親みが薄くては、如何にか心細い事であろう」と、此處へ氣の着いた祖父は思ひがけぬ心配が出來たのである。

處へ兼て千代子の父の通ふ役所へ此處からは行歸り三里の道。雪の朝雨風の日は難儀なれば、役所の近處へ若夫婦は別居したいと言ふ話の有つたのが、いよいよ定まつて此の頃別居する事に成つたので、可愛い丶孫を手離し兼る祖母に、自分も手許に置きたいはやまやまなれど、只可愛い丶孫の行末を計りて若夫婦に千代子を着けて別居させる事を祖父は主張したのであつた。

「アラ千代ぼうのお簞笥を何如するの。」

引越の當日となつて兼て千代子の衣服入と定まつて居る、三ッ引出しの小簞笥が椽側に運び出されて、手傳ひの男はこれを荷車へ積もうと仕たので、千代子は驚いて其の男に問ひ掛けた。

「彼方へ持つて參りますの。」と男の答に、

「ぼうはお引越仕ないだから、持つては嫌だよ――、おばアちやん〳〵ぼうのお簞笥持てッて仕まうよ――。」と泣き出した、聲を聞きつけて奥から出てきた祖母。

「ぼうは何を泣くのだへ。」

「ぼうはお引越仕ないの、お宿りに行くのだからお簞笥持つてッては嫌だよ――。」と泣きながら言ふ千代子の言葉を聞き取つた祖母は、當惑の面持て何と返事も直ぐには出す、暫時して、

「困つたね――」と吐息をついた。

「ぼうはお祖父さんの處に居るの、母ちやん處へ行くのは嫌。」と聞きわけの無い千代子を一寸お宿りに行つて直き歸つて來るのと、よう〳〵欺して親達と一所に行く事を、聞きわけさせた此のやさき、又だゞをこねられてはと、

「ぼうや好い物を上げるからおいで。」

荷車の上　簞笥に心をうばはれて居る千代子をやつと欺して奥へ連て入つた。

五十稻荷の緣日、勸業場、人形芝居と、毎夜の樣に親達に連られて、珍しい物を見たり聞いたりするので千代子は別居して當座の樣にお祖父さんお祖母さんを言はなくなつた。が日が暮れて寢る段になると、必ず祖父母何如かと一所に寢たのを思ひ出し、妹が母と一所に寢るのを見て、

「まアちやんは浦山しいねー―。」と寢る時には必ず此樣言つて、つめたい床に小いさくなつて寢て仕舞ふ。

此の有樣を若祖父母が見たら、わけても孫に目のない祖母は、千代子の姿の目前にちらついて、永き夜も眠むらで明すで有らう。

母や女中に折々連られて來る千代子に、遂口が滑つて祖母が、

「ばうや御馳走仕て上るから、お宿り仕ておいでな。」

と言つても、

「イヤ、お家にも御馳走有るよ。」と言つて決して、「お宿り仕やう。」とは言はない、此樣なると自分のもの、樣に思つて居た千代子を、人に橫取りせられた樣で、祖母は好い心持はせず此樣に早く親達に馴染なら最うちつと此方に置けば可かつたに。お祖父さんが餘りとりこし苦勢をするものだから、嫌でたまらぬのを手離してつまらぬ事を仕たと、祖母は心のうちで愚痴の糸をくぐらかす。祖父も、

「ばうはお家へ歸るの、お宿りするのは嫌。」と言ふのを蔭で聞いて、老の身の情ない樣な心持もするが、又思いの外早く千代子が兩親に馴染んだのを見て、ヤツト心を安んじた。

（三）

千代子は近處の小供が學校に通ふので、私も學校に行きたいと兩親にせがむので、丸六ッには未だ間の有る七ッの春近處の寺古屋流の學校へ上る事に成つた。下女が片手に机と硯箱片手に大きなお菓子の包を持ち千代子は手習草紙に折手本、母は妹の手を引いて、お

弟子入に出かけた。

　七八十人ばかりのお弟子に先生は只一人、八疊ばかりの離れ座敷で弟子に更る〲讀書算術を敎えて居る足の入場も無い程に机を並べて手習を仕て居る弟子たちの、監督役は憂し相な先生の奥様、わんぱく盛りが、

「私の頭を打ちました。」

「誰さんが私の筆を取りました。」と言着け口を仕たり又女の弟子たちが始はこそ〲の話聲が段々大きくやかましくなるのを、皆さんお靜になさいと制して居る。

「千代子は先生から弟子たちに引合はされて明日席を定めて上ますと、其の日は椽側に机を置いて、先生が草紙へ白墨でいろはと大きく書いて下さつた上をなぞつてやつと五六枚。其のうちお晝に成つたので先生の奥樣は、千代子が持つて來たお菓子を二ッ三ッづゝ弟子だちに別ち與へ、千代子には今日は最早お歸りなさい、明日からは勉强するのですよと、お菓子も澤山もろうて、千代子は嬉し相に家へ歸つて來た。

明日からは近處の小供が千代ちやんと誘ひに來る。千代子は草紙の包をしよつてお辨當をぶらさげ、雨の降る日も雪の日も休まず學校へ行つて、顏も手も墨だらけ、竈でひる寢をした猫の樣な顏を仕て歸つて來る。

　或日何時もは外から、

「母さん只今。」と勢よく駈けこんで來るのが其日はおとなしく上つて來て。

「母さん只今。」と手をついておじきを仕た、

「おや今日は大層靜かだね。」と母はお八ッの菓子を千代子にくれた。

「有難――」と禮を言つた千代子は自分の遊び場なる部屋へ行こうと仕た時、外から妹をおぶつて歸つて來た女中は、千代子の姿を見るといきなり。

「奥樣お孃樣は此の間學校で、いゝおずるをなさつて先生にお叱れなさいましたとさ。」

「千代お前何故そんな事をするの、まア此處へお出。」

と呼び止られて。

「私おずるなんぞ仕やしませんよ。」と言ひ譯をする千代子。

「それでも先生に叱られたで仕やう。」

「…………」千代子はだまつて居る。

「返事の出來ない處を見ると矢張仕たのだらう。」

「だつても私仕ないのだもの。」と千代子は泣聲、

「其れでも仕ないものが先生に叱られる譯がない、父樣がお歸りに成つたら言付けるよ。」

「母ちやん言付けてはいやよ。」

「其れから未だ今日ゴムまりを、火鉢へ落して燒いてお仕まい成さいましたつて。」

「マア昨夜買つてやつたのをかへ。」と驚ろく母。

「ごめんなさいよ――。」と千代子が逃出す機會に袂から、燒けてげたゴムまりがころけ出した。此れを見た母親は、

「學校へ持つて行かない約束で買つて上たのに、お母さんの言ふ事を聞かないで、サア最早かんにん出來ない。」

と立上つていきなり千代子の襟がみをつかんで、泣いてあやまる千代子を戸棚の中へ入て仕まつた。

「御めんなさいよ――、乳母やあやまつておくれよ――。」ととん〱戸棚の戸をたゝいて泣けども、

妹びいきの下女は、

「小孃樣も母さんの言ふ事をお聞きなさらないと、姉さんの樣に叱られますよ。」と平氣で居る。

垣をへだてた前の家の女房が、聞てへよがしに、

「又千代ちやんが叱られて居るよ、可愛い相におしおきも可いかげんにするが可い。騷々しくつて近處迷惑だ。」と言ふ聲を聞いて母親は、

「大きなお世話だ井戸端會議の議長。齒糞だらけの口から出る泡が井戸へ飛込んで、其の水を呑まなけりやならない近處こそ誠に可い迷惑だ」と口のうちでやり返し、

「ばアや出してやりよ。」

「サア母さんにおあやまりなさい。」と戸棚を開ければ泣きながらころがり出る千代子。

「お母ちやん御めんなさい。」とあやまつて、こそ〱自分の部屋の方へ逃て行く足元へ、

「最早如何ら欲がつても買つては上ないよ。」と母は大きな燒穴のわるまりをなげてやる。

北むきの薄暗い部屋に千代子は例のまアりを持つてしく〳〵泣いて居たが暫時くして、

「皆がいじめるから、お祖父さんとこへ行かうや。」

急に祖父母戀しくなり、千代子は、夕方のいそがしさに、立働いて居る母や下女のすきを見て、ちよろりと外へ出て、ぶらり〳〵と牛町ばかり行くと、向ふから大きな犬が來た、ワッと驚ろき後へ引返して細い路地へ逃げ込んだ。犬が通りすぎてから、そろ〳〵出掛けた千代子。

「左樣々々千代ちやんは一人でお祖母さんの處へは行かれなかつたけと」。悲し相につぶやいて立止つた。

千代子の家は神田猿樂町、明神下のお祖母さんの處へ行くには、何時も駿河臺を通つて行くが、其處には大きな可怕い犬が、澤さん居て、少しぐず〳〵道を歩いてゝも居ると、直き吠て出ゝ來る　千代子は其れが何よりきらい。おばアさんの處へは行きたいが犬の事を思ふと、道は知つてゝも行く事が出來ぬ。途方に暮れてぼんやり仕て居た千代子の頭をおさへて、

「ぼうや何を仕て居るのだへ。」と言ふ人が有る。

「アラお祖父さん。」と千代子は驚ろきも嬉びもして、其人にかじり付いた、

「お祖父さんぼうはお祖さんの處へ今行く處なの。」

「一人でか。」とお祖父さんと呼ばれた老人は驚き顏で千代子に問ひかけた。

「母ちやんが坊を叱つてばかり居るんだもの。」

「お前が惡戲を仕たり、言ふ事を聞かない　からだろう。」

「…………、」

暫時返事を仕なかつた千代子は、

「ぼうおずるなんぞ仕ないのよ、だけれどまアま焦したのはぼうが惡いの。」

祖父には千代子の言ふ事は、何の事だか解らないので

「おずると言ふのは何だ、又如何してマリを焦したの

だ。」

二三日前の事、千代子が學校で一札の草紙を習い終つて、先生に見せると一枚習つてない紙が有つたので、是は如何したのですと、先生に聞かれた、千代子は知らずに一枚餘けい開けて、習つたのでおずるを仕たのでは無いと言ひ、隣の机の子もさうですと言ふので、此れからは可く氣を付けてお習い成さいと、言はれた事が有つたのを、女中が何處からか聞きちがへて來て母におずるを仕て先生に叱られたと、言付けたので母に叱られた事や、毎日々せびつて、やつと買てもらつたゴムまりを、母の言ふ事を聞かず學校へ持つて行つて火鉢へ落し、母が怒つて戸棚へ入たので、祖父母が急に戀しくなりそつと家をぬけ出した事を千代子はべそをかきながら、祖父に語り。

「サアお祖父さんの處へ行きま仕やう。」

と千代子は前へ立つて歩き出した。

「マアお待一度お父さんやお母さんに、ことわつてから、ぼうを連て行こう。」

「其れでは可い衣服着て、玩具持つて行きま仕やう」

「母ちやんお祖父さんが。」と千代子は外からとなり込だので、

「おや千代ちやんは何時外へ出たのだへ。」と出迎に出た母を驚かせた。

「お父さん麹町の方に好い家が有るので、其處へ四五日うちに引越うと思ひますから、千代を當分預かつて戴きたいのですが、實は明日わたりお願に上ろうと思つて居ました處、」

と早速千代子の母は祖父に此様言つて、祖父は千代子が叱られた矢さき、宿りによこして呉とも一寸言ひだしかねて居た處、母の言葉を渡に舟と、

「其れでは今から連て行こう。」

「其れでは如何か願います。」と千代子は祖父母と別居してから、半年目の此の夕べ、嬉び勇んで大事の〱玩具の箱を持つて、明神下へ宿りに出掛た。

「マアぼうや可く來たね、お母さんがぼうを戸棚へ入たつて、マア可愛相に今度お母さんをお祖母さんが叱

つて上るよ。」

「お祖母さんぼうは何時迄もお宿り仕て居るよ。」

「アヽ可いとも、お前の好な草双紙も澤山出て居るよ。」

「さう、嬉しいな、今夜は三人で寢ましやうね。」

「アイヨ、」

此夜久しぶりて千代子はあたゝかい夢を結んだのである。

* * * * * *

明神下の家に有る時は千代子は地主樣のお孃樣、誰一人頭の押手もなく廣き庭、舟遊びさへ出來る大きな池、春は水汀に藤の花咲き秋は錦織しく築山の景色面白く、千代子の好な柿も實れば、葡萄も有る。

宿りに行つた翌日から千代子は近處の小供を集めて庭の隅の倉をまゝ事の本陣とし築山のおいなり樣へ、お參りを仕たり池の目高や鮒をすくつて魚屋のまね。お花見だ、摘草だと朝から晩まで、遊びくたびれて夜は祖父や祖母の膝を枕に、罪の無い寢顔見る祖父や祖母の心の中は如何に。自分等の年を忘れて只孫の脊丈のびるを樂みに、又祖父母の元にての千代子は言ふ事も聞けば、剛情も張らず温順しい善い子。だが何故父母の元では、朝から晩まで叱られ通し、お灸もすえられゝば戸棚へも入られるのだらう。千代子は祖父母の元では善い子、父母の元では惡い子。千代子の心には何故此の樣な、裏表が有るので有りましやう。（をはり）

昔の女と今の女

男子が今の如く腐敗して今の如く、我儘なる、而して女子が今の如く崇高（男子の爲め操を破りし者もあれど）にして今の如く因循なるは之れなく候近き程に男子も女子も同一視せらるゝは洵に幸かなる事にはあれど、古へを温れて新しきを知るの訓に倣ひ史籍に徴して神代に於ける神女を見るに長くも神功皇后の御成績あり、持統天皇の世に於ける燦爛たる文華の基をなせるものは男子にてありしか又は女子にてありしか顧へば僞に男子を凌ぐ女子少からず候、更に平安時代の女流を見るに、枕草紙は清少納言によりて書れ、赤染衛門は榮花物語を遺し源氏物語の大著述は紫式部の手になれり、其の他小野小町あり、和泉式部ありつぎては巴、板額、政子、淀君等一々枚擧に遑あらざる事は誰しも御存じの御事かと存じ候、

貧婦の貞操

若柳燕孃

國亂れて忠臣現はれ、家貧しくして孝子現はる、とか云ふ事を申します、私は決して世の中に變事あることを好む譯ではございませぬが、何か一つ變つた事が有ると、御器量の有る方は名聲を博する事が出來ると心得て居ります、斯う申すと大變大きな事を申すやうでございますが、此頃は大分表面を飾ることが流行りますやうで、大層立派な御扮裝をして如何なる上流社會の奥方かと思ふと、豈圖らんや其中には自由癈業の婦人などが居ると云ふ有様でございます、又良人は毎日遊んで歩いて、良からぬ慰み事などをして居りますが其細君は家で一生懸命に内職をして稼いで居る者もございますから、決して人は一を以て論ずることは出來ないと思ひます、

名月は座頭の妻の泣く夜かな

實に名句ださうでございます、私は風流の道は存じませぬから其意味を解することは出來ませぬが、一寸聞いても其處へ情が浮ぶかと思はれます、月が皎々と冴えて居つても己れの良人は兩眼とも失つて居る爲に此月を見ることが出來ない、此時にア、己れの片方の眼を失しても良人に一眼を開かせて此月の美くしい所を見せたい、是は女房として左もあるべき事と思はれます、私のやうな無心の者でも先達て盲啞學校へ拜見に參りました時に、丁度字の御稽古でございました、其中に誠に氣高い一人の御方、兩眼盲いて誠に御氣の毒の御樣子で、其御方が川と云ふ字を習つて御居での時に先生に向つて、川と云ふものは水が淸く流れて居りませう、自分もどうか一生の中には見たいものだと仰有つた時には、如何な私でも儘になるなら一眼なりとも御見えになるやうにして上げたいと云ふ感が浮びました、

女房『如何したんだエ、大變に歸りが遲いから私は心配して居たんだよ、急に眼が見えなくなつて仕方がなしに馴れもしない商賣を始め、若しや途中で怪我でもし

やアしないかと、お前さんの歸りが少しでも遲いと私は眞個に心配するんだよ……何だつて家へ入らないで其處へ立つて居るんだネ、サア早く此方へお入りなさい、今ネ御隣家の伯父さんが餘つたからと云つて饂飩を二つお呉んなすつたよ、お前さんが歸つたら食べさせやうと思つて居た所で……何を其樣に考へて居るんだよ、此頃は一体に不景氣なんだから、療治をする御客が無いと云つて其樣に心配するには及ばないよ、それとも他に心配の事があるなら、膝とも談合と云ふことがあるから、私に話して聞かせてお呉れ　亭主『お前にばかり苦勞を懸けて其上斯樣な事を言つちやア濟まないが、今夜改めてお前に頼みたいことがある、亭主の言葉なら何樣な事でも聞くと云ふ、誓言と云つちやア大仰だが、一つ受合つて貰ひてエもんだが如何だらう　女房『訝しなことを言ふぢやアないか、何も夫婦の間柄で其樣に改まるには及ばないやネ、亭主の言ふことを聞くのは女房の當然、お互ひに苦勞を仕合ふからこそ斯うやつて長年の間辛抱して居る、今更其樣な水くさいことを言つて、何樣なことだか話して御覧ナ、亭主『お前が然う言ふなら話をするが、俺も眼の明いて居る時分には何うにか斯うにか暮して居たけれども、不圖性の惡い眼病に罹つて生れも付かねエ盲目となり仕方がなしに按摩上下と杖に縋つて療治に出るが、長年やつてる商賣人でさへ今日此頃の不景氣に好い收入は無いと云ふこと、况して素人の俺に中々好い錢の取れやう道理はねエ、お前にばかり始終苦勞を懸けて居るが、實は此間から心配になつてならないのは、他の事ぢやアねエが借金の言譯だ、普通の月と違つて今月は十二月だ、縦令一圓の所は十錢でも入れて後は何時まで待つて呉れと頼まなけりやア、先方さまだつて默つて待つちやア呉れやアしねエ、けれども何う考へたつて錢の入つて來る的もなし、如何して宜いか此間から心配で堪らねエのだ、實は今夜も寧そのこと早く寢て仕舞はうとは思つたが、お前が一生懸命に內職をして居るのに、俺が怠けちやア濟まねエと戸外へ出は出たものゝ、夜風は身に染みて寒さは寒し、誰一人とし

て呼んで呉れる者はなし、悄然家へ歸つて來たが、何ばお前の前でも餘り面目なく、それ故何だか閾が高いやうな氣がして戸外へ立つて居たんだ、寧そのこと死んで仕舞つた方が宜いとも思つたが、さうすればお前に難儀を掛けるやうなものだから其樣なことも出來ず唯やきもき心配をするばかりだ、それに付て話と云ふのは外ぢやアないが、毎も俺を呼んで下さる大和屋さん、昨夜も呼んで下すつて御隱居の療治をして居ると其處へ歸つておいでになつたのが御内儀に御孃さん、何處のお歸りかと思つて段々お話を聞くと今日は歌舞伎座へ芝居見物、初めは俳優の評判をなすつて居たが段々と衣服の話になつて、此衣服は何程掛つた此帶は何の位と、俺は眼が見えねエから品物の善惡は分らねエが、何でも大した品物らしい、アヽ有る所には有るもんだと思つて不圖胸に浮んだのは、長い浮世に短い命、此樣に苦勞をして居るよりは、今夜にでも大和屋さんへ密と這入つて、御隱居の部屋にある金目の物を盜んで來て、それを賣るなり曲るなりして、此の苦しい所を免れやうと思つたが、家の中の樣子は眼が見えねエでもチャンと寸法は分つてるけれども、入口の戸や何かをガタ〳〵やつてる中に家の人に眼でも覺されては何にもならねエから、賴みと云ふのは此處だ、誠に濟まねエが入口の所だけお前が開けて俺を家中へ入れて呉れヽば、家中へ入つてから　仕事は屹度旨く俺がして來る了簡だから、此樣な亭主を持つたのがお前の不運と諦めて、何にも言はず俺の言ふことを聞いて是から直に一緒に行つて呉んねエ、サア早く支度をして伴れてつて呉んねエ」と早や立上つて出掛けやうとする、女房は亭主の言葉を聞いて大きに驚きましたが故と心を落着けて　女房「マアお前さん一寸お待ちよ、何を其樣に騷々しくするんだよ、隣家近所の手前もあるぢやアないか、靜かにしてマアもう一遍お座りよ、ぢやア何かエ此の年暮の遣繰が如何しても着かないから、それでお前さんはアノ盜賊に入る了簡になんなすつたのかエ、それも然う了簡を決めたんなら仕方がない、連添ふからには是が非でも言ふことを聞くのが女

房の役、私だつて随分借金の言譯をするのは厭だからそれ程までに考へたのなら私も一緒に行くが、併し急いでは事を仕損ずると云ふから今夜はお止しなさい、私が能く手筈を考へて置くから明日の晩にしてお呉れナ……ナニ明日になると厭だつて言ふだらうッて、何で其様な事を言ふもんかナ、サア丁度饂飩が温たまつたから、之を食べて今夜はお寢なさい」如何に無教育の婦人でも自分の良人が盗賊をしやうと云ふ悪い了簡を起したならば、之を止めるのが當然でございますが然るに一言も諫言などはしませぬで、其儘に宥め賺して其の夜は良人を寢かせて仕舞つた、

さて翌日の晩と相成りまして時刻を計り　女房「それぢやアお前さんモウ支度をして出掛けませう」と、夫婦は身支度をして日頃恩顧になる大和屋へ忍入らうと云ふので家を出立でました　女房「お前さん氣を注けてお歩きよ、私が附いて居るから決して心配しないで度胸を据えておいでよ……其處の泥溝板が危いから氣を注けて……　亭主「オイ〳〵まだ來ねエのか、大變遠いやうだが道を間違へやアしねエか、平常來る時は此様に遠くはねエやうに思ふが……　女房「道なんざア間違へやアしないよ、平常と違つて斯う云ふ事をしやうと思ふんだから遠いやうに考へられるんだナ、私も一生懸命だから心配おしでないよ　亭主「けれどもお前だつて俺だつて今夜始めてなんだから、若しや遣損やアしねエかと思つて心配でならねエ　女房「大丈夫だよ……ソラもう來たよ、だが私は今熟々考へたがナ、眼の見えないお前さんを家中へ入れて、若しや捕まりやアしないかと思ふと心配でならないから、寧そ斯うなりやア構はないから私が入らうよ、ナニ私は眼が明いて居るから旨くやつて見せるよ。お前さんは此處に待つてお居でよ、歩いちやアいけないよ、私は直ぐに出て來るから……」と亭主を其處へ待たして置き、女房の姿は見えなくなつた、暫時經つと何處を何うして持つて來たか、大きな葛籠を背負つて參り　女房「お前さん嘸ぞ待遠だつたらうナ、旨く葛籠の儘持つて來たよ、私にやア重くつて迚も駄目だからお前さん背負つてつてお

與んナ　亭主『アヽさうか、それは何にしても有難エ、能く持つて來ることが出來たナ、ドレ俺が背負つて行かう』と、先づ是で借金の言譯も出來ると考へて、嬉し喜びまして葛籠を背負ひ、少しも早く家へ歸らうと手に手を取つて往來へ出ると、惡い事は出來ませぬもので、御通り掛りになつた警官が二人の擧動を見て不審に思召され、直ちに其場より警察署へ拘引せられました、さて其の翌朝署長室へ女房を御呼出しに相成り『其方は實に不心得の奴だ、良人が惡い了簡を起したならば意見をすべきが當然ではないか、然るに共に謀つて他人の家へ忍入り盗みを働くとは何事である、實に不屆千萬な奴だ』と非常に御叱りになると、女房は面を上げて　女房『私の良人は昨日から少々氣が狂つたらしう存じます、昨晩も當所へ御留置に相成り、何うなることかと心配を致して居りましたが、それでは良人が盗みを致したとでも申上げたのでございますか、それは飛んでもないことで、斯樣な汚い姿をして居りまして況して深夜に大きな物を背負つて歩いて居りますれば、他人樣の物を盗んだらうと云ふ御疑念の掛るのは御道理でございますが、縱令斯樣な賤しい姿をして居りましても、他人樣の物を塵一つでも盗むやうな私夫婦ではございませぬ、良人は氣が狂つて居ります爲に左樣な跡形もないことを申上げたのでございませう、昨晩も深夜になりまして何と心得ましたか大きな物を背負つて戸外へ出やうと申します、憖じ逆つてはいけまいと存じて、良人の言ふ儘に致し、併し御近所へ御迷惑を懸けてはならないと私が附いて參りましたので、此處にございます品は皆私共の物でございます併し御疑念がありますなら大和屋さんをお呼出しになつて御調べ下されば分らうと存じます、甚だ御手數で恐入りますが、何うぞ御取調の程を願ひたう存じます』と言葉も明かに申上げましたから、こゝで署長さんも一應道理のことゝ云ふので、直ぐに大和屋の主人を呼出して調べると『前夜私共へ盗賊などは入りませぬ、近頃は新聞にも大分盗賊沙汰の記事が載つて居りますから、私共では是まで夜分一回の夜廻りを當今は三回

に致しました、昨夜の如きは犬猫たりとも入つた樣子はございませぬ、又斯樣な品は私共少しも覺えはない物で、全く關係のございませぬ品物で……』と大和屋の主人は明白に申上げた、して見ると女房の申す通り良人は精神が狂つて無根の事實を申したのであらう、然れば何の罪も無い者を一時間なりとも拘留して、人權を束縛することは出來ませぬから、十分御諭しの上直ちに放免と云ふことに相成りました。

さて夫婦は無事に歸宅を致しましたが、良人は何うも不思議でならないから　亭主『アヽ惡い事は出來ないものだ、お前が葛籠を背負はして呉れた時は、先づ是でもつて借金の言譯が出來ると、嬉しく思つた間もなく巡査さんに呼ばれた時はブル／＼身体が顫へ出した、是は明日ッから監獄へ行つて赤い衣服を着ることか、俺は身から出た錆だから仕方がねエが、お前にまで苦勞を懸けちやア濟まねエと、御調を受ける時に何と言はうかと考へたが、何うも嘘つてエやつは出ねエもので、到頭白狀をして仕舞つたから、是はモウ仕方がない監獄へ行くことゝ覺悟をして居た所、何う云ふ譯だか家へ歸つて宜いと云ふこと、聞けばお前が署長さんへ立派に申開きをしたと云ふが、何と言つたんだか俺が安心するやうに話して呉んねエ　女房『マア／＼宜いから靜かにおしなさい、モウ自分の家へ歸つて來たんだから其樣に騷ぐには及ばないよ、斯樣な九尺二間の棟割長屋でも自分の家ほど好い所はない、お前さんは泣いて居るやうだが、其の淚が本當に出たのなら私は少しお前さんに言ひたいことがあるよ、實は昨夜私はお前さんに濟まないことをしたので、男と云ふ者は塲合に依つちやア朋友の交際で女郎買やお酒を飲むこともしなければならないが、お前さんが盜賊をしやうと云ふ氣になつたと聞いた時には、私はまるで腹腸を千切られるやうだつたよ、其の時に意見をする位のことは知つて居るが、短氣のお前さんだから、憖じ異見をするよりはと思つて其儘言ふなり次第になつて寢かして仕舞ひ、其の後で種々私が考へて、亭主に嘘を吐くと云ふのは誠に濟まないが、實はお前が眼の見えない

のを幸ひに、家の前の路次を五六遍廻つて家の前へ出て來て、昨夜お前さんが待つて居たのは家の臺所の前だよ　亭主「さうか、それぢやア自分の家の前に居たのか、さうして葛籠は何處から持つて來たんだ　女房「サアそれが塵も積れば山となると云ふ昔の人の仰有つたことは守るものだネ、女の手内職だから幾らのお金が殘るものぢやアないが、僅少づゝ殘したお金、貧乏世帯にお金で置いちやア使つて仕舞ふから、無いものと思つて晴衣とまではいかないにしても、お前さんの衣服を一枚二枚とポツ／＼拵へて置いた、併し家へ置いては贅澤の心が起るからと、實は御差配の御内儀さんに家の古葛籠へ入れて御預け申して置いたのだよ、それから昨夜はお前さんの心を直さうと思つてネ、晝間の中に御内儀に願つて、あの衣服が少々入用でございますからと言ふと、直ぐお渡し下すつて、數ある長屋の其の中でお前のやうな心懸の者はない、是は僅少だがお前に上げるからと紙に包んでお金を二圓下すつた、世の中には家賃ばかり高く取つて、雨が漏つても手入れもしない家主があるかと思ふと、中には斯う云ふやうな御親切な方もあると、私は涙を溢してお禮を申し、葛籠を戴いて密と家へ持つて來て置き、お前の心を直さうと思ふから自分の家の物を深夜などに擔ぎ出したんだが、惡い事は出來ないもので、往來へ出て一廻りして歸らうと思ふ間もなく巡査さんに捕まつて何も罪が無くつてさへも惡い了簡を起すと御疑ひを受けて一晩でも警察へ留められるやうなことになる、今朝も署長さんの御調を受けた時に仕方がないから、自分の良人のことを狂人だと言つて申譯をした私の心の中を察してお呉れならば、何うか是から後決して惡い心を出してお呉んなさるナ、稼ぐに追着く貧乏なし、正直の首に神やどると云ふ古諺の通り、一晩でも警察へ留められた事が身に染みたならば、是から心を入換へてお互ひに一生懸命に稼ぎ、眞正の道を守つたことならば、ナーニ借金ぐらゐは直に返せて仕舞ふし、軈ては樂をするやうにもなりませう、サア昨日御差配の御內儀さんから戴いた二圓のお金があるから、此金で

印ばかりでも御正月の支度をして、今までの事は水に流しお目出たく初春を迎へて、來年からお互ひに一生懸命稼ぎませう」と嚙んで含めるやうに異見をしたから、御亭主も見えませぬ眼に涙を浮べ、女房の前に手を突かぬばかりにして自分の惡い量簡を出したことを悔悟いたしたと云ふ、身には粗服を纏ひ、卑しい生活をして居ても腹の中は錦の如しと謂ふは、是等の婦人を指して申すのでございませう、貧婦の貞操と云ふ題を置いて申上げました一席談、先づ是にて結局と仕つります。

春興　　兼盛
世の中にうれしきものはおもふどち花見て暮す心なりけり

仝　　時忠
ひとゝせをさながら花になしはてゝ絕す櫻を見るよしも哉

盛花　　定家
高砂のまつと都にことつてよ尾の上の櫻いまさかりなり

仝　　西行
おしなべて花のさかりになりにけり山の端每にかゝる白雲

はな衣

上

露月女史

あゝ今日は早や四月の一日。妾が戀しい故郷に歸るのも、いよ〳〵今日となりました、本當に月日の經つのは早いもので、永年住みなれた故郷を、暫時離れて遙々と、この都に上つてから、最早や今日で、丁度丸一年になります。

顧みれば去年の春、その一月の半でした。妾が常に愛讀して居る、女學新聞の廣告欄で、女子美術學校の生徒募集のことを見てからは、是非共一度都に上つて、何かな修業がして見たいものだと、夢幻にも學校のことを心に描きましたが、併しまだ母様はじめ、兼て親しい友達にも、さる素振は少しも見せませんでしたが、我戀は色に出でゝや、物や思ふと人にまで、問はれて、今は餘儀なく、まづ母様に事の次第を打ち明か

して、長くとは申すまじ、たゞ一年の暇を賜はる樣にと、胸の思ひ草殘る處もなく、打ち明けての願に、一時はどうやら容されさうもなく見えた、母樣のお心の中も、妾の心の切なるを察し給ふてか、さらばと云ふて、肯きなされた時の嬉しさ、吾知らず胸も押しつまる計りに、喜びを湛えつ。さて上京と定まつて見れば、浮か〱日を暮らすもせんなき事と、戰爭をみかけて、矧ぐ矢ならねど、夜は遲くまで、朝も又、人よりは早く起きて、其日の務めを濟まし、隙を見つゝ書冊を開くのが常でした。

三月の光陰はや過ぎ去りて、彌生も半を暮らして、殘るは九日八日となりては、過ぎ行く一日が、何となく名殘惜しく、妾のみならねど、女心の狹く小さきにや、何とはなく心細うなりて。

思へば〱、永年住み馴れた、戀しき故鄕の山や河、起きては寐覺を浦の川邊に覺まし、寐ねては城山の夜嵐に、少なからぬ興を催したこともあり、さては同じ栽縫の友どちに別れる事さへ厭になり、夫れが追々募つて來ては、たつた一人の母樣や。又仲のいゝ弟が、傍に居なくなれば、朝になつても、さも物足らないでわらうまして、物淋しい夜は、どうして明かすことが出來やう。

親一人子二人、女と云へば妾一人、後は腕白盛りな弟ばかり、今妾が居なくなれば、母樣も定めし餘計な處に、氣苦勞もなさいませうし、弟とても又、喰物足らぬ感じをしやう。

學校の留守に籠の小鳥に、餌がなくなればとて、妾がいつも氣を付けてやり、泉水の水の世話まで手傳つてやることが折々だつた、あゝ此樣な美しい仲を、假令短かい一年でも、山河距てゝ百里の先に、袖を別れねばならぬかと思へば、如何にも心淋しくてならないので……。

明くれば早や三月の三十日、明日はいよ〱目出度い鹿島立だと云ふので、母樣は御親切にも、朝から色々お調度なされて、櫻の宮に、花には少し早いけれども妾の爲めに、門出のお祝をして下されました、いつに

變らぬ手加減のいゝお口取も、今日は妾は一向に甘いとは思はないで、只この櫻の宮の、花の盛りをも見ないで、夫れで知らぬ他郷に行くのかと思ふと、矢張り悲しいやら、又淋しいやら何とも言ひ様のない憂の雲が、胸一ぱいにはびこつて來る、だがこゝで弱い顔を見せるのは、母様はじめ弟や、お友達にも面目がないとわざと、まぎらして、笑顔で御馳走のお相手を致しました。

櫻の宮からは、道のりも少ない、亡き父上の御墓に詣で、しばし他郷に旅立つべき、そのお暇を申し上げ様ため、母様とたゞ二人で、素枯れた花筒の花をとり替え、心ばかりの回向をしつ、指折れば父上の世を去りましまして、早くもこゝに十歳、妾はその秋まだやつと六つでしたが、父様の枕頭に、御病氣の御見舞を申し上げると、苦しいなかにも、オゝ感心よ、心配しないで音なしく母様の云ふことをお聞き、父さまは今に快くなるから、と常には片苦しいお方が、わざ〳〵笑顔をつくろつて、却つて妾を慰めて下さいました其顔その聲、今も猶目に見え耳にきこえる様であるが、今度自分の旅立には、嘸や草葉の蔭から、お喜びだらうと、母様ともお談して、日の暮方に家へ歸つたが、之から妾の心は、大さう元氣づいて、父様の前に對しても、是非思ふた所をやつて見やうと、悲しさも淋しさも、大方は忘れて仕舞ひました。

夜になつてからは、明日の手調度に、二つの行李の荷造りを致し、途中で破損のない様にと、母様の御言付で、下男が力で麻繩を掛けて、体よく荷造をして呉れました、早くお休みと言はれて、臥床に入つたが、獨り默つて考えて居ますと、又いそ〳〵の幻想が浮んで來て、あゝ此の暖かい、着馴れた床も、今宵一夜を限りかと思ひますと、胸は張りさける様で、只モー泣き度くなりましたが、夫れでもじつと耐えて、わざと眠らうとすると、納戸の方で、クン〳〵と鳴く音があるわゝ弟の愛犬黒！、汝も一人で淋しいのか、明日からは又妾が居なくなるので、一入淋しからう、だが留守中も、相變らず門番をしてお呉れよと、心の中で犬を

慰め、只うつ〳〵としたばかり、夫れで最早や夜は明けてしまひました。

明くれば四月は朔日の朝、空は拭ふが如くに晴れ渡つてとうかすると、薄ら寒くて、風でも引きさうですから、早速お湯に入つて、身仕舞をし、近所や親類の家にも暇を告げて、御飯を食べにかゝつたもの丶、何とのう前途がせかれて、思ふ樣に食られません。

兎角して居る間に、モー出入の車が參り、妾はいよ〳〵家を出なければならない、今迄は奧の間において有つた二つの行李、夫れも何時の間にか車夫が持つて居るので、妾は母樣に向ひ、夫れでは暫く……』行つて參りますとの言葉は、とうしても出ませんでした。

さて車に乘ると、近所の人々が、五六人集つて來て、夫れ〳〵挨拶が御座いましたが妾は暇乞を言ふ樣な勇氣はなく、たゞ丁寧にお辭儀を致し、車夫がお送り申しますの聲と共に、早や身は隣の家をも離れました。目先の變る車の上では、家のことも心に浮かばず、只行先の不知案内なのに、詰らぬ氣を揉み、凡そ五時程を經て、その日の眞晝過、岐阜のステーションに着きました。

上りの滊車は、今少し經て着くべしとの話に、取り敢えず切符を購ひ、一つの行李は手荷物とし、殘れる小さきをば、車夫に賴んで滊車まで運んで貰ふこ丶とし漸く胸をなで下して、今は滊車の來るのを待つばかり』三時何十分で何座いましたらう、妾はとうとう車夫とも別れ、知らぬ人ばかり、大勢居る狹い車室の中に乘せられて、岐阜の地をすら去つてしまひました。

あはれ東海道百里、長亭短亭幾十驛をすぎて、翌日の曉方、目ざす新橋に、二つの行李を受取り、こ丶から兼て新聞や雜誌で見て居る、賑かな銀座通りを橫切つて、神田邊の眞に穢ない旅人宿につき、何より早くまづ例の行李を開いて、墨池と筆、夫れに又餞別として貰ふた端書を出して、取り敢えず安着の旨を母樣の元へ知らせてやり、皺になつた衣服を着替えて、ホツと一息して休みますと、急に初旅のつかれが出て、頭が重くなるやら、胸が迫つて來るやら、あゝ家に居たな

らば、こんな時には嘸や母様が……と、又しても家のことが、思はれてなりませんので、傍の障子を開いて、外の景色を見ましても、庭と云ふものは、只二坪か三坪足らず、覺束なげに咲いて居るえにしだの一本も、今はなか〳〵に生けて見やうとの氣もです、瓦の波に電信の線、何處を見ても様子が變つて、まことに心細くてなりません、で又障子を閉じて、じつと火鉢に身をよせながら一年三百六十五日、こんな處で暮したら、どんなにつらい事だらうと、思ふにつれて母様や弟、さては家の召し使、浦の川向ふの山までが、戀しうて堪まらない、羽わらば、飛んでも家へ歸りたいと、覺えず涙をこぼしました。

中

さて其夜は、母様が心をこめて、造つて下さつた、溫かい布團を敷いて、夜はまださのみ更けしとは覺えねど、獨り起き居ては、なか〳〵に思ひ草多しと、靜に体を横たえて、二日二夜、殆んどまどろみもせぬ精神に、やゝ安き休みをさせました。

流石に体の疲れて居る故でも御座いませう、心はいつしかうつ〳〵として、丁度滊車に乘つた様で、覺えず夢路の、旅をたどりましたが、さて其道には、見馴れた山川、顔知る人々。

大路を走る車の音に思はず、目を開けば、何とはなく勝手の違ふた様で、妾は又初めて異鄕にある様な、心地となりましたが、朝の光の快さに、胸を搔きむしらるゝ、つらき思ひも、今は打ち忘れて仕舞ひ、朝飯を濟まして、急ぎ身仕度を調へ、兼て願へる女子美術學校へと參りました。

校舍の摸様さては、其立派さなど、兼て見しこの校の規則書にありしと、少しも違はないので、何となく舊知の人々に逢ふた如く、心も勇み氣もせき立てゝ、入學の手續などなしつ、妾は比較的他の學科よりも、好多き刺繡科に編入を願ひました。

試驗なども、思ふたよりは易く、今日からは此處の寄宿舍に起臥して、同じ年頃なる多くの校友と、机を列

べて業を授かる事なれば、心は只前途の樂しみにのみ馳せて、露も家鄕のことなどを憂へず。

如何に淋しき山里なればとて、又如何に賑かなる處なればとて、住めば都の例に泄れず、知らぬ他鄕も、住み馴れて見れば、さのみ苦しきにあらず、思へば都に着きにし日、人知れず、幾度か袖を濡らした事の、今更不思議で堪まりません。

學業の忙がしきに、一月二月は、只夢の間に打ちすぎて、上野の山の花は、若葉となり、不忍池の蓮の露、何となう愛でたくされば、鶯の花の枝に別れて、杜鵑の雲間に叫ぶと思ふ間に、早も樂しき暑中休暇となりまして、同じ學び舍の友垣は、夫れ〳〵故鄕に歸りて、なつかしき父母さては、同胞に、逢ふべく調度し給ふに、妾も一度は歸りたく思ひましたけれども、僅に一年の修業なれば、此度は都に止まりて、學業の足らざるを補ふことゝ致しました。

國の母樣からは、絶えず寫眞を送れよとの御催促に、この休暇の節、はじめて寫し取りつ、吾ながら醜くしとは思ひましたが、屢々の御志もだすもせんなしと、送り上げし返事には、暫時見ぬ間に体も太りて、如何にも健康なるやに見受候、都には嘸や、御馳走の多からむと仰せ越されし嬉しさ。

瀧の川に紅葉見る隙もなく、いつしか年も暮れて、新らしい年を、同じく都に迎へ、歸らるべき日の、いよいよ近くなるを樂しみに、學業にも一入精出して、優りたる腕を得たしと望むも、母樣が手紙の度毎に、書き加えて下される、有り難き思召しを思ふての故でした。

年を迎えて、寄宿舍に雜煮を祝ひしも、早や昨日と過ぎ去りて、月も彌生、寒さも大方去りて、日は殊に長く、梅は散りしかど、彼岸櫻の、蕾催すも近きに有るべき頃、女子美術學校の試驗は、無事に修了して、妾は身に餘る修業の證書を戴くことを得た時の嬉しさ、顧みれば去年の一月、母樣の入學をお容し下さつた時と、同じでした。

わはれ一年、花にも月にも、へだてなく同胞と睦みし

數々の友にも袖を別ちて、一人この學び舍を去るは、如何にも名殘惜しと、妾は執着の愛情にはだされて、荷物調ふ手も、いと〳〵力が御座いませんでしたが、百里の彼方には、慈愛なる母樣、仲のよき弟が、今日や立たん、明日は我家に、姉樣が歸ると、首さし延べて待つて居るもの、思ひ出して見れば、一時も猶豫が出來ません、その日寄宿舍を出で、兼て親切なる敎えを受けた先生にも、一々お暇乞を申し上げて、車を急がせ、新橋の停車場へと參りました。

下

去年の今日今日、丁度こゝの停車場へ着いて、この長いプラットホームを、たゞ大勢の人々に揉れて通り、手荷物受取所で、長いこと待たされた時の悲しかつたこと、今も猶忘れないで居ます。

夫れが今日は、萬事に馴れても居るし、又懇意なお友達が、二人迄私を送つて來て居て下されるので、氣は勇み立つて、最早や家へ着いた樣な心地が致します。

滊車は正午に神戸行が出るので、夫れに乘ることゝ致し、大凡半時ばかり待たせられましたが、妙に又この間が永い感じを致しました。

二人のお友達は、親切にも滊車まで送つて來て、猶後々までも親しい御交際をと云ふて下さるので、私は只モー嬉しくて堪まらず、思はず泪をこぼして、二人の御親切を謝して居ますと、其内に時が來て、滊車はとう〳〵此處を離れることになりましたので、私は名殘惜しさに、二人の影の見ゆる限り、車窓から首を出して、感謝の意を表しました。

滊車は程なく東京の地を離れて、品川の岸に休み、大森に着きましたが、顧みれば今より二十日ばかり前、日曜の一日を、こゝに遊びて、更に矢口の渡を越え、小向井の梅を見川崎から滊車で歸つた面白さ、思へば之も再びは出來難い淸興でせう。

麗かな春の旅、殊に今年は博覽會への旅客も多く、車室は何となう狹う感ずれど、只嬉しさに窮屈とも覺えず、曾つて上京の節、恐ろしと思ふて通り越したる、

箱根山の墜道も、今日は却つて面白く感せられ、不二山も笑ふて送り、富士川も笑みて迎えくるゝが如く、之までに覺えぬ樂しみの數々を重ねて、靜岡に着きし頃は、永き日の暮れしにはあらねど下り日となりて寒き心地を致しました、妾の乘つたこの滊車の、岐阜を通過する頃は、丁度眞夜中となりまするので、萬事に不都合ですから、今夜はこの靜岡に宿つて、明日の一番で立つことゝ致しました。

途中の一夜、なか〳〵に永く、身は恰も車中にある樣で、少しも眠られませんので、午前四時頃から目を覺まし、都のお友達に送る端書を認めて、凡そ一時間ばかり待つ內、宿の人々も起きましたので、急いで御飯を調へて貰ひ、やう〳〵一番の列車に乘つて、岐阜には、其日の正午頃に着き、車を雇ふて出掛けました。こゝから七里の路は、平常殊に見馴れて居りましたが、嬉しかつたのは、所々の山邊に、薄化粧をこらした櫻の花が、宛然妾を迎えて呉れるやう。

かくて一里、二里走る車の、牛の步む樣に思はれるのも是非なきことで、其日の夕方、無事に戀しい故里のなつかしい母樣や、弟の笑顏を見た時、妾はやつぱり嬉しくて胸が一ぱいになりました。

弟への土產、母樣へのお話早く出してやり打ち明けて御披露が致したいので、其晩は三人遲くまで、取り分け母樣は、妾の修業證書を見て、わゝ父樣がお出ならば、どんなにお喜びかしれないにと、小さい聲で仰しやいました。

明くれば四月二日、空も晴れて花も盛り、去年送別をして、戴いた、わの櫻ヶ岡で、今日は又お花見のたのしみ、母樣は妾へとて、簞笥の中からさも大切さうに、出して下すつたのを見れば、今日着よとての 櫻衣。

（完）

裁縫唱歌

變ほ調　四拍子

白井規矩郎　作曲

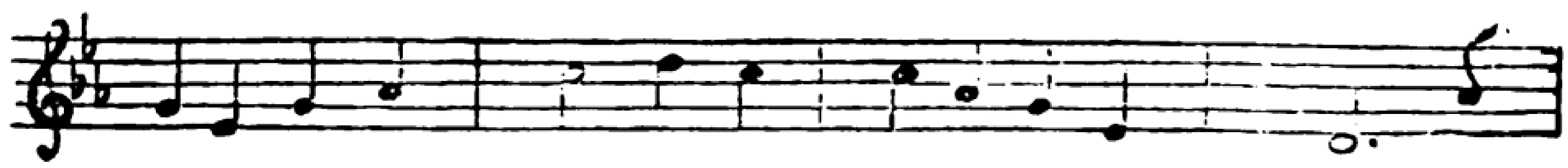


3. 3 3 1 | 3 5 4 3 | 3. 3 3 3 | 7—.0 |

きものゝ　すんぽう　さりかた　は

エリシタ　トーリテ　フキナミ　ヨ

はかまの　すんしやく　さりかた　は



3 1 3 4 | 6—7 6 | 6 4 3 1 | 7.—0 |

マツタケ　トリテ　ゆきたさ　し

コーダチ　チウダチ　オンナギ　ハ

ひもした　まへはば　あひびき　や



7. 6 4 3 | 4 6 6 6 | 6. 7 6 6 | 7—.0 |

ねりかた　そでたけ　そでくち　や

ソデツケ　ソデハバ　ハカルベ　シ

こしはば　まーちの　たかさよ　り



i. i i 7 | 6. 6 6 4 | 6 4 3 2 | 3—.0 ‖

みーはば　ねりたけ　ねりのは　ば

コーコロ　シテコソ　ハカルベ　シ

ひだはば　けまわし　はかるべ　し

裁縫唱歌

作曲 白井規矩郎
作歌 未詳

着物の寸法とりかたは、先づ丈(たけ)とりて行を指し、
衿(えり)肩袖丈袖口や、身幅衿丈衿の巾、
衿下とりて袘(ふき)を見よ、小裁中裁女着は、
袖付袖巾度(はか)ろべし、心してこそ度ろべし。
袴の寸尺取方は、紐下前巾相引や、
腰巾襠(まち)の高さより、襞(ひだ)幅觀羅はし度ろべし、
着物を縫ふの手つゞきは、表は袖背脇を縫ひ、
上前下前つぎ〳〵に、衽(をくび)を付てその衿は、
まづ下前より付け始め、袖付すみて躾(しつけ)かく。
着物の裏は袖口を、掛けてぞ後に袖を縫ひ、

はつ掛あらば先づ掛て、次に背を縫ひ合せ、
夫より後は表地と、別に變りしこともなし。
表裏縫ひ終りなば、先づ糸道を改めて、
縫目〳〵を折伏せよ、折伏せすまば裾(すそ)合せ、
躾をかけて綿を入ろ、たゞ單衣(ひとへ)こそ袖付の、
次よりすぐに衿下と、褄を絎(くけ)ろを順と知れ。
着物絎(く)けかた手つゞきは、褄尖(つまさき)絎て衿を綴(と)ぢ、
後ろ衿また兩人形、次第にくけて袖口の、
縛(くゝり)して後ち之れをくけ、衽(をくび)や褄や袖口も、
のこりおちなく丁寧に、皆よくとぢて仕立つべし。

ルーマニヤ夜話

千葉紫草

美しき娘等の集まりし中にも、優れて美しきはマルカなり。

時はマルカが十七才の折の冬、クリスマスの夜にして、父は隣村の知己の許へ行き、家にはマルカが一人殘されし留守居を淋しく、宵のほどより、村内の朋輩を招き集めて、一室の火を圍みつゝ、打解けたる物語に夜も早や痛く更けたり

長き間モルダビヤの國境を騷がしたる韃靼人の襲來も、此頃はヒタと跡を斷ちたれば、人は喜び、歌ひ、樂しみて、今日の聖日は、實に心安らかなり、然るからにマルカの父も娘一人を殘して出で、殘されたる者も亦た何に憚かるところなく、嬉々として友達と睦びに餘念なかりき。

斯かる間に月は出でたり。しべらく戸外に出で、遊ばんにはと言出したるものありて、娘等は同じく屋外に出で、積りたる雪に橇を滑らし、家を廻りて走せ、仰ぎて歌ひ、手を携へて舞ふなど、寒も知らず顏に戯れしがいつしか其月も密雲に封されて、雪さへ降來らんばかりになりたれば、急ぎ内に入りて、温き暖爐のほとり、今度は世に怖ろしき談して、誰が最も多く血を冷やすか肚胸比をせんとしぬ。

談に巧なるは、美貌を以て他を壓すると同じくマルカなりき。マルカの語るところは、悉く聞く者をして其面を覆はしめ、又た覺えず他に縋らしむるほどに怖ろしき事柄にして、娘等の中には、聞くに堪えずとて其處に伏して耳を塞ぐもあり。

マルカは往來心猛き質にして、他が戰慄して面を擧げ得ざる時に際しても自若として動かす、他が氣を失ふは

どに急激なる變に會するも騒がず、亂さず、世に幽靈ありとて怖るゝものもあり、又た盗賊を見て逃迷ふものもあれど、マルカには、それもこれも毫も普通の人と異なるなし然れば楚々として人に迫る臈たき乙女の口より、餘りに烈しき、厳つけき言葉の出でる折は、女らしからずとて父のたしなむるも屢々なりき。

今宵は其父もあらず、且つ談を聞く娘等の面の色を變ゆるを興ありとして、マルカが倘ほも話頭を進めんとしたる時、厨の方に當りて怪しき物音せり、話が話なれば、娘等は等しく見返りて、更に顔を見合せぬ。耳を傾くれば、音は床の下に聞こゆ。

やをら立上りたるマルカは、足音を忍ばして室を出でたり。他の娘等も隨えり。

壁にかけたる厨の燈稍暗く、歩を止めて、音するまゝに任せば、そは敷きたる床板を下より剝ぎ除かんとするが如し。

女のみの集り、怪しき曲者の忍寄りしからは、普通ならば、聲を揚げてなりとも助を呼ぶべきに、マルカは些の怖るゝところも無く、又た後に立つ友達を遠くるにもあらずして、其處に捨てありし斧を取上ぐるより早く二歩三歩進み寄り、倘ほも爲す樣を凝視たり。

笑ある眼は一燦きらめきて、唇を堅く、眞白き手に斧提げて立ちたる姿は、畫にて見る某の女神ともまがふべきなり。

既にして打つが如き音と共に、敷板跳あげられて、下より手一つ現はれたりと見たるも早し、マルカが打下ろす斧の風一陣、板の端を握みてし其手は四本の指を斷たれて、忍音の苦叫、紅の血、しどろなる足音して、外に向つて走る人の氣合しぬ。

マルカは色をも變へず、斧を捨て、悠々として初めて隣家の人を呼び、破られたる床を繕ひ、汚れたる血汐を

洗ひ清め、切り殘されたる指の始末せしめ、僅かなれども有合はす酒を出してねぎらひし上、友を誘つて再び以前の室に歸り、又た何事もわらざりしかの如く、落付きて更に新らしき物語にふけりたり

露知らざりし間の出來事に驚きたる隣家の人が、炬火を點じて床下を驗じたれど、恐らくこゝより忍入りしかと思はるゝほとに臺石の窓の破られたると、五滴十滴、生々しき血の黑き地上に印せられたるとの外には、之れと見らるべきものわらざりき。

曲者はいづかたに逃れ去りしか、野は一面の白妙にして、行衞を定め兼ぬれども、月の光にすかせば、皚々たる雪の上に紅の花を蒔きたるが如き鮮血の滴、遠くつゞきたり。

斯くて其夜は明けて、朝となれば父も歸來り、多くの朋友も各家に歸れり。

父はマルカが語りたる始終を聞きて、

『娘ならざりせば。』

と深き吐息を洩らしぬ。

マルカも亦た其身の男兒ならざるを最と恨みたり。マルカは竟に嫁ぐべくして、父に別れ、友に名殘を惜しみて、生れし家を後にすべき身なり。のみならず、此折は唯だ妻となりて人に侍づくを心淋しとのみ憂ひたれども、後に思合はすれば、マルカは男兒ならざりしだけに悲しき境に打沈められしなり。

冬は去りて、春は再び來りぬ。去年の事大凡は忘られたれども、唯一つ忘られざるは、怖ろしき一夜なり。時經れとも、斷たれたる四本の指は、まざ〳〵して其夜集りたりし乙女等の眼に殘りて、夢と云はず、現といはず、其指次第に大きくなりゆくが如く、時には二個の手となり、逞しき腕となり、果は數多き盜人の群ともなりて、乙女等を刧かすこと一再ならず、且つ相遭ふ毎に、話頭にのぼりては、いつしかに、其夜忍來りしは、

韃靼人の首長シライにして、美しきマルカを奪去らんが爲めなりきとの噂さへ高まれり。

野に花滿ち、空に鳥歌ふ長閑さも、極めて短き間にて、歳新らしくなりしより、久しく打絶えし韃靼人の襲來は、復も起りて、再びモルダビヤを擧げて慄はしめたり。

彼處に慘殺ありしと聞き、此處に掠奪を見し住民は、兇奴の名を耳にして已に早く怖れ戰きぬ。殊に住民の最も憂とするところは、彼等が若き婦女を脅かすの一事にして、爲めにモルダビヤは、市にも、村にも、若き娘の姿を見ず、然れば、心猛きマルカさへも、深く家の内に潜みたり

斯くの如く穩かならざる日は流れて、いつか夏の半となりたる或日のことなりき。マルカは久しく閉こもりたる欝を散ずべく、庭に出でゝ、垣に近き櫻の下に佇み、手に籠を提げたるまゝ、旣に實りたる果實を採りつゝ、日の光の葉蔭に匂ひ零るゝを眺め居たり。雪よりも白き上衣の裾に風そよ〳〵とわたりて、淸しき眼をまぶしげに見張りたる、其顏、其姿の實に美しく優れたるよ。

時に蹄の音あり。振向けば、其は垣の外に止まりて、馬上には縫したる短衣を着けし色白き騎士一人、遠乘にや疲れたる、額の汗を拭ひもあえず、喝きたる咽頭を濕はさんがために、マルカをさしまねぎて、さてこそ甘かるべき櫻の實を所望するなりけり。

『杯あらば出したまへ、いかで其れに盛りて薦めんには。』

やさしき乙女心より、騎士の出したる杯を手に取りて、已に採りたる實を籠より掬はんとしたる其時速し、突と差延べられたる騎士の右手の、マルカが腰のあたりに觸るゝよと見し間に、マルカが驚きて聲を揚げ、又た事の何たるを知る暇もあらせず、輕き身は馬上に抱きあげられて、口を覆はれたる厚き毛皮を苦しく、馬は一鞭を加へられて、鐵蹄石を蹴れば爲めに火花散る速さを以て駈出だせり。

情無きてとに思ひて、免れんと努れども、抱きたる手は容易に寛むべくもあらず、且つ若武者は囁きていふ。

「失はれたる吾が四本の指の償は、御身ならで誰か爲すべき。美しき娘と、御身が吾れを見てしよりも、吾は御身を美しと見き。然れど日は來りぬ、御身は悲しき運命のもとに生れたるなり。

悲しき運命とや、或は然るべし。曾つて一人の巫女あり、マルカの掌を相して、心に染みし夫を迎ふるまでに三度の災難ありと云へり。マルカは其の言葉と、今ま身にふりかゝりし災とを思合はして、心に泣きぬ。いづれ斯くして捉はれし上からは、悶ゆるとも、叫ぶとも最早詮なき業なれば、マルカは唯だ若武者が爲すまゝに身をまかして、ブルスに着くまでは、爭ひもせず、また踠きもせざりき。

ブルスには一筋の川流れたり。深からず、廣からされども、之れをもてモルダビヤと兇奴との境となす、馬の歩調も此處に來りて最と緩かになれり。川を渡る時、マルカは今更に悲しみて、再び此川を渡る日あるべきか、果たなかるべきかと嘆きぬ。若武者はマルカには物言はずして、唯だ馬を勞るのみなり。

マルカは少しにても体の寛められんことを希ひたれども。若武者の腕は藤蔓の如く强く腰のあたりにまわれり。

斯くてあるうちに、兇奴の假舍に着きぬ。

若武者は、豫て村に在りて乙女等の間に噂ありしに違はず、首長シライなりしなり。

馬より下ろさるゝ時、マルカは動かじとばかり拒みしかど、力及ばず、殊には物凄き笑を浮べて凝視するシライを怖ろしく、携はるゝまに〳〵、小羊の歩あはれに、小さき、汚くろしき小舍の中に閉てめられたり。

入りて見れば、一人の媼あり、竈の前に坐して切りに火を焚き、又た一人の男あり、裏手の方より、乾きたる薪、枯れたる柴などを運入れて立働らく。焔は小舍の屋根よりも高く立のぼれり。

シライは大釜をかけて食事の用意すべく媼に命じたり。然れど此折しも急ぎて走せ來りし一人あり、事ありげにシライの耳に囁きて、後の山を指さしつゝ、其の袂をとらんばかりに迫りしかば、彼は前に異なる馬に跨りて、一鞭を與ふる間もあらせず、山の方にと驅り行きぬ。

怪しさは媼なり、傍に人無き時は、優しき目をマルカの面に注ぎ、薪運ぶ男の入來れば、直ちにあらぬかたを向きて、知らず顔に小唄を口ずさむ。心して其が歌ふところを聞けば、懐かしきかな、ルーマニヤの國語なり。

わが眠る間に、疾く窓より遁れずや、
わが眠る間に、疾く走らずや。
彼歸來たらば、汝を妻となし、
妻となして、直にこの釜に投入れん。
釜は燃ゆる火の上に置かるゝなり。
たゆたふ勿れ、唯だ走れ、走れ、
走つて去れよ。
路を知らずとも、天に神あり。

憐れなる此身を救はんとする情深き歌の節々、憚りあれば、口にこそ覺りたりとは言はざりしかど、マルカは眼もて感謝の意を表して、薪男の在らぬ隙に窓より遁れ出で、藪も厭はず、小石に足の痛むも心せず、斃るゝまではとひた走りに走りてプルスの河邊に出でたり。

川は一二日前の雨に、今しも水嵩まして、前刻に過ぎし折の穩かなりしとは打ちて變りて、僅か二三時間にし

て濁水激しく岸を嚙みて走れり。

之れを越さんとすれば、溺るゝを免かるべからず、然れど、水に溺るゝと、兇奴に苦しめられて、偖て其の果には、生きながら釜の中に煮らるゝと、いづれをか採るべき。マルカは今に至りて考ふるいとまなく、直ちに衣を解きて、之れを頭にくゝり、靴は脱ぎすてゝ、わはれ、女の嫩弱き身を以て、急流に踊入れり。いかに氣は猛なりとも、水は走ること激しくして、マルカは見る〳〵流され、やがては其の底深く沈み行かんとしたれとも、神の惠やわりたる程なく、他の岸に泳ぎつき、直に復た衣を纏ふて、濡れそぼつ髮を絞りも敢えず、薄覺えに覺ゆる道を覺束なくも走り出だしぬ。

疲れて休まんにも、後を見らるゝ恐ろしさに息も吐き得ず、水の中にて苦しみしかば、力も絶え〳〵に、勢も盡きしかと、止まれば追手に迫まらるゝ憂わり。

唯見れば、遙かに一團の森わりて、其が梢のさま、繁みの形は、吾が家を蔭にする懷かしき森なるが如し。

マルカは飛立つ如くに喜びて、足の運びも自ら進みぬ。

然れど、此時、マルカは野を驅くる蹄の音を聞きたり。振かへり見れば、騎士七八、いづれも馬を急がして、何事をか呼び合ひつゝ、或物を求むるかの如く、やがて程なく別れわかれになりて、森に、林に、畑に、小丘に、夫れ〳〵の道を擇みぬ。逃げ脫きたる後を追ふ兇奴の一群の、こゝもとまで搜ね來りしにはわらざるなきか、匿れんにも家はなく、物蔭は無くして、唯だ樹と草とのみ。マルカは早速に上を見わげて、傍に樹つ一本の柏の幹を攀ぢたり。葉繁りて、必せざれば姿を見出さるべくもわらず。

少時して、彼等は復た集りて來れり。互に語るところを聞けば、川まではやさしき女の足跡を傳ひ得たれども、其より此方には、絶えて無く、探ねんにも便はなしと云ふ。

まことや、マルカは、川を越してより、乾きたる草の中のみを走りしなり。彼等は最早知り得ずと断念ちしが如く、馬の首を回したり。去るに臨みて一人は、恐らく水に溺れしならんと他に語りぬ。

其の影の見えずなるまで密みて、やがて枝を下るより早く、マルカは走り得るだけ走りて、家ある森に向ひたり。

饑と、疲と、怖と、戦とにて、身も魂も、たゞ此の儘に朽ち果てなんとすれども、夕暮にして、辛じて最寄りの一ッ家に辿りつきぬ。顧みれば、過來しかたは、靄にとざされて、其れと見えわかねども、夕雲の彼方、將に沈み落ちんとする日の光に向ひて、白き雲一片漂ふは、こゝまで護りて送り來し天の使の、今しも神の御座に歸り行かんとして、之れに乗り、之れを急がしつゝあるにあらざるなきか。心緩みしマルカは、石段に倒伏して、少時は起上らず、神に感謝の言葉の唇を洩るゝも徼けく、其儘に息絶えしが如く身動きだも得せざりき。

マルカの姿見えずなりてより、全村を挙げて捜ねまわりても、行方知れず、うみてつかれて、偶ま歸り來りし者一人、其處に倒れたるマルカを見出すと直ちに、人を集めて家に荷ひ入れ、勞はりて寢臺に移せしも、マルカは死者に等しく、眼を閉ぢ、口を結びて物言はず、水もて唇を濕ほし、代る〴〵其名を呼びて、半時あまりにして、漸くに蘇生らしめたり。

逸早く、父の許に急報を齎らしたる者ありて、父は取る物も取り敢えず、駈つけ、涙ながらに、生命のみは安らかなりし娘の手を握りて喜べり。

父來れりと知りて、辛じて眼のみ見開らきたるマルカは、嬉しさに口は吃り、語は順序をなさゞれども、出來

得るだけ記臆を呼起こして、長かりし馬上の苦痛、小舎の中の焚火、情厚き老媼の歌など、とり〴〵に語り出でたり。聞くいづれもは、不思議なる思をなし、中にも、マルカが身を躍らして激流に飛入りしこと、敵の中に在りても、怖れず、騒がず、能く幹の上に身を匿くしたる沈勇のほとは、一人として驚かざるものあらざりき。然れと、焚火のほとりの老媼の歌のみは、誰も信實なりとなすものなく、等しく昏睡と錯亂が與へたる一時の幻影に外ならずとなしたり。

ほとなく健康は復したれとも、之れに懲りてマルカは戸外に出づるを謹しみたり、のみならず、俄に心弱くなりて、唯だ一人家に殘こさるゝを厭ひ、又た絶えず怖ろしかりし捕はれの様を描出して、淋しさと、物悲しさとに、染々父の膝に泣く夜半もありき。

斯くてのほとに二年の歳月を經、兇奴も漸次退きて、今はクリミヤ地方を荒しつゝありとの噂さへ傳はりたり。

マルカは之れを聞くに及びて、稍やく眉をひらき、又た漸やく自由に呼吸するを得るに至りしも、尙ほ努めて外に出でず、毎日曜日の教會堂禮拜にも、家の内に在りたりとも強ち祈を捧げられざるにもあらざればとて、朋友の誘ふをも辭して行かざりき。

此間は、美しき姿空しく家の内に隱められ、日々の粧もおろそかにして打すてられしかと、研はいよ〳〵研をまし、艶はいよ〳〵艶を加へて、マルカは以前よりも美しき娘となれり。

去れば其歳も程なく暮れて行かんとする或日のこと、父はマルカに向ひて夫を迎ふべく言出しぬ。そは希臘商人にして、家は富み且つ姿もすぐれたれば、寔に應はしき縁なるべしと云ふ。

マルカは心進まざれとも、父の言葉を否み兼ねて、一日其人に會しぬ。丈高く、色白く、容貌具はりて、實に

稀なるべき好男子ながら、室に入りて、一目見るとしもなく見しに直ちに、マルカは穩かならぬ思に亂れて、之れを明らさまに指示し得ざれども、何とはなしに唯だ怖ろしきやうに感せられたり。のみならず、其人は、頭を下げて禮する時も、椅子に座して語る時も、但しは相對する視線を殊更に避けて偸見するときも、絶えず長き上衣の下に片手を匿して、其間少なからず怪しむべき擧動ありき。且つ片手を見せざる起居動作、審かしと心づくと共に、マルカは冷水を浴せられたるが如く、全身寒氣立ち、打戰くを堪え得ずして、直ちに其人を去らしむべく父に迫りぬ。

辛じて忘れたる怖ろしき記臆を新たに呼起こしたりと知らざる父は、處女なれば、唯だ羞かしき上より斯くわるなるべしとて意に止めず、言葉を盡くして、迎ふべく諭したる後、其人の扶によりて借財を償ひ・又た其人の力によりて、賣るべかりし家も土地も安かなるを得たれば、其の恩義に酬ゆるためにも、まげて從ひかし。のみならず、彼方より望みたる緣邊なれば、必ず惡しくは計らうまじとのことなり。

一家の窮迫を救はれたるが上に、父の願ふところもしだし難く、マルカは人知れず泣き、人知れず解き難き胸の縺をも強ひて解きて、兎も角も、身を捧ぐべく決心のほどを明にしたり。其の決心を聞きて、希臘商人は、家の始末をなし、花嫁に贈るべき贈物を調へて、式を擧ぐる日に再び來るべく約して歸り去れり。

悲しきはマルカの心なり。意に叶はざる夫を迎へて、名づくべきやうもなき怖を抱かしむる夫の侍づきて、其間一點だも愛の光明を認めず、怪しむべき手もて此手を握らるゝに至りし術なさは、抑も何にか譬ふべき。式の日來るとも、せめては尙は遠き後にあれかし、いづれ定まらぬ世なれば、或は何等かの事起りて此緣破るゝも計り難しと、空賴めなる願を立てしも仇なれや、四週日は夢幻の境に過去りて、いよ／＼明日と云ふ日になりぬ。

豫じめ花聟より使あり。今になりては殊更に打合はすこともなければ、式に際して、直ちに會堂にて相見べしと。この宣告を聞きて、マルカは又た更らに泣き、更に悲しみて、神の扶をさへ祈りたれども甲斐なく、夜一夜泣きて、明方に近く不思議なる夢を見たり。

聖壇の前に立てば、相並びて花聟あり。輝く蠟燭の光をかりて、其の面を熟視すれば、不圖りき、曾つて此身を驚かし脅かしたる、憎き、恨めしき兇奴シライ其人にして、牧師が命ずるまに〱、兩手を高く揚げて空に十字架を描かんとするとき、止むなく上衣にて覆ひし片手をソとひきいだせば……見よ、其指は……マルカは驚ろかされたる自らの聲に目覺めて、脊に汗の流るゝばかりなるを覺えたり。

朝になりて、儀式の服に着替ゆる時、手傳を兼ねて祝ひに集まりし朋友の誰彼は、喧ましく喜びを述べたれども、破心のマルカは言葉少なく打萎れ、粧ふ面も涙に濡れて、力無げなる風情はまたなくいぢらしく見えたり。然れど解知らぬは、之れをも羞かしきが故ならわ、却つてはやしたてゝ、中には背打ちて嘻々とばかり興づるもありき。

花嫁の行列が會堂に着したる時、其の入口に武裝したる若者の一隊ありたり。這は家を出づるに先だちて、マルカが密かに父に告げ、父より村の者に謀りて、豫じめ招寄せたるものにして、彼等は花嫁が内に入ると引續きて會堂に入り、中より堅く鍵さへかけて扉を閉てぬ。

マルカは思定むるところあるかの如く、たゆたはずして聖壇に進めり。若者等は犇々と其後につきて聖壇の前半を圍みたり。

眼を擧ぐれば、傍に立つ花聟は、鬚美しく、着たる衣服も、夢に見しそれとは全く異なれど、今將た肩と肩の相觸れなんばかりにして、其の横顔をとくと打見やれば、あゝ、忘れんとしても忘れ得ざる、まがふかたなき

シライなりしなり。

恭しく又た厳かに祈を捧げたる牧師は、花嫁花聟に向ひて、二人共に夫婦たるを誓ふべきや否やを問ひぬ。

「空に十字架を描きて、偽なき證を示し玉ふにあらざれば、吾が夫とは得なさじ。」

マルカは憚るなく言ひて、牧師と花聟との面を等分に見比べたり。

「爾は斯くなしうるや。」「然り。」

花聟は答へぬ。

「さらば、速に十字架を描くべし。」命せられて、花聟は、左手もて、之れを描かんとせり。

「右手は如何にしたまひし。男は双手を用ゆるが法なりと聞きしに。」マルカは聲を強めて詰れり。

言はれて、花聟が、右手を衣服の下より高く揚げんとしたるも早し、後ろに警固の若者等は、一語だも言はせず、シライを縛したり。後手に廻はして、右手を驗ぶれば、其手は指四本あらざりき。

シライの從者が、之れを取返さんとひしめきて、少時は會堂の中、破るゝばかりに騒ぎたてしも、軈て兇奴は悉く同じ繩目を被りて、戸外に運ばれて、夜をも待たず生命を奪はれたり。

シライ一人は、殊更に村民の手を下さずして、程近き王の許に送られ、彼は投入れられし獄にて断頭臺にのぼされたり。

マルカの名は、この事ありしより、其の美くしさと共に、いよ／＼傳はりて、日を經ること一月余り、此度は國王の許より、啻に其身一つを免れたる勇ましき所爲ありしのみならず、國を擧げて惱まされし兇奴の害毒を除きたる功に賞でゝ、改めて王子の妃となすべき旨の命下り、マルカは程なく宮殿の中にて多くの侍女にかしづかるゝ身となりぬ。

斯くてこそ、曩に、三度の禍わりて後、夫に從ふに至るべしと、巫女の占ひたる言葉も思當らるれ。

マルカを救ひたる老媼は、何者なりしか知れず。國王の力もて隈なく搜めたれども、終に再び其の姿を見出すを得ざりき。然れど其とき、竈の前にて歌ひたる歌は、斷れ〳〵なれども、マルカの記臆によりて、改め作られて、マルカの作曲を附せられて、この後長くルーマニヤの國歌の一として殘りたりと傳へらる。

（をはり）

獨乙の皇太子殿下と二少女

此のほどのことでした、獨乙の皇太子殿下が（御年廿二才）は、エルサスロトリンゲンといふ地方へ御旅行になりましたが、此地は今から三十三年前に獨乙國が佛蘭西と戰爭して勝ちました報酬として佛國から莫大な償金と共に占領いたした地方であります、さて此度の太子の御旅行について領民は種々思考をこらして歡迎いたしましたが、或日の事殿下は幌なしの馬車に御召しになつて、市中を御巡覽になりました時に、美々しく粧ほひをこらした二人つれの年若い令孃が御馬車近くに進みよりまして一把の花束を獻上いたそうとしました、此の中の一人は此の花束を獻上いたせば殿下には必ず此方へ御むきになるに相違ない、其の折に寫眞機で御　影申そうといふことをもくろむで居りましたのですそこで隨んで獻上いたしますると　殿下は既に其人の小さき寫眞器に御目をとゝめられましたが令孃はそれを更に存じませんでした、殿下は彼の花束を御受になりつゝ「少ゝ御待なさい」と仰さられながら御自身先づ二人を御寫しになり終つて又仰せられますには「此度は私の番さあ御寫し取りなさい」と御冠り物や身体なと正しく御あらためになつたので流石の令孃も今更きまりか悪くさらばとてその儘逃られもせずとう〳〵仰に隨つて御撮影を申上げたといふ事です、

お幾の誤解

上村左川

お幾は今や消えなんとする庖厨の火の前に俯伏き込んで、覺束ない光りを便りに猶も小説を讀み續けて居る。開け放つた窓や戸口から今しがた迄射して居た夕日の名殘も、もういつしかに消えてしまつたのである。前には少し距て丶丘があつて、今はそれとも見判けかねる此丘の頂と空との際の處に、何だか朧げに人の姿のやうな黒い影が見える。小説に讀み入つては居るもの丶、お幾は最前以來折々此丘の方を見遣つて居た。實は洗濯物が其處に干してあつて、日が暮れて山風が起らぬうちに取り入れねばならぬのである。夜に入ると此邊りの高地では風が強く、ともすれば着物を往還へ吹散らされることがあるので。

今しも吹いて來た一陣の風に、爐の餘燼の忽ち赤くなるのを見て、娘は焦つて本を閉ぢながら立ち上つた。母が何とか云ふであらう。實は斯う暮れてから外部へ獨りでは出られぬことで、母に叱られるは知れきつて居れど、今となつてはもう仕方がない。全く小説に身が入り過ぎた報ひである。着物を入れる籠を引攫ぎながら内を出たが、山里の常とて日が隱れ丶ばもう間も無く黒暗は谷間から廣まつて來て、四方から包んでしまふ。仰いで見ればそれでもまだ丘の頂は微かに見え、今しがた迄無かつた宵星の影が二つ三つは見え出したのに、平常より餘程遲くなつたことが想はれる。それに風が次第に強く、籠に當つてヒユー〳〵と鳴るに、お幾は身を屈めて風に向ひながら、終に頂上の平地へ來たが、茲へ來て見ると又一しは暗さを増したやうで、物干の綱を引渡した棒も見えず、唯白い着物ばかりが風に浮動して幽靈かと想はれるばかりである。ふと向ふの方に、見えこそせね人でも來るやうな氣合がして、軈てお幾が棒の側へ行き着くと、綱へ何か觸れたと見えて、棒迄

一寸顫ひが傳はつて來た、すると忽ち焦つたやうな聲が聞えて、
『おや、これは何かへ行きかゝつたんだらう』。
男の聲であつて、高所から聞えるのは何でも馬に乘つた人らしい。お幾は怖ろしげもなく
『私方の物干綱へ行きかゝつたんですよ』。
『おやこれはどうも』と辯疏するやうな語氣で云つて、それから快活な聲で『おゝそれでは丁度望みの物だ。私に其綱の端を少しおくれ、馬の鐙の輪が弛んだ。それがあれば括り緊めることが出來る』。
お幾は其聲のする黑い姿の方へ進み寄れば、馬上の人は今其處へ跳びおりて黑い姿は二つに別れた。
『何れ程あればいゝですか』。
『一尺か二尺かで可い』。
二人は今側近く向ひ合つて居るが、互ひの顏はろく／＼見えない。お幾は綱を手探つて歩み、棒に縛りつけてある端の處まで來て、それを解きにかゝつた。
『變な處へ着物を干したもんだなア』と男は不審さうに云へば、『それでも大變好い干場ですよ』。
『あなたの内は?、此附近かね』。
『直ぐ此下です、其處の端れから見えますよ……刄物をお持ちですか』とお幾は綱を解いてしまつて尋ねると、
『いゝえ……なに、玆に在る。待つておくれ』と暫時躊躇して後懐から何か取出しはしたが、自分の手に持つて居て、此方へ渡さぬので、お幾は只綱の端の處を兩手に持つて差出すと、唯一切りに切つた鹽梅、餘程鋭い、そして普通の小刀よりは長い刄物であると云ふことだけは知られた。そこでお幾は其人が右の綱で弛んだ輪を縛りつけるのを手傳うて、鞍の垂れ下つたところを上げてやつたが、暗さは暗しうまく行かないので、其

人は舌打ちしながら隠袋を探り『もうマッチがたつた一本しかない大切さうに擂りながら、風に吹消されないやうに屈み込めば、お幾も俯伏きかゝつて前掛けを引揚げて風を防いだ。火は暫時其場を明らせて、男の淺黒い顔濃き八字髭白い歯を始めお幾が艶を帶びた目、ふつくりした軟らかな頬の具合など一寸見せたかと思ふと忽ち消えてしまつて復元の黒闇になつたが、それでも暫しの明りで用事は辨じてしまつた。

『有難う』と男は一寸笑ひながら『併し私は始めには暗がりの中であなたを妖怪かと思つたよ』。

『私は又あなたが牛やら何やら判らなかつたですの』と、娘は譯も無く答へた。此時男は敏速く馬に乘つたが、其機會に何か着物から辷り落ち石へ當つて少し向うへ飛んだものがあつた。

『あゝ小刀を落した、何うか拾つておくれ』と急に云つた。お幾は跪んで其處らを一心に探し廻つたが、何としても見當らない。男はもどかしがつて又馬をおりながら一緒に探し出した。

『あなたはもう外にマッチはないですか』とお幾が問へば、『ないの、あれつきりであつた』と焦つたやうな答。

『それではあなた茲においでなさい、私が内の庖厨まで駈けて行つて火を持つて來てあげやう。長くはかゝらないです。』

『いや〳〵』と男は慌だしく停めて『お廢し、待つて居られない。今でからが暇取り過ぎた。あなたが朝早々に茲へ來たら發見るに違ひないから拾つて置いておくれな』と一寸笑つて『私がいつか取りに來る、馬の耳さへもろく〳〵見えない程暗いから、元の道へ伴れ出してさへおくれなら、もう今夜は厄介はかけない。どうも有難う』。

お幾は進み寄つて、手綱を取つて引出せば、間もなく往還へ出て、馬の蹄の音が違ひ、同時にまだ温かな埃が鼻へ來るのを覺えた。

『有難う』と男は再び云つた『もう大丈夫だ』と跡は無言で猶佇立む間、お幾は暗がりの中にも馬上の人が別れの握手しやうと手を捧げて居るやうに思ひ、此方からも捧げたれど行違つて男の手は我肩の處へ當つたのでそれを把らうとする中、男は馬上から俯伏きかゝつて來て、軟らかな口髭が頬に觸れるや否、馬は向うへ歩き出した。お幾は口髭が觸れた瞬間に忽ち立腹して、男の耳を打たうとしたが當らず、男の姿も笑ひ聲も闇に包まれてしまつた。

暫らくはじつと其處に立つて居たが、軈て肩に掛けた籠を腹立たしげに投げ出しながら、洗濯物の取入れに着手つたが、風は次第に強くなるし、中々容易の仕事でなく、それに綱の端を解いたので、干物は半分は下へ落ちて居たのである。それを一つ〳〵取上げて居る中に、何だか變な物に手が觸れたので、拾ひ上げて見ると今の人の落した小刀であつた！お幾は倉卒に籠の底へ投げ込んで置て仕事をしまひ、それから重荷を抱へて丘をおりる時、ふと見れば内の庖厨に蠟燭が點いて居る。母が待つて居るに相違ない。軈て歸り着くと、母は果して不機嫌な語氣で『洗濯物を入れに行くは好いが、用事をしないで山の上で男を相手に馬鹿談などして居ては困るじやないかね』と

お幾は何も馬鹿談をして居たのでないとは知れど、別れ際の挨拶が少し其方へあやしいやうな事に成行いたのであるし、又二人の話聲を母が聞いたのであらうと思つたから、跡を深く問はれないやうにと、通りかゝつた餘所の人に道を教へてやつたと簡單に云つてしまつた。母が咎めるやうに云ひさへしなかつたら、お幾はもつと有体に包み藏さず話したのであらう。母が呟きながら居間へ行くと、お幾は先づ彼の小刀の事を母には隱して置かうと決心して、其爲めに籠からそれを取出し、此時蠟燭の光りで始めて悉しく視て、忽ち跳起がるやうに驚いた。

普通の小刀では無く、全く短刀であつて、而もこれ迄お幾が見たこともないやうな立派なもの、美しく金銀寶石で柄が鏤めてある。拔いて見れば玉ちるばかりの鋭刄、お幾の目は其美しさにくるめき、暫しは身動きもせで凝視て居たが、軈て隣室で母の聲の聞えるに、急に鞘に納めて懷へ隱した。品物の立派な事を見るにつけても、愈兩親には飽く迄も秘密にしやうと云ふ決心になつた。今これを打明けて見せたら、話に際限が無くなり、それに兩親が自分等で品物を仕末して置かうと云ひ出すであろう。元來此品は彼の人が此自分へ托したものであるから、親と雖見せないが當然だと思ふと、それでもう決斷は付いてしまひ、直ぐに我寢間へ行つて蒲團の下へ短刀を隱した。

されど其晩は外の事は思はず、用事を仕舞ふと後小說本を手に取つた。一つは日頃の癖、一つは本を讀むに擬らして篤と思案に耽りたい爲であつたが、小說を見るにつけても、平素種々の物語で讀んだ美しい短刀の事が頻りに思ひ出されるのであつた。

『お前は阿爺さんの云つて居たことを聞いたのかえ』と云ふ聲がするに、お幾は跳び上ると、母親が戸口の處に立つて居る。

『はい……いゝえ』と間の拔けた返事、『阿爺さんが何う云つて？』。

『そんな馬鹿な本に視入つて居なかつたら氣が着いたんだらうよ。阿爺さんが、お前はあの牧場へ馬を置いて來なかつたら好かつたつて、さう云つて居てよ、以前此邊を荒した馬盜人が此頃又此邊へ出て來てね、昨夜は牧村の馬を盜られたと云ふことだよ』。

此話にはお幾はひとく驚いた。馬は實はお幾自身の持物のやうになつて居るのであるが、併し馬盜人の事よりは、兩親に秘密を領づかれることがもつと怖ろしかつたので、『それは大變危險だけれど、併し馬盜人が來た

つて、馬と自分とは、私が防いで見せる』。

『私が防ぐ！其小說本からそんな事を覺えたの？』

『さうでせう』とお幾は冷やかに答へた。

されど其夜お幾は本の事を思つて居ず、唯始終心の浮ぶのは彼の短刀の一件ばかり。あの人は自分が暗がりの中で頭を撲らうとしたことを知つたのであらうか、又自分の顏が見えるのであらうかと、頻りに其事を考へる自分はあの人の顏を見た、十分とは云へない迄も、兎に角其淺黑い顏と黑い口髭……自分の髮のやうな軟かな口髭の間から見えた白い齒の具合だけは慥かに目に存つて居る。若しあの人が唯一分間でも、自分は全く知らぬ人に接吻させやうとして居たと思つたなら、それは大間違ひである。そんな女ではないと云ふことを今は知らせてやらう。今度來たら何氣なく此短刀を返し、短刀の事を格別心に懸けて居たことは決して見せないことにしやうと思つた。それ故か床へ這入る前に篤と短刀を眺めて後、着物を解いて橫になり、それから眠つてしまつたが、其夜變な夢を見た。其夢に、自分は又洗濯物を入れに行つたところが、着物は皆變な人の群に代つてしまつて、頻りに喧嘩をして居る。自分が其中へ飛び込んで、彼の短刀を拔いて『散つてしまへ！馬鹿者！と叫ぶと、忽ち一同が逃げ散つてしまつた。

併し翌朝になつて倩々考へて見るに、何分菜でしらへや座敷の掃除、種々庖厨の用事をする身分には、そんな事は似合しからぬので、終に旅人の事短刀の事、は忘れるやうになッてしまつた。

平生折々遊びに來る近邊の若者等も、馬盜人の噂をして、お幾方の馬が牧場に置いてあるのを危險だと注意するものがあつたが、お幾はまだ盜まれはせまいから、明日は伴れに行かうと思ひ、翌日家を出かけて牧場へ行く途に、とある川端の處へ來ると、今迄其處の柳の樹の蔭になつて居たと見えて知れなかつたが、忽ち向うに

馬に騎つた人の姿が現はれた。其樣子で見ると、何でも路上に印いた馬の足跡を詮議して居るらしい。其人の姿格好何處となく覺えがあるやうなと思ふ中、忽ち彼の短刀の主たることを知つた。尤も其人は髮の色も容貌も彼の夜見たよりは色が薄く、着物も違つて居るが、ふと此方向いて我顏を見た時、白い齒を出した具合で、お幾は同じ人たるを知つた。

嗟、準備して來なかつて殘念！折角平氣な貌で返して遣らうと思つて居たに、短刀を持つて居ないではそれが出來ない。それのみならず、自分ながらはや顏が赧らみかけて居ることを感ずるのである？されど強いて抑へて恥かしさうな顏をせず、故意とすました聲で、家まで跟いて來て吳れるなら、早速預つた品を返さうと云つた

『いやちつとも急ぎはしないのと男は笑ひ彼の夜と同じ笑ひ同じ快活な聲で『それに今あなたの家迄行つて居られない。小刀はあなたが持つて居てくれゝば安心だから、要る時に取りに行くです。その時まであなたは人には知らさないで、確と預つて居ておくれ』。

『私は自分の事を他には饒舌りはしませんさ』とお幾は立腹の體で『そしてあの晩暗くなかつたなら、あなたは頭を打たれたのですよ。其譯をお知りですか』。

男は又笑つて、手を振つて別れを告げ、其儘馳けて行つてしまつた。

實はお幾は少し失望の氣味である。彼の時は夜であつたが、今晝見ると少し興が薄くなつた氣持がするのである。成程あの人は頗る好男子には相違ないが、あの夜見た時のやうに畵にでもありさうなやうな心を動かす處がないのであつた。それに何となく不思議な處がある、あの晩は慥かにもつと色は黒かつたやうに思ふ。一体何うした人であらう。何故此自分の家の邊で彷徨して居るであらう。實際お幾に焦れて此邊へ遊びに來る村の若者連とは違つて居る。多分政府の用で都から役所など建てる土地を撿分に來た人であらう。そんな人は今迄

も折々來ることで好い土地を發見る迄は至つて忍びで居るが常であるから、あの人も其連中であらう。友達に問うて試ることも得せない。若し根堀り葉堀り色々と問はれはせまいかとそれが厭なのである。それにあの人は、自分が萬事秘密にして居ると思つて居るに相違ない。若しあの人があの美しい短刀を表立つて受取りに來て身の素性を語り、短刀を落した時からの一伍一什を殘らず人々に知らすことが出來るなら嘸面白からうと思つた。家に歸ると、又更に疑ひを受けるやうなことが無いやうにも、要愼の爲めに彼の短刀を今度は小匣の中に藏め、それから其日は放心したやうになつて、近傍の若者連が、頻りに二日前の晩の馬盜人の噂をしあふのをも耳に入れなかつた、夜番組合は人に嘲弄せられ、小舍番人などは盜賊と共謀になつて居るかのやうに疑はれ、餘程廣く同類を持つた一團のやうに噂せられて、終に警察は都から特別探偵の派遣を受けることになつたと云ふことである。されどお幾はそんな事はろく／＼信じもせず、只仰山に云ひ囃すのであらうと思つて居た然るに其夕方三次と云ふ隣の男が來て、家内一同の團欒に加はゝつて、四方八面の話をし、お幾は例の默つて居る云ひわけに小說本に俯伏き込んで居る側で、三次は恐しい噂をし出した。丁度今しがた警吏連が此附近を通つたとの事。盜人の連累を幾人か捕まへ、盜まれ物は幾らか取返したが、其盜人の首領が逃げたので、今追駈け中、尤ももう逃げ路へは手が廻してあるから捕まへられるは必定であるとの話』。お幾さん、あなたは能うて其馬を伴れて歸つたねえ』と媚びるやうに云へど、お幾は聞かぬ風して小說から目を放さなかつた。母は横から

『三次さん、まアあなた眞面目にあれに話したつて駄目ですよ、あれはもう小說本より外の事は、何を云つたつても耳には入りはしません』。

三次は夫婦の者の方へ向いて『そして其盜人の首領は此間はや一度捕まへられたとがあつたさうですが間もな

く逃げたさうです。探偵が一度捕まへて、持つて居た刄物を取上げたが、それでもうまく逃げたさうです、中々敏捷い早變りをする奴で、直ぐ鼻先を歩いて居るのに、巡査や探偵がそれに氣が付かなかつたとがあつたさうで何でも、目を瞬く間に髮の色まで變へると云ふ話です』。

『それでは中々油斷のならぬのですな』と老爺が云ふ傍で、お幾が此時耳を欹てゝ目を大きくする樣子、に三次は又娘の方へ向いて『それでも其首領は中々立派な風体ですよ。私は何時かあんな盜人の首領を一人見たてとがあつたが、天鵞絨の上衣に絹の飾帶をして、黃金の鎖やらに鈕を着け、帶にも寶石の燦爛する柄の短刀を差して居た、青玉の美しいのが付いて居るのだ。其短刀は中々價値のあるものださうだねえ』。

お幾は手に持つて居た本を忽ち床に落して、顏は蒼ざめながら立ち上り『そんな話は聞きたくもない、どりや外部へ行つて歩いて來う、茲に居ては好い加減の嘘ばかり聞かされるからたまらない』と高らかに笑つて庖厨へ行き、戶を開けてそれから思案し、又俄かに引返して自分の寢間へ行き、わかないやうに內から閉めて置いて、彼の短刀を取出して床の上に投げ出せば、蠟燭の光に柄の青玉は燦然と輝いて居る。お幾は側に膝を突いて、冷たい兩手を顏に宛てながら俯伏いた。頭は惑亂しさうな心地！

表面は故意と平氣を裝うて居たものゝ、今の三次の話を聞いて、忽ちお幾が心中に閃めいたはあの夜逢うた人の姿！馬の腹帶の斷れて居たと！それに短刀を落して其儘置いて行つたは逃げて身を隱すに都合好くする爲めに故意としたとではあるまいか。そして二度目に逢うた時は、川端の柳の陰に隱れて居たと云ひ、殊に着物を變へ髮の色を變へて居た。されど仝じ聲仝じ笑ひで全く仝人に相違ない。首領……嗟！今三次の云ふ其逃げた盜人の首領に相違ない！今宵三次の話を聞く迄それとは夢にも知らず、何の疑ひも起さなかつたとは我ながら愚かの至り、そして現に其男に、今度取りに來るまで此短刀を預つて置かうとの約束をしたとは！

それでもあの人は此自分を信じて居る。然うだ乾度信じて居る。自分が唯一言で、此附近中大勢の人々に其身の踪跡を知られて追駈けられ忽ち身の破滅になると云ふことを知つて居る筈ながら、自分へ短刀を托んで置いたのは能く〳〵自分を信じての事である。此短刀を唯人に見せさへすれば、それでもうあの人は直ぐ捕まへられる筈だ。二度目に逢うた時も、呼ばゝれば内へ聞える位の處でありながら、自分を信じて居ればこそ、打くつろいで話もした譯であらう。それに又我家の馬を盗まうと思へば盗まるゝ處へ來て居ながら、盗まなかつた處を見ると、自分を萬事恃みにして居る爲めであらう。今迄氣が付かなかつたが、村中で馬を盗まれる人がだん〳〵あるのに、自分の内は少しも難に罹らないことを、隣家の人が父に話して居るのを聞いたことであつたして見ればあの男……盗人の首領は我家を保護してくれて居るのである！斯う思ふとお幾は突然と立ち上つて忽ち氣が落着き、元のお幾に返つて、何氣なく短刀を手に取つて復懐に收め、顔には色が出來目は稍生氣を帯びて來て、再び父母の居る室へ行き『まだ馬鹿話をして居るの』と云つて置いて外部へ出て行つた。

それから暗がりの中を、あの晩其處で逢うたと云ふばかりが恃みで、若しや又來て居たら詮義の厳しい事を知らせて遣らうといふ考へから、俄かに彼の丘へ駈け登つて見たが、唯暗闇で誰も人は居ず、風より外に何の音も聞えないのである。若しや今も此邊にうろ〳〵して居て來かゝるとがあるかも知れないと、暫らく彷徨しながら耳を欹てゝ聴いて居ると、思ひがけぬ音か聞え出した。それは馬の蹄音には相違ないが、一人でなく大勢で下の路を駈けて居る様子。何事であらうと家へ駈け戻ると、家内の人々も何事があるかと異しんではや道の方へ駈け出て居る場合であつた。お幾は父母に氣づかれぬやうに、入違へてそつと我室へ通り、其窓から丘が見えるので、窓口へ踏んで一心に耳を欹てゝ居ると、頻りに人聲が聞え、家の彼方側の納屋のある方でドダバタと足音がして、それから暫らく靜まり、軈て此方へ來る足音、それから又道で馬の蹄音が聞え、終に我室の

戸口が鳴つて母の聲……

『おやまアお前は茲に居たの?、お丶眞個にお前なぞは茲に居て好かつた。大騒ぎだつたよ。今ね大勢が來て到頭彼處であの馬盗人の首領を捕まへてね、それから都から來て居る探偵の方が今他の連累者を追駈けておいてだつたから、それが歸る迄内の己舍の厩の處へ入れて縛り付けてあるよ。其方たちが歸つてあの盗人を伴れて行く迄まアお前は茲においで、い丶かい』。

『あ丶宜しい〳〵、私を呼ばないで置いて下さい』と開けかけた戸の内から答へた。

何時になき柔順な返答、若し這んな場合でなかつたら、母は不審に思つた位であらう。いや、此時娘の顔色を視たなら猶驚いたのであらう。お幾は色稍蒼ざめて齒を喰ひしばつて居たのである。實にお幾は母と全じく這んな片山里の生れで、猪や狼の哮る聲の中に産聲をあげたと云ふのであるから、男のやうな思ひ切つた擧動をするのも別に不思議は無いとで、今盗人の首領が捕まへられて厩に縛りつけてあると聞いて、驚ろきの中にも取敢ず心に浮んだは、あの小舍の古くなつて朽ちて居るとで、此間も馬が騒動した爲めに一枚板が外れたとのあつたのを、自分がそつと繕つて置いたのである。若し役人共がそれを知らないで居て唯番人に任して居るならば、自分が何とかして件の穴を大きくして、彼の首領を救うてやるとが出來ると思つた。

それから二時間程過ぎて後に、今は誰も寢靜まつて四邊寂然した頃、そつと忍び出て件の小舍の方へ行くお幾の姿が見受けられた。番人は此家の畑仕事の手傳ひに雇はれて居る六藏とて、お幾には殊に從順の奴隷で、主人の娘の氣象は知悉いて居ること丶て、お幾が忍びやかに捕囚の樣子を問ふと、盗人は後手に縛つて足は柱へ紲げつけてあると云ふとを耳語き聞かせた。窺がうて見れど內は暗いので確と見えないが、壁へ脊を凭せて坐つて居る樣子である。お幾は眼を光らせながら、顔を脊けて小聲で六藏に『そして斯うして居る中盗人の連累

が來て助けて行く氣遣ひは無いかね』。
『それは心配はして居ないです。其處の下の小舍にまだ二人別の番人仲間が居ります。私が合圖に鐵砲を打つたら直ぐ來るとになつて居るですから』。
此時お幾は俄にか丘の上を見あげながら『おや彼處に人が居るやうだよ』と驚いたやうな語氣で云へば、初めは平氣で居た六藏も、確かには見えねど、さう云へば人が居るかのやうに思はれ、若しや盜人の仝類が助けに來たのではあるまいかと徐々怖氣が立つて來た。
『ほんにさう云へば何か居るやうですね、伴れの番人を呼ばう』と、已に鐵砲を打たうと搆へると、お幾は慌て丶腕を捕へ『まアおまち。若し合圖をして後、何でもなかつたら笑はれるよ。お前そつと行つて見屆けて御覽ん。怖いの？怖けれは鐵砲をお貸し、私が行つて見る』。
お幾が豫期した如く、かう云はれてはもう否應はない。六藏は鐵砲を擔ぎ、身を屈めて用心しながら、そろ〱と丘を上つて行つた。お幾は其姿の見えずなるのを待ちかねて、急に小舍の側へ馳け寄りながら、厩の壁の側に跪んで、罅隙から小聲に『お動きでない、命を大事と思へば默つておいで、私が以前あなたに預つた短刀を今返すから、それで何うでもして逃げなさい』と口早に云ひ畢るや否、彼の弛んだ板を外すと、彼方向いた盜人の姿、亂れた髮、脊、肩の具合、縛られた兩手の有樣が仄かに見える。お幾は懷から彼の短刀を取出して、其鋭い刀で繋がれた繩をきつて切つて、短刀は罅隙から投げ込みながら急に側を馳け退いた、其瞬間に中の男が此方向いた樣を見ることは見たが、もと〱馬盜人の首領を助けると云ふ目的でこそあれ、猶も茲に立停つて話をしやうと云ふ所存までは無かつたのである。
それからお幾は丘を半分どころまで登ると、上から六藏の歸るのに逢うた。人影と想うたは唯樹の枝の風に動

くのであつて、ようてそ鐵砲を放たなかつたとの話に、お幾は又獨り殘つて居るのが淋しくなつたから、追駈けて呼びに來たと誤魔化した。實際體は顫え手は冷たくなつて居るに相違ない、心は弱く眩暈がしさうなやうな氣になつて居たので、六藏の手に縋りかゝつて徐々と下りたが、平素窃かに焦れて居る六藏に取つては其冷たい手でさへ觸られるのが嬉しかつたのである。お幾は六藏の手も冷えて居るのを見て、庖厨の口で待つて居るなら酒を飲まさうと、それから一緒に歸つて、庖厨口の處へ伴れて來て酒を飲ます間頭は惑亂しながら、彼方の己屋の樣子は如何にと、闇の中ながら一心に見張つて居た。茶碗酒を飲む間に暫らく時間も經ち、少し心も落着いて來て、さて六藏に向ひ、今夜樹の枝を人と見違へて鐵砲擔いで行つたことを人に云はないから、其代りに自分が深更に外部へ忍び出たとは母に話さないやうにと堅く口止めして置いて、それからそつと戸を締めて我居間へ歸つた。もう逃げ去つたか、それで無ければ發見つた筈だ、役人の歸つて來る迄己屋の戸を開けないことは知れて居る。

お幾が案の通り首領は逃げたのであつた。役人等の歸つたは彼れ是黎明近くであつたが、お幾は又もや窓の側に蹲つて耳を敧てると、果してけたゝましい驚ろきの聲、叱る聲、父を呼び起す聲が聞えて、引續いて一同急に駈け出す足音！跡は裏庭は寂然として、忽ち何の音も聞えなくなつてしまつたので、お幾は安心して床に歸り、それからは三歳兒のやうに、ぐつすりと眠入てしまつた！

翌朝朝餐の席へ出て見るゝ、一同話は唯前夜盗人の逃げた一條ばかり、お幾は強いて平氣を装うて聞き、それから、役人等が始め此盗人の身體を撿めた時小刀を持つて居るのに氣が付かなかつたものだと大に其迂濶を罵る番人等の蔭口、又二人の仲間が己屋の彼方側へ大きな穴を切り開けるのを知らなかつたのを六藏が惡口するのをも平然として聞いた。されどお幾の安心は決して長くは續かなかつた。程なく往還の方から又新らしき取

沙汰が聞え、前夜逃れた馬盗人の巨魁は再び捕まへられ、油斷して又もや逃げられることのないやうに、今度は嚴しく縛しめて數人の巡査をつけ都へ護送したとの事、今の先き迄警察の無能を笑うて馬盗人の機敏を褒めて居た連中が、此噂を聞いて忽ち又探偵の機敏を褒め出した。探偵とは即ち都から派遣の警視で、名は浮田連藏と云ふ人である。此人は派遣以來此近邊の地理を悉しく研究し、賊團の中に混じて生命をさへ賭したを幾度、囚へた賊が逃げたとのことを聞くや、再び機敏に網を張つて苦もなく又獲物にしたのであつた。都から來て居るとの噂は聞えて居たれど、此邊の者は誰もまだ其人を見者は無つたのであつたが、今や浮田警視は丁度此路へ歸つて來つゝあるとの噂に、一同此逹者の風采を見やうと待ち搆へて居た。田舍での手柄は殊に花々しい者である。人々の立ち噪ぐ中に、お幾は表面は平氣の體なれど、内心は苦々しい心地し、見ぬに上越すことは無いと、程なく往還に馬の蹄音が聞え出すや否、そつと二階へ潜んで居たが、暫らくすると下から呼び立てられた、能く〳〵聞けば今や前を通りかゝつた警視浮田連藏氏は、我家へ立寄り、暫時の間自分と對坐で話がして見たいとの事。お幾が爲めには實に想ひかけぬ次第！其警視たる人が此自分と人の居ぬ處で話して見たい用事とは、そも何であらう。さては外ではあるまい、秘密が現はれたに相違なからうと思ふと、坐ろに怖氣を催したが素より逃げ隱れをするやうな卑怯な娘ではないので、臆した模樣を見せずに二階段を降つて客間へ這入り、其處に坐つた客人の姿を見るや、忽ち跳起るやうに驚いて後邊に蹌踉いた。意外！其客は外ではなく、前夜我に短刀を托した其同じ人！さては盗人の首領か、いや〳〵お幾は直ぐに委細の事狀が判つた、全く自分は人違へをして居た、過つて盗人の首領を助けたのである！

警視は懐から短刀を取出しながら、淋しげに笑つて此方を見……、お幾は短刀を眼前に見るさへ、今では悚然とするやうな氣がした。警視は徐ろに口を開いて『ねえさん、此短刀を私があの盗賊の首領の手から奪ひ取つ

たてれが二度目だ。此三週間前に一度掏取つたが其時には、彼奴逃げたのだつた、其後捕まへられて昨夜又二度目に逃げたのを、私が復捕まへて其時復此短刀を掏取つたのだ。先夜此前の丘で私がこれを落轉して、其後にあなたが拾つて持つて居てくれると云ふをばあなたから聞いて知つて居たことだ』と、それから暫時詞を停めて後『昨夜此家の己舍で何んな事があつたか、それは問ふのでは無い。いやあなたが何んな事をしたつてそれは咎めはしない。』それはあなた位の娘心は、憐れみの情に惹かされると、何うかすると惡い者を助けるともあるもの、其位のとは知つて居るから、咎めはしない。唯問ひたいは外ではない、あなたは何故私が托んで置いた此短刀を、あの盗賊の手へ返したの？』。『え丶、何故返したかと仰有るですか』とお幾は眞に赤心から出る聲で『それはあなたが其馬盗人だと思ひましたからそれで！

浮田警視は一旦は驚いて身を反らせたが、軈てお幾が覺えの快濶な笑ひに崩れながら『あ丶さうか、始めて疑ひは晴れた、最初私があなたに逢うた晩は、私は全く故意と風體を變へて、盗賊等に其仲間と見えるやうにしてあの首領の跡を踉け、又仲間へも交つて居たことであつた。あ丶成程さうか、今になつて好く譯が判つた。そして今度復あの首領を捕まへたのは全くあなたのお庇だ！』

『え丶私のお庇！何故です』とお幾は呆れた顔をすれば『彼奴め、玆を出ても直ぐに自分の棲處へ姿を隱さないで、矢張此邊に彷徨して居たのは、全くあなたが助けてくれ短刀を返してくれたに因つて、戀の心あつてのこと丶思つて、あなたを見たさに此邊に居たのに相違ない』

お幾は聞いて前垂を目にあて潤み聲に『おや、それでは其盗人は他の人よりも私を思つて居たでせうか』

されとお幾は全く人違へで、何も別に心あつての事でなかッた事は、其後の行ひに照しても歴然と知れる。

名流逸話

Anecdotes of Eminent Women.

JOSEPHINE.

There was in Paris a lady who was rendered quite prominent in society by her social attractions, her personal loveliness, and her elevated rank. She was a widow, twenty-eight years of age. Her husband, the Vicount Beauharnais, had recently perished upon the scafford, an illustrious victim of revolutionary fury. Josephine Tassher Beauharnais, who subsequently became the world-renowned bride of Napoleon, was born on the island of Martinics, in the West Indies. When almost a child, she was married to the Viscount Beanharnais, who had visited the island on business, and was captivated by the loveliness of the fair young Creole.* The revolutionary storm soon burst upon her dwelling with merciless fury. She experienced the most afflicting reverses—friendless-ness, bereavement, aud penury. The storm had however passed overher, and she was left a widow, with two children, Eugené and Hortense.

Napoleon, in obedience to the orders of the Convention, to prevent the possibility of another outbreak of lawless violence, had proceeded to the disarming of the populace of Paris. In the performance of this duty the sword of Beauharnais was taken. A few days after wards, Eugené a very intelligent and graceful child, twelve years of age, obtained acces to Napoleon, and, with most engaging** artlessness and depth of emotion, imploved that the sword of his father might be restored to him. Napoleon had no heart to deny such a request. He sent for† the sword, and, speaking with kind words of commendation, presented it with his own hands the Eugené. The grateful boy, burst into tears, and, unable to articulate a word, pressed the sword to his bosom, bowed in silence, and retired. Napoleon was much interested in this exhibition of filial love, and his thoughts were immediately directed to the mother who had formed the character of such a child. Josephine whose whole soul was absorbed in love for her children was so grateful for the blessings with which the young general had treated her fatherless Eugené, that she called in her carriage the nextday, to express to him a mother's thanks. She was dressed in deep mourning. Her peculiarly musical voice was tremulous with emotion. The fervour and the delicacy of her maternal love, and

the perfect grace of manner and of language with which she discharged her mission, excited the admiration of Napoleon. He soon called upon her. The acquaintance rapidly ripened into an unusually strong and ardent affection. * creole は西印度諸島なる佛國の血統の人をいふ。 ** engaging は人の心を惹き易きの義。 † 人をして其劍を取りにやりたるなり。

巴里にて、交際の巧なると愛嬌ゆたかにして門地たかきに、其名聲かくれなかりしさる婦人ありき。齡二十八の寡婦、夫『ボーアルチイ』子爵は此頃はげしかりし大革命の犧牲となりて、近く斷頭臺下の露と消えけるなり。後に那翁に配して世界に名高かりし『ジョセフイン、タッシエー、ボアルチイ』は西印度「マルチインコ」の島に生れぬ。いまだ幼かりける頃『ボアルチイ』子爵は用向ありて此島に來りし折、はからずも此うるはしう年若き婦人に心惹かれけるなり。無殘なる革命の騷ぎ間もなく其居を襲ひ、友を失ひ、財を奪はれ、貧困の間彼女はつぶさに辛酸を嘗めぬ。からくも身は免れたれど、二人の子『ユーゼチ、ホルテンス』と共に、彼女はあはれ寡婦となりにき。

那翁議會の命に從ひて、またもや起らむ騷乱の恐を防がむとて、巴里の民の兵器を取り上げゝるが、此うちに『ボアルチイ』の劍をも奪ひ去りたりき。『ユーゼチ』歲十二、愛らしう品高き小兒なりしが、後數日那翁のもとに到り、あどけなき中に情を盡くして、父が劍を戾したまはれと願ひぬ。那翁むげに之を拒むべくもあらず。劍を取り來らせて、さて懇にいたはりつ、手づからそを返へし與へぬ。『ユーゼチ』嬉し淚に咽びて語らむやうを知らず、劍を胸に押し當てゝ、無言のまゝ會釋してそこを退きぬ。那翁此兒が至孝を見ていたく感に打たれ、かくもいみじう其子をおほしたてし母に思ひ到りぬ。また其子の愛に心を奪はれたる『ジョゼフイン』は、此年若き大將が、父なき『ユーゼチ』へのやさしさをいたく喜びつ、あくる日、禮にとて車を驅りて那翁を訪へり。此時『ジョゼフイン』は身に喪服をまとひて、情ありてうるはしき聲は打ち震ひぬ。母たるものゝ愛いみじう深く、言語動作の品高きを見て、那翁いたく嘆賞の念を禁せず、彼また間もなく『ジョセフイン』を訪ひき。この相識はやがては深き愛情とかはりぬ。 (完)

彙報

●高等女子實習學校

今回牛込白銀町十九番地に新設したる同校は專ら女子の特性たる和睦唱順の美風を養成し忍耐勤儉の氣象を發達せしむるを以て目的とし其の學科程度課目共に現時の高等女學校程度にして校長は女流社會の名家山脇房子氏なりと

●紳士と毛皮

春寒ふして花未だ開かず東京紳士の躰面は獸類の毛皮に包るゝの有樣なるが頭にラッコ首にはカハウソ貂、オプソン、背中に虎あり前掛に豹あり熊あり狐あり寢皮に綿羊、北海の狐、敷皮に羊、白熊あれば足入れにアザラシ靴には牛手袋に鹿皮象の皮あり殆んど獸類づくしといふべし此等の毛皮を相場に積れば馬車懸の狐四十圓内外、狸三十圓内外、車懸けに至つて種々あれど先づ虎の皮九十圓豹の皮三十圓狐四五圓カハウソは北海道物二十五六圓支那の毛皮十五六圓熊は三四十圓より七八十圓まであり寢皮は綿羊にて三圓より五圓北海道狐四五圓なり襟巻は貂、オプソン五十錢より二三圓まで敷物はお好み次第足入(馬車人力車用)は狐、アザラシ、綿羊二圓より三四圓まで人力蹴込の敷物綿羊にて一圓より上三圓まであり といふ

●各夫人の面接日

交際社界に立つ人々の爲めに内外各夫人の面接日を左に掲ぐ

毎日(日曜日除く)	イスヴォルスキー夫人(露公使)
毎日	コルビザール夫人○ドーマン夫人
毎月曜日	青木子爵夫人
毎火曜日	マクドナルド夫人○ウード夫人
第一火曜日	田中子夫人○ミラー夫人○ホルダー夫人○プリンクリー夫人
第二火曜日	ミラー夫人
第三火曜日	田中子夫人○ボルター夫人○プリンクリー夫人
第一水曜日	桂伯夫人○リマ夫人
第二水曜日	三宮男夫人○マキン夫人
第三水曜日	桂伯夫人○リマ夫人○マキン夫人
第四水曜日	三宮男夫人○マキン夫人
第二木曜日	宮中女官

第四木曜日　宮中女官
毎土曜日、メレガリー夫人〇エアカード夫人
第二、四土曜日　珍田夫人

◎清女薛錦琴米國に於て演說す

曾て紹介した錦琴女史は、米國に留學して、同地の保皇會(康有爲氏等の組織せし者)の公館にをるが、一日大埠頭の丹桂劇場に臨んで演說した、米國淸國の男女聽く者、雲集して四千人にも及んで、場內充塞し、之れが爲め道路は通せなかつた位で、漢字新聞の通信員なども、演說を聞ぎ終ることが出來なくて、其文を記せんと欲し、次日女史のもとに至つて口述を受けたと淸國人の耳にも其女子の演說を聞くのは未曾有だろふし米國人の耳にも初めてだから物珍らしかつだろふ、兎に角に淸國廿世紀の初筆の女傑は此の娘子ならん當年とつて十七歲

◎酒の藥用としての價値

ホスピタル雜誌は酒が藥用として正當に用ひられ得べき場合を論じて曰く酒は興奮劑として適當なるものなりとの說は最早信せられざるなりこは酒が筋力を强壯にし又神經力を强健ならしむる効力なきこと明白なるを以てなり酒は一時血液の循環を促進し腦及び內臟に血液を注流するものなれとも之が爲に血液及び組織の消費を迅速ならしめ氣力其者には何等貢獻する所なし而して酒の藥用としての効能は其外に一もあることなしといふ

◎丁抹皇帝の氷滑

丁抹の冬の樂しみは氷滑りにして同國首府のコーペンハーグンにてはカステルグラーヴエン河を最も氷滑りに適當なる場所とし皇帝を始め多くの人々此所に集まりて氷滑りを爲すを常とす而して奇なることは同所に集まりたるときは何人と雖も皇帝に對して敬禮を爲すを要せざることとなり今其由來を聞くに或るとき例の如く多くの市民集まりて氷滑りを爲し居たるに一人の婦人は誤りて氷の上に轉びたり慈愛深き皇帝は直ちに其婦人を助け起したるに多くの婦人は之を羨み妾も皇帝の手にて助け起されたしと爭ふて氷の上に轉ぶに至り皇帝は其都度其人々を助け起したるも終に疲勞に堪へずして侍者を遣し朕は貴女等を助くることを好むと雖も度に過ぎたる敬禮は朕の堪ふる所にあらずと言はし

め爾來は同所に於て一切の敬禮を廢すること丶なしたるなりと云ふ皇帝は本年八十四歲の老体たるに拘はらず市民と共に氷滑りを樂しむが如き他國の主權者に見る能はざる所なりと

◉維新の女丈夫

（岩倉公母堂の逸事）

公爵岩倉具定氏の母堂にして贈大政大臣岩倉具視公の令室たる槇子刀自は、本年七十七の高齡に達したるが舊臘以來尿毒症にて老衰日々に加り、岡國手始め係り醫師數名詰切にて看護怠らざりしが、藥石其の効を奏せず、遂に去月廿三日午後七時十五分永眠せられたり、槇子の方は文政十年江州膳所本田藩士の家に生れ、幼くして才色共に秀で、十餘歲にして岩倉公家に輿入れとなり、具視公に配して二男と三女とを擧げたり、長女增子（嘉永二年生）は即ち今の掌典長岩倉具綱氏の令室、長男は即ち具定公（嘉永四年生）二男は具經氏（嘉永六年生れ）、子爵岩倉具明氏の亡父）第二女極子（安政四年生）は戸田伯に嫁し第三女寬子（慶應三年生）は故森有禮子の令閨たり。刀自の資性は幽雅貞淑能く婦德を具へ、維新前後に於ける內助の功は、筆紙の外なり、元治、嘉永の間先公幽閉せられて、京都より約二里を距る岩倉村に閑居せる頃の如き、西郷吉之助、坂本龍馬、佐々木高行等數多の豪傑何れも深夜人定りて後、公の柴門を敲き、納屋の椽下に身を潛めて天下の耳目を避けたりと然に佐幕黨の間者は頻りに出沒して、鵜の目鷹の目探偵甚だ嚴かなりしが、槇子の方は此際に在りて未だ半面の識なき者も、志士か又は幕府の間者かと云ふ事を一見して識別し、志士と認むれば直に引入れて公に介せり、當時勤王の士が公の門に集り、能く七卿を召還し、大勢を一變し、維新の大功を奏したるは、亦以て槇子の方の與りて力ある所とす。

曾て往事を追懷して云はれけるには、先公が岩倉村に引籠り居られし時は、髮を落して麻の衣を付け對岳と名乘られしが、佐幕黨が夜間血の滴れる人の腕、若くは足首等を窓外より投げ込みて威嚇せし事屢々なりしも、覺悟を極めたる妾は何の恐るゝ處も無し、或る夜丑滿の頃雨を冒して、裏手の畑より忍び寄りて、裏戸を敲く者あり、誰ぞと問へば、吉之助に候ふと答ふ、即ち西郷隆盛なり、引入れて其服裝を見れば、短き袴を着け、熊の皮を肩に纏ひ、手拭にて頰被りをなし、

草履穿きの如何にも氣の毒なる有様なりき、空腹なれば何か食物をと請はれたれども、家には冷飯と澤庵の外何の貯へも無かりしが、それにて結構なりとて、七八椀皺舌して打食ひし事あり、其頃の浪士は晝は山に隱れて幕府の目を忍び夜に入りて、互に志士を訪問せる事なれば、晝は冷飯も碌々食し得ず、其艱難辛苦を思へば今も涙の種なり、然るに坂本龍馬さんの如く、幕士の毒刄に敢なき最後を遂げられしは哀れの極にて、佐々木（高行）さんなどは、妾の顔を見る毎に昔の恩誼を語り出して種々禮を云はるゝも、實は時々冷飯を食べさせしのみ、當時公家の財政にては、實際其以上の馳走を爲し能はざりし事にて、先公御自身すら三度の食に不自由の事も少からぬ程なりき云々と。斯の如き境遇に在りて、先公と共に維新の大業を贊襄せられし功績の如何に大なりしかは、吾人の長く記憶すべき所なり往年「女の右大臣」と稱せられし、今の中御門從一位の令室富子（具視公の姉）の方が往事を談する毎に、槇子の方の賢才美德を賞揚せざる事なしと扨、埋葬の地は先公の墓所、品川海晏寺裏手の高地なりと。嗚呼維新の女丈夫、血の腕、足首、冷飯に澤庵漬、此談話をして今日太平の世に對照す眞に隔世の感あるべし。

◉小松宮殿下の御葬儀

去月廿六日は故元帥小松宮彰仁親王殿下國葬の御當日なりければ、滿都の貴賤老若、故殿下が御名殘りの御儀容を拜觀し奉らんとて、早朝より赤阪御本邸附近、音羽護國寺附近及び御沿道丸の内等に麕集するもの、幾萬なるを知らず、其間に峨帽華冠の武文縉紳、馬車人車、又は騎馬にて御邸に參候するもの、御祭場に先着するもの、絡繹として絶えず、午前七時頃にはさしもに廣き丸の内も、人もて埋めらるゝに至りぬ。此日朝來陰曇滿天の濛雲深く垂れて、吹く風冷やかに晴るゝにもあらず降るにもあらず、極めて蕭殺たる光景を呈し、拜觀者の内には用意の傘を携へたるも多かりき。

▲御行列の御出門

午前八時品川沖の軍艦は、青山練兵場の陸軍と相應じて吊砲の第一發を放てり、此聲殷々として百五十萬市民の胸を打ちけるが、砲は是れより靈柩の豐島ケ岡に達する迄打ち續けられたり、而して御行列は此最初の一發と同時に御出門となりぬ御行列の先頭なる警視一騎警部四騎は虎の門内にて御列に加はり、又陸軍々樂

隊を先頭とせる前衛儀仗の近衛騎兵同輜重兵歩兵大隊も丸の内に於て順次御列に加はりしが御邸東御正門より出でたる行列は伶人の道樂を合圖に、眞榊一對、白旗十旒・雜色之を荷擔して眞先に進み、次に聖上皇后兩陛下より御下賜の根越榊、次に獨逸皇帝陛下御贈進の花環次ぎに東宮同妃兩殿下及び各皇族方より贈進の榊十餘對、次に錦旗二旒力士數名にて之を捧げ次に鉾四本・楯四面・次に故殿下が內外國より受けさせ給ひたる勳章數十個を海陸軍將校二列となりて捧持す、

▲御柩と供奉者

次に御柩は相撲協會より出願せる力士五十名にて奉舁し徐々として進み行けり、檜の白木作りにて左右兩側上部に御簾を懸けられ、下部に銀色菊御紋花章二個を附せられ甚だ御質素の御構造に見受けられぬ、御棺側には陸軍將校總代として山口立見兩中將以下大中少佐各一々名御柩の右側に海軍將校總代として伊東大將有馬中將其他各少將等同左側に陪從しぬ、御柩に次いで御附武官・供奉申し上げ、次ぎに家扶家從呉床雨皮刀劍沓等を護持し御馬四頭を曳きて供奉す次ぎに喪主載仁親王殿下には鈍色の御喪服に素服を掛けさせ細繭にて編みたる御沓を穿たせ給ひ白紙にて握りを卷きたる御竹杖を突かせらら御附武官を從へ歩ませ給ふ、次に貞愛親王、依仁親王以下各殿下、其他御近親の方々亦徒步にて供奉せらる、

黑木東部都督は儀仗諸兵總指揮官として參謀幕僚を隨へて後衛儀仗兵の先頭に立ち海軍々樂隊は低濁の音調にて悲しき譜を吹奏しつゝ進行し、橫須賀海兵團の水兵八百名、第一師團の步兵二個大隊、工兵一個中隊、近衛砲兵師團砲兵騎兵輜重兵順次行進し警視警部其の殿をなせり此の殿騎の御正門を出でしは午前十時を過ぐる正さに五分なりき

斯くて御列は順路豐島ヶ岡に向ひ、午前十一時五十分頃滯りなく御祭場に到達せしが、御出棺前後に稍々晴れんとしたる天氣は忽ち曇り、十時半頃に至りて蕭々たる雨となれり、さながら此の國葬を悲しむものゝ如くなりし。

◉日本淑女學校

目下本鄕區千駄木林町へ新築中なる同校は、來る四月の新學期より開校する由なるが中學部、高等學部、大學部、家政部、裁縫科、豫科の三部三科を設け、模範的敎育に從事するといふ、校長は小杉榲邨氏にして、

講師には棚橋絢子女史の名も見へたり

●京都淑女學校

京都市下京區不明門通下珠數屋町北入卓屋町の同校は一昨三十四年四月を以て開校し、校長は多年教育界に在りし田島教惠氏にして、其女子教育に熱誠忠實なるは、女學界に稀に見る所なり、教員は總て八名あり、何れも女子にして專門の教課に任じ、學年は本科四年高等科二年、別科三年、隨意科五年の脩業年限にして本科、高等科を合せて高等女學校の課程と同一ならしめ、別科は音樂の一科とし隨意科は點茶、插花、手藝の三科とす、別科及び隨意科を設けたるは、京都市各女學校中同校の特色なりとす。

●東京女學校

鳥尾子爵の統括せる下谷區東黑門町東京女學校は校舍狹隘の爲今回本鄉區駒込千駄木町太田子爵邸內の一部眺望佳絕の處二千余坪の敷地に宏壯なる校舍新築に着手せしが本月下旬竣功の上は高等女學校の資格を得技藝專修科裁縫教員養成科并に高等女學校程度以上に於て三ケ年の研究科をも併置する筈なりと

●産蓐熱の新療法

近頃米國に於て醫學上の大發明ありその發明者は紐育のドクトル　チャーレス　クリッフオード　パッロースと呼ぶ人にて一日氏は産蓐熱に苦める黑人の患者を診察したり患者は出産の爲め病院に入院中男子を分娩したるに産蓐熱を發し熱度百四に昇り脈搏も亦從多く諸醫は種々手を盡したれど病狀は危險に進む一方にて熱度百八、脈搏百六十に上り最早や殆ど快復の望なきに至れり是れより先きパッロー氏は患者の腕より血液を取りて試驗したる結果ストレプトコクチ　ビオヂーンと稱せらるる敗血症の毒菌を多量に含有せることを發見したるが氏は患者の容態は尋常の療治法を以てこに應ずるも到底無用なるを見て極端の手段を取るの外なしと信じ即ち防腐藥中最も激烈なるもの丶一なるフオルマリンの多量を患者の右腕に注射したるに此療法は非常の効驗を示し翌日は熱度も稍や減退したるより再び血液を試驗したるにストレプトコクチは以前より著しく減少したれども尚ほ多量の存在を認めたるを以て更にラオルマリンを注射せしに効驗益丶著しく爾來經過頗る好良に趣き二週間にして終に退院するま

でに至れり此事は忽ち醫學社會の評判となり産蓐熱に罹れる患者に對して同一の療法を試みたるもの少なからざりしに何れも好結果を得たりと云ふ

●私立濟美學校の設立

今度嘉納治五郎、鷹司熙通、上田萬年、近衞篤麿、菊地大麓、目賀田種太郎、箕作佳吉、澁澤榮一外數氏の發企にて私立濟美學校なるものを設置（位置選定中）し尋常高等小學校、中學校幷に高等女學校、中學校幷に高等女學校を通じて十一箇年を以て卒業せしむる組織となし嘉納、上田、目賀田の三氏之が創立委員として取敢ず、神田今川小路八番地に假校舍及び事務所を設け來る四月より尋常小學第一學年に入るべき男女兒童六十名を差當り募集するし、小學授業科は毎月金六圓にして入學金は二百圓なるが同一家の者にて二人目以上の入學者に對しては入學金を要せずとなり該校設立の趣意は家庭の事情甚だしく懸隔せざる兒童を收容し夙に小學期に於て品性陶冶の基礎を確立し中學期を通じて更に修養を加へ斯くして十分なる成効を期するに在るが故に教員の住宅及び寄宿寮をも校内に設け子女教育に熱心なる父兄の希望を滿さんとするものなりとぞ

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）：金二十錢		郵税
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢		一册
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢		二錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢		
内（定刊數……十二册 増刊四回……三、六、九、十一月價格同一）		

廣告料

二十四字詰	一行	中頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治卅六年三月十五日發行　第參卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　合資會社博進社　東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

中學校 參考書 實業學校

文學博士 荻野由之君著
●大日本通史
上卷脊皮上綴大判千頁 正價一圓五十錢 小包送四百匁

法學博士 有賀長雄君著
●帝國史略
全一冊脊皮上綴大判千卌頁 正價一圓五十錢 小包送四百匁

落合直文君 小中村義象君 共著
●新撰日本外史
全一冊脊皮上綴大判千百頁 正價一圓廿錢 小包送四百匁

文學博士 荻野由之君著
●中等教育日本歷史
上下二冊脊皮上綴六七五頁 各正價五十五錢郵稅八錢

文學博士 荻野由之君著
●中等教育日本歷史要解
全一冊洋布上綴四二四頁 正價五十錢郵稅六錢

文學博士 荻野由之君著
●日本歷史評林
全一冊洋布上綴千九百十頁 正價一圓八十錢 小包送六百匁

文學士 寺本柳次郎君著
●日本歷史
特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢

松井柏軒君著
●新撰大日本帝國史
全一冊洋裝並綴五六四頁 正價四十錢郵稅十二錢

文學士 坂本健一君著
●世界史（上卷）
洋裝脊皮大判千八十頁正價一圓六十錢小包送四百匁

文學士 坂本健一君著
●全（下卷）
洋裝脊皮大判一四五〇頁 正價貳圓小包送四百匁

長谷川天溪君著
●通俗世界歷史
全一冊洋裝大判三三四頁 正價廿五錢郵稅八錢

（後村の一）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

中學校實業

著者	書名	體裁・定價
文學士 木寺柳次郎君著	●中等教育 東洋歷史	全一册脊皮上綴二八七頁 正價八十錢郵稅十二錢
文學士 幸田成友君著	●東洋歷史	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
文學士 木寺柳次郎君著	●中等教育 西洋歷史	全一册脊皮上綴二六六頁 正價七十錢郵稅十二錢
文學士 吉國藤吉君著	●西洋歷史	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
文學博士 高山林次郎君著	●世界文明史	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
理學士 佐藤傳藏君著	●中等教育 地理學教科書	全二册脊皮大判四二三頁 各正價五十錢郵稅十錢
理學士 佐藤傳藏君著	●日本新地理	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
大和田建樹君著	●通俗日本地理	全一册洋裝大判三百頁 正價卅錢郵稅八錢
理學士 佐藤傳藏君著	●萬國新地理	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
澁江保君著	●通俗世界地理	全一册洋裝並綴三四〇頁 正價卅錢郵稅八錢
峯是三郎君著	●中等教育 新編地文學	全一册洋裝並製四百頁 正價五十錢郵稅八錢

發兌元　東京市日本橋區

(後付の三)

中學校實業

著者	書名	定價
農學士 橫井時敬君著	農業經濟學	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 西村榮十郎君著	農用器具學	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學博士 稻垣乙丙君著	植物營養論	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 佐々木祐太郎君著	氣候及土壤論	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
上野農學士 有働農學士 共著	土地改良論	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 木下義直君著	肥料學	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 井上正賀君著	黴菌學	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 石坂橘樹君著	農政學	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 井上正賀君著	農藝化學	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學博士 橫井時敬君著	栽培汎論	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
農學士 田中節三郎君著	栽培各論	特製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢

發兌元　東京市日本橋區

中學校實業

- 德田實也君著 ●**蠶業經濟論** 全一册洋裝大版三百頁 正價卅錢 郵稅六錢
- 林學博士 本多靜六君著 ●**提要造林學** 特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 林學士 新島善道君著 ●**森林保護學** 特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 林學士 奥田貞衛君著 ●**森林學** 特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 高等商業學校教授 祖山鍾三君著 ●**商業實踐法** 全一册洋裝大版六八〇頁 正價七十五錢郵稅十四錢
- 法學士 清水泰吉君著 ●**商業經濟學** 特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 六條隆吉君 近藤千吉君 共著 ●中等教育**世界商業史** 全一册洋裝五〇〇頁 正價三十錢郵稅八錢
- 法學士 永井惟直君著 ●**商工地理學** 特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
- 高橋邦二郎君著 ●**通俗商業簿記** 全一册洋裝大判三三〇頁 正價廿五錢郵稅八錢
- 增井增次郎君著 ●**銀行實踐法** 全一册洋裝大判五二二頁 正價六十錢郵稅十二錢
- ドクトル 岡崎遠光君著 ●**銀行政策** 全一册洋裝大判四二〇頁 正價一圓郵稅十二錢

發兌元 東京市日本橋區

學校參考書

著者	書名	體裁・定價
窪川眞澄君著	●通俗銀行簿記	全一册洋裝大判三四六頁 正價廿五錢郵稅八錢
高橋邦次郎君著	●通俗會社簿記	全一册洋裝大判三六八頁 正價廿五錢郵稅八錢
法學士 桐生政次君著	●世界商工業史	特製六十錢郵稅十錢 並製四十五錢郵稅八錢
白耳義商業學士 飯田旗郎君著	●商業汎論	特製六十五錢郵稅十錢 並製五十錢郵稅八錢
法學士 勝部國臣君著	●實業商用會話	全一册洋布上綴小判 正價卅五錢郵稅六錢
寒澤振作君著	●商業文範	全一册和裝大判一八二頁 正價廿五錢郵稅六錢
水島鐵也君校閲 濱田四郎君著	●補習教育 商業入門（一卷）	和裝並綴大判百五十頁 正價十八錢郵稅四錢
法學士 野口弘毅君著	●銀行新論	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
天城安政君著	●增訂 商業讀本（卷の一 卷の二）	和並裝綴各一五〇頁 正價各十五錢郵稅四錢
天城安政君著	●仝（卷の三 卷の四）	和裝並綴（全部四册） 正價各二十錢郵稅六錢
法學士 池袋秀太郎君著	●經濟汎論	特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢

本町三丁目 博文館

（後付の七）

中學校實業

法學士 井上辰九郎君著
經濟原論
全一冊洋裝衿皮金字文入 正價一圓廿錢郵稅十八錢

法學博士 天野爲之君著
經濟學研究法
全一冊洋裝脊皮金文字入 正價一圓郵稅十錢

法學士 二宮基成君著
經濟學通論
特製七十五錢郵稅十二錢 並製六十錢郵稅十錢

工學士 峰屋貞興君著
應用化學
特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢

內藤工學士 藤井工學士 合著
分析化學
特製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢

工學士 重見道之君著
應用機械學
全一冊洋裝大判三八〇頁 正價七十錢郵稅八錢

竹貫直次君著
應用土木工學
全一冊洋裝大判三八〇頁 正價七十錢郵稅八錢

第六高等學校教授 松尾哲太郎君著
器械設計 製圖學初步
全一冊洋裝上綴 正價六十錢郵稅四錢

馬詰次男君著
通俗 工業官廳簿記
全一冊洋裝大判二八〇頁 正價廿五錢郵稅八錢

工學士 松永新之助君著
工業大意
全一冊洋裝並製二五〇頁 正價廿五錢郵稅六錢

黑田政憲君著
陶器製造化學
全一冊洋布中判三百頁 正價六十錢郵稅八錢

(後付の八)

發兌元 東京市日本橋區

(後付の十)

中學校實業

著者	書名	定價
干河岸貫一君著	日本女子立志編	全二册和裝紙數七百卅頁 正價一册六十錢郵稅八錢
西田敬止君著	帝國女子修身鑑	全壹册和裝紙數四百卅頁 賣價十五錢郵稅四錢
故文學博士 高山林次郎君著	論理學	上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
文學士 蟹江義丸君著	倫理學	上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
文學士 木村鷹太郎君著	東西洋倫理學史	上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
文學士 速水滉君著	心理學	上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢
峯是三郎君著	中等教育應用心理學	全壹册洋裝上製四百五十頁 正價五十錢郵稅八錢
醫學博士 三島通良君著	學校衛生學	全壹册洋裝上製三百餘頁 正價七十五錢郵稅八錢
下田歌子女史著	家政學	全二册和裝紙數五百頁 正價一册三十錢郵稅六錢
中島義弌君著	新撰小學女禮式	全壹册洋裝紙數二百卅頁 正價廿五錢郵稅六錢
下田歌子女史 坂正臣君著	女子用文習字帖	全壹册紙數百四十四頁 正價八十錢郵稅八錢

發兌元 東京市日本橋區

學校參考書

著者	書名	冊數・定價
大和田建樹君著 小野鵞堂君書	明治女子書翰文	全一冊和裝紙數二百頁 正價四十錢 郵稅四錢
大和田建樹君著 巖谷一六君書	明治書簡文	全壹冊和裝紙數二百頁 正價三十錢 郵稅四錢
橘千蔭翁書	烏丸帖	全壹冊和裝大判二十四枚 正價三十五錢 郵稅四錢
橘千蔭翁書	假名習字帖 新百人一首	全壹冊和製大判五十枚 正價三十錢 郵稅四錢
伊藤直楯君 岡村増太郎君 著	幾何畫法	全壹冊洋裝紙數百五十頁 正價十二錢 郵稅四錢
落合直文君著	日本大文典	全壹冊洋裝紙製八三四頁 正價一圓七十五錢 郵稅十六錢
落合直文君著	中等教育 日本文典	全壹冊洋裝上製五百頁 正價六十錢 郵稅十錢
文學士 岡田正美君著	解說批評 日本文典（上下）	上製一冊五十錢 郵稅十錢 並製一冊卅五錢 郵稅八錢
落合直文君著	中等教育 文法教科書	全一冊洋裝上製百廿六頁 正價四十五錢 郵稅八錢
大和田建樹君著	日本大文學史	全五冊洋裝紙數千五百頁 正價一冊四十錢 郵稅八錢
小中村義象 増田于信 君共著	中等教育 日本文學史	全壹冊洋裝紙數二百五十頁 正價二十五錢 郵稅八錢

本町三丁目　博文館

（後付の十三）

☛中學校實業

大和田建樹君著 ●和文學史 全壹冊洋裝紙數六百五十頁 正價四十五錢郵稅六錢

落合直文君著 ●中等教育國文軌範 全壹冊洋裝紙數三百八十頁 正價二十五錢郵稅六錢

國學院編纂 ●名文評釋 全壹冊洋裝紙數四百五十頁 正價五十錢郵稅十錢

中村秋香君校 ●吉野拾遺詳解 全壹冊洋裝紙數百五十頁 正價二十五錢郵稅四錢

佐々木信綱君校 ●校註土佐日記 全壹冊洋裝紙數五十頁 正價十錢郵稅二錢

佐々木信綱君校 ●校註竹取物語 全壹冊洋裝紙數七十六頁 正價十二錢郵稅二錢

佐々木信綱君校 ●校註伊勢物語 全壹冊洋裝紙數百十二頁 正價十二錢郵稅四錢

大和田建樹君著 ●中等教育刪定徒然草 全壹冊洋裝紙數百十二頁 正價十八錢郵稅四錢

佐々木信綱君校 ●校註更科日記 全壹冊洋裝紙數百二十頁 正價十二錢郵稅四錢

佐々木信綱君校 ●校註方丈記 全壹冊洋裝紙數六十頁 正價八錢郵稅二錢

大和田建樹君著 ●歌まなび 全壹冊洋裝紙數千卌八頁 正價壹圓五十錢郵稅十六錢

發兌元 東京市日本橋區

（後付の十四）

中學校 參考書 實業學校

著者	書名	體裁・定價
安原健堂君著	正續文章軌範讀本	全壹冊洋裝上製五百五十頁 正價七十五錢郵税十四錢
文學博士 萩野由之君著	中等教育 作文法	全壹冊洋裝紙數五百頁 正價三十錢郵税六錢
下田歌子女史著	女子書翰文	全壹冊和裝紙數二一八頁 正價三十五錢郵税八錢
文學士 武島又次郎君著	修辭學	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
文學士 畔柳都太郎君著	邦語英文典	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
文學士 青木昌吉君著	邦語獨逸文典	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
文學士 松井知時君著	邦語佛蘭西文典（上下二冊）	上製各五十錢郵税十錢 並製各卅五錢郵税八錢
石川辰之助君著	初等英語會話教科書	全壹冊洋裝總クロース製 正價二十五錢郵税四錢
石川辰之助君著 文部省檢定濟	初等英語作文教科書	全一冊洋裝上綴一八〇頁 正價四十錢郵税六錢
博文館編輯局校訂	前々太平記	全一冊洋裝脊皮金字入 正價六十錢郵税十六錢
博文館編輯局校訂	太平記	全一冊洋裝脊皮金字入 正價六十錢郵税十六錢

（後付の一六）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

前田默鳳道人著

（三月上旬發兌）

書學捷徑

全壹冊菊判刷
唐本仕立美本
習字實習法
定價金五拾錢
郵稅　六錢

サア〳〵皆さん買て御覧なさい、說明は言文一致、習字のはやみちです、作字の改善法です。筆の遣方より點畫結体の作方等順を立て部を分ち、何字でも自由自在に作れる様に、極めて丁寧に極めて平易に解釋してあります。又執筆用法等の事より、繁文、省文、補空、借換及び古來文選に至りては、一々證を擧けて解するなと、總て書學に關するものは此編中に盡してあります。從來の普通習字帖と同一視すべきものではありませぬ。學校の參考に大に益あるは勿論獨習の諸君は此編を措て他に優るものはないのです

三宅青軒君著 ●**書法自在** 正價金貳拾五錢 郵稅六錢

石川鴻齋君著 ●**書法詳論** 正價金四拾錢 郵稅六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

女學界定期增刊 花にしき
毎月壹回五日發行
(明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可) 第參卷第四號 (明治參拾六年三月十五日發行)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界　明治期復刻版⑱
明治36年3月（第3巻第3号、第4号）

2006年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3047-0　C3321